

昭和30年9月17日日本国著作権特許承認第1205号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・第2期4巻第4号・昭和34年4月1日発行(毎月1回)

裏窓



淫祠邪教・特集

4月号

裏窓

淫祠邪教・特集号

4

昭和30年9月17日日本国著作権特許承認第1205号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・第2期4巻第4号・昭和34年4月1日発行(毎月1回)

定価 120円

IBM 1807



異色官能 サスペンス **地獄の乳房** 飯田豊吉・著 喜多玲子・装幀

謎の黄色いトランクをめぐる東京暗黒街にくりひろげられる凄惨な死闘と執拗な復讐地獄！息もつかせぬ迫力興味篇！

¥. 250
〒. 40

あまとりあ社の
特撰単行本

どれを読んでも
素敵な面白さ

続・隠密 覚書 **忍び夜秘帖** 島本春雄・著 喜多玲子・装幀

大江戸の夜に咲く逢魔の花！大名屋敷、旗本屋敷、そしてまた分限者の夜の闇を探ぐる影のような公儀隠密鳴子善四郎！

¥. 260
〒. 40

異色時代巷談 **女犯経秘図** 高月大三・著 喜多玲子・装幀

酒地肉林の好色寺の地下部屋に捕われた女隠密！素っ裸の木馬責めに果して耐え得るか？お小夜嵐、穴蔵菩薩も収録！

¥. 250
〒. 40

これこそ読者の
満足する本

御送金は書留
か現金為替で

エロチック ミステリ **あやかしの夜** 岡田鯨彦・著 笠井 一・装幀

ねっとりどんだ夜の底にほの白くとけこんでゆくような羞恥の構図、人間喜劇の断面を特異な筆で描き出した異色作

¥. 260
〒. 40

耽奇 サスペンス **妖しい花粉** 狩久・著 古正英生・装幀

白く重さを秘めてゆれる乳房、慄える太腿……性の真実を求めて蠢めく人々の姿を捉えた異色ミステリ！！

¥. 230
〒. 40

最寄の有名書店に
あります

ハガキ下さい
図書目録送呈

エロチック サイエンス **甘美な謎** 矢野 徹・著 笠井 一・装幀

ふくよかな肌の香りは超次元の世界にただよい、はてしなく広がる非情の科学に機械化された細胞は如何に悶えるのか？

¥. 250
〒. 40

マンハント

3月号 発売中！

- 馬鹿ほど怖いものはない R・ハーバー
- のどかな日曜日の午後 G・ブルワー
- 美しい人形のために A・マアマー
- 灯を消すな二人に C・ワールリッチ
- 百万人目の殺人 R・ブラッドベリ
- 颯りもの R・マーステン
- 誘惑 F・シリッグ
- 拾った運 J・E・クロニン
- そんなのが好き！ M・ブレット
- 街には拳固の雨が降る E・ハンタア
- ハッピー・バースデー R・レイニイ
- そうは問屋がおろさない H・Q・マシュ



現代無用語辞典
グラマア・フォト
P・ロウランド
マンハント・スクエア
淡路瑛一
スクリーン・つまみ食い
永久蘭太郎

総ページ 142頁 定価 100円 送料 8円 東京 久保書店

強烈なスリル。セクシイなムード。現代人の要求にピッタリした探偵雑誌！



★本文一八二頁を御覧下さい★

淫祠邪教・特集 女色金猫教

矢 桐 重 八
栗 原 伸・画

★わらをもつかむ気の男が、あらたかな噂にひかれて詣でる邪殿に、黒髪長き浄衣の巫女が、修法にこと★
★よせて妖しい祈祷に身も心もとろかすのだ！ 金猫は黄金を招き神酒と柔肌に憑かれた煩惱の果ては？★



特集・邪教・淫祠

外誌に現れた淫祠邪教秘話……峠 浩介 (27)

女神の壺……南村 蘭 (76)

女体苦患教……瀬谷伴八 (150)

腰紐呪法……島本春雄 (110)

馬のり仙女……藤見 郁 (102)

女色金猫教……矢桐重八 (182)

八坂の妖巫……橋爪彦七 (202)

愛神の生贄……北羽奥男 (214)

黒髪呪縛……小田桐 爽 (228)

彼女のミサ……黒羽 新 (262)

江戸暗黒秘録 邪宗淫寺抄……鈴木和夫 (88)

まぼろし侍 破魔暦 壁虎呪文……黒木 忍 (276)

裏窓・四月号・目次

◎表紙……堂 昌一 ◎目次カット……石塚芳幸

◎目次裏口絵……栗原 伸 ◎トビラカット……江村 良

巻頭 消えた刺青裸女……文・秋津京太 画・山田彬弘 (11)

ビグラ ヌード傑作選……藤澤 修 (19)

時代談 櫓り観音……円城寺 達 (96)

秘境 燃える女窟……溝呂木寂子 (50)

連載妖異 サスペンス 怪異愛霊教 飯田豊吉 (124)

復讐譚 恩讐地獄ぐるま……中林節三 (62)

ある罪 陥(おとしあな)奔……潮井 拓 (171)

黒髪 髪行燈……志摩不二 (245)

★★★裏窓既刊号目次★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★ (144)

色頁 絵物語 裸女弁天……文・中島喜美 画 (163)

うらまど スコープ あの場面この女優……芝 利 泰 (194)



■あまとりあ社の特撰単行本を御覧下さい!!

ハガキを下されば冊録スグ送ります
東京都中野区江古田一あまとりあ社

封建刑罰悲史

江戸暗黒秘録

封建の江戸に行われた
おぞましい公刑私刑の
種々相を描いた興味篇

230円
千40円

鈴木和夫・著

耽奇サスペンス

夜光裸身

暗黒の中に輝く美女の
裸体!! 覗き見る男の眼
前に切なく身をもがく

250円
千40円

葉田 光・著

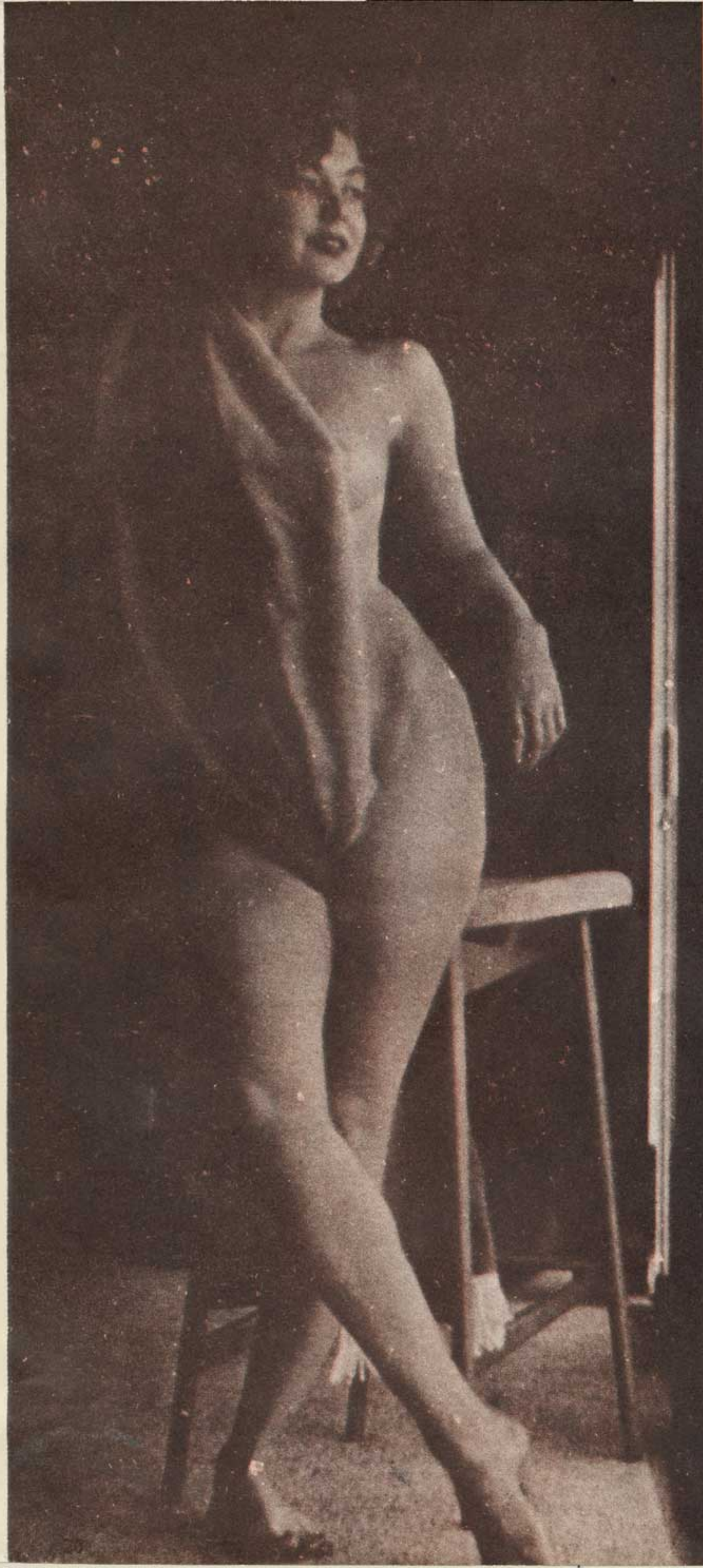
妖美艶色物語

濡れた夜曲

探訪記者の鋭い眼がと
らえた妖しくもおぞま
しい裸女美人の種々相

200円
千40円

島本春雄・著



女裸青刺消えた

裏絵
窓語
物語

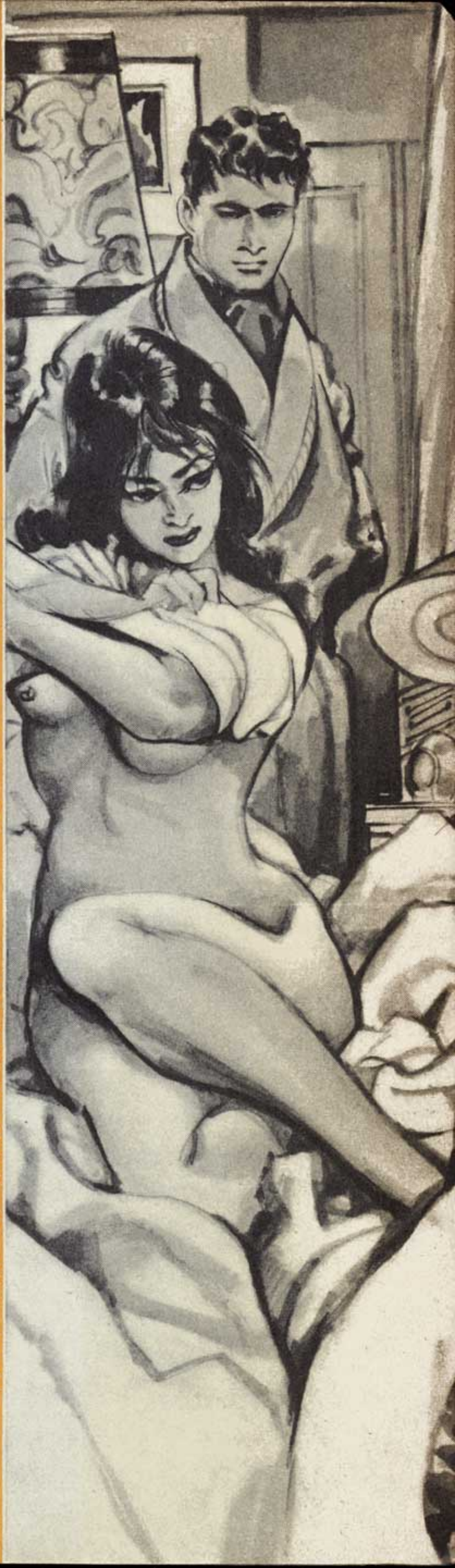
① 急 停 車

ポツリ、とフロントガラスに雨粒が当たって一筋流れた。
「とうとう降って来やあがったな」
紅小路英作は、スピードを速めた。時間は午前二時過ぎ。
たった今、大磯あたりを通過したところだ。
二本のヘッドライトに真ッすぐ照し出されたアスファルト道路には、行き交う車もない。

と——。ヘッドライトの光茫の中に、ポツンと白いものが写し出された。なんだろう？と眼をこらしているうちに、ぐんぐんその白いものの実体が接近してくる。
若い女だ。スリッパ一枚きり。胸がはだけ、ぼっちりさくらんぼが鮮やかだ。
キーン。急停車。間一髪のところ、女は轢かなかったが、女は、車の前の路上に、仰のけに倒れていた。

秋 津 京 太
画・山 田 彬 弘





⑤ 取材費

「きみ、何かあったんだらう？是非話してくれないか？」

「でも、このことが世間に知れ渡ったら、あたし殺されます……誰にも話されないことなんです」

「だから、余計聞きたいんだ……」

きみの生命は全力あげてまもるよ……それに、報酬も出す……」

英作は烈しい取材欲にかられて、百万円出すとまで云い切った。これが、女の堅い気持を、ぐらっと斬り崩したらしい。

「ほんとに百万円下さるの？」

「嘘じゃあない……今、すぐあげる」

⑥ 淫靡な刺青

「あッ」と英作が目を瞠った。

というのは、今まで気がつかなかったが、滑つこい女の背から臀部にかけて、奇妙な刺青が描き出されていたのだ。絵柄は、奇怪な爬虫類であった。グロテスクな四肢が、びったり、女の腰を抱くようにへばりついている。あきらか

にそれは、女を玩弄物と見なしたおもしろ半分
の刺青であった。

「こんな恥かしい刺青をされて……それから、
遠い香港や南方の魔窟に売り飛ばされるんです」

「うむ」

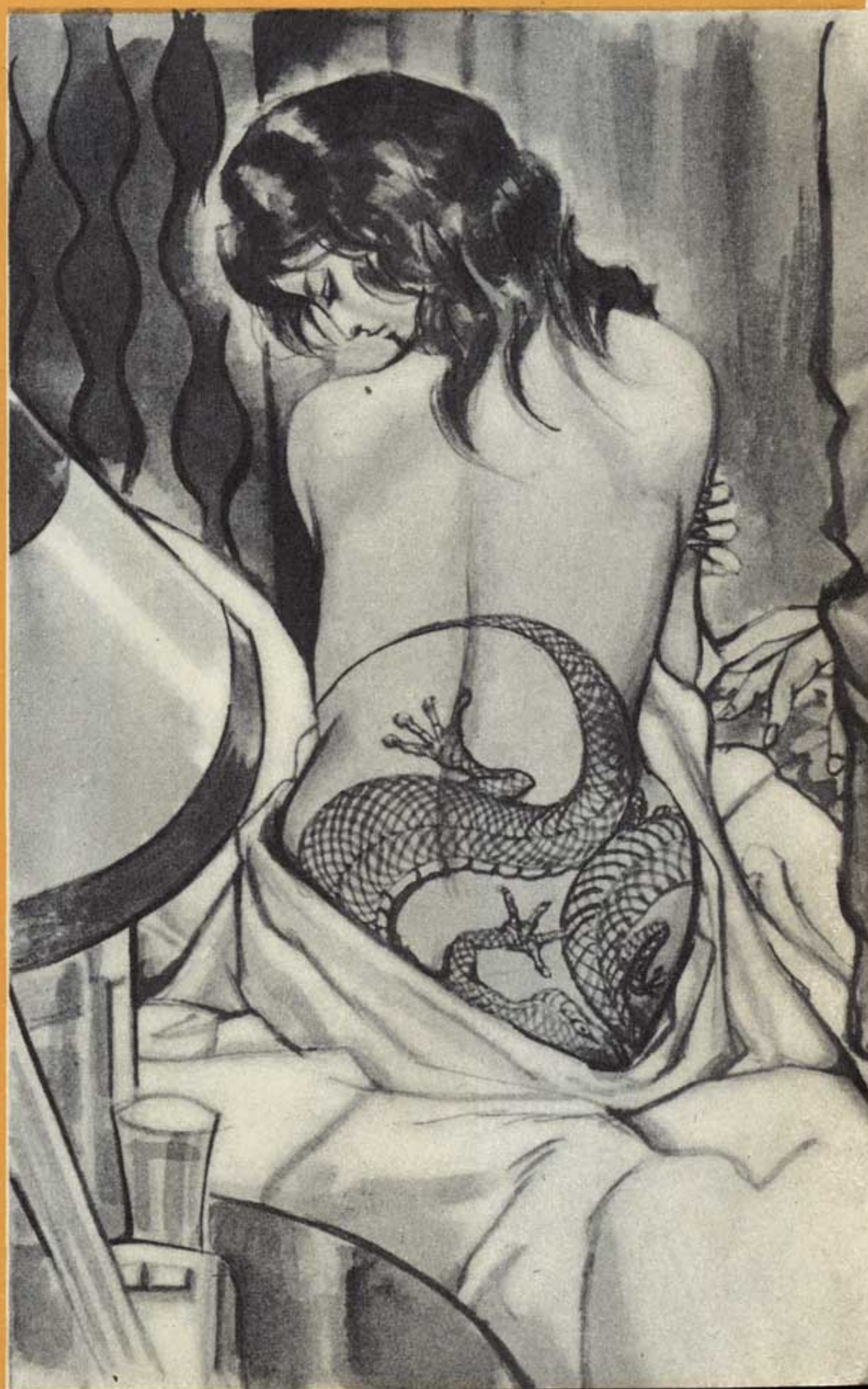
英作は、早速、ノートを広げた。

「実は、あたし、二月前まで横浜で外人相手の
ナイトキャバレに勤めていたんですが……」





英作は、百万円の小切手を書いて女に渡した。
「お話しするわ」
女は小切手を睨むようにしながら深くうなずくと、不意に、スリッパの裾をまくり上げ、するするッと首から脱ぎ落した。そして、くるりと背を英作に見せた。



⑦ おとしあな

女の名は由利アケミ。ある夜、三人の外国船員の相手をした。看板になったあと、面白いところへ行こうと、朋輩四人と一緒にいった。

自動車で随分と走った。ついたところは、人気のないひっそりとした森の中の洋館である。

中に入ると、急に、男たちの親切な態度ががらりと変った。不意に、荒々しく襲いかかられて、アケミたちは全員、丸裸に剥がれてしまったのだ。



⑧ 地下室

全裸のアケミたちが逃げまどう。男たちが鞭をふるって追い立てる。——地下室への階段を、五人の裸女は、「ひいひい」悲鳴をあげながら転るように降りねばならなかった。カビのにおいのする地下室。ぼつんと点っている裸電球。彼女たちはその地下室の異様



⑨ 滑車歪む裸女

トミエという女が二人の男に無理やり引き立てられると、壁に取りつけてある太く頑丈な鉄輪と鎖に手首手足をはめられた。滑車を取りつけてあって、ギギギツと軋みながら、滑車が動くとき、トミエの裸身が、あられもない様々な恰好になつて、壁に奇妙な字を描く。

「ひいーッ」

トミエの口から悲鳴がつんざく。アケ

ミたちは蒼ざめてしまった。
「ね、おもしろいだろ。みんな大人しくするい、ね」

そして、アケミたちは、一人ずつ、壁の鉄輪に、大の字に立たされた恰好で、身動きならないようにはめこまれたのである。

アケミは、手首と足首に喰いこむ鉄輪が痛かった。が、身をよじると、じわじわと締めつけてくる。じっとしているしか仕方がなかった。



な陰惨な雰囲気、ゾッとした。
 というのは、四方の壁に、十六世紀頃、西洋にあったという拷問部屋のような様々の道具が並んでいたからである。
 「お前たち、もう、こゝから逃げられない。オレたちの虜なんだ。奴隷だ。泣いても喚いても駄目。暴れると容赦しない。拷問にかけて黙らせる。い、ね。拷問とてもおもしろいあるよ」ニタツと一人の男が笑って云う。



⑩ 日本娘売買団

翌日から、いまわしいことが始まった。というのは、背中に刺青を彫られ出したのだ。毎日毎日、アケミは、刺青台に横たえられ、刺青針が、チクチクと柔らかな肌を突き刺してゆくのに、身もだえしななければならなかった。他の女も同じ運命だった。
 「お前たち、刺青が彫り上ったら、売り飛ばすんだ。い、値で売れるのだ。貨物船の船底部屋に閉じこめてな」
 恐るべき、刺青日本娘の売買団だったのである。

アケミは戦慄した。
 が、とても逃げ出す隙はなかった。

⑪ 天の助け

そして今夜だ。天の助けか、鉄の輪が、うまくゆるんだのだ。夢中だった。彼女は破れたスリッパ一枚をまとい、逃げ出した。英作の自動車が来合したのはそんな時なのである——。

朝方近くまで、女の異常な体験語りは続いた。英作は、もう、ベストセラーは決定的だと思った。昼前近く、ノートを終えたあと、彼はぐったり疲れて、ベッドの中で深々と眠った。



⑫ 消えた裸女

黄昏近く目覚めた。女の姿はなかった。テーブルの上に、メモの走り書きがあった。

「紅小路英作先生へ——小切手の百万円ありがとう。わたしのお話した体験は全部嘘っぱちです。先生が熱海から自動車でお帰りの時間を前もって調べまして、あんな演出をしたのです。背中刺青はわたしの亭主がインキで描いたものです。先生が体験記作家で体験を莫大なお金

で買いになるということを知っての、わたしたち貧しい夫婦の一芝居だったわけです。お話した嘘っぱちの体験記をお書きになるのも御自由ですが、本にすれば物笑いになることでしよう。お止めになった方がよからうと御忠告までに……では、さよなら」

読み終った英作は、思わず、「畜生!! 百万円ぶったくりやがったか、畜生!!」と叫びた。

〈完〉

ヌード傑作選



カメラ・藤澤 修













外国の活字に現れた

淫祠邪教秘話

ショウよりおもしろい邪教の踊り、悪魔に魂を売った女、妖神怪教アチラ版……

峠 浩介



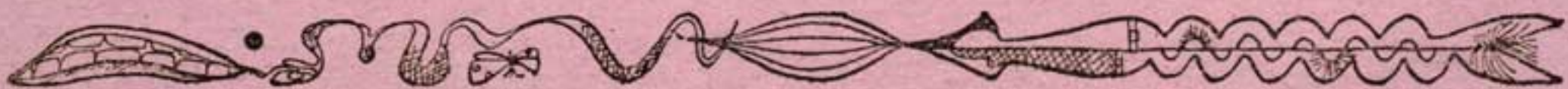
☆

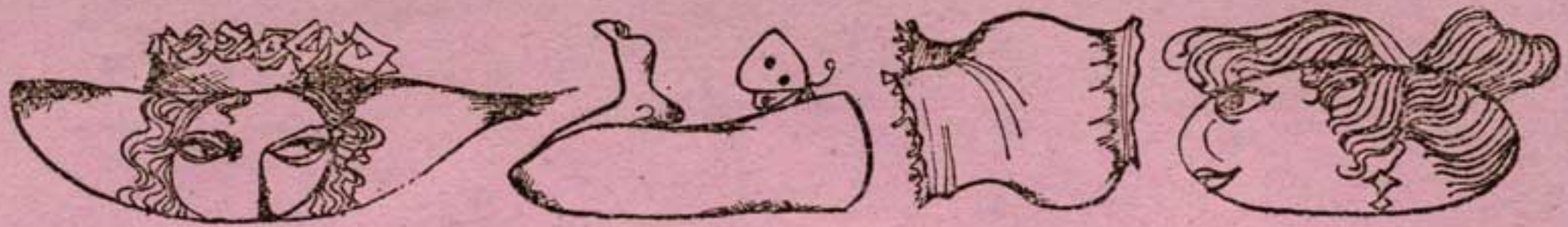
ニューヨークの一二五丁目。ジャズのお好きな方なら、ははあとすぐお気づきになる黒人の街ハーレムの、薄汚れた、一種奇妙な匂いの漂っている路上に、白人の死体が一つ転がっていた。

こんなふうに書くと、ちょいとばかり大げさに見えるけれど、ハーレムの路上に死体の一つや二つ、別に珍らしいことではない。お巡りたちも、最初は、どうせヤクザのけんかだろうくら

いに考えた。ところがこの死体、調べてみるとヤクザどころか、およそ縁の遠いケチなサラリーマン。熱狂的なジャズ・ファンでもなければ、ありきたりの遊びに飽きて、ハーレムのナイト・クラブで黒人女のストリップでも眺めようかなどという、物好きなぜいたく人種でもない、要するにハーレムなんぞで殺されるには、いかにも不向きな男であったのだ。

善良な市民が殺されたのだから、警察でもある程度力を入れて調べる。ところが、一向に調べ甲斐のない男で、殺されそうな理由がでんでみつからない。ただ、殺される前に、会社のボナスが入っているが、もちろんたいした額でもないし、ホールドアップが狙うような風采じゃないと、何のことはない、まるでないない尽しだ。小金をポケットに、ボン引きにでも誘われてついふらふらとハーレムに足を入れたのだろうと、まあこんな結論しか出しよ





うがないのだけれど、だからといって、ハーレムのヤクザにインネンをつけられるような柄ではなし、無論のこ
と、喧嘩なんてとんでもハッブンの男
だから、捜査はたちまち行きづまって
しまった。

普通の人間だったら、ええい面倒だ
迷宮入りにしちまえ、てなところなん
だが、どこの国でも刑事というのは根
気のいいもので、執拗に聞き込みを続
けていた一人が、殺された男と女房と
の仲が、あまりよくもなかったことを
聞き出してきた。

死体の身許が知れると同時に、もち
ろんその妻は一通りの尋問を受けたの
だけれど、念のためにともう一度当っ
てみると、どうも様子がおかしい。何
となく刑事のカンにひっかかるフシが
ある。

こうなると、そこは根気の強い刑事
のこと、手をかえ品をかえて聞きまく
る。最初のうちは、この女房もガンと
して口を割らなかつたが、たまたま別
の小さな事件で挙げられて、署へしよ

っぴいてこられたチンピラが女房を見
て、多分刑事のご機嫌を取るつもりだ
ったのだろう、あの女はハーレムで二
三度見かけた顔だな、なんてことを洩
らしちゃった。

担当の刑事がこれに勢いついて、い
よいよ執拗に問いつめると、とうとう
女房もあきらめて、一切をバラしてし
まう段取りに相成るのだが、それによ
ると――。

亭主は善人だがみみっちいサラリー
マンで、せい沢ができないばかりでな
く、何かにつけて女房に満足を与えて
やれない男。女房にしてみれば、嫌い
というわけではないから、離婚までは
考えないのだが、どうにも生活に張り
がない。ふとしたことから、若い男と
ネンゴロになってしまった。

三十前で、ちよいとイケる女の女房
に、満足を与えてやれなかったのは亭
主の罪といえはいえるのかもしれない
が、とにかく女房の方は、若い男に誘
われるまま、好奇心のおもむくままに
秘密組織のあやしげな宗教団体へ入り

こんだのだ。

初めは、ほんの好奇心から、ちよっ
ぱり覗いてみるつもりだったのが、一
度足を踏み入れると、もう離れられな
くなっちゃった。なにしろ相手は秘密
組織だけに、一度入ったものは、たと
え暴力に訴えてでも組織につなぎとめ
ておこうとするし、それ以上にこの組
織の魅力が女房をとらえて、彼女の方
から積極的に、亭主の眼をかすめては
通う始末。

もちろん、まっとうな神さまを拝む
ようなものではない。何人かの信者が
秘密の場所に集って、得体の知れぬ薬
の入った酒に酔い痴れ、各々が考え得
る限りの狂態を尽すというもの。しか
し、段階があつて、ある程度の修練を
経ないと、本格的なお祭り騒ぎという
か、式典というのか、そういったもの
には参加できない仕組になっている。

彼女はまだその段階には達しないの
で、本格的なお祭りの内容は知らなか
つたが、何でも特別の部屋があつて、
彼女がかいま見たところでは、正面に





は奇妙な像がかざられ、残る三方にはえらく大きな鏡がはめこまれていたという。

とにかく、自分たちの段階でさえ、あれだけ猛烈なことをやるのだから、上の人たちは一体どのようなことをと彼女は早くその仲間入りがしたくて、せっせと通いつめた。よく話に聞く、金のある連中の秘密パーティーなんかと違って、まるで金のかからないのが何よりの魅力と、彼女は単純に喜んでいたので、これにおかしいと気づいてさえいれば、亭主が殺されるような破目にもならず済んだのだ。

金のかからぬはずで、彼女らが実は金もうけのタネになっていたわけ。彼女の話聞いてすぐに、警察は大がかりな手入れを行ったが、組織の大物たちはすでに感づいて、拳ったのは小物ばかり、それでもカラクリだけは一応明らかになった。

つまり、彼女のいう本格的なお祭りが、実際は大がかりな見世物で、部屋の三方にはめこまれた鏡の向うから、

高いお金を払ったお客さんたちが、ニヤニヤしながら見物していたのだ。

お客さんたちから、それこそ眼の玉の飛び出るような料金を取る以上、一通りや二通りの見世物では満足しやしない。そこで、誘いこまれた信者たちに、一応の訓練期間を与えて、せっせと狂態の練習をさせていたわけだ。信者にしてみれば、一日も早く本格的なお祭りに参加したいだろうし、より強い刺戟を求めるのは誰しも同じなんだから、めでたく進級させてもらえる頃には、常人では想像できないほどのことをやってくれるようになる。

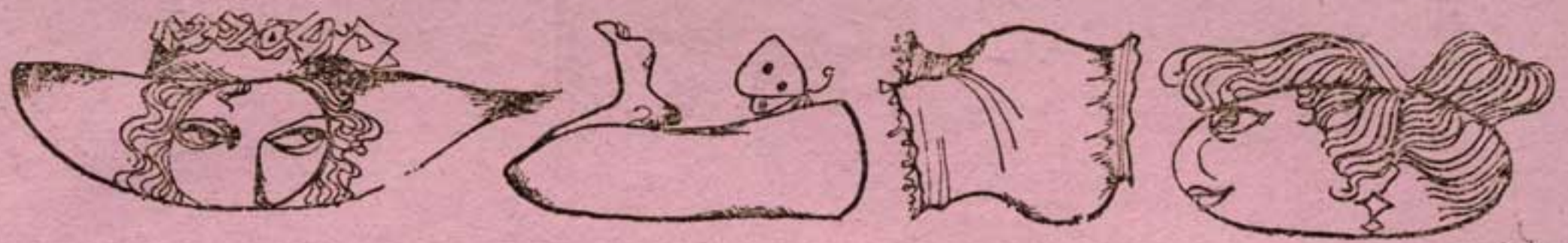
なかなかいいシステムで、これだけなら、安サラリーマンの亭主が登場する余地は全くないのだが、組織のチンピラどもが、自分たちのポケットマネーを稼ぐのに、訓練期間の信者たちを覗かせることを考え出した。珍らしく小金をポケットにした亭主が、きつとほろ酔いででもいたのだろう、一世一代のアヴァンチュールのもりでポン引きの誘いに乗ったのが運のつき。

胸ときめかせて覗いてみたら、なんと女房がとんでもないことをやらかしている。とたんに頭へきて、よせばいいのにドア蹴とばして飛びこんだものだから、チンピラどもだってボスに内証の小遣い稼ぎ、騒ぎになってバレたことだと、すぐに殺しちまったわけだ。この時、もし女房の方がわめきたてていたら、亭主と仲よく心中でなことになるのだが、とっさの機転で知らぬ顔をきめこんで、まずは逃れたということだった。

この話、二年ばかり前に、アメリカの程度の悪い実話雑誌にのっかっていったものだ。何だか話がうまくできていたので、実話だというふれこみではあった。でも、案外三文作家の創作じゃないかと思つた覚えがある。しかし、ハイレムあたりには、こういった見世物が実際にあるらしく、確かに浅草あたりのチャチなショウなんかより、何倍か面白いだろう。

お祭りの内容は、十六、七世紀ごろにヨーロッパで流行した、例の黒ミサ





なんかをやる悪魔教や、それにヴードゥー教などの、性的な面ばかりを強調したようなものらしいが、すべてナイトクラブ業者のアイディアなのか、それとも、実際にそんな秘密宗教の小団体があって、資金稼ぎにお祭りを覗かせていたのか、そのところはわからなかった。

いずれにせよ、その内容はすさまじいもので、男女の営みは無論のこと、それとてもまっとうなものではお祭りに参加する資格はないわけだし、同性同志の行為あり、中世の好色貴族がやらかした拷問を思わせる行為ありと、まったくはなばなしい。うるさいアメリカのことだから、いくら低級な実話雑誌とはいえ、それほど露骨には書いていないけれど、本誌には、どうもそのままの紹介はよさないと、編集長氏に叱られる危険がある。読者の皆さんで、しかるべく想像なさってください。

☆

ヴードゥーといえば、タヒチを中心

に、西インド諸島や、アメリカ南部の黒人の間に行われている、なんとも奇妙な宗教だ。アメリカの通俗小説によく出てくるから、たいていご存じだろう。一種の悪魔教には違ひなからうけれど、信仰する連中がみんな黒人であるだけに、なんとなく神秘的でもあるし、なんだか薄気味悪くもある。

日本でも最近翻訳が出たが、このヴードゥー教をからませた、すてきに面白いスリラーがあるので、ちょっとご紹介してみよう。

『死ぬのは奴らだ』という邦題がついている。原題は、『こちらも生きるかわりに、相手も生かす』という意味の成句があるのだが、それをもじったもので、内容も、題名以上に勇ましい。

主人公のジェームズ・ボンド君は、腕利きのイギリス海外秘密情報部員。十七世紀に大活躍した海賊の巨頭が隠しておいたものと推量される古い金貨が、アメリカに続々と現れ、それがソ連のスパイたちの財源になっているという情報を調査するため、秘かにアメ

リカへ乗りこんでくる。絶対秘密のうちに乗りこみ、アメリカの当局との連絡にも万全の用意がしてあるのだが、ホテルにつくなり、時限爆弾をしかけられて、危くこっぴどみじんになり損うといった按配で、冒頭からスリルに満ちてお話が運ばれる。

スパイたちのボスと目星をつけられている男が、ミスター・ビッグというハーレムの大ボスで、ヴードゥー教の頭主。信者たちから、ヴードゥーの教祖であるサメディイ大公の化身だと信じられていた怪物人物だ。

アフリカのコンゴ地方に源を発するヴードゥー教は、要するに呪術で、サメディイ大公というのは死の軍勢の大將であり、いふなれば地獄の親分。これに、ザンビーという死霊がくっついていて、ザンビーといえば、どうも蛇の神さまらしく、アメリカ南部のインディアンの中にも、ザンビーを信仰する連中があるようだ。

サメディイ大公にしる、ザンビーさんにしろ、いけにえにはトリや豚では





いけない、角のない山羊——つまり人間のことだ——を供えろとおっしゃるのだから、なんとも恐ろしい神さまには違いない。そんな恐ろしい神さまの化身であるミスター・ビッグは、当然のことながら、大変な権力を持っている。ハーレムの黒人で、ビッグに楯つこうなんて考える奴は、一人だっていない。サメディー大公に逆らうことは、直接に死を意味するのだから。

こんな男が相手なんだから、ボンドも、それに彼のパートナーになつてくれるアメリカ情報局員のレイターも、悪戦苦闘の連続、もうダメだという瞬間が、何度も二人を襲ってくる。幸いなことに、ビッグのお気に入り、予言能力を持つという不思議な美女ソリテアがボンドに好意を寄せ、お蔭で危地を脱したり、ソリテアと愛し合ったために、かえってピンチを招いたり、舞台がニューヨークからフロリダへ、さらにジャマイカへと移るにつれて、アクションとスリルの連続また連続、かなりどぎついエロチックのシーンも

適当にからんで、別に宣伝をするつもりはさらさらでないが、読んでいてアクビが出ないことだけは保証する。

むやみやたらと人が死ぬけれど、文章がドライだから、いやな感じもしないし、バラキューダという南海産のどっかいカマス的一种に追い廻されるところなんか、誇張ぬきにハラハラさせられる。このバラキューダを、ビッグの一味が飼っており、アメリカ情報局員のレイターがその水槽に投げこまれて片腕を食い切られたり、とにかくものすごいストーリーだ。

どちらかといえば、ストーリーの面白さ、特異さだけでもっている作品ではあるけれど、これだけ波乱バンジョウのお話は、そうザラにないから、スリラー・ファンでまだ読んでらっしゃらない方は、是非どうぞ。それに、ヴァードゥー教のことがかなり詳しく出てくるから、その方に興味のある方にもおすすめしておく。

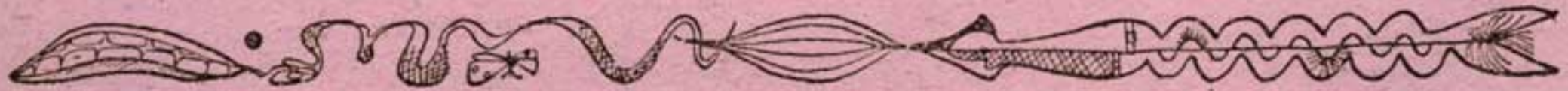
ついでにつけ加えると、原作者はイアン・フレミング。国際通のジャーナ

リストで、今度の戦争中は、海軍情報宮に勤めていたスパイの方の専門家でもある。作品は五つばかりあり、私は二つほどしか読んでいないが、全部ジエームズ・ボンド君を主人公にしたものだそう。訳されたのはまだ一つだけのはずだけれど、いずれ次々となることだろう。

ヴァードゥーで思い出したが、ファンタスティックという、主として空想科学小説をのせているアメリカの雑誌の十一月号に、色っぽいものを得意にしている探偵作家、ブライス・ウォルトが『ヴァードゥー・クイーン・イン・ニューヨーク・リンス』という題の実話物を発表していた。ヴァードゥー教の内幕をあばいたものだ。

☆

悪魔つきや黒ミサや、サバのことなんかは、すでにあちらこちらで書き尽くされているし、確か眠狂四郎シリーズでも、初めのころにそんなシーンがあったくらいだから、別に眼新しいことでもない。確かに興味はあるが、と





つくに地上から姿を消した、遠い昔の語りぐさ、くらいに感じてもしいたし考えてもいた。

ところが、去年の暮にS社から出た『悪魔への祈り』という翻訳ものを読んで、いささか驚いた。この本に書いてあるのが本当とすると、いま、ところもあるうにパリのどまん中で、サバが行われているんだそう。考えてみれば、日本にだって、何だか得体の知れない宗教がワンサとあるのだから、仰々しく驚く方がどうかしているのかもしれないが……。それにしてもですよ、どうも半信半疑、誰かパリのことをよく知ってる人をつかまえて、一言訊いてみたくてしかたない。とは言っても、相手が妖術に興味を持っていなければ、どうしようもないわけだ。

この本、原著者はフランス・バルネーといって、あとがきによると、ある週刊誌の探訪記者だそうである。それだけに、十分足を使って調べ廻ったあとがうかがえるし、妖術の歴史も、実によく調べてある。まさか、と思う

ようなことだらけなのだが、これだけ実例が並べられると、信じないわけにはいかないらしい。

たくさんの実例の中から、一つだけご紹介しておこう。

ある日、偶然のことから、この著者が有名なファッションモデルと顔を合せた。ほんの二年ばかり前にはミルクコーヒーと三日月パンで辛うじて命をつないでいた彼女は、著者が妖術に興味を持っていたのを知ると、自分が急に出世したのも、実は悪魔に魂をわたしてしまっただけだと、打ち明ける。

秘密厳守の条件のもとに、彼女はこの著者に自分の日記を送ってくれるのだが、それには、彼女が悪魔に魂をわたすいきさつから、サバの実況まで、詳しく記されていたのだ。

女優をめざしてパリへ飛び出したものの、おいそれとスターになれるわけもなく、みじめな大部屋生活の挙句、とうとう男の世話を受けるようになった。この男自体は、何ともいやな奴なのだが、この男のお蔭で、彼女はフラ

ンソワという青年と知り合い、彼にすすめられて、名声と金を引きかえに、悪魔に魂をわたそうと決心する。

フランソワに、パリから百数十キロ離れた、とある森の小屋に連れて行かれ、彼女はそこで、いよいよ悪魔に魂をささげてしまう。

全裸になって、キリスト教を捨て去る宣言を済ませると、フランソワがどこからか連れてきた黒猫の腹を裂き、その血を彼女の裸体にふりかける。彼女は、自分の血で悪魔への誓言を書きつけ、悪魔からの返事として黒猫の臓物を貰って帰るのだが、その夜以来、彼女の運命は文字通り百八十度回転したのだ。

数日後、せきたてられるような気持である有名な写真家を探ねたのがきっかけ、みるみるうちに彼女の名は売れていく。三月ほどたつと、もう押しも押されもしない、女優兼業のファッションモデルにのしあがるのだが、このころに、彼女は初めてのサバに出席する。





そのサバの光景は、中世にさかんに行われたと伝えられるものと、まったく同じだ。読んでいて、不思議な気がするほど、およそ時代ばなれがしている。

深夜の森の中。空地の中央にテーブルのようなものがおいてある。最初に半裸体の男が七人、次に手に笛を持った全裸の男が三人。やがて、背の高い美しい妖術師の女王が、薄いガウン一枚で姿を見せる。続いて、黒い鍋をささげ持った全裸の娘が二人と、いけにえの猫を入れた箱を持った娘が登場。さらに十字架を持って二人の女がこれに加わる。

逆十字架が立ち、その根元に積みあげられたわら束に火が放たれると、笛が鳴り始め、女王はやおらガウンを腰のあたりまでまくりあげて、横になりくの字なりに、尻をつき出す。信者たちは順番に、女王に接吻する。あとは狂ったような騒ぎが始まり、女王は黒い鍋で悪魔の食物を煮る。——黒いガマ、黒い雞、黒猫、モグラ、イモリ、

それに地獄の草と女王の血。これによって、長命、不妊、肉体の快樂に恵まれるというのだが。

悪魔に魂をわたしたファッションモデルの日記は、まだまだ続いている。どうにも信じがたいことなのだが、この女は、後に著者自身を秘かにサバへ連れて行くのだ。

『悪魔への祈り』の、これはごくごく一部分に過ぎない。二百五十頁ばかりの本だが、現代の事例と、歴史から引き出した事例を効果的により合せて、フランス・バルネーはぎっしり並べて見せてくれる。

こんな話が信じられるものかどうかは、どうぞご自分で読んでみてください。

☆

悪魔だとか、妖術だとか、およそ神秘的だとか怪奇趣味なんか大好きな作家といえば、誰でも、すぐにディクソン・カーを思い浮かべる。カーの作品には、こういったものが随分よく顔を出す。もっともカーの場合は、悪魔

だとか妖術そのものに特に興味を持っているわけではなくて、彼のオカルティズムに対する興味は、かなりの巾を持つていようだ。もちろん、妖術について、作品中に文献を例挙したものがあらくらいだから、まず相当なものだろう。

カーと並んで、オカルティズムに凝っていたのに、これはずっと古い作家だが、ジェレット・バージェスというのがある。例の神秘博士アストロを主人公にした作品の製造元で、このアストロがオカルティズムの大家。推理の方法自体はきわめて科学的なんだが、水晶だまを睨んだり、なかなか面白い探偵だ。

一九一二年に出た作品集で、『ザ・マスター・オブ・ミステリー』というのしか知らないが、他にもあるのだろうか。二年ばかり前にH書房から出た名探偵を並べたアンソロジーに、一つ入っているはずなんだが、その本が今手許にないのでわからない。

邪教というテーマから少し離れちま





ったが、奇妙な味のある作家というのは、どうも英米が圧倒的に多いような気がする。神秘的な、なんとなく邪教的な考えを持っていたケルト人の血を受けているせいかも知れない。ポーがそうだし、エミリー・ブロンテだとかウィリアム・モリスだとか、悪魔的などといったら、文学者たちにハッタオサれるかもしれないが、ある大学の偉い英文学者が、ポーやブロンテは明らかにケルトの血を受けついでいると書いておられたんだから、確かだろう。

サキを初め、最近の作家でも、L・P・ハートリー、E・M・デラフィード、S・H・アダムズ等々……なんといっても英米作家が多い。

そんなわけだから、怪奇物といえど英米の専門みたいに思っていたのだけれど、このごろS社で出している世界恐怖小説全集の中の、ロシア作家のアンソロジーを人から貰って、ずいぶん勉強になった。

考えてみれば、怪奇物を英米の専門

と思っていたのは、全くの早合点で、どこの国にだって昔から伝わる妖怪の物語はあるはずだし、キリスト教が伝わる以前には当然いわゆる邪教が巾をきかせていたのだろうから、それらを材料にした作品があるのは当り前だ。

『スペードの女王』を書いたブーシキンがおり、怪憎ラスプーチンが出現したロシアなんだから。第一、有名なムソルグスキーの『禿山の一夜』は、禿山で魔女たちが開く宴会の音楽だった。

ただ、アレクセイ・トルストイに怪奇小説があったのは、初めて知って驚いた。

アレクセイ・トルストイは、最近映画が来た『静かなるドン』のシヨロホフと並んで、『苦悩の中を行く』を書いたソ連文学の双壁だ。

恐怖小説全集に入っている作品は、『カリオストロ』で、紙数がないから筋の紹介はできないけれど、なかなか面白かった。

今はどうなっているのか知らないがロシアにはなんとかいう宗教の一派があつて、この信者たちはみんな去勢をするので有名だ。

少し前に、ある週刊誌が書いていたのだが、革命の起る前、レーニンだったかスターリンだったかが、地下へ潜るのにこの秘密宗教を利用し、そのためにソ連の高官たちの中には、去勢者がずいぶんたくさんいるのだそう。

どこまでが本当かは知らないが、レーニンだかスターリンだかに従つて、この秘密宗教に入っていた連中は、特に眼をかけられたのかどうか、とにかく革命以後、非常に出世が早かったという。

マレンコフなど数人の名前が挙げてあつたけれど、こう言われてみると、なるほどマレンコフでは去勢者の顔だと、いささか感心したことがある。友人の日共黨員に聞いてみたら、苦笑しながら、首をかしげていた。

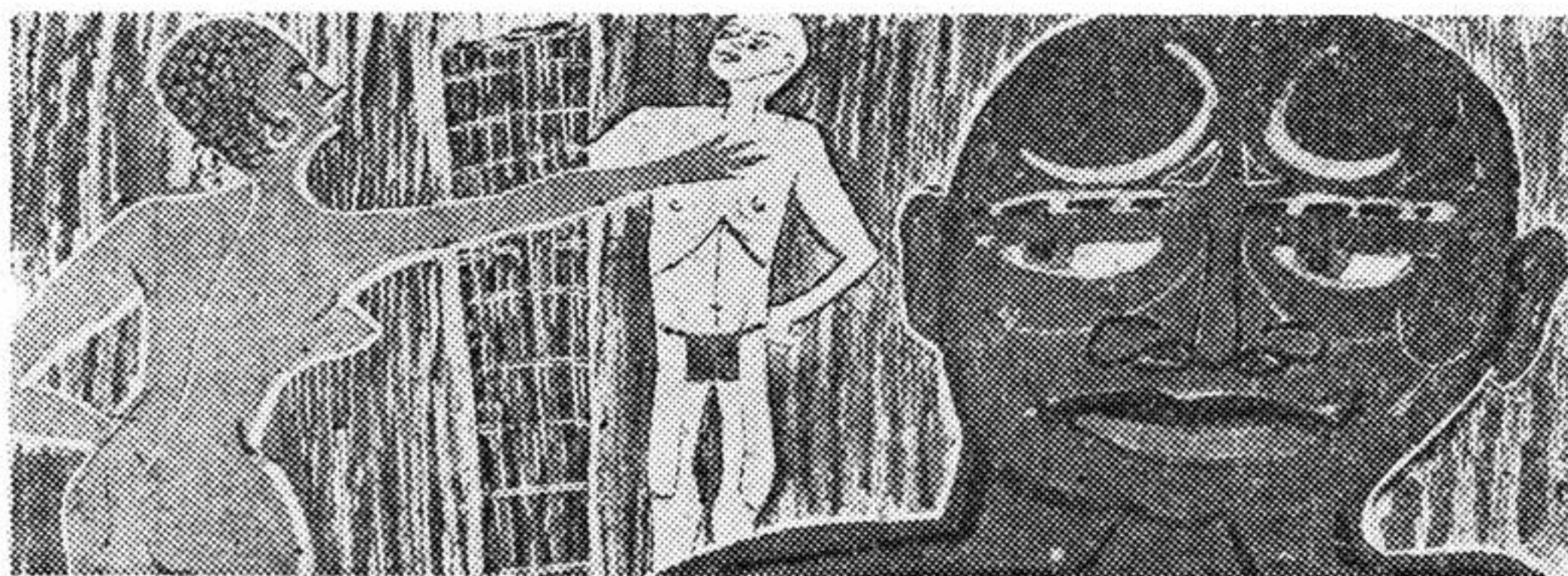


裏

窓

四 月 号

淫 祠 邪 教 · 特 集



第 四 卷 · 第 四 号

わるよい

「へえ、親分。着きやしたで……」

遠慮勝ちに駕籠の垂れを上げて、ゆり起すように声をかけた駕籠屋の、何度目かの呼び声に、仁兵衛はしびれるような酔い心地の夢をふと破られた。

「う、うう、う」

「ええ、親分。お屋敷に着きましたんで、へへ、どうかお降りなすって……へえ」

ちえッ、何を云いやがる、お屋敷たあ何でえ。仁兵衛は、泥のように酔った頭の隅で、駕籠屋たちの、見えすいた世辞にちつとばかり腹を立てながら、揃えられた履物を、危な

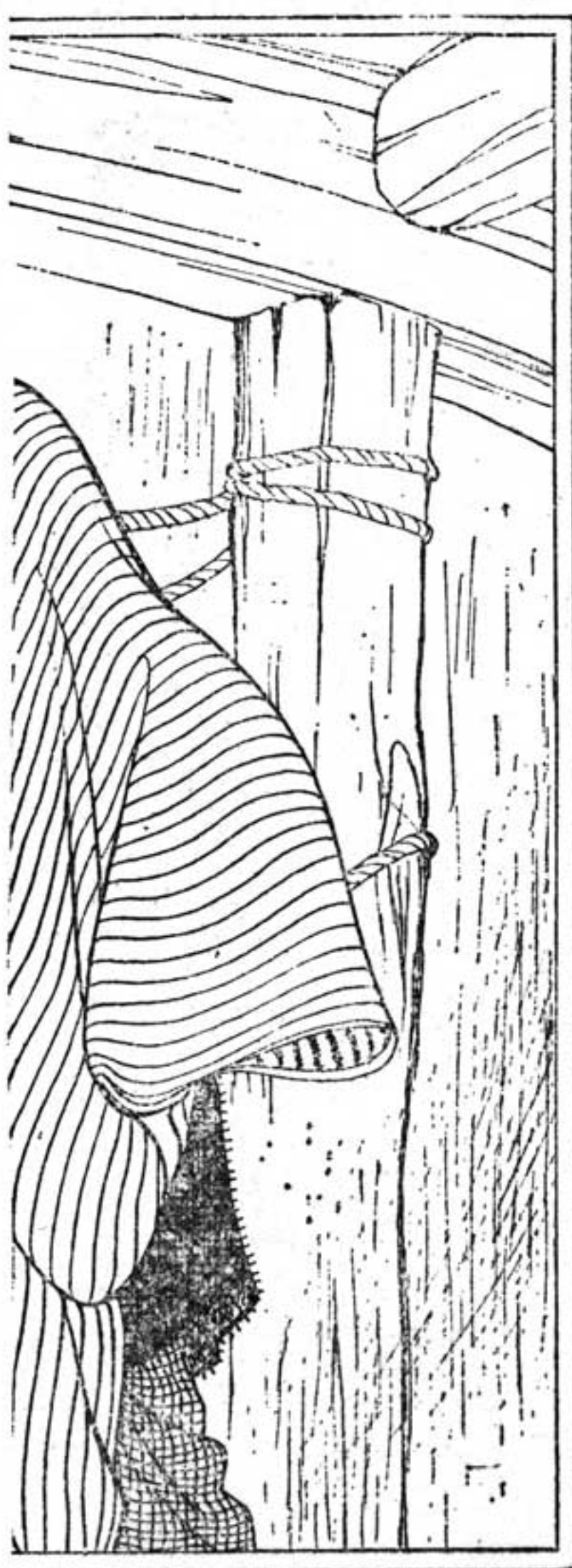
く足先につっかけるようにして、よろよると駕籠の中からまろび出た。

どのみち、酒手を少しでも多くほしい駕籠屋どもの、口から出まかせの世辞とは判っ

ていながら、いま、泥のように酔いしれて、帰りついた我が家のたたずまいは、お屋敷と云われるには、あまりにも見すばらしかった。

「あ、あッ。で、でえじょうぶで、ごきんすかい」

ふらふらと腰が崩れて、大戸を降した戸口のあたりに膝をつき、手をつき、他愛もなく仆れかかる仁兵衛の、鶴のように瘦せた軀を二人の駕籠屋は、放ってもおけずに助け起そ



月城寺 遠

絵・七世文子

うとする。

「ちっ。ういーッ。い、いらねえお世辞だ。

ま、まだ、この仁兵衛は、そ、それほど酒にのまれちゃあ、い、いねえよッ」

「で、でも、親分」

「う、う。で、てめえ……それ……」

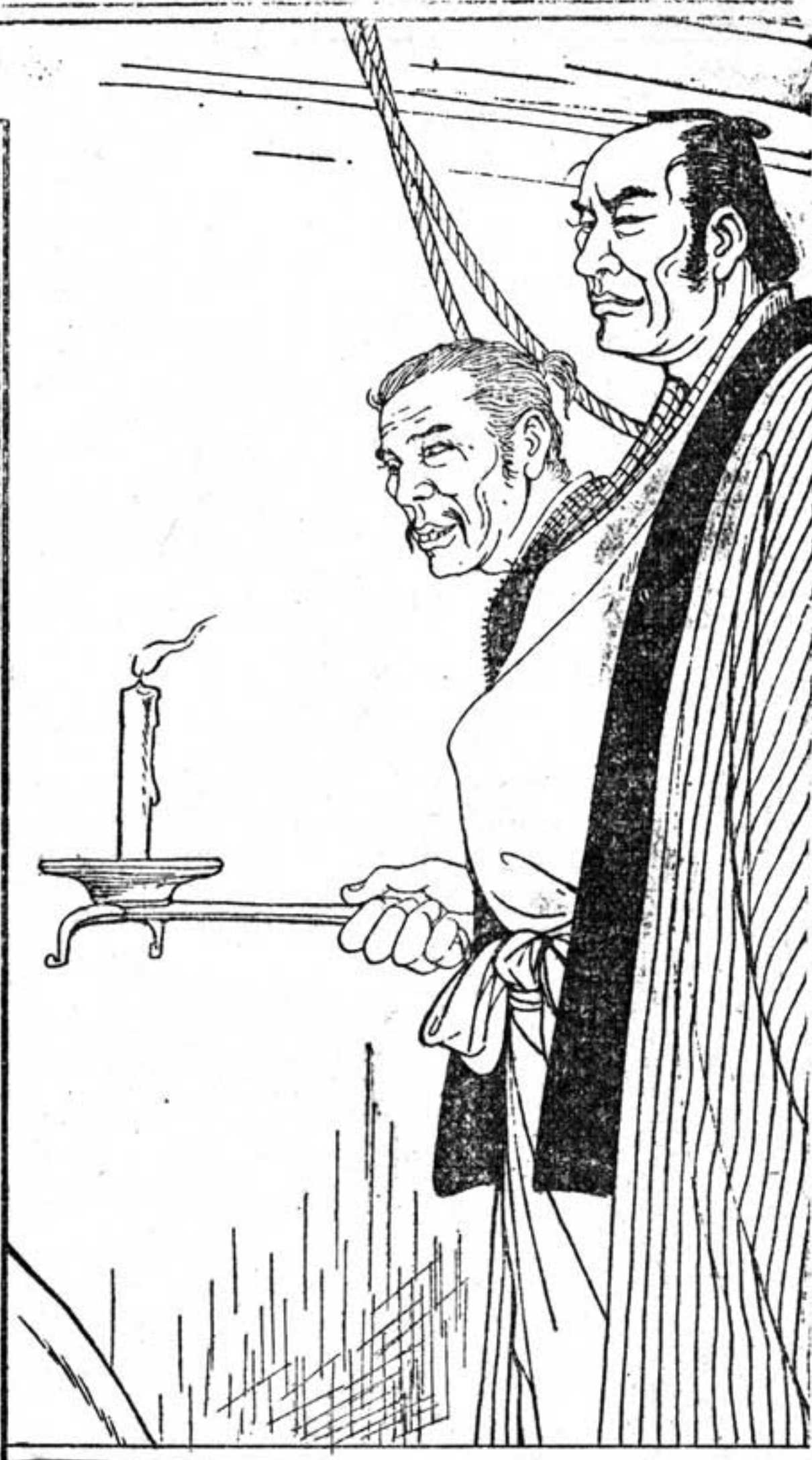
気ばかり確かなつもりではいても、今夜ばかりはどうした加減か、軀が云うことをきかなかった。

六十路を過ぎた年の疲れが、近頃になってよく自分でも判っていたし、だから無理矢理にすすめられた酒を、出来るだけ抑えて呑んでいたつもりが、これほどの酔いを、軀のふしぶしに廻らせようとは、仁兵衛は思ってもいなかった。

花菱屋仁兵衛。そう、今にも消えかかったように書かれてある、すすけたような木札の傍のくぐりが内部から開けられて、もつれあう仁兵衛と駕籠屋の他には人通りもない、暗

時代 巷談

探り観音



い通りに、斜に灯を投げた入口から、華やかな色彩がすらりと立って、

「あら、まあ、こんなに酔っぱらって……」
と、仁兵衛の手を取った。

「あ、こ、こりゃあ、どうも……」

駕籠屋は、その娘の、匂うような美しさにへどもどしながら、老人の腰を支え、腋を支えて、娘に手伝ってぐりの中に仁兵衛を押し込むように送り込んだ。

「おとつあん。こんなに呑んじゃあ、軀に毒だよう。ほんとにどうしたのか知らねえ」
そんなことを口の中で云いながら、娘は駕籠屋の掌の中に、いくらか包んだ紙包をそつと握らせる。

「ま、まってくれ。ち、ちよつと、待ってくれッ！」

仁兵衛が、上り框の板敷に、瘦せた軀を必死に起すようにしながら、骨ばった手を空をつかむように振り廻して、叫んだ。

「へえ！」

「な、何か、御用で？」

観音講の講金が娘の軀と引き替えになろうとは！色と慾とに憑れた狼の前にお静の運命は？

二人の駕籠屋は、娘に貰った酒手の重さを掌の中で計りながら、くぐりを出ようとして曲げた腰を、また立て直して仁兵衛の方を振り返った。

「お静ッ。包があった筈だ。紺色の、ふ、風呂敷包があった筈だッ。か、駕籠の中に、わ

れたかも、し、しれねえ……」

「え？ 紺の風呂敷包み？ 駕籠屋さん、ちよつと駕籠の中を調べてみて下さいな、おとつあんが、忘れたって云ってますから」

「へえ。おう、相棒ッ。駕籠の中を見てみなよ。そんなものが、あったようにも思わねえんだが」

一人が、娘と相棒にうながされて、表に置いた駕籠の中を、ごそごそと探しにかかる。

「あったかい！」

「ねえぜ、そんなもなア。親分の、お間違いじゃあ、ごきんせんかねえ」

それを聞いて仁兵衛はガバツと上り框に身を起した。

「そ、そんな、そんなこたあ、ねえ筈だッ」

両手は、はだけた着物の、懷の中をかき探し、足元を、土間を、忙し気に見廻した。

「ないッ。無いッ！ か、金が無くなったッお、お静ッ、探してくれッ、講中の金が、な

くなったッ！」

きょとんと突っ立って、とまどったような顔付きの二人の駕籠屋をチラリと眼の隅に見ながら、お静は父親のただならぬ気配に、心配そうにその顔を覗き込んだ。

わるだくみ

心配そうに、相手の顔を覗き込んだ浩庵は酒焼けのした渋紙色のひたいをピタリと扇子で一つ叩いてから、いつもの癖で、とってつけたようにえへへと笑った。

「で、拙としてはだな、親分の仰言るように花菱屋の盃の中に、ちよいと一服、盛った訳じゃが、ひとつその、約束のものを……」

「ふふふ。浩庵先生、まだ手を出すのは早いぜ、仕事は残ってるんだ」

そう云ったのは、深川櫓下の人入れ稼業、橋口屋伝六だ。

伝六の家の奥座敷で、一緒に呑んでいるのは本道の簀井浩庵である。

本道（内科）の看板をにかけてはいるが、腕のところはどうやらあまりあてになりそうもない評判で、どうかすると、月水早流しの闇治療も再三ならずやってのけ、匙加減で人

の五人や六人は、器用に、坊主の方に廻していようと云う油断のならない医者だった。

伝六は、でっぷりと欲肥りに肥った軀を、神棚を背にして、あぐらを組み、長火鉢の猫板の上に置いた盃を、時々口のあたりに持つて行く。

「ふふふ。今頃は仁兵衛のおやじ奴、泡を喰って引っくり返っているだろうぜ。ふふふ」

「それにしても、今日になっても、あわてて馳け込んで来ないところを見ると……」

「なあに、昨夜の、今日だ。あの金を何処かで落したものと思いやがって、血まなこになつて馳けずり廻っていやがるに違えねえ」

「えへへ、そうかも知れぬな、親分」

「これで……」

伝六は、ペロペロと舌なめずりをしながら云った。

「これで、お静は、こっちのものだぜ。おまけに旨くすると、仁兵衛の縄張りも、すっかり頂戴出来ることになる……ふふふ。芝居の筋書きは、こう行かなくちゃ、面白くねえや」

にやりと笑う伝六の盃に、お幫間^{たご}医者の浩庵が、なみなみと酒をつぐ。

「で、その、拙の方も、おこぼれを、な」

「うむ、酒なら、遠慮なく呑むがいいぜ、先生」

「いや、酒ではない、その、黄金色の方のものを、な」

うふふふ、と咽喉の奥で笑った伝六、観音講の講金を罫に、同じ稼業の花菱屋仁兵衛をうまうまと陥し入れた筋書きの成功を、心の中で祝いながら、あとはもう、熟柿の落ちるように、すっぱりと手の中に落ち込んで来る筈の仁兵衛の娘お静のことを考えている。

作事奉行牧野備前守の側用人、大庭鬼十郎が、仁兵衛の娘お静に魂を奪われて、再三、仁兵衛のもとに娘を妾奉公に出せと、人を通して談じ込んでいるのを耳にした伝六は、その話なら、此の伝六に……と、大庭用人を自分の手中にまるめこんだ。

作事奉行の側用人を、自分の手中にまるめ込んでしまうことは、人入れ稼業の伝六には金箱を抱いたようなものなのだ。

鬼十郎の手を通して、いくらでも仕事の筋が降って来る。この金ずるに妾を世話して、その鼻毛を抜かせれば、金儲けは思いのままだ……そう思った伝六が、仁兵衛に当って見たが、

「たとえ相手が大名でも、俺の娘は、妾なん

かにやあ、やれねえ」

それが、仁兵衛の、にべもない返事だった、手を変え、品をかえ、してみたが、そうすればするほど、却って仁兵衛はかたくなになった。

お静も、父親の血をついで、美しい娘に似合わず気が強いのか、それとなく手を廻して気を引いてみても、一向にうんと云わないのだ。女房を早く死なした仁兵衛の身の廻りの世話と、稼業のきり盛りをたった一人で人手も借りずにやってのけ、松ヶ枝小町と評判の娘なのだが、このお静一人が、手に入ると入らぬでは、伝六の儲けのおもわくが、大分違ってくるのだ。

「大庭様。あの娘のことは、おまかせ下さいまし……」

と、鬼十郎の前で大きな口をきいた手前もあるし、うっかり他の者の手柄にされては、ごっそり仕事を横取りされ、橋口屋伝六、男もすたり身もすたる。

近頃になって、しびれを切らした鬼十郎がお静の件はどうなった……と矢のような催促だった。

春めいてくると、どうやら、五十面を下げた大庭鬼十郎も、軀の内部に火がつきそうに

なつて来るのかも知れない。

だから、伝六も気が気ではなくなっていた。そこで、思いついたのが、最後の手段。

幸か不幸か、相手の仁兵衛は同業の人入れ稼業でありながら、年とともに強くなるその頑固さが禍いしてか、だんだん稼業もさびれてきているのだ。

若い頃は、神田松ヶ枝町の花菱屋仁兵衛と云えば、広い縄張りを自慢にした程の勢いだったし、若い衆の何十人も顎で使った元締だった筈が、今では時世の波に乗り切れずに、同じ町内ながら、裏通りにひっそりと看板をかけているにすぎなかった。

「仕様がねえ。こうなりやあ」

伝六は、舌なめずりをして、罫をかけたのだ。

「恰度、来月は、あの仁兵衛おやじが、観音講の月番だから……」

さ け

「仁兵衛とっつあん。来月は、おめえさんが観音講の月番だぜ……」

伝六はそう云って、仁兵衛に盃を差した。毎月行われる観音講の寄り合いの席だった

同じ稼業の元締め連が、親睦をかねて作っている無尽講の頭寄せに、仁兵衛も昔からのつきあいで、しぶしぶながら顔を出している。

柳橋の船宿、波乗屋の二階で景気をつけ、時刻をはかって仕立てた猪先舟で、かねてなじみの川向うの旗亭扇屋の二階広間に、乱れかけた一座が、やっと落ちついたところだった。

仁兵衛は、他の者と離れてたった一人、呑むともなく膳を前にしているのを、伝六が、さもいたわるように話しかけ、にじり寄って来たのだ。

幫間医者の浩庵が、くわえ頭をふり立てて顔一面のあいそ笑いを浮べ、仁兵衛の盃に酒をつぐ。

「先月俺が預かった講中の預かり金だが、先刻柳橋で帳尻を合わせて、ここに二百七十三両と二分ある。来月の月番のおめえさんに、確かに渡すぜ」

「そ、そりゃあ」

と仁兵衛が顔を上げた。

「そりゃあ、受け取らねえ事もねえが、櫓下の。別に今夜、こんな酒の席でしなくても」
「いいや、松ヶ枝町のとつつあん。そうはいかねえ。本来なら、柳橋で受け渡しする筈だ

ったが、おめえさんの顔が見当らなかったから、ここまで持ってきてしまったんだ。受け取ってもらいてえんだが」

伝六は、そう云って立ち上ると、

「皆の衆。講中の預り金は、約定通りに来月の月番、松ヶ枝町に預けやすから、どうかひとつ、手をしめて貰いてえんで……」

と大きな声で満座につげた。

やがて、シャンシャンシャン、と手をしめ終ると、二百七十三両二分を包んだ、ずっしりと重い講金の包みが、紺の風呂敷に包まれたまんま、仁兵衛の膝の上に置かれる。

「えへへ。まあ、来月は、御苦労様なことできさるテ……さ、おひとつ」

浩庵がさり気なく銚子を取り上げて、仁兵衛にすすめた。

これに、老人を前後不覚にする為の薬が仕込んであろうとは、神ならぬ身の知る由もない仁兵衛。

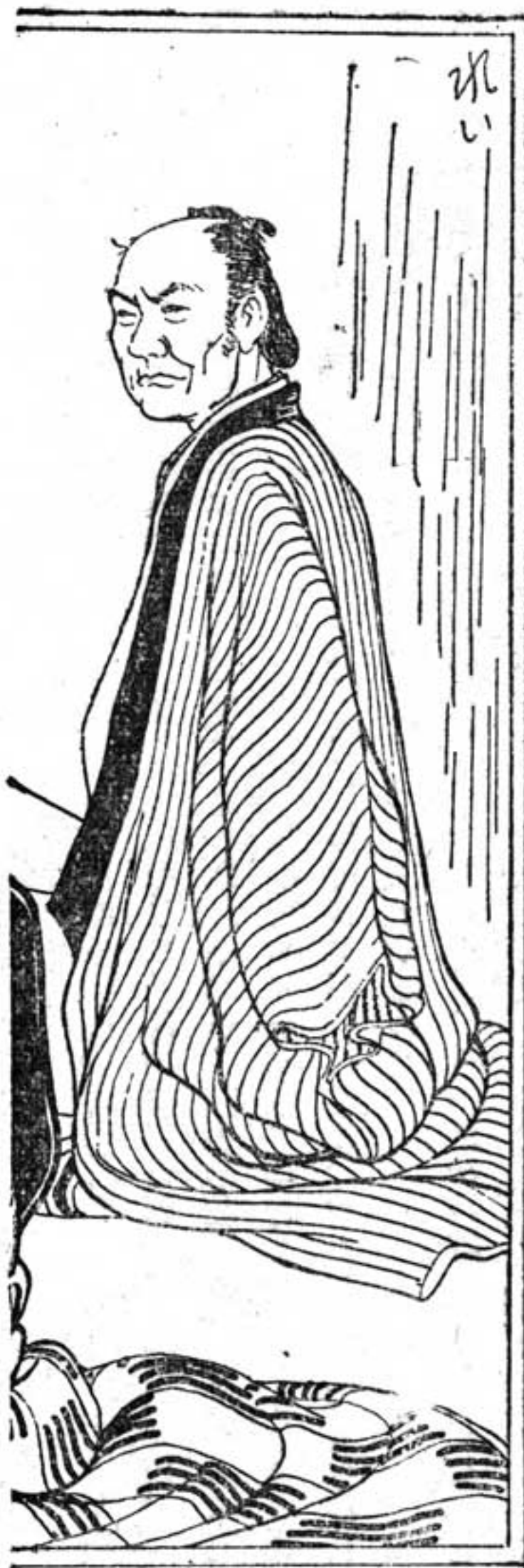
大金を預かった責任はともかく、酒の一杯や二杯で崩れてしまうとは考えてもいなかったもので、まあ少しなら、と気を許したのが油断だった。

伝六は、仕かけた罠にえものがかかってくるのを、眼を細くしてながめていた。

わ
な

眼を細くして、仕掛けた罠にえものが、ちやんとかかって来たのをながめている伝六。

お静は、日頃の勝気にも似ず、白いうなじが襟元からのぞける程にさしうつむいて、じ



つと疊の目を見ている。

「……そうかい。そりゃあ、災難だったなア……」

伝六は、心とはうらはらの事を口に出してお静に見えないように、にたりと笑った。

観音講の寄り合いの夜から、恰度三日目。

父親仁兵衛の失くした二百七十三両あまりの講中の金を、どこで落したかと、八方探したが見当たらないままに、お静は、もしやの思いに一筋の希望をつないで、櫓下の伝六のところを訪れたのだった。

「……あのとき、金包みを忘れて座を立ったんじゃあねえかと云うお前さんの考え方も、そりゃあ、無理もねえが、松ヶ枝町のとつあんは、娘のお前さんが知ってる通りの堅物だ。一杯や二杯の酒に喰らい酔って大切な講金を忘れて帰るような男じゃねえ。若し、忘れたと云うのなら、扇屋を出てからの話じゃあねえのかな。ふふふ、何処かに、お前さんの知らねえ、いい穴がちゃんとこしれえてあるンじゃあねえのか？」

親身に心配してくれるような男ではないことは、お静には始めから判っていたが、胸がつぶれる程の思いをしている時に、父親が色狂いをして、それに金をつぎ込んでしまった



ような云い方は、若い娘には耐えられなかった。

「そ、そんな……」

「そうじゃあねえと云うのなら、それでもいいが、まあ、どのみち、来月の末までには三百両近い金を、おめえさんのところでこしらえなきゃあ、どうにもなるめえ。とにかく、この橋口屋伝六は、満座の中でちゃんと講金

の受け渡しは済んでいるんだ」

あとは、全部そちらの責めだと云わんばかりの言葉だった。

「……………」

言葉もなくうなだれるお静。

三百両近い金は、昔ならともかく、今の花菱屋の身代では、どう馳け歩いても算段のつかない金高だった。

おまけに、仁兵衛は、あの夜のことがもとで卒中を起し、半身不随のまま床についている。

「松ヶ枝町のつつあんには、気の毒なことをしたが、だからと云って、講中の預り金を月番が何処かに失くしました。じゃあ、連中が納まるめえ。まだ、この事は俺の耳に入っただからよかったようなものの、他の者の耳には入れないようにした方が、お前さん方の身の為だぜ。下手をすると稼業が出来ねえのはおろか、江戸に居られなくなるかも知れねえ。訴人の仕方によっちゃあ、横領の科人になって、牢に叩き込まれるぜ」

伝六、えものを思いのままにする為に、脅かし、締めつけて罫の口を閉じるつもりだ。

しかし、その言葉とはうらはらに、此奴の豚面はニヤリニヤリと顔の紐がほどけて、眼の前にぶら下った金づるの、あの大庭鬼十郎のあばた顔がふやけて写るのである。

作事方の人入れは、これでどうやら一手に握れそうだ。そうすると、その一ヶ月何万人かの頭割りかふところ手のまんま、この櫓下の伝六様のところに転がり込んで来る……。

「な、お静さん」

伝六は奇妙な猫なせ声を出しやがった。

「お前さんも若い身空で苦勞が多いが、もしお前にさえその気があれば、この橋口屋が、相談に乗ってやろうじゃねえか」

「……………」

「無理にすすめる訳じゃあねえが、仁兵衛とつつあんもそんな病氣になったンじゃあ、この先稼業を続けて行くことも出来めえ。とつつあんに心配かけず、ゆっくり養生させてやるにやあ、な、判ったろう。いつか話した、あの大庭様の話な。うんと云やあ、それで全部カタがつかあな」

「……あッ」

お静は心の中でハッとした。

今の今まで、何か心の中に妙なしこりがあるのを感じていたが、これは、罫だったのだ。きつとそうに違いないのだ……。

娘の本能が、訳の判らないままに、敏感にそれを感じ取ったのかもしれない。

眼に見えない縄で、ぎりぎり身動きならず縛り上げられてゆく自分の運命が、今になって判って来たような気がする。

父親は金包みの中味を確に受け渡しするとき、に調べたと云う。また、あの駕籠屋を一度は疑って見たが、それも、扇屋に昔から出入りの町駕籠で、決して正体の知れない駕籠屋で

はなかったのだ。すると……。

何か、からくりがあるのではないか？

お静は、そう思った。

第一、父親は、そんなに酒に弱い方ではなかった。稼業がら、昔は相当に呑んだこともあるし、今でこそ年を取り、軀の加減を考えて、出来るだけ多く呑まない様にはしているが、毎日のように、寝酒の一杯はかかした事がなかった。

それが……。

あの夜は、ほんの二、三杯口をつけたただけだと云うのに、あんな酔い方をするとは？

「どうだい。講金の三百両ぐらいなら、大庭様の方からでも、立て替えて下さるぜ」

伝六のいやらしい眼が、のしかかるようにお静を見つめ、うむを云わせぬ言葉がたたみかけてくる。

「あたし、帰らせて貰います」

お静は、伝六の言葉に返事もせず、すらりと立ち上った。

伝六は、その美しい立ち姿を見上げながら云った。

「ふふふ。そうかい、ふふふ。そのうちに困って、気持も変わるだろうから、そのときや

ア、俺のところに来るがいいぜ……ふふ」

しめぎ

「……そのときやあ、俺のところに来るがいいぜ……」

と、あの場で帰りぎわに云った伝六の言葉が、今のお静には痛いほどの思いでよみがえってくる。

娘の本能から、居たたまれないものを感じて、逃げ出すように帰って来たあのときからもう、やがて一カ月に近い日が過ぎてしまっていた。

中気で寝込んだまま、口さえもろくに聞けずに居る仁兵衛をかかえて、人入れ稼業でもなかったし、もう、花菱屋の戸口は、あのとき以来締めきったきりだった。

それでなくてさえ、不如意勝ちだった手許が、もう、今はどうにもならなくなってしまっている。

お静の、なけなしの着物は、とっくの昔に質店の蔵に入っていたし、髪のものも、自分の物はおろか、母の残した品物まで、洗いざらいなくなっていた。

仁兵衛の昔からの知り人もなくなはなかった

が、何処からどう手が廻っているものか、ばったり寄りつかなくなってしまうて、そのかわりに、毎日のように、うるさく顔を見せるのが、あの藪医者者の浩庵だった。

「へへへ、仁兵衛親分の具合はどうか」

そう云って、見舞にことよせて、蔭ではお静の袖をそっと引き、

「どうじゃ、もう決心がついたかな」

と、顔を近く寄せてくるのだ。

此奴が、父の仁兵衛に薬を吞ませた奴だとお静に判ったとしたら、ただでは済まないのだが、当の仁兵衛も気が付かず、お静ももとより判らない。

仁兵衛をへべれけにしておいて、その前後不覚の軀を駕籠に乗せるとき、あっさりとな呂敷包の二百七十余両をとり上げたのは、伝六に指図されたこの藪医者だったのだ。

そのあとで、たンまりと頂くものを頂いた浩庵は、またぞろ、こうして次の仕事にかかっているのである。

仁兵衛は、中気になって以来、あの頑固さを、何処かに置いてきたかと思われるほどの弱気になって、お静の手を取っては泣き、浩庵の見舞を受けては、涙をこぼした。

舌が引き吊って、言葉にならない声を、懸

命になって出そうと努力する。

「あ、あ、あ、ああ、あー」

床の中で赤児のように声を上げ、お静に向って手を合わせたたりすることもあった。

身を切られるような辛さの中に、日はいつの間にか過ぎていって、観音講の例会が近づいて来るのだったが、二百七十余両の金は、出来るどころか、毎日のたつきにことかく仕末なのだ。

お静は、こうなるまでに八方を駆け歩いたが、娘の身には、その大金は重すぎた。

身を売っても、せいぜい三十両どまりで、たとえ、それで金は出来たとしても、父親をこのまま放りっぱなしして身を沈めることも出来ない相談なのだ。

罠なのだ。そう思ったあのときのお静の直感どおり、じりじりと伝六の仕組んだ締め木がお静の柔肌をしめ上げてくる。

しかし、はっきりした証拠がない限り、これが仕組まれた罠だと誰かに訴えることも出来ないのだ。

相手は、如何にも親切ごかしに迫ってくるのだし、謎を感じていながら、どうしようもないことだった。

一番せつないことは、父親の仁兵衛が、お

静に手を合わせて、廻らぬ舌で、大庭様の話に首をタテに振ってくれ、と顔を見る毎に云い、そして涙を流すことである。

浩庵が仁兵衛を言葉上手に口説き立てたあげくの果に、気の弱くなってしまうている仁兵衛が、そのまま乗ってしまったと云うことは、お静には判っている。

茅場町の新兵衛と云う同業の元締めが、講中の金をどうするのだ！とねじ込んで来たとき、お静の気持は、死んでしまいたい程だった。

「あたし、櫓下の橋口屋さんへ行つて来ます」
そう父親に云ったとき、

「おお、おお……」

仁兵衛は動く方の左手で、お静の手を握りしめて大粒の涙を流した。

娘の気持を察しもしたろうし、花菱屋がこうまで落ちてしまったことの責任を、胸がつぶれる程の思いで感じていたであろう。

傍に居てそれを聞いていた浩庵は、にたりと笑った。大庭鬼十郎からは、もう矢のような催促だったし、伝六も焦っている。いま、お静が腰を上げる気持になつてくれたことは伝六につつかれている浩庵としては、ほっとした思いだったかも知れないのだが……。

どぞう

伝六に尻を突つかれている浩庵としては、ほっとした思いだったかも知れないのだが、お静は、櫓下の橋口屋伝六のところに来て鬼十郎の妾になると云う話には、決して耳をかさなかった。

「なあ、お静さん。おめえ、何か勘違いをしているンじゃあねえか、俺が一と月前に云つたのは、大庭様の話に、首をタテに振るのなら、金は何とかして立て替えようと云うんだぜ。それを、何でえ、金だけ借してくれ、大庭様の話はいやだ、じゃあ、おめえの方ばかりの都合はいいが、こちらの面は丸つぶれじゃねえか！」

「そうだ、その通りだよ、親分の云うとおりだ」

浩庵が、そばからしゃしゃり出て、
「昨日から、口をすっぱくして云う通りだ。おまえさんが、ウンと云えば、八方丸くおさまるのじゃ」

と、伝六の尻馬に乗った口ぶりで云う。

「いやですッ」

お静は、美しい顔をこわばらせて、二人を

にらみつけるように見つめた。

「あたしは、大庭様の話はいやです。お金を借してさえ下されば、きつと、何とかしてお返し致しますから……そのお話と、このお話は別のものにして……」

「やかましいッ！」

伝六が、たまらずにどなった。

「女だと思つて優しくしていりやあ、つけ上りやがつて！ やい、お静ッ。この女が仁兵衛とぐるになつて、金を盗みましたと、この俺が訴人すりやあ、伝馬町の拷問倉で、いつてえどんな目にあうと思つてるンでえ。この強情あま……」

「まあまあ、橋口屋の、そう娘御をおどかしではいけない」

今度は浩庵が、猫なせ声でお静を口説き立てる。

「え？。親分をおこらせてしまうと、お静さんの損になりはせんかな。それより……」

「では、何故、こんな土蔵の中に、女を閉じこめて、二人がかりで責め立てるのでござんすかえ」

橋口屋の土蔵の中だった。

荒けずりの板敷の上に、三枚ほど敷いた荒れ畳の上に、お静はきちんと坐っているが、

それを左右から囲むかたちで、伝六と浩庵が口説き立てているのだった。

「そ、そりゃあ……」

伝六が、思わず口ごもると、浩庵がそれをさえぎるように、

「お、お静さん、よく考えても見なされ、お前の父親の恥を人に聞かせてはまずいと思うからの、云わば、こちらの思いやりじゃ」

「そ、そうだぜ。やい、お静。盗ッ人のおめえたち親娘を、生かすも殺すも、今じゃあ、この俺の胸一つにあるんだ。おまけに、浩庵先生に聞きゃあ、仁兵衛は、大庭様の話を承知して、涙を流して喜こんでいるってえ云うじゃねえか！ 親の承知している話に首を横に振るたあ何てえ親不孝な娘だッ」

「……………」

「ちえッ、中一日おいて夜が明けりゃあ、観音講の当日だ。無尽の当った連中に金も渡さざあならねえし、おまけに、大庭様に、最後の返事も持って行かなくちゃあならねえんだぜ」

「……………」

「浩庵先生よ。もう、こうなったら、口で話していても、はかがいかねえ、土蔵の二階に押し上げて、痛え目にあわせてやろうじゃね

えか！」

伝六が、いきり立つのを浩庵が押しとどめた。

「まあ、まあまあ、親分。痛めるなンぞと、そう短気を起しては、却って事がもつれるもとだ、えへへ、拙にはな、もったいい手がござるて、えへへ」

ボン、と額を叩いて、いつものくせで笑った浩庵、お静の傍にいざり寄った。

「へへ、さあ、お静さん。おとなしく、この土蔵の二階に上ることだな。いま伝六親分の云ったとおり、おとつあんにゃちゃんと承知がさせてあるのじゃ。強情を張ると、どう云うことになるか、ゆっくりと見せて進ぜるからな……へへ」

伝六のように、真っ向から、いきり立たないところが、却ってうす気味の悪い感じをお静に与えるのだが、伝六にはそれが判らないから浩庵の猫なせ声が齒がゆかった。

「お、おい、先生。どうする気だい。二階に押し上げてまた、二日も三日も押し問答じゃあ、大庭様の方が、ただじゃあ済まねえんだぜ！」

「まあ、そう焦らずに、拙にまかせておくがよろしい。傷をつけたら、叩いたりすると、

玉の値が下ると云うことを、御存知ないのかな、ふふふ。観音講の当日までには、きつと首をタテに振らせてみせるから……」

は
ね

「ふふふ。観音講の当日までには、きつとどんな事があっても、首をタテに振らせてみせるから……」

浩庵は、お静が崩折れるように転がっている姿を見降して、そうつぶやいた。

土蔵の二階。

お静、燃えるような、緋の長襦袢一枚に剝がれて、無慙にも自分の腰紐で、高手小手に縛り上げられてしまっているのだ。

花のような、色とりどりの色彩が、うす暗い土蔵の中に、パツと開いたように散って、それが、なまめかしく浩庵の眼を射た。

伝六は、お静を土蔵の二階に押し上げたあとで、何かの用を思い出したらしく、この場には居ない。

「ふふふ。さあ、覚悟はよいかな」

ピクリ、とお静の軀が震える。

心の中では、必死にあがらっている、可弱い娘の身で、何処まで、伝六と浩庵にたて

ついて行けるものだろうか。

「な、なにを、するんですッ！」

「うんと云えば、それでいいのじゃ」

「……か、かえして！帰して下さい！」

「そうはいかぬ……ふふ」

浩庵は、お静の足元にかがみ込んで、必死に縮める素足を抑えた。

「あッ、あッ！」

「これ、そうあばれると、恥かしい姿になるのが、判らないのか」

「あッ！」

お静は浩庵が一体何をするつもりなのか判らなかった。しかし、この藪医者が、懷から片手で取り出した物を見た時、全身の血が、かーっと熱くなるのを感じた。

浩庵の手に持たれているのは、鷹の羽根ではないか。

「……………」

「ふふふ。これで、どうするかわかるか」

浩庵はそう云って、その鷹の羽根をお静の

柔らかな頬の上に走らせた。

「あ！ ああッ」

ふっくらとした頬から、咽喉のあたりを、それで二、三度撫でられただけで、ぞーっとする擦ったさが、全身を駆け巡る。

浩庵の膝が、しっかとお静の軀を抑えていて、縛られた身では、その魔手から逃れることは出来なかった。

「ふふふ。擦ったかろうがの。しかし、まだまだ、これくらいでは何もしていないのと同じことじゃ。ほら、こうして足を抑えて、この足の裏を、こうして……」

「あッ！ ひ、ひ、ひッ」

無情な鷹の羽根が、新鮮な果実のようなお静の足のうらの柔かな箇所を、そろりそろりと擦り廻し始める！

「ひ、ひッ。う、う」

それは、何にもたとえようのない責め苦だった。

痛さは耐えようがあるかも知れない。

しかし、擦ったさは、こらえようがないものなのだ。

小半刻もこうして擦られて、気が狂ってしまった女もいた程の、これは、おぞましい地獄の責めだ。

「ああッ！ くっくッ！」

身をもだえ、頭をのけぞらせ、お静は呻いた。

瞬時も休まぬ羽根の動きは、二つの柔らかな足のうらを、速く、時には遅く、撫で廻し擦りまわす。

桜貝をはめこんだような、美しい可愛い足指は、さながら別の生き物のように、反りかえり、縮まり曲り、ピクピク、くねくねと悩乱の踊りを踊るのだ。

全身に、びっしりと脂汗が流れる。

総身の毛穴が、瞬時に開き、また縮まって今にも逆流するかと思われるばかり柔膚の下血潮の流れが、火となって全身をかけめぐる！

「あーッ。いッ、いッ、ひィ、ヒィ」

「どうじゃ。……」

浩庵も、流石に息をはずませている。

膝の下にもだえるお静の必死の動きが、それが必死であるだけに浩庵一人の力では抑え





ようがなかったのだ。

「ど、どうじゃ。たった一言、大庭様のことを承知しましたと、云えばいいのじゃ」

「うッ、うッ！」

「……強情を張るなら、張るがいい。そのかわり、この浩庵は手加減はせぬぞ」

そう云いながらも浩庵、羽根を動かす手を止めて、額ににじんだ汗を、そっと片手でふいた。

お静は、身をくねらせて、はあッ、はあッと荒い息を吐いている。

一時的にもせよ、皮膚の上から羽根の魔手が離れたことは、それは得がたい救いかも知れないのだが、その空白の刻が却って次の責め苦の激しさを思わせて、たえられないおぞましさを感じさせるのだった。

「……はアッ、ふうーッ」

はげしい身もだえのあと、骨も肉もばらばらになってしまったような虚脱の中にお静は居た。

「どれ、そろそろまた始めるとするかな」

浩庵が、意地悪くにやりと笑って、再び羽根を取り上げる。

「あッ、あれッ。ゆ、ゆるしてッ！」

「そんなら、承知するのじゃな」

「……………いえ、そ、それは！」

浩庵の眼がギロリと光った。

「こうなれば、手加減はせぬと、云った筈だがな……。ふふふ、足の裏だけでは、ものたらぬと見えるの。いっそのこと、裸に引んむいて、ところきらわす擽って進ぜようか！」

お静の乱れに乱れた姿に、どうやら木石でない浩庵、妙な気持を起したものの、これも役得ずくで、松ヶ枝町小町の肌が見られると今頃になって、気もそぞろになりやがった。

「ふふふ。ふふふ」

お静の後に廻って、手首の紐を解く。

助けるつもりではさらさらなかった。長襦袢を脱がせるには、高手小手に縛った紐が、先ず邪魔になるからだ。

「あッ！ た、たすけて！」

腕がされる、と思う恥かしさに、お静が思わず声を立て、身を俯せるのを、浩庵はかまわずに押し伏せて、長襦袢の襟がみを取って引き剥がす。

丸いすべすべした肩が現れて、それが、なやましい曲線のまま、浩庵の眼を射た。

両手の紐は解かれていたので、お静は必死に胸を抑えて身を縮めた。

そのとき。

「やいッ！ な、なにを、しやがるッ！」

土蔵の二階に上って来た伝六の声だった。

まんじ

「やいッ。な、なにを、しやがるッ！」

土蔵の二階に、いま上って来た伝六は、浩庵とお静のもつれる姿を見て、とたんに、どなりつけた。

「こ、この、簀匠者奴ッ！ 大庭様に渡す前に、お静を傷物にするつもりかッ！」

伝六が、そう勘違いをしたのも当然かも知れない。

お静は肌も露わに身を伏せているし、浩庵は、それにおおいかぶさるような恰好でもつれているのだ。

いま、この娘を浩庵づれが自由にして、大庭鬼十郎の気をそこねたら、伝六はどうにもならない破目になってしまうのだ。

「ち、ちくしょう！ 大庭様の妾になれと、責めるようには頼んだが、てめえのなぐさみものにしてくれとは頼まねえぜ！」

「ち、ちがう、ちがう。お、親分！ そ、それは、間違いだ！」

浩庵は、顔色を変えて、伝六の前に手を振った。

「間違いもくそもあるものか！ 俺の来ようがもう少し遅れていたなら、とんだことになるところだった！」

「そ、それは、ち、ちがう！」

「くそッ！ どうするか、みやがれッ！」

いきなり、浩庵につかみかかる伝六。

土蔵の二階に女を中にして、二人の狼がまんじとなって転がった。

浩庵も今はもう、必死だった。

殺されるかも知れない！ そんな恐ろしさが、言訳さえ聞こうともしない伝六の面上に現れていたからだ。

「お、親分！ ま、まってくれッ！ 仁兵衛に薬を吞ませ、か、金を抜き取ってまで、わ、わしは尽しているのじゃ！ ま、まッて……」

「うぬッ！ 今更、ぬかしやがるな！」

「まってくれ。ち、ちがう、ちがうッ。お静をモノにするつもりなら、何も、こんなところまで連れ込む手間もいらぬはずじゃ、仁兵衛に、仁兵衛に吞ませた、あ、あの薬で」

「うぬッ！ くそッ！」

「いたッ、いたいッ。く、くるしいッ！」

浩庵の上にのしかかった伝六は、その太い

両の手でこのいまましい籍医者の首を締め上げてゐる。

お静は、その二人のあらそいを、土蔵の隅に身を縮めて見守っていた。早く、早く此の場から逃げ出さねばならない！。そう思う心のあせりとは別に、いま、浩庵の洩らした言葉が、お静の耳に針のように突き刺つたのだ。

やっぱり！ 矢っぱり、此の二人の男達が父をおとし入れたのだ！。

そして、私をこうして罠にかけ、金と父親の病氣との締木の中でしめ上げて、大庭鬼十郎の妾にしようとしている！。

お静は、浩庵と伝六の争いのすきを狙って素早く脱がされた長襦袢を身にまとつた。

乱れる足をふみしめて、土蔵の二階を駆けおりる。

幸に、戸前の門は、いま伝六が上って来たときに外したままになっていた。

燃えるような緋色の長襦袢のまま、お静は土蔵を飛び出し、庭をぬけて、裏木戸のありかを探し求めた。

「あッ！ お静が逃げた！」

間もなく気がついた伝六が、首をしめられて気を失ない、ぐったりとなった浩庵を、そ

の場に転がしたまま、あわててあとを追つたが、そのときには、もう、お静の姿は、何処にも見付らなかつた。

明る日。

川向うの旗亭、扇屋の二階で開かれた観音講に、突然ふみ込んだ町方役人が、そ知らぬ顔で席に出ていた橋口屋伝六に縄をかけて引き立てた。

幫間医者の浩庵は、土蔵の二階で息をふき返したが、伝六と同じく捕われて、やがて、松ヶ枝町の仁兵衛をもちつづして、講中の金を盗んだ事を白状してしまつた。

危機を逃れたお静が、すぐてのことを訴え出たためである。

作事奉行牧野備前守の側用人、大庭鬼十郎が、何者かに毒を盛られて変死をとげたのはそれから間もない頃であつた。

時代巷談

(次号掲載御期待下さい！)

巷説緋扱帯呪文

美女の柔肌を巻く緋扱帯に秘められた呪いの謎！ 大江戸の夜に舞う妖魔の踊り

次号予告

高月大三



未知の山麓

日暮れだぞ

暮れたおやまを見るでない

ほうれほうれやってきた

山麓くるわのお女郎が

小学生が湯のたちこめる川の側

でこんな歌を口ずさんでいた。

もう、この辺の温泉町は四時半

になると日は落ちて、寒さは厳し

くなってくる。

しかし、家に帰れば寝るだけの

百姓の子供達は、石けりやおしく

らまんじゅうなどをして、日の暮

れを忘れてしまうのであるが、こ

の歌をだれともなく口にすると、

「おれ、帰るだっぺ」

「私も、帰るすら」

と、みんな家の方へ散って行く

のである。



女達のいびつな影絵がゆれなが
ら山道を上って行く。従う男達
は未知の異妖な世界に誘われて

溝呂木 寂子

燃える女窟



なぜなら、歌の文句どおり夕日
が落ちて湯の町に色香が匂うころ
になると、きまpping、幾人かの女
郎の群れが山麓から町へ下つてく
るからである。

今日もどんよりした天気だった
ので、日の暮れは早く、子供達の
姿も一つ消え、二つ消えして、川沿
いの道は人影がなくなっていた。
谷間の温泉場なので周囲は山が
そびえ、暗くなると物音一つしな
い森閑さである。

十国峠につづくドライブ・ウェ
イが、時折ヘッドライトの灯を見
せたりするが、すぐ、以前の黙々
とした黒い山に還ってしまふ。

小金橋をへだてたこの道は、人
家もまばらなので、橋の向うの商
店のたちならんだ町と比べると、
昼と夜の違いであった。

温泉町に続くこの道は、急坂で
街燈もない不便さであるが、山麓
くるわの女郎達は雨さえ降らなけ
れば山を下ってくるのである。

まるで山のネチネチした赤土に

吸着するような歩き方で女達は奇
妙な歩行をつづけて、小金橋の近
くへやってくる。

しかし、女達は決して橋を渡っ
て町の方へ入っては行かないし、
温泉場の人達も夜になると山へつ
づく暗い坂道の方へは行こうとも
しなかった。

つまり山麓女郎と温泉町の人々
との間に無言の協定ができていて
おたがい守っているのである。
だから女達も町内の人々の生活を
知らないし、町内の人々も山から
下ってくる女郎の群れがどこに住
んでいて、どんな生活をしている
のかまったく知らないのである。
ただ、女達が小金橋のたもとで、
湯治にきた客を引く女郎だという
ことだけしか、わかってはいなか
った。

町へ下りてくるのも客引きが目
的だから、男がいなければ商売に
はならないのであるが、この薄暗
い小金橋の上には噂を聞いた物好
きな温泉客がいつも幾人かやって

きて、けっこう相手に事欠かない
らしかった。

そして、たいていの男は必ず一
度は、宿の女中のたぐみなうわさ
話につられて小金橋へやってくる
のである。

小金橋へきたら最後、だれもが
女達の魔力にかかったように、暗
い坂道の方へ登って行く。

そして、半数以上が翌朝一度、
荷物を取りに下りてきて、再び登
って行くのであるが、その後、山
を下ってくることはなかった。

町の人はそのことを知っていた
が、女郎にいれあげて温泉場を歩
けないので、遠廻りして山越えで
もするのだらう、と、こう想像し
ていた。

矢島は、この話を偶然、旅館の
主人に聞いて、雑誌記者の第六感
がはたらいたのである。なにか、
からくりが山麓の女郎の身边にう
ずまいているような気がした。

完全に探ってやろうという気持
が矢島の肉体を活動的にしてい

のだった。

つい先日、二カ月の出張の間に結婚の約束をして肉体関係まであった加美子が、生地ドライさで矢島の親友の津久井をタックルして結婚してしまったのである。

まったく不可解な加美子の態度が、はじめは理解できかね苦しんだが、もう結婚してしまった以上話し合ってもナンセンスであると思つた。矢島は空白状態の身心をかかえて、この温泉場へやってきたのである。

東京の都心に住居を持ち、静けさと云うものを感じなかつた生活だけに、雑音から離れたこの温泉郷は、まるで、矢島の疲れのすべてをいやすかのようにあたたかく彼を包んだ。

そして、加美子のあの浅黒いピチピチした肉体の甘さが遠いものになったころ、この山麓くるわの話を聞き、ネタになりそうな気がしたとたん、彼の活動性は紐からはなれたコマのように鋭敏になっ

ていた。

仕事の上での興味もあったが、その奇妙な女郎達に何か官能的なものをも感じていた。

とにかく、噂の小金橋に行くことにした。

矢島は夕飯をはこんできた女中に、

「君、山麓くるわって知ってるかい？ この温泉場じゃ、かなり有名じゃないか」

「あら、お客様、よく御存じでいらっしゃいますわねえ。そうなんです。片輪者のお女郎さんで有名なんです。なにしろ、十人十人とも、先天的か後天的な不具者なんですのよ」

「そうらしいなあ。腕がなかったり片足がなかったりらしいが、それで、よく客がつくそうだねえ」
「なんでも、山麓くるわの女郎部屋は何ともいえない芳香がただよい、一度行くと忘れられないお里らしいですわ」
「へえ、湯の町のフアンタシアっ

てところかな。しかし、場所はどこなんだね」

「それが、くるわのお女郎さんと一緒じゃないかぎり、昼間だれが行って探してみても、わかんないらしいですわ」

「へえ……」

「きつと夜だけの世界だからでしょうけど」

「しかし、昼間ない処へ、みんなよく行くな——」

「そうでございますとも。私なぞ女ですからよけい不思議でございますわ」

「まったくだ。ひとつ後学のために見学に行ってみるか——」

「そうですね。小金橋で女の顔を眺めるだけでもおもしろうございしますわ」

「じゃあ、出かけてくるかな。今七時三〇分だなあ——」

「あおう、お風呂は？」

「いやあ、山麓くるわで泊るかも知れないから、そこではいってくるよ。アッハッハッ」

「あら、もうお泊りのことを考えていらっしゃる。ほんとうに若い人はホッホッホ」

女中はさもおかしげに笑って、矢島のオーバーを取ってくれた。

オーバーに腕をおすと袖裏のサテンの冷めたさが、じんじんと背筋に寒さを感じさせる。

廊下に出ると、いっそう冷え冷えとして矢島は外出するのがおっくうになってきたが、酔客のどなりあう声が宿中に響いて、部屋の中にいてもおもしろくなさそうなので、予定どおり小金橋へ行くことにした。

玄関に出たらさっきの女中と、若い田舎出みたいな少女と二人が見送って来た。

長身で、身なりからいってもスター級のタフ・ガイぶりはこの温泉町の旅館内でも目立っていた。矢島には若い男にありがちな安っぽい動きがないだけに、そのタフガイぶりは一段の魅力でもあった。

矢島は女達の視線をさけて足早に玄関から玉砂利の敷きつめた道へ出ていった。

外はさすがに空っ風が谷川の方から流れて、ぎすぎすした寒さが頬を撫でた。

矢島はオーバーの衿をたてて、ゆっくり小金橋の方へ歩いていった。

道幅の狭い商店街には、幾人も酔客やアベックの姿で、人通りはかなりあったが、どの顔もアルコールに染って、緩慢な動きで、裾模様のある派手な着物を着た芸者の肩を抱き、ヒヤカシ半分に射的屋へ入ったりビリヤードをのぞいたりしていた。

その酔人たちの目の中に、わびしい忘我の世界をみせられたように、矢島はちよつと不愉快な気持ちであった。

そのくせ態度だけは、だれもが温泉気分を満喫していて、ビジネスのことも金繰りにかけ歩いている女房のことも忘れたかのように

強気にふるまっている態のよさが、しゃくにもさわってくるのである。

しかし、所詮はこの場限りの気分に分酔っている男達だと思うと、哀われな気もした。

ブルジョアの連中もちらちらいなくもなかったが、ほとんどがドライブのついでといった人達で、すぐ熱海の方へ帰ってしまうのである。

三十分も歩いて行くと、すぐ左側に河が見えてきた。

川面に湯気がたちこめ、汚物のかたまりが流れのゆるやかな川瀬で、ブヨブヨと浮いているのが、

ランタン風の街燈に映えて、矢島の目には不潔にうつるのである。

しかし、湯けむりの中で、洗われた川石だけは、東京にない自然さを感じさせて美しいと思った。

河岸を五十メートルも歩くと、店もなく寒々とした景色になってくる。

稲荷神社の前に、青や赤の旗が

暗い中ではためいていた。

その稲荷神社の前に、きしむような安ぶしんの小金橋が山の方へ向ってかけられていた。

片輪女郎

矢島はタバコに火をつけて、ゆっくりと眺めた。

噂どおり、橋の上には数人の男達が低い声で女達を物色しているさまが、うすぼんやりした橋向うの方でかすかに見えるのである。

相手が片輪の女達だけに、普通の遊廊のような華やかな嬌笑や媚態は見られず、黙々と取り引きをしている様子である。

まったく異妖な、暗い人間市場であると矢島は思った。それだけに興味ぶかいものがある。

矢島は寒さの中でタバコを喫いながら、小金橋の手前で眺めていた。

酔った客が女達にまつわるように、

「よう、せむしの姉ちゃん、今夜

俺と一緒にいこう。うい——なあせむしの姉ちゃん、チェッ、このアマ喋らないぜ。ツンボかよう畜生奴。少し高いぜ、サービスしな。オイ」

と、どなっていた。しかし、口先きだけのようである。

そう野次をとばしながらも、男達は、何やら女達と交渉して山の方へ向って、めいめいの女の肩を抱いて消えていったからである。

男達の側にくっついて行く女達のどれもが、片足がなかったり、腕が一本なかったりの片輪女ばかりである。

霧の深い山ぎわの野路につづいた坂道を登っていくのが、ひょうきんな影絵のように左右にグラグラ揺れて消えていく……。

男達の後姿には未知の世界への期待とおのきが、ギーギーと響く義足の音と一緒に感じられた。

矢島は小金橋を渡っていった。橋の途中で、中年の重役タイプ



の紳士が矢島を見て、

「失礼だが君も女を買いに行くのかね。わしも一人でここまで来たものの、くそ度胸がすわらんもんで、実は連れを待ってたとこなんだが——どうです。君さえその気なら、金はわしが払ってやってもいいのだが——御一緒ねがえんかな」

矢島は遠慮のない紳士の態度に、いささかムツとした感じで、「そんなことなら構いませんが、御一緒したところで、どうせ別々になっちゃうんじゃないですか。それに自分の好きな女と遊ぶのに人の金なんかじゃおもしろくない

ですからね。もし、それだけの女がいれば僕は自分で払いますよ」
「君、そう怒りなさんな。いや、失言、失言」

「それに、全部、片輪者って話ですからね」

「君、そこなんだよ。気を廻したまえ、ここへ一度きたら忘れられないと云うのは、その片輪者の肉体の魅力なんだよ。つまり、足のない女は異常なほどに腰部が発達して、腕のない女は胸が発達してとにかく抱き心地は満点ってところなんだよ。ヘッヘッヘッ」

と、友を得た中年の紳士は助平たらしい目じりをさげて、好色そうに矢島に説明した。

そして、矢島に泊ることをしきりとすすめるのである。

「とにかく、女達のところまで行って見ましよう。その上で泊るか泊らないかきめなくちゃ……」

「いやあ、まったくそうですね」
東京では仕事の関係でキャバレーや、ナイトクラブで飲み、よく

女達を連れ込み抱いたこともあったが、みんな十人並のフェイスと肉体を持っている女達ばかりであった。

しかし、今夜はそういうわけにはいかなかった。

みんな畸型女ばかりであると思ふと、好奇心だけでは、とうてい抱けそうにもなかった。

だが、一度女を抱いた男達の半数が、金をなくして山越しするか、その里に身を埋めてしまふとかの話を出すと、やはり、何かカラクリが潜んでいそうな気がするのである。

矢島は暗闇にひとしい小金橋の上を歩きだした。

橋の上にどんな女がいるのか、それすらわからない不安さが、矢島の足を鈍らせるのである。

暗さにもやや慣れてくると、四人の女達の姿がぼんやり見えてきた。

どの女の目も動物的なひかりを持っていた。小金橋の橋のらんか

んに片目の女が、ケロイドでひきつった口先をゆがませて立っていた。

他の女達は枯木の側にいたので表情もなにも矢島の距離ではわからなかった。

女達の方へ歩いていくにしたがつて、プーンと女の匂いが、セックスを刺激するのである。体臭ではなく強烈な自然の花の香であった。矢島は、横から歩いてくる紳士の顔を見ると、上気したような頬を撫でて、

「いやあ、敵地にのりこんだ心地ですなあ、まったく……」

と、うわずった声でつぶやき、唾をのみこんだ。

近づくにつれて女達の動かない姿が目の前に浮きあがってきた。

真っ先に目にうつったのは、黒衣の女である。

すっかりはだかになったポプラの木の下で、肩を抱くようにして立っていた。夜鳥のように光る二つの目が燃えて妖艶である。



頭からスッポリとレースのショールを巻いて、そのはしっこを握っていた。

その細い指先が暗い中で、死んだ白魚のようであった。

矢島がその女の方をみつめている間に、連れの中年の男は、胸の驚くほど大きな目玉のとびでたようなせむし女をつかまえて、交渉の最中であつた。

女郎たちは、この黒衣の女とせむし女と、橋のらんかんにいた片目の女のほかに、あと二人、右足のない女と腕のない女がいるだけ

である。

義足と、義手をはめた女達は青白い不健康な色をして、時々、背筋に浸み込むような金属の音をカチャカチャとひびかせた。

矢島は黒衣の女を目指して寄っていた。この女が四人の中で一番、常人らしい外観であつたこと

と、加美子のおもかげをどこかに持っていたからでもある。

見れば見るほど洗練された美貌の女で、むしろ、周囲の畸型女の中にいるのが不思議なくらいでもあった。

しかし、闇の中で一点をみつめている目のひかりは、やはり片輪者のしいたげられた絶望的なものが感じられないでもなかった。

歩いてくる矢島を見て、女はギクツとしたようだった。また以前の冷静な表情にかえっていった。

そして、ショールをつかんでいた指をほどき、低いポプラの枯枝をピクンピクンとはじいていた。

そのしぐさには、わざとらしいものもなかったが、ことさら、自然なものでもなかった。ただ、なんとなくそうしているといったかっこうなのである。

矢島の体が女の前に立った時、女は動きもせず媚びるでもなく、チョットさぐるような目つきでみあげた。

長身の矢島の前にも立っても、さほど違わないところを見ると、相当、上背のある女らしい。

「君、今晚、ひまなの？」

女は一言も喋らない。

「ね、君、聞えないのかい？ 困ったな——君ほんとうに喋れないの？」

いくらきいても女は黙っているのである。矢島は処置なしと思つて、さっきの中年の男を振り返つたが、もう彼の姿は一メートルに足らないせむし女の肩を抱いて、暗い山道を登っていくところだった。

あきらめて帰るのもばかばかしいので、矢島の方も無言で女の日を眺めた。

沈黙の中の交渉である。

しばらくして、女の瞳が動いたそして、橋のたもとにいる片目の女と、義足をいじっている女と、動きのかたい義手をブラブラさせている女達に向つてピーと口笛をならした。

寒気に浸みこむような強い音色である。

それを聞いて、義足の女はあぶれたわというような顔をして、重い足をゆっくり運ばせて歩いていったが、二、三步いつて振りかえり義手の女をうながすように、あごをしゃくつた。足に力を入れたのか義足が不気味にギーギーとなった。

義手の女は表情をかたくして、やせた体をひきずるように義手をカチャカチャさせて、これも無言で山の方へ歩いていった。

もやが深く、二人の奇妙なカップルは、すぐ消えてしまった。女たちのすべての動きは影絵を思わせるのである。

矢島は口笛を吹いた女を前にして、今後のなりゆきを慎重な気持ちで待った。

黒衣の女は笑ったのである。美しい笑いであったが、笑みの中に温かみは感じられなかった。しかし、白い歯と濡れたような

赤い口唇はカトレアの花びらのように、妖しく矢島の官能をくすぐるのである。

「ねえ、君……話せるんだね」

と、口走った時、女の白い指先きが矢島の首に、奇術者のような柔軟な動きをみせて迫ってきた。

黒衣の女はやはり無言であった。夜鳥のような目が、しっとりとしてセックスを意識しているような、

それでいて、感情はほかのところでさまよっているような、無心状態なのである。

はじめ会った時の感じを少しもくずさない変わらなさであった。

黒いウールのドレスの上に袖を通さないミンクのコートを着て、女の無言はなおもつづいた。

矢島がしびれをきらして帰ろうとした時、女は矢島の首に腕をまわしたまま、刺すような声で、

「たとえ、一晚にしろ、あなたは片輪の女郎を抱いて悔いませるか？」

「愚問だな。僕がここにくること

自体が」

「そう、みんなそういいいます。でも、享樂のあとには必ず、片輪者をなぐって帰るのだわ——ですから、もし、肉体の代償として金を払うのが厭なものでしたら、今、やめてください。もし……もし、そういう結果になったら、私どもはその雑言の代償としてお金でないものをいただきますが、御諒解くださいますか？」

「もちろん！」

「では……」

そして、首にまわしていた腕に力を入れ、接吻したのである。

深い深い、もえあがる沼の中にひきずりこまれるような甘美なうずが、矢島の全身を陶然とさせていった。

女は腕をほどき矢島の手をとった。

その無心の動作につれて、強烈なセックスの沼へおいやられるのである。女の魔力なのか？

山へつづく坂道は急傾斜だった

舗道を歩きなれている矢島には苦手であった。

矢島はだんだん吸い込まれていくような錯覚がした。

そして、女の目に従順になっていきながら、ふと、女の催眠術に自分がかかっているのではないかと意識することもあったが、妖しい女の幻力にひきずりこまれるように矢島は女の肩をひきよせた。

女の肩からコートが、暗い赤土の上へ落ち、女は再び奇術師のような指の動きをくりかえした。矢島の視界は幻覚だけになり、暗闇の中に、きらびやかな幻想の世界が展開されていくのである。

矢島の心身は、女の指先から流れてくる見えない糸にあやつられる影でしかなかった。

それほど、女の肉体から発散される魔力は強いものであったのだ。それでも止ることなく歩みつけているのは、ふと靴先きにあたる小石の感触でわかるのだったが、すべてがばく然としていて、明確

な視覚はまったくないのである。

だいぶ、歩いたとおぼろげに思った時、高い処から流れ落ちる滝の音のようなものを耳にした。

視覚は感覚をなくしていたが、聴覚だけはたしかのようである。足が進むに従がい、その滝の音

はだんだんと大きくなってきた。そして、その音の前で歩みが止

ったような気がした瞬間、矢島の意識は減退していた。

黒い雲が頭の上から被いかぶさったような重量感であった。

もう、この黒衣の女の前ではさすがの矢島も抵抗のすべがなかったのである。

女の秘密

首もとに再び女の誘い出すような、ねっとりした手ざわりを感じた時、矢島の意識は平常どおりになっていた。

かなり広い部屋で南国風にソテツが竹の鉢に植えこんであった。そして、部屋の四方に淡いブラ

ックのジョーゼットのカーテンが熱っぽい微風にそよいでいるのが目覚めたばかりの矢島の目に映った。

からつとした感じのしないのは外気のある地上でない証拠だと矢島は考えながら、ベッドの上で腹這いになった。真黒のベルベッドでおおわれて、すべての造りが、豪華である。

部屋の中の調度品、全部が黒を基調にしてあった。

その時、ふと矢島の目にはいったのは、大輪のけしの花である。そのけしの花だけが、なやましいほどの赤い色で、ひととき目立つのである。

花粉の苦しいまでの香は、たゆまず発散され、黒い部屋の中でグルグルと渦をまいていた。

ベッドの真向うに風呂が備えつけてあるらしく、カーテンのゆらぐたびに湯気が、部屋の方へはいってくるのである。

その風呂の中に黒衣の女はい

っているらしく、時々、水のはねる音が鈍く響く。

矢島は女の見えない入浴姿に、全身の神経がしびれるように崩れていくのを、どうひきとめるすべもないのである。

矢島はベッドからスルリと下りて、風呂のある方へ歩いていった。

女の裸体にひかれながら……

側によっていくと部屋と風呂をへだてているジョーゼットのカーテンの薄さで、中がもやの中の世界のように見えるのである。

水にぬれているのを両腕をあげて女は束ねていた。

矢島の足音をききつけて女は頭だけで振りかえり、大きな湯上りタオルを風呂の中でつかっているらしく肩からスッポリ被ってしまった。それから、ゆっくりした、刺すような声で、

「そんなぶざまな盗み見なんかするものではありませんわ。人が入浴しているのを、のぞくなんて愚の骨頂だわ」と、いって、

「もし入浴したかったら、私の次におはいりなさい。それまでベッドの処へいって貰うわ」

「もし、一緒に入りたいといったら……」

「それは……だめ、いくらあなたからお金を貰うとしても……私には死ぬほどの勇気がいることなのよ。ほんとうに……」

女は自分の秘密はここにあるのだといわぬばかりに、弱々しく低く、哀願するようにそういった。あの、自分の城を負っているよう

後向きの女の肩が水にぬれて、すべすべと美しい光沢をみせていた。

そして茶褐色の長い髪の先きが



な冷たい傲慢さは消えうせ、自分の不具を呪うような、悲しむような悶えが感じられるのである。矢島は一人うなずくように、

そして、女の言葉のすみずみに「失敬」



と他人行儀に小さくつぶやいて
ベッドの上に横たわった。天井を
あおぎながら女の美しさに触れた
ような気持ちで、ほのほのとした
ものを把握したかんじであった。
女の白い指と、水に濡れた髪と
丸い白い肩とを思い浮べているう
ちに、矢島の側に黒衣の女は裾の
ながいガウンを着て立っていた。
ゆっくりとした口調で、

「お風呂、湯を入れかえておきま
したわ。よろしかったら……」
「どうもありがとう。一風呂あび
るか」

矢島は湯上りであざやかな皮膚
の色をみせている女を美しいなど
思いながら、風呂の方へ歩いてい
った。

小さな長方形の浴槽で黒いタイ
ルが敷きつめてあった。温泉なの
でちよっとにおいがあったが、水
の色は無色透明である。

湯舟の中には、どう云う意味か
真赤なけしの花が浮べてあった。
水に花粉の香が浸みているのか、



麻薬に酔いしれる前の恍惚状態が
矢島の全身をおそった。

矢島はセックスのとりこになっ
たように、女のことを何度も何度
もあえぎながら呼んだような気が
したが、そのままどうなったか、
やはりわからなくなってしまった
のである。

そして、女の唇のあれたような
甘さに意識をとり戻してきた。

女の形のよい唇は矢島の胸毛の
あたりまで、触れてははなれして
しだいに二人の肉体は燃焼してい
くのであった。

ふと、矢島は女が不思議とガウ
ンをつけたままなのに気がついた
のである。そう思うと部屋の中は
真っ暗で、先の薄い吊りランプが
二つ三つあるだけなのである。

矢島はとっさにベッドの横の壁
にあるスイッチに手をやり、部屋
を明るくした。

そして、女に向って、

「君、僕をどう思う？」

「いい方だわ」

「じゃあ、ガウンを脱いでくれ
る？」

女は顔中をゆがめて青ざめたの
である。そして次には怒りをみせ
てベッドからサッと下りてドアの
方へ歩いて行こうとした。

瞬間、矢島は敏捷にベッドの上
から、すべりおりて女の肩を持ち
右手で、ガウンをはぎとっていた。

おお、どうだろう。

女のすべすべした全裸の体に豊
満な乳房が四つもあるのである。

黒い部屋の中でその全裸は奇妙
であったが異妖な魅力があった。

矢島は無気味というよりもいい知
れぬ美しさを感じるのである。

そして茫然と立ちつくしている
女の胴を両腕でゆるゆると抱いて
いった。しだいに固く……。

残酷な黒女

一夜を堪能した矢島が目覚め
ると、女の姿はなかった。ドアの方
へ行き、廊下へ出ると、小部屋が
続いている。みんなおなじような

造りである。

しかし、黒衣の女の部屋のような造りが他にないところをみるとどうも、女はこのくるわの長らしい。

小部屋がなくなったところに左右に分れる道があり、右にいくと『けし園』へという立札があり、左に行くと『黒獄室』へという立札が、立ててあった。

矢島は先にけし園の方へ行ったのであるが、その燃えあがりそうに広く続いているけし畑に目をみはった。一面に苦しいほどの花の匂いがただよっていて、矢島はクラクラとめまいさえ感じそうになった。

そして、左の道から『黒獄室』の方へ歩いていった。

つきあたりに入りがあったが門みたいになっていて、扉はなかった。矢島はつかつか入っていった。

物凄く広い部屋であったが、天井は岩でできていて、ぬめぬめと

苔が薄気味悪く纏いついている。

そこに数十人の片輪女が坐っていた。祭壇のようになっていて一段高いところに黒衣の女が立っていたが、目がきらきらして魔女そのものであった。

昨夜、乳房を見られて赤面しながらはじらいをみせた女と同じには、とうてい思えないのである。

その時、中年の紳士と消えた胸の大きく出たせむし女が、黒衣の女に一礼して、

「不帰子様、私と一緒にまいりました男は、金も払わず、私めにせむし女とのしり、はては部屋に火をつけて逃げようと思いました。おさばきを……」

と、低くいつているのが矢島に聞えた。

「そう。約束を破った男、帰すことはなりません。けし園へおやり」

せむし女は一礼して席についたすると、耳のない女が立ち上り、「不帰子様、私の部屋の男めは私

の耳をみまして、朝になりますと片耳じゃおかしいからもう一つの残りをしまつしてやろうと申し、髪をつかみ乱暴をしました。おさばきください」

「何と生意気な。ここへおよび、早くこの『黒獄室』へお呼び。耳をそぎとってやるから。あばれてもかまいません。今、すぐここへ連れてくるのです」

女は立ち上り、すぐさま、男を石室の中から連れてきた。男は女達を眺めてへらへらみだらな笑いを浮べていた。もう一夜にして完全な麻薬中毒者になっていたのである。

不帰子様と呼ばれている黒衣の女が、

「あなたは約束を破りました。雑言の代償として耳をいただきます」

といった時、キラと光るナイフが彼の耳の横を走っていた。男は「ゲッ」

と、いったかと思うと耳をおさ

えて倒れてしまったのである。

二人の男が次々と切られて、一人の男が足首を切られて、黒衣の女の足元が血の海と化したところ、この奇妙な『黒獄室』の会合は終わったようである。

矢島はかたずをのんで見ていたが、その陰惨な女達の残虐性に飛び出して、それを止めることもできないほど驚愕していた。

女達の群れがそろそろと入口の方へ寄ってきたので、矢島は急いで部屋へ帰った。

ベッドの上で矢島の興奮した頭は、黒衣の女と、けしの花と、手足をなくした男達のことを考えていた。

ドアが開いたと思うと女が淋しげな表情で入ってきたのである。

そして、矢島に向って、

「あなた、『黒獄室』を見てしまったのね。でも仕方ないことなの。約束を守ってくれないのが悪いのだわ。あの男たちは私達のしもべとなつて死ぬまで働いて貰わねば

ならないのです。それに二日もいと地上へは帰りたくなるのですわ」

「阿片のためにか？」

「そう。ああ、あなたは『けし園』も見たのね。私達は体を売るのは肉体慰労のためだけなのよ。生活資金は温泉で栽培されるけしから充分とれるの」

「しかしあの男たちのしおきは」

「ひどいと、おっしゃりたいのでしょ。それは、わかっているのですが、幾十年も幾十年も片輪者としてののしられてきた私達にしてみれば、あれだけのことでもしないかぎり憤怒はおさまりそうにもないのです」

「僕にはわからないが、社会的通念からいっても、すべてが悪をふくんでいる気がするんだ」

女は唇をかみしめ、矛盾とたたかっているようだった。そして、
「どうすればいいのです」

「僕は、ここがどこだかも知らない。そして、無事人里へ帰れるか

どうかともわからない。そんな不安と、あきらめの中でいえることはただ、けしの花の栽培だけはやめてほしい。そして、あの男達をしあわせにしてやってほしい。それだけだ」

「あの、男達を……いや、いやだわ、あんな愚かな男達は、私達の牛馬です」

「馬鹿！」

「えっ」

「僕は帰る。金高をいいたまえ」

女は青ざめ、うなだれながら、
「それはよろしいのです。この部屋のドアを開けて、三つ目の右の小部屋が出口です。お送りしませんが、あなたのおしあわせをお祈りするわ。とにかく小部屋の石段をずうっと下りて行って下さい。三つ目の回転扉のところが小金橋の上の坂道になっていますから」
女は一気に喋ってベッドに身をなげ、さめざめと多乳の体を呪って泣きくずれた。

女の咽び泣く声が小部屋のドア

を開くまで矢島の耳について離れなかった。目覚めさせるような錯覚を感じさせた。

ちよつと振りかえり、矢島は小部屋のドアを開け、冷たい黒い石段を下りていった。小金橋の前に立った時は、翌日の正午に近かった。矢島は口の中で低く、

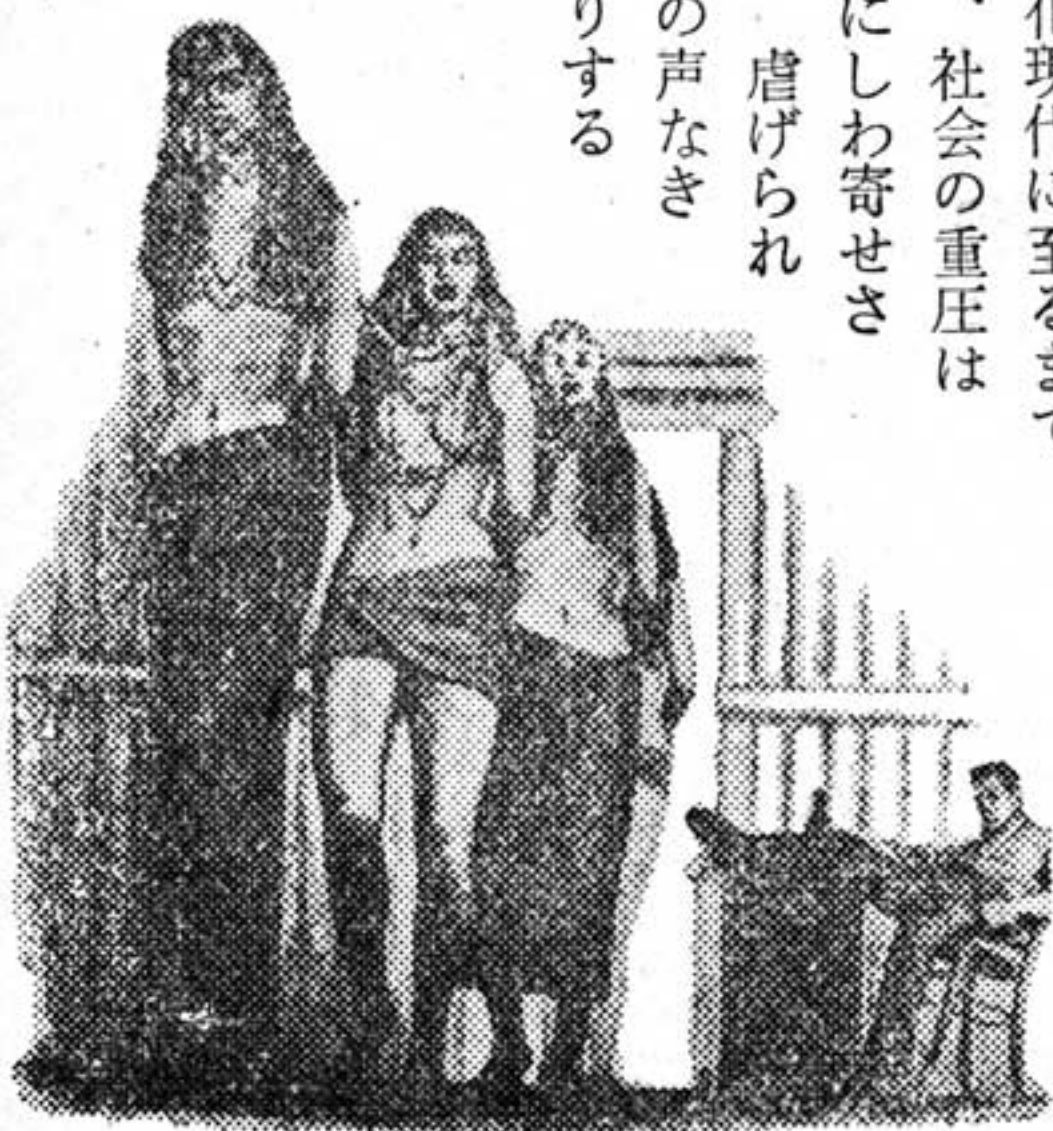
下へ下へおりていく悪感が、矢島を夢の世界から現実の世界へと「夢ではなかったのだ……」とつぶやいたのである。

裏窓 陽春五月号

女性解放悲史特集 乞御期待！

封建から開化現代に至るまで
男女別あり、社会の重圧は
か弱い女性にしわ寄せされてきた！ 虐げられた白き奴隷の声なき苦悶を浮彫りする大特集！

次号予告



恩讐地獄ぐるま

中 林 節 三
山 田 彬 弘・画

しのぶ湯

「銭を払って湯にへえるのもそろそろ終りだぜ」

「ほう、ご政道が変って湯銭が只になるとでもいうのかい」

「何をいつてやがんでえおたんちんめ——四月八日は行水のはじめ也——ってね、この八日は灌仏会じゃアねえか」

「冗談じゃアねえや。お釈迦様は唐金でできてるから頭から甘茶をぶっかけられても風邪をひかねえが、こちとら生身の人間は今から湯銭を惜しがってちゃア、いっぺんに風邪をひいてそれこそお陀仏になっちまわア」

「くそつたれめ！ 江戸っ子は気が早えンだぜ。そんなこといつてちゃアてめえなんぞ初鰯を喰うために女房も質にいれられめえ」

「なんだとう、そんな時になつてうちのかかあ

が質屋の蔵に坐つてゐるか家にいるか、見に来て見やがれ！」

「フン、あのおかめじゃアいつまでたつても流れねえから安心しろい！」

「いったな、流れるかどうか、こうなったら一文の利子も入れねえで質屋の番頭が流すか流さねえか試してやらア！」

うす暗い湯舟で、そんな他愛ないやりとりが、ほかの客の失笑を買った。湯をさまざまにためて、さくろ口といつて、せまい口をかがんで入って跨がないと湯舟に入れない。そこにもうもうと湯気がこもつて、お互いの顔も見られない中で威勢のいい言葉だった。これが一日中働いた江戸の職人の疲れを癒す挨拶だった。

その時、

「ごめんなさいまし」

と、湯舟のふちに遠慮しいしい手をかけて

手拭いをつかんだ手で目の前の湯をかき廻した男があった。

「お前さん、ずっとへえっていいぜ、そこはあけたから」

「へえ、ありがとうございます」

男はザブリと湯舟にからだを沈めた。

「目が不自由なのかね」

一人が声をかけた。

「へえへえ」

「見ねえ按摩さんだぜ」

「へえへえ、揉み療治に流していましたが、なんだか急に湯を浴びたくなりましたから」

「なるほど、甘茶をかぶりたくなりやアお釈迦様だ」

「へえ、灌仏会も近くなりました」

「按摩さん。お釈迦様っていえば何だか慈悲深え仏と聞いているが、そうやって不自由な盲になつてもやっぱりお釈迦様は拝むかね」



「へえ、ありがたい仏様と拝みます」

「金仏のお釈迦様は慈悲をかけてくれるだろうが、生きた仏様もやっぱり慈悲をかけてくれるかね」

「えへへへ、女子でございますか」

「チェッ、わかったのかい、粹な按摩さんだ」

「えへへへ」

「おい、盲をそうからかうんじゃないぜ」

「へえ、ありがとうございます。しかしこれで盲には目開きと違ってまたたのしみもあるもんでございますよ」

「そうかもしれねえぜ。そいでなくっちゃア盲に生れついて神仏は拝めねえ」

「へえ、おっしゃる通りで」

「按摩さん、一つ盲だけにできるたのしみってのを話してくれねえか」

「へへへへ、目開きは盲だと思って気を許しますよ。揉み療治に伺っても左様でございます。たいていのお客様は蒲団に寝そべっております。凝った筋を揉みほぐして参りますと楽になりますのかぐったりとからだを投げ出

盲人が随喜して詣でる洞穴に御利益あらたかな弁天像、法楽か地獄か呪われた小町の身に触手がのびた！

してもうこっちに任せっきりで。へえ、これ
が手ざわりでお客様の年恰好からすっかりわ
かりますんで。相手がお婦人だと目開きの男
には見せない恰好をなさいます。それでもい
くらか気になるのか、ちょっとそんな時は筋
に力はいります。こっちは今お客様はどん
なお気持でいるのかすっかり想像してしまっ
て、しらずしらずのうちに手には力はいりま
す」

「チョッ、助平な按摩さんだ」

「へへへへ、まあお客様がほどよくあぶらの
のった年増か何かだとたのしみも多うござい
ますよ」

そこで盲按摩は、えへへへと笑ったが、こ
れは話したものでどうかちよつと考えるふり
をした。そしてどうしても話してみたい誘惑
にかられたのか、

「へへへへ、これは何といったって目あきに
は敵わぬたのしみがこのごろ江戸にできまし
たが、皆さんはしりますまい、へへへへ」

「いやな按摩さんだ。話してしまいいねえ」

「へへへへ、これはこのごろできたんでござ
いますかね。谷中に盲だけを済度する弁天様
ができました」

「いやだぜ、谷中に出る夜鷹は何をくわえて

るかわからねえ、目あきにはこわくって抱け
ねえぜ」

「いえ、夜鷹なんぞではございせんので」

「じゃア鼻か。まあいいや盲だからって遠慮
なく鼻でもなんでも抱くがいいぜ」

その時、二三人がさくろ口から入って来た
ので、盲按摩の相手をした男はザブリと立ち
上った。

「えへへへへ」

盲按摩は、まだ薄っ気味悪い笑いを洩らし
ているのを、さっきから湯舟の隅で聞してい
た男がある。その男もすぐと湯舟を出て行っ
た。

はだか弁天

谷中の、昼でも狐狸の出そうな田圃の中に
ぼつんと立っている荒れ寺、久しく住む者も
なかった法洗寺は、半年ほど前から無住寺で
はなくなった。空恩という五十ばかりの雲水
が住みついたのである。それから三月ばかり
たったころ、空恩の前にはじめての客が坐っ
た。客はまだ若い旅廻りの大工だと名乗った。
空恩は見てるのか見てないのかわからぬ眠
そうな目で、めんど臭そうに、政吉といっ
た若い男の申し出を聞いていた。

「母がたいそう弁天様を信仰しておりました
その母はすでに亡くなりました。私はい
ささか心願がございますので、江之島の弁天
像を模した像を刻みたいと思いますので、裏
の物置をお貸し願いたいと存じます。できあ
がったらやはり裏庭にある洞窟へ祀らしてい
ただきたいのです」

「よかろう」

空恩はめんど臭そうに承知した。

それから、政吉と名乗る大工は、雨露をし
のぐだけの物置に閉じこもって営々と弁天像
を刻んだ。そして一月たった。弁天像はでき
あがったのだ。

政吉は、やっと仕上げた弁天像を、本堂の
裏庭の、いつ掘られたのかわからぬ、長い隧
道の奥の、やや広くなった洞に祀った。

空恩は、それを政吉に知らされると、気軽
に托鉢から戻った足で裏庭の洞窟の中へ政吉
の持つ手燭の明りに導かれて入っていった。

空恩は、手燭の明りに浮かんだ弁天像を見
つめていった。

「よくできた」

そこには、江之島の弁天像と同じ像があっ
た。ただ違うことは、江之島弁天は高さ一尺
六寸なのが、政吉が刻んだのは生きた人間と

同じ等身大の像であった。江之島弁天は、琵琶を抱く奇像という、右足を前に折り左足を伸ばして下に垂らしたもので、それが等身大にできていて、しかもでき栄えは、若い生き身の娘からその着衣をことごとく剥ぎ取り、そして琵琶を持たしたといつてよかった。それが淡い手燭の明りの中で謎めいた微笑を浮かべているのだった。

「私に少々的心愿の筋がございますから、当分の間この弁天像は盲人のためだけご開帳したいと思います」

「お前が作ったのだ。勝手にするがいい」

空恩は無関心そうな返事をして洞窟を出た。それから空恩が盲人に行き合つて告げたのか、政吉の作った弁天像に参詣する盲人がふえていった。盲人だけが洞窟に入り、付添つて来た人々は、盲人だけにと聞かされていたのか決して中へ入ろうとはしなかった。

政吉の作ったこの弁天像が、どのような利益を参詣した盲人にあたえるのか、法洗寺はだんだんと盲人達の奉納金でうるおった。空恩は相変らず朝から寺をあけ、日暮れまで戻らなかった。政吉は自分で食事をつくるようになり、それで空恩との接触は切れたようなものになった。それまでは空恩が朝夕二度食

物を整えてやっていたのだった。

娘 消 失

ぼとり——と、窓から何か投げられたものが、お園のふくらんだ胸をかくした着物の上におぶつかって畳に落ちた。

本町の唐物屋、肥前屋の奥座敷だった。

お園は、雨戸を締めようと、障子を開けたとたん、それが放り込まれたのだ。

なんだろうと手に取って見て、お園はびっくりした。

小石のおもりを包んだ投げ文だった。

と、

いきなり、いつ戻ったのか、お艶がその投げ文をお園の手から引ったくするように奪い取った。

「お園！ まさかこれの中を見やアしないだろうね！」

「いえ、今雨戸を締めようと障子を開けたとたん——たった今です」

「そんならいいけど」

お艶はいった。

お艶は、肥前屋の一人娘だった。

お園は、つい二月ばかり前に、口入屋から

肥前屋へ奉公に来た娘だった。女中奉公する

とは見えぬ美しい娘だった。

お艶は、そのお園が気に入った。父にねだつて、自分専用の小間使いにした。

「まるで姉妹のようだ」

そう店の者ばかりか、近所で噂した。お艶もお園に負けず劣らず美しい娘だった。

お園は十九。

お艶は十八。

そのお艶は、お園から奪った文を胸に押し当てていた。

お園は、そこにいてはいけない気がして、そつと部屋を出た。

間を置いて戻ってくると、お艶は部屋にいなかった。

お園は、派手な夜具を二組並べて敷いた。そしてその一つに横になった。一晩中お園は眠れなかったように転々としていた。とうとう、朝までお艶は戻って来なかった。

「何！ お艶がいなくなった！」

肥前屋市兵衛は、見えない目を不気味に剥いて、目の前に坐っているお園にどなっていた。

「そ、それで、どうして昨夜のうちに儂にしらせなかった！」

「はい、そのうち戻って来ると思ひまして……」

：それまで起きて待って、いようと思ったのですが、つい疲れが出たまま朝まで寝入ってしまったのです」

「うっ、なんてことだ！」

市兵衛は、お園を睨んでいった。

「幸吉を呼びなさい！ お前さんは退ってよろしい」

お園は立っていった。入れ替りに番頭の幸吉が入って来た。

「お艶が昨夜からいなくなった。すぐ七五郎親分を呼びなさい！」

「へえ」

七五郎親分が、乾分の岩松をつれて間もなく来た。

「お艶さんが昨夜消えちゃったってね」

どかりとあぐらをかくと七五郎はすぐいった。

「へえ、お艶は肥前屋の一人娘でございます

何とか親分の力でお艶が無事なうちに少しも早く探してくださいまし」

「できるだけの手は打つがね。まず投げ文を拾ったお園という娘を呼んで貰おう」

岩松が、すぐお園をつれて来た。

「お艶さんが消えちゃった時の話をしてくれ」

「はい」

お園は、昨夜のことを話した。

「フーン、で、その文には何か上書が書いてあったろう。それでなくっちゃどっちを目当に呼び出しをかけたかわからない。お前さんも美しい娘だからな」

七五郎は、お園を舐めるように見つめていった。

「はい、書いてございました」

「そうだろう、いって見な」

「はい。『お艶さんへ、幸吉より』とたしか」

「幸吉つというと、番頭さんだね、旦那」

「へえ、番頭ですが」

「もちろん番頭にするくらいだ。身許のはっきりした信用のおける男だろうな」

「へえ、そいつはたしかに。幸吉さえければお艶といっしょになって肥前屋をついで貰うつもりでおりました」

「そいつを幸吉さんは知ってるのかね」

「はっきり話しはしませんが、薄々は感じていると思います」

「親分、幸吉をつれて来ましょうか」

岩松がいった。

「それには及ばねえよ。投げ文をしたのは幸吉じゃねえ。そんなことをして、もし旦那の

耳に入りやア、この肥前屋の富とお艶さんをふいにされるかわからない。第一そんな危険を冒さなくっても幸吉にはいつでもお艶さんには文も手渡せるし、話をする機会はいくらもあるはずだ。お艶さんとお園という娘が一つ部屋に寝るのを知って、どっちの手に渡るかわからない投げ文は店の者じゃアねえぜ」

「誰がお艶を投げ文で連れ出したのでしよう？」

「旦那には心当りはねえですか。人に恨まれるとか」

「そいつは長い間稼業をしていては」

「お園さんとかいったな、退って貰おう」

七五郎はお園を退らせると、市兵衛の方に向き直った。

初らぐいす

「お艶さんの行方を一日でも早く探すために旦那にちょっと目をつぶって、といっても目の見えねえ旦那だ、少々手荒い方法でラチをあけるのを勘弁してもらいてえがどうだろう」

「へえ、お艶の行方がわかるんなら、見えなくなつた目をこの上つぶして見ろといわれり

「やアその通りにしてもようございます」
「ハハハ、なアにね。これで聞くと見るとは
大違えで、たのしみがあるもんだ」

七五郎は、ニヤリと笑った。そして酒をつ
いだ盃をぐいとあけると、
「岩松、お園ってえ娘をつれて来い。そいか

らな、しばらくこの部屋の方には誰も寄りつ
かねえようにいっとけ」
「へえ、お園の阿魔ですね」

岩松は、もう赤い
顔をしている七五郎
に妙な薄ら笑いを見
せて部屋を出ていっ
た。

岩松は、すぐお園
を、追い立てるよう
に座敷へつれて来て
襖を締めた。

お園は、座敷へ入
ると、七五郎の酔っ
た淫らな目にじろり
と見られて、ハッと
入った敷居際に立ち
すくんだ。

「岩、その娘をふん
じばるんだ」

「合点だ」

「あっ」

お園は、岩松に肩
を突き飛ばされて、
畳に膝をついたとこ



ろを、両手を背中に捻じ上げられて、抵抗したが、合せた両方の手首を岩松に括り縛られて突っ伏してしまった。

「お、親分さん、お園がお艶を連れ出したでしょうか」

市兵衛は、見えない目を見開いていった。

「さあてね、そいつはその娘が何とかいうだろう。まあ旦那は黙って見物じゃアねえ聞いているこった」

七五郎は、突っ伏しているお園をじろりと見て、

「岩、そんな隅っこじゃア仕様がねえ、そこ
の欄間に縄をかけてその阿魔を立たせるんだ」

「あっ」

お園は、ずるずると岩松に引きずられながら、必死に乱れてひろがる裾からのぞく膝の白さをかくそうとしたが、岩松は構わず欄間の下にお園を引きずって、おさえこんだまま後手に括った縄尻を欄干に通してぐいと引いた。

お園の体は、無理に立たせられて、前かがみに俯つ向いた姿を七五郎の方に見せてもう動かなくなった。岩松はそれを見て、もう一度ぐいと縄を引っ張ってから、縄尻を柱に巻

いて固定した。それでお園は、座敷の真ん中に爪先立っていた。

「おい、すっぱりいっちゃまいな。お艶さんを連れ出させたのは誰だとな」

「……………」

「いわねえのかい。一人娘を拐われるほど肥前屋さんは他人に恨まれる覚えはないというのだ。それに最近この店に雇われた者はおめえのほかにはいない。それにあの窓は内庭に面していて、往来からは石のおもりをつけても文は投げられない。どこの鍵もあの時刻には固く締っていたそうだ。もちろん幸吉が投げ入れたんなら別だが、あの文は贋文だ。となりやア投げ文はおめえの細工と見たんだ」

「……………」

お園は黙っていた。そして、爪立ちの体をぎくりとさせた。すぐ近くに岩松が近寄ったのだ。

「おい、吐かねえか」

岩松は、立たせられたお園の足許にかがみこんで、下からお園の顔を見た。

「よしっ、吐かねえなら吐くようにしてやる」

岩松は、懷から十手を出すと、爪先立っているお園の穿いた足袋の中に十手の先を入れ

て足の甲をぐりぐりつとえぐりつけた。

「あっ、ヒイ」

お園は、全身に突き刺さるような鋭い痛みを覚えて、身をよじるように身動きした。

「どうだ、これでもか！」

グリグリつと、岩松は、お園のやわらかい足の甲を十手の先でえぐりつける。

「ヒイッ！」

お園は、足の甲を責めつける十手をどかすために、その痛めつけられる足を持ち上げればいいのはわかってても、それはできないのだそうすれば、すでにひらきかかっている着物の前を割って、はだかっている膝をその上ま
で男達の目に見せなければならぬのだ。

「フン、気の強え娘だ」

岩松は、さてどうしてくれようと七五郎の方を見た。

「岩、俺がかわってやろう。目の見えねえ旦那の耳にはおもしろいうぐいすの変った音のたのしんで貰ったが、今度は目あきの俺達
の目をたのしませて貰おうよ」

七五郎は、そういうと、持っていた盃をぐいと流し込んで立ち上った。

「おい、今にそっちからどうしても口を割りたくなるようにしてやるぜ」

酒くさい息を、俯つ向いているお園の顔に吐きかけると、七五郎はお園のあごに手をかけて無理に仰向かせた。

「フン、目を閉じてるな。どうしても白ア切るつもりなんだな」

七五郎の、お園のあごをつかんだと別の手が、いきなりお園の襟をつかむと、ぐいとそこをはだけていた。

「うっ」

無理に仰向けさせられたお園の顔が歪む。

「おい、もっともっとうぐいすの初音を洩らさせてやろうか」

「うっ、ヒイ」

「もう一声だ。だれがおめえをこの店へ入り来ませたんだ！」

「だれでも……しりません、そんな……」

あごから手をはなされて、お園はそう叫んだ。

「まだ白ア切るのか、しぶとい阿魔だ。岩、お上の御用で音を上げさせるんだ。構わねえから阿魔のうしろへ廻って帯を解け」

七五郎は、お園の胸から手をはなして岩松にいった。

「あっ、それは……」

「遠慮しねえで何とでもさえずって貰おう

か」

七五郎は、岩松に帯を解かれながら、羞恥と恐ろしさに悲鳴を上げるお園の顔を淫らな薄ら笑いの目で、そう意地悪くいった。

あっ、と身もだえた。その足先に解かれた帯が蛇のようにうねった。

「うごくない！」

岩松は、役得と容赦しない。派手な細紐が幾本か岩松の手に引き抜かれた。

はらりと着物がひらいた。

「このあまッ」

「あッ！」

「おい、強情を張り通すなあ結構だが、少々痛い目を見るぜ」

七五郎の十手が、お園の腕のつけ根に捻じこまれた。

ぐいとそいつをこじるようにする。

ヒイッと、お園の唇から悲鳴が洩れた。

この手で七五郎は今までに幾人もの女を泣かせている。いって見れば女の肌から滲み出るあぶらが、七五郎の十手を光らしているのだ。

ぐりぐりつと、女のおぶらを吸っている十手の先が、やわらかいお園の脇腹をこじりつける。

うっ、ヒイッと、もうお園は全身でそのたびに身もだえている。

「フン、それでも音を上げねえしぶてえ女は初めてだぜ」

七五郎は、責めつかれたのか、

「岩、こいつを土蔵でも借りて押込んでおけこれ以上娘に泣き声を上げさせちゃア店の者に妙な気を起させるからな」

七五郎は、そう岩松にいったいて、どかりと座蒲団に坐り込んだ。

「どうです。二十年もお内儀さん無しで暮らしていると、今のような女の声を聞くのも妙なもんじゃありませんか。なんならこれからもちよくちよくあるこった。そんな時ア聞かせてもよござんすぜ」

七五郎は、明らかに妙に興奮してるらしい市兵衛の盲の顔を薄笑いして見つめていった「おおよその見当はつきましたぜ。あれだけしぶとい娘を誰がこの店に入り込ませたかっていう男でさア」

「だ、だれですその男は！」

「ハハハ、そいつはまだいえねえ。が、相手はお艶さんを拐い出して身の代金を取る気だといったらわかるかもしれねえが」

「あっ、角太郎——！」

市兵衛は、見えない目を見開いていった。

「じゃアねえかとね。江戸の角太郎はこのごろ妙に鳴りをひそめている。こいつは病気でもしてるかと思つたが、またそろそろ仕事に取りかかったんだ。狙つたが用心が堅くって押込めねえ、それでお艶さんを賈の投げ文で連れ出した。角太郎が入り込ませた娘なら骨が舍利になるまで痛めつけてもこいつは口は割りませんぜ。そいつがまたこちとらにはずいぶんたのしみだつてこともあるんだが」

七五郎は、ニヤリとした。そして、

「相手が稀代の泥棒となると、こいつはこの七五郎をせいぜい大事に扱って貰いてえな」と、ずるそうな薄笑いを浮かべた。

法楽地獄

ゆらり——と、あたりに、ともされた手燭の灯りで、二つの大きな黒い影が動いた。

それと同時に、あの生身を思わせる等身大の妖しい弁天像が浮き上った。

「おい、あばれずによく見るがいい。これが俺の彫つた弁天像だ。この弁天像が盲人たちにどのような功德をさずけるか——」

「うっ……」

無理に仰向けされた恐怖にふるえている美

しい顔は、肥前屋の一人娘のお艶だった。

お艶は、恐怖で顔をそむけようとするのを政吉は無理にそのお艶の目を弁天像に向けさせた。

「うっ——」

お艶は、そこに裸体に剥がれた娘を見て一層の恐怖に声を洩らした。はつきり声が出ないのは、お艶はしっかりと猿ぐつわで口をおさえられていたからだ。そのお艶は、あの賈文でおびき出されて、この洞窟に連れ込まれたのだ。お艶は等身大の弁天像を、薄明りの中で生身の娘が裸体にされているのだと見誤まつた。そして自分もそうされるのかと、もう肥前屋の富の奥深く育った娘は生きた心地がしないらしくふるえ上っていた。

「来たぞ、信心深い盲が——よく見ているがいい！」

政吉は、暗い隧道を近づくと、おぼつかない足音に振り向いていった。そしてお艶の体を抱え込むと、横のくぼみに身を退いた。

やがて、政吉の持つ灯りに浮んだのは、四十過ぎの、両目が抉られたように盲いているふた目と見られない醜怪な顔をした体つきもそれと劣らぬ頑強だが、何か吐気をもよおすような異臭を発する男だった。

非人だった。

その男のつくる黒い影は、いっそ化物じみて洞窟内に揺れた。せむしだった。

「ヒヒヒヒ、この弁天様だけだ、俺を相手にしてくれるのはな、うん、まるで生きているような妙な手ざわりがするわい」

男の手が、弁天像をまさぐり出しながら、陰気な声を出した。

「イヒヒヒヒ」

それから行われた盲目の男の奇怪な行動はとうてい常人には正視できぬものだった。

やがて、非人男は、ぎくり、としたようにあたりを見たが、やがて何事もなかったように隧道を出て行った。

「見たか、あの色餓鬼のやったことを！」

政吉は、押さえ込んで、無理にそこで行われた非人の行動を見せつけたお艶にいった。

「フフフフ、見たな。見たろうな！」

政吉は、お艶を抱え上げると、弁天像の後に廻った。そこがパクリと口を開いて行き止りの洞窟からつづくせまい隧道を歩いた。

お艶は、どきりと投げ出されると、本能的に足をちぢめた。洞窟からの道は、あの弁天像を刻んだ物置につづいていったのだ。その両手を後手に縛り合わされた姿を、政吉の目が

じつと愉しむように見下ろした。

「おい、いっておくことがある。明日か明後日にはあの弁天像をお前の親父が拝みに来るはずだ」

「……………」

「もう一つ、市兵衛が弁天参りに来る時は、あの木像の弁天は生きている弁天にかわってゐるってこった。わかるか。市兵衛は一人娘が無事に戻るように祈る弁天像は当の娘が代役してゐるってわけだ」

「あっ！」

「どうだ、おもしれえ趣向だろう」

政吉は、猿轡がずれて、お艶の激しく身動きするのを冷たく見つめてニヤリとした。

「な、なんだって、そんな恐ろしい目にあたしを会わすんです……」

「なんだというのか。聞きてえだろう——二十年前、お前の親父は一人の番頭を叩き出したはずだ。將軍さまでもねえのに不義だとぬかしやがって、不義の片割れは土蔵へ押し込んだ。土蔵で鼠のように生れたのが俺だといったらどうだ」

「知りません！ そんな、だからといってあたしは……あたしには何も……」

「フン、罪はねえといいてえんだらう。が、

お前が肥前屋の娘と生れたのが因果だと思つて貰おう。俺のおふくろは俺を生み落してから三年ばかり肥前屋に首に縄をかけられた犬のように玩具になっていた。生れるとすぐどこかへかくした俺達の行方を、というの俺は双子と生れたんだ。もう一人はお園ってお前の拐出しに肥前屋へ女中奉公に入り込んだ。その二人の子供の行方を肥前屋に教えてもらいたいために、おふくろはお前の親父の気嫌を取って暮したそうだ、畜生！」

政吉は、ころがっているお艶の帯に手をかけると、ずるずるっと引張った。ぐるぐるところがされるたびに、後手に両手の自由を奪われたお艶のすんなりした膝から足先が真紅の裳裾を割った。政吉の手に奪った帯が残る。

「どうだッ！」

「待って——待ってください！」

お艶は、襲いかかる男の動作に悲鳴を上げた。

「そうだ、お前をどうかするのは市兵衛だった。俺はすんでのところでそれを忘れるところだった」

「許してください！ そんな恐ろしいことは……父に、肥前屋の富に何とでもそのつぐない

はさせます——」

「断わろう、おふくろが生きてりゃアそれでもいいが、おふくろは俺達の顔を二度と見ずに死んでるんだ」

政吉は、お艶を睨んだままきっぱりといった。

将棋の駒

肥前屋の裏口から往来へ出た按摩があつた。持った笛を口に当てようともせず一丁ばかり歩いて、ぎよっ、としたように立ち止まった。

その時には、自分の脇にびったりつくように寄り添っている男に、按摩はぶるぶるとふるえ出した。

「おい、おめえ、いつかしのぶ湯で盲の法楽を喋った按摩だな」

「へ？ いえ……」

「まあいい、それで肥前屋の廻りをぐるぐる廻ってやつと呼びこまれて市兵衛に何を口説いたんだ！」

「いえ、揉み療治のほかにはほんの世間話をしたまででございます」

「娘を拐われた市兵衛に谷中の弁天に願でもかけろといいて来たか」



「あつ、何もそんなこと……」

「フン、それじゃア娘を拐ったのは江戸の角太郎という泥棒だそうだけれえを喋って来たか」

そういうと、フツと、もうその男の影は、びっくりしている按摩のあたりから消えていた。

ぞくりとしたように、盲按摩は、あたりの

闇を見廻してまたふるえ上った。

その頃、肥前屋の土蔵では、いまわしい責め苦が美しい十九娘の体に加えられていた。

「おい、口をつぐんでいりゃア角太郎はおめえを無事に救い出しにくるとでもいったのか。フフ、いくら角太郎だって内側から錠の下ろした土蔵にはへえり込めねえぜ」

お園を土蔵に押し込んでからは、岩松が土

蔵の中で番をつづけていたのだ。その位の用意をしなくっちゃと、七五郎は、江戸の角太郎という稀代の泥棒を恐れてもいたのだ。

「おい、そいつをよこして見な」

七五郎は、岩松から責め竹を受取ると、「今度ア少しは痛えぜ」

そういつて、ビュツと振りかぶると、ピシツと打ち据えた。

「うっ」

拝み手に、頭上に両手をくぐられている娘の裸体が、薄明るい灯の光りの中で、吊られた鰹のように身もがいて、もううちつつく痛め折檻に全身あぶら汗を浮かせた肌を魚鱗のようにうねらせた。

「角太郎の耳に聞えるように大声で喚くがいい！」

ピシツと、青竹が、十九娘の肌を打った。

「しぶてえ娘だ、まだか！」

「あっ」

ピシりと、鳴った。

「ううっ」

ピシリ、ピシリ！

「いい音がするぜ。目が醒め



「あつ、貴様——」

「角太郎が参上したんだ」

「やっぱり、そうだったんだな」

「フツ、違うぜ七五郎親分。」

江戸の角太郎はどんなに堅く戸締りしても押し込もうとすりゃア風のように押し込める現に内側から錠のかかった土蔵をきれいに開いて参上したぜ」

「じ、じゃ、なんでここへ角太郎が現れやがったんだ。フン、そこを動くところの娘はブスリだぜ」

七五郎は、ピタリと抜いた七首を、ぐったりとしているお園の胸乳の下あたりに当てていた。

「用意がいいぜ、さすがに七五郎親分だ」

「畜生！ 土蔵を出ろ。出ねえとこの娘の命は取るぜ」

「そいつは止めるこったぜ、親分」

「あっ！」

七五郎は、七首を握った手首に激痛を覚えて、ポトリと七首を落した。その瞬間に角太郎の腕が七五郎の首をぐいぐい締めつけてい

るぜ。そろそろ売り出す初鰹とそっくりだ。

いくらいいいねをしたってこちとら江戸っ子だおどろきやしねぜ！」

またピシリと打った。

「おや？」

七五郎は、つづけて振り上げた青竹を下に下ろして、あたりを見た。

「どうしたんで親分——」

「岩、誰か来たようだ、開けて見な」

「へえ」

岩松は、内側から錠を開けた。ギイと扉を

開いて、首だけ出してあたりを見た。

その岩松の首に、ぐいと、万力のような力が捲きついた。

どたりと、岩松は呆気なく気を失った。

「どうした、岩！」

十九娘の裸体を見ていた七五郎は、ふと振り返った。

「あつ、貴様は誰だ！」

「フン、どうやら俺を待っていたようだが」

た。

「うっ」

と、七五郎がのけぞる。そいつの懷に角太郎の手が入った。取り出したのは捕縄だ。そいつで、岡っ引の一番恥かしい、自分の捕縄で七五郎は角太郎に後手に縛り上げられてどたりと押しこめられた。

「この娘は角太郎が貰っていくぜ」

七五郎は、口惜しそうに、お園の裸体が下ろされ、着物をかけられて角太郎に横抱きにされたまま土蔵を出ていくのを見送った。

ドタンと土蔵の扉がしまつて、錠のかかる音が響いた。

「畜生、角太郎め！」

七五郎は、扉口のそばにころがっている岩松を見て、齒を噛んだ。

「おい、岩松！」

頭を蹴飛ばされて、岩松は気がついた。

「早くこの縄を解きやがれ！」

「へえ」

七五郎は、縄を解かれると、落した七首を拾った。それと一緒に七五郎は妙な物を拾い上げた。

将棋の駒だった。そいつが七五郎の手首を打ったのだ。血に染んでいた。手首の肉をわ

ずかだが抉り取ったのだ。

「角太郎め！」

駒には、角行と彫られているのだ。

恩怨模様

「おい、また来たようだぜ」

政吉の聲が恐ろしくお艶の耳に響く。

等身大の弁天像は、奇妙な笑みを洩らして無音の琵琶音を奏でている。そして、もう一体、それは生きた弁天像だった。お艶なののお艶はつい一刻ほど前、政吉に無理に着衣を剥がれてそこへ運び込まれたのだ。

「朝までにここへ姿を見せねえってことは、お園は誰かに捕まって、今ごろはひでえ目に会ってるに違えねえ。としたら、こっちはこっちでおめえにお園の分を返してやるんだ」

そういつて、お艶は、もう長い間、無理に手足をひろげられ、うしろの木枠にくくられて、弁天像と同じ恰好に固定されていた。そして、木彫の弁天像のある洞のちよつとしたわきのくぼみに置かれた。

もう四五人は、妖しい弁天像に淫らな功德を受けて来ただろうか。

そのたびに、お艶はそれを見せられ、もしそれらの盲人が、ふと二歩か三歩わきを動い

て、そこに生きた娘の裸像を知ったとしたら

お艶は、その恐ろしさに、醜い顔をした信者が自分に気づかず洞窟を去っていくと、はじめて自分がその男に気づけなかったことではっとするのだった。しかし、無気味な地獄の使者は、時をおいてはまたお艶を恐怖のどん底に突き落すのだ。

これ以上の恐怖があるだろうか。そしてそれは、実の父がここに参詣に来る時までつづくのだ。その時は政吉はお艶に、市兵衛が来たら木彫りの弁天像と生身のお艶の裸体を置きかえるといったことから、市兵衛は厭いなしにお艶の裸体に触れるのだ。触れなければご利益はないと、政吉は按摩の宅助を使って市兵衛に吹きこませたはずだった。

「来たぞ！」

政吉は息を押殺していった。

お艶は、もうその恐ろしきで目を上げることもできなかった。

と、

「あっ！」

政吉は、驚きの声を上げた。

「おい、政吉、お互いに娘を交換しようじゃアねえか」

盗っ人冠りの男なのだ。その腕に抱かれて

いるのを、お園と知った政吉の驚きだった。

「いやだ！」

「妹の命を失くさせるつもりか」

「畜生！」

政吉は、懷から弁天像を彫り上げた鋭利な鑿を取り出してお艶の胸にその先を当てがった。政吉は、生きた娘を交換するより、妹のお園に死んで貰って自分達が長い間かかってやっとその機会が来た肥前屋に、一人娘のお艶を殺してその復讐を遂げたいのだった。

「よし、遠慮なくそっちも殺すがいい」

「あっ」盗っ人冠りの男に下ろされたお園が悲鳴を上げた。

「お園！」兄妹の情だった。

政吉が思わずお艶の胸に当たった鑿の切っ先をそらして、悲鳴を上げたお園の方に身を乗り出した時、盗っ人冠りの男はすっと飛んで政吉から鑿をもぎ取っていた。

「畜生！ はかりやがったな！」

「お園を介抱してやるがいい、ひでえ目に会わされていたんだ」

背中の木杵から自由にされたお艶が、盗っ人冠りのうしろで着物を着た。

政吉は、お園を抱いてそれを口惜しそうに睨んでいた。

「兄さん、その方にあたしは肥前屋の土蔵から救われたんです」

「えっ？」

政吉は、うろたえたようにお園と盗っ人冠りの男の顔を見た。

「礼には及ばねえぜ。俺ア江戸の角太郎のともねえ濡衣をてめえの手で晴らしたかっただけだから——それより、婚取りの祝言もこの秋と決った一人娘を拐い出されて肥前屋は死ぬほどの思いを味わったはずだ。これでお園さんを救ってやった俺の顔に免じて恨みは捨てぬか」

「俺は市兵衛にそれだけでは許せぬ気持だ」敵意に燃えた目で、政吉は角太郎を睨んでいた。角太郎の目がその政吉をあわれむように見ていった。

「お前はそのためだけに肥前屋親娘を生きながら地獄へ落そうとした。しかしそのお艶が父親の違うお前達の妹だと知ったら、お前はお前の目的が果されなかったことにほっとするだろう」

「な、なんだって！」

角太郎の言葉に身を乗り出した政吉は、やがて、がくりと頭を垂れた。

「お艶は相恋の番頭幸吉と祝言するそうだ。」

肥前屋の身代はそっくりお艶のものになるはずだぜ」

「ああ——」うめいたのは、お園だった。

「お園さんといったな。おめえさんは肥前屋に奉公に出て同じ幸吉が好きになった。それで抜け出せるのを逃げずに岡っ引の手で痛められたんだ、だが妹にはその恋も譲られるるな」

ううっと、お園は低く泣き出した。

「行こう、お艶さん、どうやらこっちには用がなくなったようだ」

角太郎は、お艶を促して、政吉とお園を洞窟内に置いて長い隧道を先に立って歩いた。

そこに駕籠が一つ待っていた。

「頼むぜ。肥前屋に担ぎ込んでくれ。酒手は肥前屋がはずむだろう」

「へえ」

お艶は、盗っ人冠りの男に無言で頭を下げてから駕籠に乗った。お園を乗せて来た駕籠だ。それに揺られながら、お艶は駕籠の中に落ちていた銀打の平簪を拾って、やがてそれを胸に抱くとつぶやいた。

「すいません、姉さん……」

盗っ人冠りの男の影は、もはやあたりの闇に溶けて消えていた。

★密林の邪教★

女神の壺

穴に投げ込まれた男の頭上から 美しい女神の嘲笑と共に黄金の雨が降ってきた！



残酷なリンチ

リマック川の河岸に、若い女の死体があがった。

素っ裸の、変死体だ。

検屍と解剖のために、その死体は、すぐにリマ警察庁に運ばれてきた。

「あつ、これは！……」

女の死顔をひと目みて、ハートレイ警部は思わず声をあげた。

「ほう、ご存知の方ですか？」

といったのは、ブルーノ博士である。博士は、リマ警察庁付の検屍解剖医官だ。

この地下の屍体置場には、女の変死体を囲んで、いま、三人の男がいる。

すなわち、ハートレイ警部、ブルーノ医学博士、それに日本人の柔道教師、ジョージ・アリタ、つまり、このおれだ。

ハートレイ警部は、おれの顔をチラリとみてから、博士にいった。

「実は、この女性は、私の秘密の部下なのです。れいの、オロヤの裸踊り教を探らせにや

南 村 蘭

江 淵 晃 夫・画



った女なのです……」

「ほほう。すると、あなたがいつかお話ししていた、秘密の捜査員というのは、このご婦人でしたか……。それが、どうしてまた、こんな姿になって……」

ブルーノ博士は、眉をひそめて警部にきいた。

「もしかすると、彼女の身もとが、裸踊り教の奴らにバレて、それでこのようなりんちを受けたのかも知れません……」

沈痛な表情で、ハートレイ警部は答えた。

「まさか、彼らがこんなひどいことを……」

博士は、重苦しく首を横にふった。

「——で、博士。この女性の直接の死因はなんでしょう？」

「それが、珍しいのですよ。破傷風菌による強直発作です。このすさまじい死顔をこら

んなさい。どんなにガマン強い人間でも、この菌に犯されたが最後、ヒイヒイといって泣きわめく。汗をダラダラ流し、身体を折りまげて苦悶するのです……」

「すると、他殺ではないのですか？　だが、どうしてまた、彼女が破傷風になど——。どこから感染したんです？」

「いや、当人が知らぬまに感染したのではなさそうだ。——こらんなさい、この太腿の内側を……。まだ新しい注射の痕があります。そしてこの手首足首についた紫色のアザは、

たしかに縄の痕です。——察するところ、この女性は、手足を縛られて、むりやりに破傷風菌を、内腿から体内に注射されたのです」

「ちくしょう！　なんというひどい事を！」

ハートレイ警部は、拳をかためて口惜しげにうめいた。

「リンチだとすれば、これ以上、残忍で報復的なものではありませんまい……」

ブルーノ博士が、低いしゃがれ声でつぶやいた。この博士は、いつもカゼをひいたような、しゃがれたイヤな声をだす。まるで慢性のゼンソクをわずらっている悪魔のような感じだ。医師としての腕は、たしからしいのだが……。

「この犯人は、必らずあげてみせますよ」

ハートレイ警部は、唇を噛んでいった。

——ところがその後、一ヵ月たって、同じく、全裸の女の死体が、リマック川の河岸に発見されたのだ。

さらにまた一ヵ月後、同じく女の死体が浮きあがった。

この二人の女も、ブルーノ博士の検屍の結果、縛られて破傷風菌を注射され、殺されたあげくに川のなかへ放りこまれたことがわかった。

リマの街は、この猟奇的な連続殺人事件に湧きかえった。

合計すると、三名の犠牲者である。つまり警察から裸踊り教に放った三名の女の捜査官が、すべてその身もとを発見されて、殺されたわけだ。

女性ばかりを密偵にだしたのは、女のほうが信者に化けて潜りこむのに容易だと思ったからだ、と警部がいった。しかし、結果はみことな失敗だ。

「——ハートレイ警部。この殺人犯が、裸踊り教の奴らだとわかっている以上、早いところ奴らを検挙したらどうなんです？」

と、おれはシリシリして警部にいった。いくら南国の平和な街の警察でも、これではのんきすぎる。

「ぼくだって、そうしたいさ、ジョージ。だが、残念ながら、わが民主警察は、確実な証拠が揃わなければ、彼らを逮捕することはできないのだ」

いかにも残念そうに、大きな手でテーブルの端をつかみ、ハートレイ警部はいった。

密林の邪教

このリマは、南米の西海岸、ペルーの首都だ。カリヤオ港から、リマック川を十キロほどさかのぼった地点にある、美しい街だ。

風光明媚、氣候温暖。観光客も多い。

ところが、このリマの奥地のオロヤという密林のなかに、ちかごろ、奇妙な宗教が巢喰ったのである。

その密林は、マラニョン川の上流地帯にあつて、やがてはエクアドルの国境からブラジルを抜け、世界一の大河、アマゾンに注ぎこんでいく。

この奥地のジャングルの洞窟に、忽然として生れ、根をおろした宗教こそ、まったく怪奇だった。

リマの市民たちの噂によれば、その洞窟に集った信者たちの、熱狂的なお祈りが、次第に高まって、はげしい興奮が渦巻きはじめると、男も女もいっせいに着ているものを脱ぎ捨てて、踊り狂うというのだ。

裸踊り教という名称は、そこから起きているらしい。が、さらにその踊りがクライマックスに達した瞬間、奇妙な音色のチャイムが鳴りだし、とたんにロウソクの灯が消されて暗黒になる。

その闇のなかで、邪悪の愛欲がくりひろげられるという……。

教祖は、白人とインディアンの混血女で、みずから、女神のリデルと名乗って、非常な美人らしい。

どこの世界にも、邪悪の愛欲を好む人間はいるとみえて、宗教の仮面をかぶったこの怪しい団体は、次第に同調者をふやしていく形

勢だ。

そこで、リマ警察庁のハートレイ警部は、ひそかに女の捜査官を送りこんだのだが、むざんな死体となって戻ってきたというわけなのだ。

「どうもわからん。三人の女性捜査官は、みんな腕ききばかりで、おめおめと正体を見破られて殺される筈はないんだが……」

ハートレイ警部は、額にシワを寄せて考えこんでいる。大男で腕つぶしは強いが、頭脳の回転は腕力ほどでない警部だ。

「この警察庁の内部に、奴らに内通している人間でもいるんじゃないかなア……」

おれは、一步突っこんでいってやった。

「まさか——。彼女たちを送りこんだのは、極秘になっていて、これを知っているのは、ぼくと庁官と、それにブルーノ博士だけだ」

邪教ということはわかってるのだから、踏んこんで片っぱしから、ひっくくってしまえば一番かんたんなのだが、一般市民からまだ実害をうけた訴えはないし、三人の女性の殺人事件についても、確実な証拠は何もないのだ。

「——よし！ ハートレイ、それじゃ今度はおれが一番やつつけよう！」

おれは、決心して警部にいった。おれは、

このハートレイには、ちょっとした恩があるのだ。一文無しの腹ペコで、やっとこの街へたどりついたおれを、日本の柔道家として警察へ雇ってくれたのが、この警部だ。

もっとも、おれのいいかげんなホラに、調子よく乗ってきたといえ、それまでだが。ここらで、その恩を、いっちょようお返ししよう……。おれは、ガラにもなく、そう思ったんだ。

密林の洞窟のなかの怪教。

美貌の混血女教祖。

生きて帰らざる三人の女スパイ。

好奇をそそる道具はそろっている。

「やるよ。さいわい、おれはまだこの街にきてから、半年とたっていない。顔はあまり知られていない筈だ。うまく信者に化けこんで奴らの悪事を洗ってきてやる」

おれは、力強い声で警部にいった。

「ジョージ。——ありがとう！」

警部は立ちあがって、おれの手を握った。大げさなゼスチュアだ。

「やらせてくれるかい？ ハートレイ」

「きみのすばらしいジュウドウをもってすれば、どんな難事件だって解決疑いなしだよ、

ジョージ！……」

警部は青い眼に感激をうかべて、おれの肩を抱きしめる。おれは背中がこそばゆくなった。

この警部は、ジュウドウきちがいなのだ。日本の柔道を、まるで魔法の武術のように錯覚して、信じこんでいるんだから、いやになつてしまふ。おかげで、おれへの信頼も、バカに厚いというわけなのだが……。

そのとき、ドアがあいて、警察医のブルーノ博士が入ってきた。

「やあ、ハートレイ。どうかね、まだれいの連続殺人事件の犯人は挙がらないのかね？」

博士は、あいさつ代りに警部にいった。

「いや、こんどこそ、こんどこそたしか証拠を押えてみますよ、ねえ、ジョージ」

警部は、明朗な微笑をうかべておれの顔をみた。おれは、うなずいてみせた。

ブルーノ博士が、ジロリとおれをみた。

「信用できるかね、この男が？」

淫祠邪教・特集

相変らず、イヤなしゃがれ声だ。おれはゾツとした。白い眉毛の下の眼が、鋭く光る。

——黄色い猿に、なにができる……

そんな顔つきだ。アメリカで有色人種がバカにされるのには馴れているおれだが、どうもこの博士は、虫が好かない。

女神の神酒

おれは、その夜、ただちにマラニョン川の奥流伝いに、密林の奥地をめざして進んでいた。

熱帯地特有の鮮明な月光が、密林の梢をこまかく縫いわけて、道なき道を照らす。

夜になると、さすがに気温は冷えて、おれはブルブルとふるえた。緊張の武者ぶるいもある。

(捕まって破傷風の注射をブツリじゃ、かなわねえからな……)

三週間たっても、おれが戻らない時には、次の刑事を連絡に送ってくれることになっている。

おれは地図を頼りに、裸踊り教への道を、まっしぐらに歩いた。

そして二時間後。おれは、めざす洞窟を探しあてたのだ。その入り口は、密生した熱帯

の草樹におおわれている。その奥にチラチラと灯りが見えるのだ。

おれは、かまわずに足を踏み入れた。と、左右の暗闇から、たちまち両腕をとられた。

「信者証をみせろ」

男の声だ。

「今日から、私も信者になりたいのです」

おれは、わざとオドオドした声でいった。

「紹介者はあるのか？」

「それが……実は、ないのですが……」

「……………」

二人の男は、両脇に寄りそったまま、無言でおれを洞窟の奥へひっぱっていく。

(しめた……)

と、おれは思った。だが、これからが問題だ。おれは両脚の筋肉がこわばった。

洞窟のなかは、意外に奥深く広い。ロウソクの光りが、うすぼんやりと内部を照している。人間の影が長々と尾をひき、絶えずゆれているのが不気味だった。

やがて、祭壇に突きあたった。トーテムを思わせる半人半獣の木像が、赤、青、黄、極彩の色に化粧されて祀られてある。よくみると、数十人の男女が、さまざまの姿態でもつれあい、びっしりと空間を埋めていて、それ

が少し離れて見たときには、一個の半獣神と化して眼に映る奇怪な彫刻だ。

その祭壇の前の広場には、すでに多くの男女が参集していた。おれは、すばやく眼で、その数をかぞえた。五十数名はいそうだ。すでに、ナマぐさい熱気に包まれている。男女ともにインデアンが多い。

おれは、祭壇の下にひきすえられた。うしろの信者たちが、ザワザワと騒いだ。

祭壇のうしろから、教祖が現われたのだ。

なるほど、するどい美貌をもった、まだ二十五、六ともみえる若い女だ。やや長目のにばした金髪。その額のまわりに、金色の環をつけ、細く長い咽喉から胸もとに、よく光る宝石のついた首飾りが、キラキラと垂れ下っている。

うすい紗のガウンを身にまとっただけなので、豊満な肉体があらわに白く透きとおっている。

(この女が、女神のリデルか……)

おれは、女の顔を凝視した。ほそく切れあがった。眼、鋭く高い鼻。うすい唇は、非情な冷酷を思わせる。

「——お前の名は？」

と、尊大な口調で、女神がいった。

「タカモリ・サイゴウ」

おれは、おれの郷里の偉人の名をいった。
おれの脳裏に、桜島の風景がチラとよみがえ
った。なつかしい！……

「国籍は？」

「チャイナです」

これもデタラメだ。だが、おれのツラはチ
ヤイニーズといったほうが、誰でも信用する
んだ。そのほか、二、三の訊問があった。お
れは、いいかげんに、しかし、まじめくさっ
た顔で答えた。

最後に、ペルー貨で五百ドルとられて、お



れはどうやら合格したようだ。

「では、女神さまの神酒を与える……」

そばについている、インデアンの男がいつ
た。女神は、ガウンをひきずって、祭壇の裏
へ姿をかくした。

おれは、ホッと一息ついた。背筋に汗が流
れている。

やがて、またおれの前に、女神のリデルが
現われた。木彫りの腕に、なみなみと注がれ
た液体を持って、それをおれの鼻さきに、ぐ
いとつきだす。

「これを、お飲み——」



おれは、すなおに両手をだして、それを受けとった。

(つまり、固めの盃ってわけだな……)

スコッチとまではいなくても、ブドー酒ぐらいは飲ませるだろうと思って、おれはその木碗を口にもっていった。

(おや?……)

アルコールは全然ない。どころか、なんともいえぬ奇妙な匂いが、その液体から、発した。うすい湯気がたっている。

おれは、うわ目づかいにリデルの顔をみあげた。女神は、おれの様子をじっと見つめている。

おれは、ひと口すすった。

まずい!……なんていう味だ。

おれは、木碗を膝においた。とても飲めるもんじゃない。

「飲みなさい」

女神が、命令口調で厳然としていった。

「なんですか、これは?」

おれは、思わずきいた。

「神酒です。それを飲まぬうちは、わが教団の信従ではない」

おれは、仕方なく目をつぶって、その神酒とかいうシロモノを、がぶがぶと飲んだ。や

や塩気のある、複雑な味だ。

「フフフ……」

女神の唇に、なぜか妖しげな笑みが浮かんだ。おれは、女神の足もとに膝まづき、そこにキスをした。

そのとき、祭壇の両袖に垂れさげたカーテンのかけから、一人の男が現われた。黒布のマスクを、すっぽりと頭からかぶり、肩から足の先までの黒マントを着た、異様な人物である。両眼の穴だけが、不気味に二つのぞいている。

その人物は、つかつかと女神に歩み寄り、彼女の耳もとに、なにごとかさやいた。

それをみて、おれは、なぜか不安をおぼえた。その不安感は、たちまち事実となって適中した。

女神の耳から離れた黒マスクの男は、いきなりピストルをだして、おれの胸もとに突きつけたのだ。無言である。

「ど、どうしたんです。なぜ、私に、そ、そんな!……」

おれは、あわてて手をふり、後ずさりして身がまえた。

(くそ! おれの素性がバレるにしちゃ、早すぎるじゃねえか!)

だが、女神のリデルは、眼を吊りあげておれをにらんだ。

「お前も警察のスパイだったのか!」

おれは、じりじりと後退した。

「ジャポネ! ジュウドウ!……」

おれの頭を、うしろから別の男が、ガン! となぐった。

おれは、いくじなくひっくり返った。

ジュウドウもくそもあったもんじゃない。

なぐられ、蹴られ、おれはあっさり気絶してしまった。

奴隷の洗礼

気がついたとき、おれの眼の前はまっくらだった。口のなか血なまぐさい。痛みは感じないが、だいぶ切ったようだ。ペッペッと吐き出す。

暗闇のなかで、そっと手をのばすと、腕がのびきらないうちに、すぐザラザラした土の壁にぶつかった。左右に手をひろげると、これもまた固い土の壁だ。うしろにも空間はない。つまり、ひどくせまい穴の中に、おれは投げこまれたのだ。

おれは、最後に眼を上に向けた。そこに、ぼんやりとしたうすあかりを見たとき、おれ

淫祠邪教・特集

はホッとした。

だが、そのうすあかりの天井は、かなり高い。五メートルほどもある。とても這いあがれるものではない。

おれは、湿気のひどい穴の底に腰をおろして考えはじめた。

(おれは、なぜあんなに早く、見破られてしまったんだろうな……)

これが、第一の疑問である。

女神のリデルに、あの黒マスクの男が耳うちした瞬間から、急に様子がおかしくなったんだ。すると、おれの素性を見破ったのは、あの男か？
あの黒マスクは、いったい何者なのだ？

おれは、真剣になって考えはじめた。

と——頭上の穴から、オレンジ色の光りが射しこんできた。誰かが、ロウソクをもって近づいてきたらしい。おれは上をむいた。
白い女の顔がのぞいた。女神のリデルだ。

「ウフフフ……。穴の中の住みごこちはどうだい？」

「うるせえ。きさま達は、いままでこうして人殺しをしてきやがったんだな。おれが身をもって証拠をつかんだがらには、必らずきさまらをぶつつぶしてやるぞ！」

おれは、力いっぱいどなった。

「ホホホ……。元気のいいジャップね。でもお前ももうじき、怖ろしい菌を注射されて殺されるのよ。神に召される前に、私の神酒をもって、ありがたい洗礼をしてあげるわ」

神酒で洗礼……。なんのことだ？

と——頭上の視界いっぱい、女神のガウンがふわりとかぶさった。同時に、おれの頭上に、ナマあたたかい液体が、しぶきとなって降りかかってきた。その数滴が、おれの唇を濡らした。

「むッ……」

さっき、祭壇の前で飲まされた神酒と同じ味だ。おれはまた上を仰いだ。

液体は、おれの眼に鼻に口に降りそそぐ。

(あッ、わかった！……)

おれは、あわてて顔をうつむけ、両手で頭をかかえた。ひでえ。こんどは首すじが濡れた。

(助けてくれえ！)

おれは、悲鳴をあげた。

神酒の雨は——まもなくやんだ。

「ウフフフ……。アハハハ……」

穴の上にひろがったガウンは消えて、また女神の顔がのぞいた。

「洗礼された感想はどう？ フフフ。ジャッ

プに私の神酒を飲ませたり、頭からかけてやったことははじめてよ。せいせいしたわ。これで思い残すことなく、お前を殺せるわ」

なんという怖い女だ。魔性の女だ。

だが、おれはまだ死ねない。殺されるのはいやだ。

おれは、上にむかって手を合わせて哀願した。

「たのむ！ おれを殺さないでくれ。おれは死ぬのがおそろしい。おれをこの穴からだしてくれ。おれの命を助けてくれれば、おれはあなたの奴隷にでも、なんにでもなるよ！」

「……………」

リデルは、冷酷な表情で、黙ったまま、おれを見おろしている。

「おれは、もともと旅のルンペンだ。リマの警察なんかには、なんの義理もありやしねえ。警察なんか裏切って、こんどはあなたの忠実な手下になります。ジャップの黄色い猿は、よく働きます。一度ためしてみて下さい。お

ねがいです。このとおりです！……」

おれはペコペコと頭をさげ、涙をながして売りこんだ。

と——リデルの声音が、急にやわらかくなったのだ。

「日本人のことは、私だって知っているよ。小さいくせに勤勉で、骨おしめせず、蟻のようによく働く……」

「そ、そうです。奴隷にはもってこいです。お願いです。私をあなたの召使いとして、一生こき使って下さい。おねがいです！」

おれは必死だった。咽喉を鳴らして泣きわめいた。

「ウフフフ。おもしろい男だこと。その言葉に、ウソはないだろうね？」

「誓って！……ウソではありません。忠誠を誓います」

「私の命令することを、なんでもきくというのかい？」

「はい。あなたのような、美しい女神さまのおっしゃることなら、どんなことでも、よろこんで……」

生きた壺

おれは、やっと穴の底から、ひきあげられ

た。やはり、洞窟内に掘られた縦穴だった。祭壇の裏に小部屋があって、そこが女神の神聖な私室になっている。

「ホホホ……」

女神のリデルは、勝ち誇った笑い声をあげた。彼女の左右には、屈強なインデアン男が三人も護衛している。男たちは、おれにとびかかってねじ伏せると、おれの両手首に、ガチャリと手錠をかけた。その上、おれの咽喉に、鉄の首輪まではめやがった。

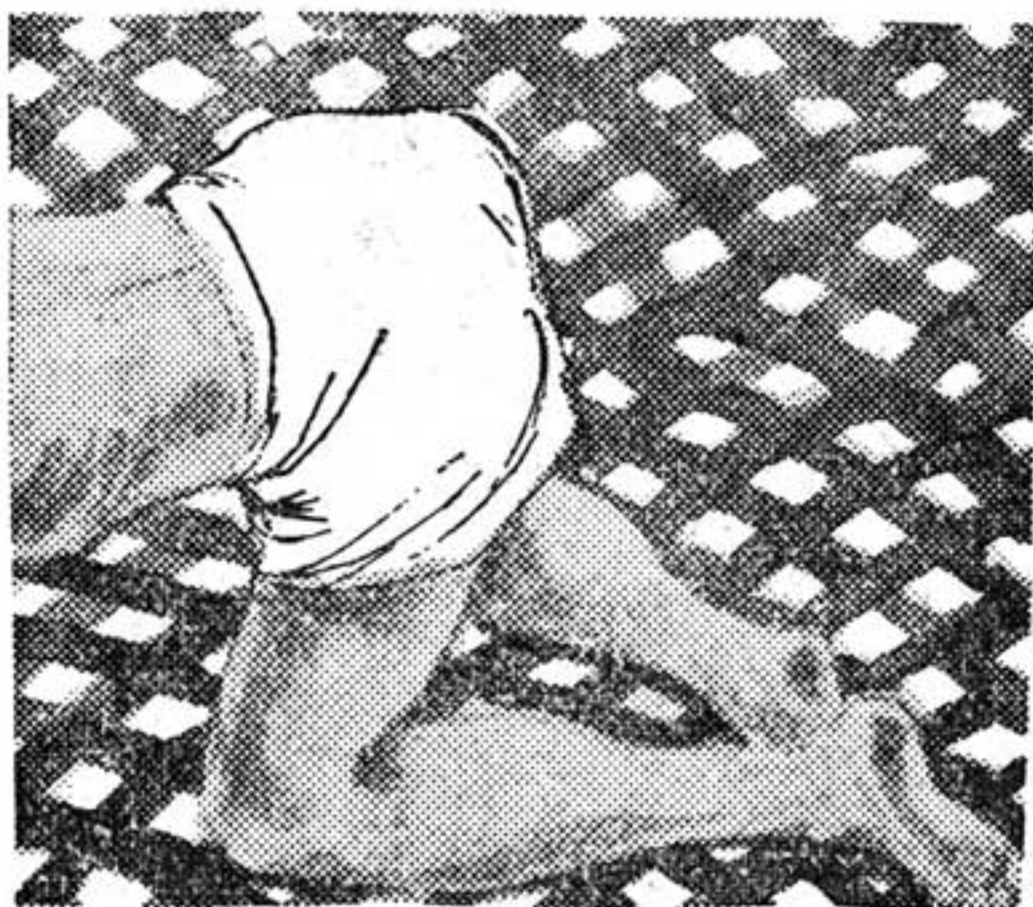
その首輪には、長い鎖がついていて、その先端は、リデルの寝る頑丈な鉄のベッドの脚につなげられた。

（くそ！ これじゃ犬じゃないか！）

命は助かったが、おれは畜生と化して、自由を奪われた。

そして、おれは——
ついに、女神の壺と
なったのだ。

それが、いかに屈辱的なものであったか。多くは語りたくない。
「神酒」だけなら、ま



だガマンもできる。だが……。

しかし、おれは、破傷風菌の注射が怖さにその苛酷な命令に服した。

なんとという冷酷な性癖……。
なんとという傲慢な趣味……。

リデルが若くて美しい女だということ。それだけが救いだった。

その屈辱と苦痛のなかに、苦痛だけではない、不思議な感覚の疼きが伴うようになってのは、リデルの神々しいほどの美しさが、おれの心を次第に魅了しはじめたせいだろうか……。

「ジャップ！ 足を洗っておくれ！」

「ジャップ！ 踏みだいになるんだよ！」

「猿！ 肩を揉んでおくれ！」

「犬！ チンチンしてごらん！」

おれは奴隷であり、愛玩物だった。

こうして、血のにじむような日が過ぎた。

リデルも、それからあの

黒マスクの怪人物も、ようやくおれに気をゆるしはじめた。

黄色い東洋の猿は、完全に奴隷化した。

悪夢の三週間は過ぎた。

おれは、ついに、黒マスクの男の正体をつきとめた。

あの男は、この洞窟のなかでは、黒マスクも黒マントも、絶対に脱がない。おれの前では、啞のように黙ったままで、リデルと話を

するときには、手まねや

身ぶりでするといった

ぐあいの用心深さだ。

(声をださないところが怪しい……)

と、おれは気がついた。

おれは、奴の歩いてくる靴さきに、ベッド

た。

おれは、奴の歩いてくる靴さきに、ベッド

た。



の下から、ふいに足をつき

だした。奴は蹴つまづいて

たちまちころがった。

「あぶない！ 気をつけろ！

また鞭をくらわすぞ！」

おれにむかってとなり、

おれは脇腹をしたたかに蹴

られた。

だが、おれは、ついに奴

の声をきいた。

イヤな声だ。ひどいしゃ

がれ声だ。たしかに聞きお

ほえのある声だ。おれの思

ったとおりだった。こんち

くしょう！

ブルーノだ。警察医のブ

ルーノ博士だ。

奴が裸踊り教の女神をあ

やつっていた、黒幕の男だ

ったのだ。

警察から、いくらスパイ

をくりだしても、すぐに見

破られて殺されてしまうの

は、あたりまえだ。ハート

レイのまぬけめ！

おれは隙をみて、祭壇の裏側に張りめぐらしてあるカーテンを破り、その布きれに、そのことを書きつけた。腕を噛み切って血をしほりだし、その赤インクで書いた。

「裸踊り教のボスは、ブルーノ博士。すぐ手配を乞う」

あとは、ハートレイ警部からの連絡を待つだけだ。

三週間たっても、おれが戻らない時には、次の密偵員がくることになっている。

三週間と二日目。裸踊り教信徒たちの、さまざまな愛欲のパノラマが、やっと終了した深夜、待ちに待ったその男が現われた。

鋭い目つきをした、尋常でない挙動の男が一人、疲れて眠っているリデルの隙をみて、すばやくおれのそばに寄ってきたとき、おれはポロポロとうれし涙をこぼした。

「これを警部に——」

おれは、布きれの手紙を、その男に手渡した。男は、うなずいてすぐ消えた。

おれの頭上の寝台で、女神が、むむウ……と声をあげて寝返った。おれは、ドキリとして、頭のなかが一瞬つめたくなった。が、女神は、また軽い寝息をたてはじめた。

おれは、ホッとした。四肢の力がクタクタ

とぬけて、犬のように寝そべった。

魔の記憶

おれが奴隷の鎖から解放されたのは、翌日の早朝だった。

血の手紙が、ハートレイ警部に届くと、さっそく、ブルーノ博士の研究室に、警官隊が踏んこんだ。博士を強制引致し、証拠書類や培養器に入った破傷風菌のコロニーなどを押収した。

同時に、裸踊り教の大検挙がおこなわれたのである。

おれは生き証人としてブルーノ博士と対決し、奴の悪事を徹底的にあげた。

「ありがとう、ジョージ。実は最近になってから、ほくも博士を疑いだしていたんだ。というの、殺された女たちの死因である、破傷風菌の線をたぐっていくと、次第に博士が怪しくなってきたんだ。だが、決定的なキメ手がなくて弱っていた。そこへ君の手紙さ。

いや、よくやってくれた。さすがにヤマト魂の持主は違うね。大いに礼をいうよ」

ハートレイ警部は、相変らず大げさなゼスチュアで、おれの肩を抱いた。

「だが、博士は、どうしてあんな怪しげな宗

教に関係していたんだろう？」

と、おれはきいた。

「ブルーノも、リデルという女神も、実は、ロカルノ党の地下運動員だったんだ。彼らはリデルの美貌を利用して、裸踊り教なんていう怪しげな宗教を流行させて、リマの人心をつかみ、あるいは動揺させ、革命の下準備を計っていたんだ……」

と、警部は説明してくれた。

南米の革命さわぎは、年じゅうのことだ。血なまぐさい騒動があつて、一夜のうちに政権が変り、前の権力者は銃殺されるか外国へ逃げだす。

おれには、どっちが正しいのか、よくわからない。だが、どうも邪教をはびこらせて、人心を惑わせようなんてのは、タチがよくなさそうに思える。

おれは、リマ警察から、賞状と賞金をもらうと、またフラフラとあてどのない旅へ出発した。

おれは、柔道なんて、ちっとも知りやしないんだ。いつまで腰をすえていると、化けて皮が剥がれる。お人好しのハートレイ警部をガッカリさせるのは、後味のよくないことだからな。

賞金はありがたかったが、賞状なんてものは邪魔だから、すぐリマック川のなかへ投げ捨ててしまった。おそろしい思い出は、早く忘れない。

だが、あの異常な体験は、当分のあいだ、おれの胸から消えないだろう。

おれの両手首には、あの女神にはめられた

手錠のあとが残っている。首輪のあとは、ヒリヒリと咽喉に痛い。皮鞭をうけた背中も、まだ腫れている。

だが、これらの傷あとよりも、まだ強烈におれの肌にしみついているのは、あの魔の味わいだ。

あの不思議な味覚は、いつまでも消えるこ

となく、おれの舌に残るだろう。いや、舌だけでなく、全身に……。全身の感覚に……。

サンチャゴへむかう汽車のなかで、おれはふいにもう一度、あのリデルに逢いたくなかった。あの女神のベッドの下に、もぐりこみたくなったのである。

ストリップ開眼

観客席へ、長いビロードのカーテンをはらって入った笛次の眼を真ッ先にとらえたものは、舞台の中央に白く浮き上っている女の豊かな乳房だった。

ちょうど、白いスポット・ライトが、女の乳房の部分だけを丸く照射していて、後は影になっていた。乳房だけがそこにあるような感じだったのだ。乳房はぶる

んぶるんと上下に紅い乳首を軸にと興奮させた。

して揺れている。異様なほど大きく実っていたし、恰も、女とは別の、その乳房だけが、独立して揺れ動いているように思えた。

一瞬、舞台全体がぱつと明るくなって、女体の全貌が露呈した。

柔軟な動きだった。腰が左右に波をうち、両肢が大きくはねる。くるりと女が後をむく時の、臀部の二つの丸い丘がくぼみをつくって揺れる時の煽情は、笛次をドキッ

と興奮させた。

いつしか、笛次は、舞台のかぶりつきの方へ、観客の隙間を押し分けて出ていた。

すぐ目の前に、巨大に見える女の白い裸身が踊っていた。彼の眼は、まばたきもせず、女の肌の上をはいずり廻った。

笛次は女の裸身から、三年前接した吉原の妓との感触を取戻そうと試みたが、それは徒労に終わった。というの……

★あまとりあ社の異色ある単行本で春宵を興深く楽しんでください！

耽奇サスペンス 夜光裸身

葉田 光 著

定価二五〇円・千四〇円

近日発売！



江戸暗黒秘録

邪宗淫寺抄

鈴木和夫

東 桂史・画

美貌の破戒僧に狂う大奥の女達、妖術に随喜する圧制
下の庶民、昔も今もあの手この手の邪教は絶えない。

新興宗教取締令

江戸の法律「御定書百箇条」の第五十三条
に「新規之神事仏事並に奇怪異説御仕置之事」
という規定がある。

一、新規之神事仏事致候もの

出家社人に候はば其品重きは

其品軽きは

俗人に候はば

一、奇怪異説申触人集致においては

人集いたし候宿

発起いたし申触頭取

同世話いたし候ものは

但、町方方共人集めいたし候宿之名

主重過料、組頭五人組過料、三十日以
上捨置不訴出候はば町方方共名主役
儀取上

とあって、新興宗教取締令のようなもので
ある。宗教に関係がなくても、「破防法」な
いしは「警職法」のような意味で、たとえば
天一坊事件などは、この法律の後半の部分に
触れるわけだったのだろう。

天一坊事件の判決文は――

天一快行 酉三十一

右者偽りの儀ども申触れ浪人共を集め、公
儀を憚らず不届につき死罪の上獄門に行ふ
者也

常楽院

右快行と申す者に仕へ浪人共集め候儀、更
に快行の宿を召仕ふる所の役人にも届けず
重々不届につき遠島申し付くる者也

と有って、事の次第によらず、何でもか
でも「人集め」などをする事は「公儀を憚ら
ず重々不届」だったのである。

この法律は、八代將軍吉宗が大岡越前守は
か数名に命じて造らせたものだが、「人集め
云々」のくだりは、天一坊事件の経験者とし
ての越前守のアイデアによるものかも知れな
い。

余談はさておき――現代でも「新興宗教ほ
どすてきな商売はない」といわれている。

坊主丸もうけ、というが、その丸もうけに



輪をかけてボロイのがこの商売である。企業的にこの商売へ手を出す山師がいるくらいのものだ。

まして、迷信深い江戸時代のことから、邪教淫祠も数知れず、奇怪異説もまた盛大に乱れ飛んだのである。

ただし、ボロイ点においては現代のそれの方が段違いにボロイ。

筆者は別に新興宗教がすべて淫祠邪教だと思いうものではないし、そういうものに恨みがあるわけでもないが、公平に判断したところ、昔のマスプロ仕掛けの回転は現代ほど活潑なものではないし、法的制約もまた段違いである。

江戸時代は何事かあればただちに「お上」の眼が光るような仕組みになっていた。前述のように、新興宗教を開業(?) すること自体が違法なのである。

ただ、この法律に定められた刑罰は特に苛酷なものでもない。「所払」というのは、その町に住めなくなることだ。隣町で住む分にはさしつかえがない。「逼塞」とは謹慎刑の一種で「門をたて、夜中くぐりより目立たぬよう通る分には苦しからず」という但し書があつて、これでもたいしたことではない。「過料」は罰金刑、「江戸払」は江戸から追い払われることである。

淫祠邪教で稼いだ連中が獄門や磔などの極刑に処せられるのは、いい気になって他の罪を重ねたからである。また、「出る釘は打たれる」式の弾圧もあれば、非道な肅正もあつたわけだが、以下、当時の記録から、そういう事柄を拾い上げてみよう。

御蔵門徒の入牢

明和初年、江戸浅草で旺盛な伝播力を備えた新興宗教が起った。

教祖は小細工次郎兵衛という珍奇な通り名

を持つ町人だが、吉原遊廓の近江屋という妓楼の主人権兵衛という者が信者となつてから急激に信徒がふえた。

何も遊女屋の亭主が信心に精出すことはなからう、と思うのだが、案外、信徒をふやすことによつて利益配当でもあったのかも知れない。とにかく権兵衛の胆入りで教団がふくれ上つた結果、幕府は明和三年三月十九日、信者（御蔵門徒という）の一斉検挙を開始した。老若男女、多数の信徒が厳しく狩立てられて伝馬町の牢につながれた。

当時の制度では、拘留期間などという定めはないから、取調べが長びくうちに、生地獄のような牢獄生活に耐えられず、未決のまま獄死する者も数多く出た。

当時の蘭学医として高名な杉田玄白は、その著書「後見草」に御蔵門徒の非惨な最期を次のように伝えている。（以下はその抜書きだが、送りがなは補筆した）

公には、末だその罪定まらずして、死しける者のならひなれば、小塚原、鈴ヶ森などといへる、極悪人を切棄て給ふ処へ、同じ様に捨てられたり。之に依つて、其の屍鳶や鳥つつき喰ひ、餓えたる犬は腹（腸）

を引出し喰ひぬ。此の事見聞く人毎に、目もくれ、魂も消えむ計りに思へしなり。漸漸（ようやく）秋の頃に至り、其の罪定まり、或は棲み馴れし家居を追払はれ、或ひはあかぬ夫婦を引分けられ、父子兄弟所を隔て、むきむきさまさまの刑に行なはれたる（下略）

世直し大明神

その田沼の伴の田沼山城守意知を殿中で斬った侍がある。

新番の士、佐野善左衛門政言という者で、時に二十八才。相手の意知は三十六才で当時若年寄の要職にあった。斬りつけられた意知は、殿中を憚かつて抜

刀せず、刀を鞘ごと抜いて佐野の攻撃を防いでいたが、ついに身に数カ所の深傷を負った。

殿中は上を下への大騒ぎ——。この時、駆けつけた大目付の松平対馬守という老人と、次いで駆け寄った目付の柳生主膳という武士が協力して、ようやく佐野を取押えた。

天明四年三月二十四日のできごとである。田沼意知は翌四月三日に落命し、佐野は翌日四日に切腹して果てた。

佐野善左衛門の刃傷の動機は、全くの私怨によるもので、田沼に系図を騙りとられたことが原因だったが、当時の民衆は、佐野が天下の為に奸漢田沼を除こうとしたのだ、とき

めてしまった。

田沼意知が斬られた翌日から、当時天井知らずの高騰が続いていた米価が、少しずつ下落する、という現象が起った為もあって佐野は「世直し大明神」とあがめられるようになった。その遺骸の葬られた浅草本願寺境内の徳本寺には、武士といわず町人といわず天下の老若男女がうしおのように押し寄せて礼拝するありさまとなった。

幕府は、この「世直し大明神」の参詣人にも弾圧を加えている――。

意知朝臣の御事ありて後も、相良殿（遠江相良の領主で五万七千石の大名だった意次のこと）御勢ひ変らせ給ふ御気色もなく、一日、二日と過ごさるるに、はや常のごとく出仕まし、又、折節の憂を忘れ給ふためなるか、猿楽など興行し給ふよし、人伝へ聞き、知るも知らぬも悪み識り奉らざるはなし。

去年よりの童謡に「いやさの水晶で気はさんざ」といふこと行はれし最中なれば、下賤の者ども、夜に入れば、暗きにまぎれ、此殿の御門前を打通りながら「いやさの善さで血はさんざ」と謡ひ囃し、又、二人の

乞骸人、一人は七曜の紋付きたる酒樽の古莖をかぶり、怪しき姿して馳出せば、一人は鐘馗大臣と成り、悪魔遁がさじと追詰め木刀にて切殺す真似して町々を白昼に廻り歩行せる、（中略）
政言は死して後、はからざる幸ひを得侍り

ぬ。去年の冬より、聞きも及ばぬ飢饉にて四民あくまで困窮し侍りしに、此人（意知）はてられし翌日より、五穀の価ひ、少し賤しく成りしにより、頑愚の者ども寄集り、あな尊、有難や、此人は人間にてはましまさじ、神にておはしましけるか、我々を救



はん為、仮に此世に生れ来て、かかる奇怪

を仕出し、神あがらせ給ひけりと謂ひ触れて、其なき骸を葬りし、浅草本願寺の寺中徳本寺という御寺へ、毎日蟻の集ることく引きもきらず、つどひ詣で、ひたすらに世直し大明神と崇め唱へ申すの由、時の奉行聞こし召し、近頃奇異の事なり、是を静めよと、其卑官をさしやり給ひ、門の出入を止められたり。是によりて暫く人も集らざりしが、其後も何事を祈るやらん、詣る人は絶えざりき。(後見草)

という事情で、淫祠でも邪教でもないのだが、幕政への反感の結果だから、「これはいかん!」というのでオフ・リミットにしたのである。

谷中延命院事件

江戸時代の淫祠邪教の経営者では、延命院日道一派が、何といってもスタア級であろう。

日道は幼名を牛之助といい、何の因果か、生れついでに美男だった。思春期のころから「ダメッテ坐れば女が集まる」式の艶福に恵まれていたので、自分の美貌には自信があった。長じては役者となり、いよいよ大評判と

なった。

小人玉を抱いて罪あり、美貌ゆえに女に不自由しないところから、お定りの放蕩で身を持ち崩し、一座から追い出されたので、止むを得ずお寺の坊主となった。

坊主道に精励するうち、師僧の嚚化後は、その跡をついで一寺の住職とまでなったが、いくら坊主頭でも、美男はやはり美男である「アラ、凄いいセックスアピールだわ。グッとイカスじゃないの!」

などという噂が立ち、ユル・プリンナーぱりの人気が高まる始末となった。

元来、意志薄弱の素質がある上に、ここに一人、プロデュウサアが登場したのだから救われない。柳全という年寄り坊主だが、こいつが大変な悪党でオギヤアと生れた時、母親の胎内に良心を置き去られて来たような男。

日道の黒幕となって、悪徳のABCからXYZまでを教え込んだ。

まず女犯学だが、これは日道、優等生だった。参詣に来る女で、美しい部類に属する者は娘でも人妻でも後家でも、手当り次第に奥の間へ引き込んでヨロメかせた。

ところが、ほとんどの女が日道の美貌に魅

せられ、「御仏の恵み、ありがたや」と歓喜して、日暮れになると涙が出たり、知らず知らずに泣けてくるありさまとはなった。

今夜も刺激が欲しくって、駕籠を降りて、石段のぼりや——とばかりに、金品持参で集合してくるのだから、延命院株式会社にとっては、こんな旨い話はない。

さらに徳川さんの大奥にまで手をのぼし、將軍様からキャンセルを喰らって、適当に渴いている連中をカモにしようという大胆不敵ぶりとなった。

次いで、彼等は密通仲介業みたいなものを始めた。大奥の女達を日道一人ではさばききれなくなったとみえて、阪東三津五郎、市川男女蔵、沢村源之助、岩井久米三郎等の役者をよび、取り持ったのである。

役者を当てがわれた女達は、まだ運のいい方で、西の丸大奥部屋方女中こう、という女は大スターの日道自身と交渉を持った為、ついに妊娠してしまった。

だが、日道はこのゲンシユクなる事実に眉をしかめるばかり。男としての責任をとるところか、こうに墮胎薬を与えるという非情ぶりだった。このほか、下谷善光寺坂源太郎妹

きん、という女など、多数が毒牙にかかった。企画がマンマと図に当たったプロデュサアの納所坊主柳全も、負けず劣らず、吉原五十軒道清次郎の母りせ、という姥桜を情婦とする始末――。

他に、有名な蓮華往生システムによる殺人罪も犯した、というが、これは事実かどうか疑わしい。

かくて、淫楽をほしきままにし、濡れ手で粟の快に酔った延命院へ、寺社奉行脇坂淡路守の断が下り、享和三年五月二十六日朝、捕手が乱入する――。

以下は「続視聴草三集六」に有る延命院一派への宣告文である。

谷中日蓮宗延命院 日道 亥四十

其方儀、一寺の住職たる身をも顧ず、淫欲をおかし、源太郎妹きん、又は大奥部屋下女こうと密通に及び、其外、屋形向相勤めし女両三人へ艶書を送り、右の女参詣の節は、密会を遂げ、或は通夜などと申なし、寺内へ止宿致させ、殊にこう懐妊の由を承はり、墮胎の薬を遣り、総て破戒無慙の所行に候。其上、寺内作事の儀、奉行所へ申立ての趣と引違ひ、勝手の儘建て直し候事

共、重々不屈の至りにつき、死罪申付るもの也。

延命院納所 柳全

其方儀、延命院所化にて、女犯相成らざる身分にて罷在り乍ら、新吉原五十軒道清次郎母りせと密通いたし、女狂に及びたる段不屈に付、晒の上触頭へ相渡し、寺法の通り取計らう可旨申渡。

享和三癸亥年五月二十六日朝、寺社奉行脇坂淡路守組子長田伝蔵、高橋又八郎、其外数十人、延命院にて召捕り、同年七月二十九日御仕置済。

破戒坊主の処刑

延命院は日蓮宗の寺であって、邪教ではないのだが、大々的淫寺には違いなかった。

日道は死罪で、これは斬首の刑だが、柳全の方は命までは取られなかった。

これはなぜかという、当時の法律がそうできているのである。「御定書百箇条」の第五十一条に「女犯之僧御仕置之事」という規定がある。

一、寺持之僧

遠島

一、所化僧之類 晒之上本寺触頭

へ相渡し、寺法之通可為致

一、密夫之僧 寺持所化僧之差

別なく、獄門

とあって、柳全は、この第二項を適用されたわけなのである。

それにしても、ただの女犯とはわけが違ふのだから、柳全という男、よほど巧くい抜けをしたものらしい。晒というのは、日本橋へ三日間晒し者にする刑で、「御定書百箇条」の第百三条「御仕置仕形之事」というところに、

一、晒 於日本橋に三日晒

但、新吉原之者所之義に付晒に可成惡事致候はば新吉原大門口にて晒

とある。心中を仕損じた男女、女犯の僧等がこの刑を課せられる。吉原遊廓で起った事件の場合は、大門前の晒し場で晒されるわけである。

この時代、日本橋の南の広場に晒し場があって、朝、伝馬町の牢から引き出された罪人がここに縄付きのままつながれ、夕方になって牢へ返される。それを三日間続けるのである。

晒し場は、間口五間、奥行三尺の菰葺小屋で、三方は藁で囲ってある。

延命院の柳全は、この刑が終った後、さらに寺法による処罰を受けた。裸体にして番傘を一本背中に背負わせ、首へ縄を付けて、犬のように這い廻らせた後、追放するという方法だったと伝えられている。

「法曹後鑑」には、遊女と心中を仕損なった僧の処罰や、人妻と密会した僧の事件などが記録されている。

寛保元酉年十二月 牧野越中守、石河土佐守、水野対馬守伺ひの内。

享保六丑年、長延儀売女に出会ひ、其上遊女と申合せ、一諸に身を投げ候処、相果てずにつき、三日晒しの上、本寺触頭へ相渡し、寺法の通り可申付旨申渡。

享保十四酉年、武州栗原村道心者西岸儀、同村与四郎女房と押して密会いたし候に付死罪罷成候。

とある。「御仕置裁許帳三」には、比丘尼と密通した僧の事件が記録されており、これは江戸市中引廻しの上、小塚原で磔になって

いる。寛文十一年のことである。

一人正山、是は館林の者、善光寺の所化、清雲と申す比丘尼と心有之、清雲弟子清慈と申す比丘尼、訴人申す故、評定所より穿鑿の内、入。(入牢という意味)

右の者、江戸中引廻し、亥霜月二十一日、浅草にて磔。

とあって、これは、僧籍にある者同志の密通なので、刑がことさらに重くなっている。

訴人をした者はヨロメキ尼僧の弟子の尼だというからコワイ。いくら目にあまる行状があったとしても、師僧を訴人するなどは仏の道に仕える者のすることではあるまいと思うが、こういう事情によるものか？ 尼僧モンダイの権威であるところの今東光センセイにでも聞けばわかるかも知れない。

「百一録」には女犯の罪で極刑に処せられた僧侶達の事件が記録されている。

享保三年十一月二十六日、引渡者有之、播州加古川真言坊主、女犯引渡梟首。此の外十余輩馘(下略)

とあって、獄門や斬首になっているのだが、この時代、坊主の女犯などは格別に珍らしい事ではなかった。

坊主が医者に変装して、吉原へくり込む、

などはザラにある図だったのである。また、寺の多い土地に岡場所ができたりして「いろは茶屋、医者で行くほど遠くなし」などという川柳も生れた。いろは茶屋というのは、谷中天王寺の近くにあった私娼窟で、坊主を主な顧客としていたほどなのである。

「高輪へ来るとうしろで帯をしめ」だとか、「薬箱、持たず品川さして行き」などというのは、芝増上寺の僧などが品川の遊廓に登楼したことをよんだものだ。吉原なら、医者として薬箱を持って行かねばならないが、品川は近いから、そんな小道具も不要だったというわけである。

だから、女犯で処刑される坊主は、よほど要領の悪い連中か、よほど横着な奴か、よほど運のよくない部類か、ということになるのだが、以下、そういうお歴々のことを、ざっと拾って書いてみる。

寛政八年の八月十六日から三日間、召捕られた七十余人の坊主が、一斉に日本橋へ晒されてしごく壮観だったという。

文政七年八月二十七日から二十九日まで、日蓮宗の名刹、妙法寺の所化六人が日本橋で

晒された。これは吉原や岡場所で遊んだ連中だった。

文政十三年四月、京都で女犯僧の一斉検挙があり、十八人が遠島七人が三条橋詰で晒された。

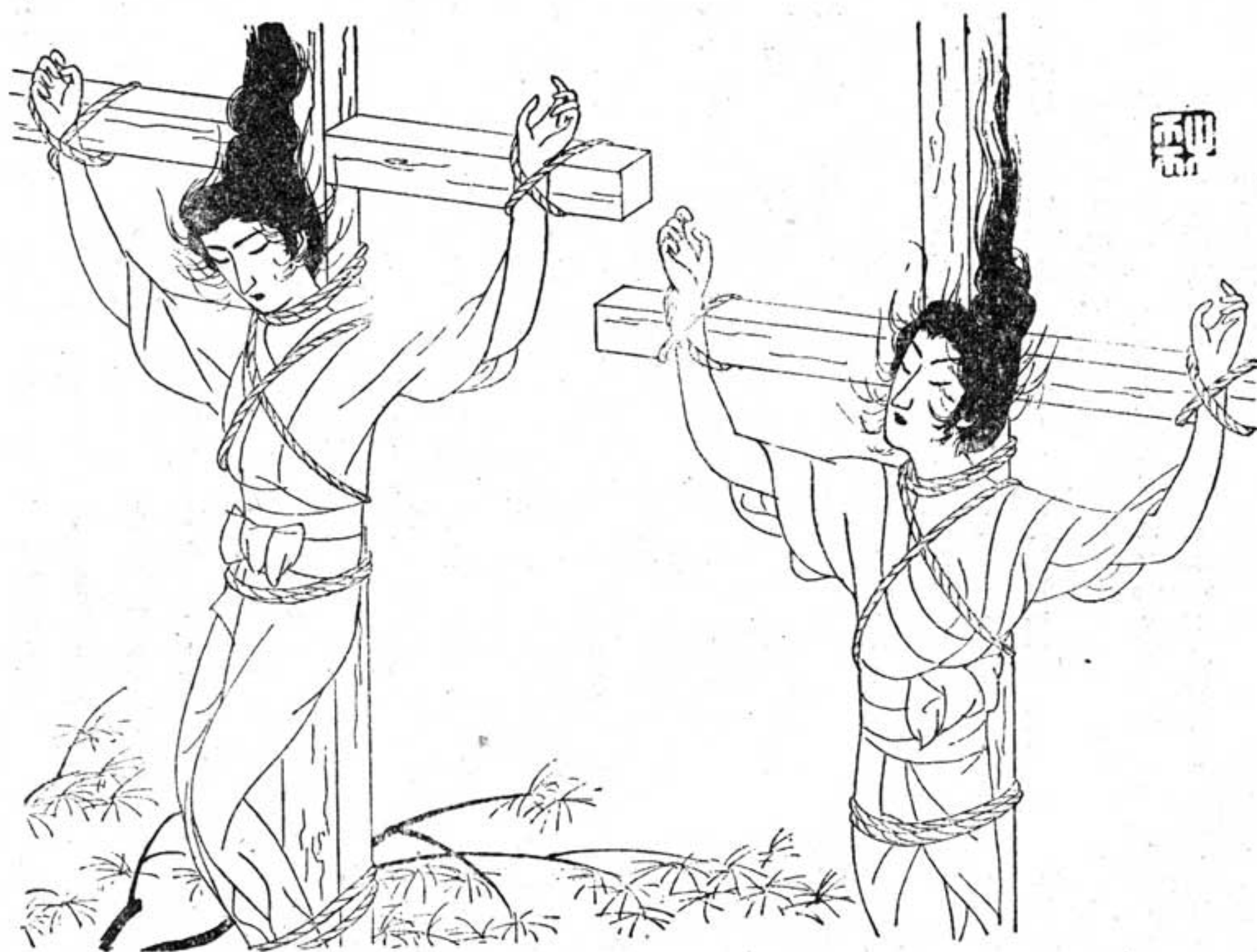
文政十三年二月、大阪でも一斉捕縛が開始され、しばらくの間、諸方の色街や寺院から狩り立てられた。人数は不明である。

女犯僧に関連して、女達が処刑されることも少くなかった。

天保十一年六月、単山新感応寺の住職日啓の事件は延命院に次いで有名なもので、田尻村文蔵の後家りも、という女を表面尼僧に仕立てて妾にしていた科で日啓は入牢、遠島を云い渡され、船を待つ間に牢死した。

ところが、この罪条は、幕府が体面を保つ為に表面を糊塗したもので、実際には、日啓以下、新感応寺の坊主達が大奥の女達と密通したことが発覚したのである。

家慶將軍附の老女、瀬山、大御



所家齊の夫人附御年寄の花町、等がその相手で、御代参のほか、自分等も参詣と称して寺院に出入しさらに、衣服の加持寄進と称して運ぶ長持の中に潜んで通ったりした、というから御苦労なことではある。女達は江戸城の平河口御門から白無垢一つの跣足で放逐された。

豊田貢一派

文政の頃、京都で切支丹まがいの妖術を見せ、愚民から金品をまき上げ、市中引廻しの上磔の刑に処せられた女がいた。

名を豊田貢という。——といえ、ば、「ああ、大塩平八郎の乱に出てくる美女の教祖だろう」と見当をつける読者も多いことだろう。

佐々木味津三の「風雲天満草紙」に出てくる女である。この原作は戦前、片岡千恵蔵主演で映画化され、また、先年は新東宝で嵐寛寿郎主演のものも造られた。

新東宝の方は、綜芸プロの社長夫人で東映出身の女優魚住純子が豊田貢を演じたが、事実は、映画ほど若くはない。何と、五十六才の女なのである。

「興醒めだねえ」などと云わずに、まあ、その判決文を読んでください。少し長いが、全文を引用する。

京都八坂上の町 陰陽師

豊田 みつぎ

丑 五十六歳

此者儀、女の情外れ不思議の事を行ひ、人を驚かし都鄙に名を上げ度しと初志の心得違ひより、稻荷明神下げは戯れ同様に相卑み候処、わさ方にて出会ひ候死亡水野軍記儀、厳しく他言を差留め妖術を以て此者妬ましく存じ候者の姿を見せ候に付き感心致し、其節は切支丹の邪法と承らず候へども軍記輕卒に法を伝へ難きを伝授請く可しと夜中滝へ浴水に罷り越し心を固め候上、天帝の秘法と申す儀承り、銀子を差出し軍記所持の天帝の画像を拝し、神文の心持致し指の血を画像へ濺ぎかけ、右を念じ候陀羅尼の唱へ様、其の余病氣、加持金銀等集め候修治は申すに及ばず、妖術中の印文まで

密授請け候後、浴水登山不動心の修行致し新に家宅を構へ、明神下げに託し、渡世始め、軍記指図とて、異なる神謠を此者取り持へ候神体無之、稻荷を社号に致し、其上染物にも異紋を付け、天帝画像代りに仕組み有之る三像の画を表具致し所持、追々此者病氣加持吉凶の判断的中致し候を、きぬ羨ましく存じ、秘術請け申し度しと申すに付き、登山浴水の修行を教え、不動心を見極め、誓を致し、軍記を頼み、きぬにも天帝の画像へ血をそそぎかけさせ候上、軍記より伝法を通じ、尚又、きぬへ密授致し候に付、同人より又々さのへ秘授に及び、同人遂に邪術通じ、当表に於て弟子を拵へ先に遣ひ、跡形なき儀を申し、加持等を勤めさせ、人々心取失ひ、差出候過分の金銀錢衣類を掠め取り、さのより右金子をきぬへ配当致し候に付、同人儀も師恩報として、此者へ右の内を相贈り貰ひ候上は、さの掠め取り候金子の儀存ぜずとの申分取用ひ難く、かねて、きぬと申合せ、弟子に邪法を弘めさせ、掠め取り候金子は、先ぐり次第贈りに師匠へ貢に致させ候様、巧に相当り其上、最初わさ頼み候とて、同人娘とき此

者隨身修行致さず候を憤り、人外の折檻致し、又は喜之進を浴水場へ連れ行き、怪事を行ひ、其上、母兄難儀致し候とも見捨て救はず、自分は却て、年来天帝を念じ、邪法の修治を以て、病氣加持等望の通り見透しと呼ばれ、不相応の榮耀に暮し候始終、公儀を恐れざる仕方、女の身分にて別して大胆の至り、重々不屈に付、大阪三郷町中引廻し磔にかくるもの也。

というのである。御覽の通り、牛の涎のような、要領の悪い文章だ。現代人としては、「チエツ、齒切れのよくねえ。一箇所でも切りやあいのに、ダラダラと読みにくくて仕様がねえじゃねえか！」

とでもいいいたくなるところだが、そこをまあ、浮世の義理だと諦めて、根氣よく熟読すると——これで案外おもしろい内容だと思ふのである。

成立事情や道具立て、役者の配置が現代のどこかの新興宗教みたいで、昔も今も、こういうものの根本は、あまり変わらないのだ、と気づくのである。

まず軍師がいる。水野軍記という男、山師めいた浪人者という見当だ。欲に吊られた女

弟子ができる。

貢もまた、そういう女達を育成し、手先に使う。お定まりの教団内のリンチなどもチャンとやっている。「人外の折檻致し、云々」などは、こういう集団につきものみたいなものだ。病氣でも何でも癒して、万事お見透しというスーパーマンの貢が、恩師の軍記の命は救えなかったものか、召捕り以前に死亡してしまっているあたりも皮肉な事情になっている。

赤い羽根の共同募金猫ババや、新聞社との喧嘩などはないけれども、家族を見捨てて、自分は栄耀栄華の暮らし——とくると、人相の見当までついてきそうな具合のものだ。

市中引廻しの上礫、というのは酷刑だが、切支丹としての処断、という意味もあったためだろう。

映画の方では、この一味を天満与刀の大塩平八郎が、断々固として摘発するのである。

妖僧護持院隆光

次は、江戸のラスプーチン護持院隆光に登場願うとする。

隆光は大和国長谷寺慈心院の住職だったが

音羽護国寺の住職亮賢のすいせんで、貞享三年、神田柳原の知足院に移った。

彼は、五代將軍綱吉の母、桂昌院の信任厚く、権僧正に任ぜられ、元禄元年、寺を神田橋外に移して、同八年には護持院と寺名を改め、大僧正に任ぜられて、柳沢吉保と共に権勢をふるった、一代の妖僧である。

当時、江戸城内には夥しい狐や狸が棲んでいた。ことに、吹上御苑から紅葉山へかけての森林地域は、足を踏み入れる者のないままに、狐狸の絶好の巣のようになりさまたった。

ついには、狐が白昼でも本丸のあたりに出現して、大奥の廊下にまでウロチョロと姿を見せる始末となった。臆病な女達などは夜もオチオチ睡れない仕儀に立ち至った。

この時、綱吉の愛妾、右衛門ノ局という美女のアイデアで、城内に犬を沢山飼うことにした。これは効果絶大で、間もなく狐狸は影をひそめ、城中もやっと静かになった。

それを知った隆光は、桂昌院の前へ表われ実にとんでもないことを吹き込んだ。

「このたびの事は、全く御仏のお計いでございます。恐れながら察しまするに、上様は戌のお生れでございます故、犬とは特別に深い

仏縁をお持ちであらせられるにかかわらず、今日まで打ち棄てておかれたことが、城内に狐狸をはびこらせるが如き不詳事を招いた原因でござりまするぞ。上様はさきに徳松君を失われ、その後御世嗣さまがないのは、これすなわち前世の応報、生類を多数殺傷遊ばれた故と愚考いたしまする。この上は、すみやかに生類をお憐れみ給い、ことに犬をこそ大切になさるよう……」

とまことしやかに申し立てた。

「さらば、どうすればよいのかのう？」

「まず、天下のお犬を解放して、生類御憐れみ、大慈悲の令をお下しなされるほかはありますまい。何卒、お犬様のことを、お心にかけさせ給え」

と云った。桂昌院は早速これを綱吉に伝える。綱吉は無批判におふくろさんを大事にするタイプの男だったから、即座に賛成し、貞享四年正月の二十六日、「生類憐愍令」なる怪法令を発することとなった。

犬のこと、従来の如く、無慈悲なる取扱い致すべからず。万一これにそむきたる者は厳罰に処す。武家、町家とも、飼犬の性別毛色、年の程までも届け出るべし、云々、

などという内容だから、びっくりしたのは一般大衆である。さらに、隆光から桂昌院を経て、「生類御憐みは野良犬にまで及ぼすべきである」と申し入れたので、綱吉は老中どもを呼びつけ、

「先日の布令は飼犬のみ保護するよう触れた由なるが、飼犬を大切にすることは当り前なのである。野良犬といえども、やはり御犬様であるぞ！」

ととなりつけた。そこで、

例え主なき犬といえども、大切に、飼犬同様に飼育すること——

と改めて布達する始末となった。

人と犬の尊厳が入れ換って、日本中は迷惑至極な大騒ぎとなった。つまらんことから命を落す者もずいぶん多く出て、吹矢でツバメを射た町人が死罪。猫を誤って井戸の中へ落した武士が八丈島へ流罪。病馬を捨てた科で武士や百姓二十五人が神津島へ流罪等という例が数限りなく出た。

江戸本所相生町の大工市兵衛という者は犬を殺して死刑となったが、訴人したのは実の娘で、五十両の褒美を貰ってニンマリ笑ったというから罰当りな女もいたものだ。

科人毎日五十人、三十人づつあり、打首に

なるものもありて、血のしたたる首を俵に入れ、三十荷ばかり持ち出す（徳川十五代史）

という惨状がくり拡げられた。「この故に下水を道へうたず、是はほう振むしを往還之人、ふみ殺すと云ふ事也」というくらいに、諸民は戦々競々、安心して道も歩けないありさまとなった。

当時、市井に行なわれた無数の落首の中に「民よりも犬を大事に養ひて、美濃幸ひを右京やうなし」という作がある。美濃とは、柳沢吉保、右京とは松平輝貞の事で、松平右京は柳沢を小型にしたような佞臣だったのである。常日頃から綱吉と仲の悪かった水戸光圀などは、犬の生皮二十頭分を綱吉に献上したほどだったが、綱吉、ついにこの悪法を引っ込めず、彼の死によって、ようやく人間様の世の中が訪れるのである。お犬様時代は二十年間も続いたのであった。——

ところで、護持院隆光だが、彼は桂昌院と肉体的交渉があったらしい。時に桂昌院、五十過ぎの婆さんだったが、権勢の附録付きだから、この二人、怪しいことは確かに怪しい

のである。

そしてまた、隆光の弟子達と大奥の女達との間にも、「勇将の下に弱卒なし」式の関係が盛大にもたれたという。

どうも、この時代、大奥の女と交渉を持てるのは「一に將軍、二に坊主、三に役者——」というようになつていたらしい。

享保二年、護持院が火災で焼けた時、その焼跡を整理したことがある。

寺の裏庭にあった大きな池を埋めるため、水を汲み出してみると、十数人分もの人骨が出て来た。しかも、いずれも女の骨だった。女人禁制の寺の中に女の骨があるとははなはだ怪奇である、というので、いろいろと関係者に問い合わせるうちに、かつて、桂昌院の居た三ノ丸で下男をつとめていたという老人が、これは極秘の話だが、と前置きして次のような証言をした——

「桂昌院様がお盛んであったころ、彼女は護持院の僧正隆光様に大変な御帰依で、日となく夜となく僧正を御殿に招かれた。その節、若い僧達をお供に連れてくるので、自然と、それらの僧と大奥の女達との間に近づきができた。そこで、女達は何かと口実をもうけて

毎日、かわるがわるに護持院へ参詣するようになった。その中には妊娠する女も出て、身の振り方に困り果て、いつしか行方知れずになる女も、毎年幾人かあった。今にして思えば、この池の中の白骨こそは、そうした女達の変り果てた姿なのであろう」

というのである。つまり、身投げをしたものか、あるいは、口封じの手段として殺害した後に投げ込んだものか、いずれにしても不自然な愛欲に溺れて行った女の悲惨な末路には違いない。

妖僧隆光は晩年、さすがに落ち目となり、

宝永四年の二月に隠居し、同六年正月十日、綱吉が死んだ後は、登城もせずにしたが、やがて同年八月二十二日、江戸を去って故郷大和の超昇寺に引き籠ってしまった。

隆光ぐらいの怪物になると、磔柱を背負って死ぬようなことはなく、ともかくも余世を安泰に送った、というのだから、悪運の強い坊主ではあったわけだ。

平田篤胤と天狗小僧虎吉

近世国学四大人の一と称される平田篤胤は本居宜長の古学を推し進めて、幕末思想界に多大な影響を与えた大学者である。

その篤胤が、四十六才の文政四年三月十三日に、自宅へ佐藤信淵、屋代弘賢、伴信友、国友能当等を招いて、天狗小僧虎吉の話を聞いたことがある。

だいたいこの篤胤という人は、一種の畸人で、漢学和学に通じている上、オランダの書物も読んで、地球の丸いこと、地球の回転すること、などを早くから唱えた人だったが反面、幽霊の存在を信じ、狐が人を化かすこと、天狗が実在すること等を信じて疑わない人だった。



彼の著書「古今妖魅考」三巻のうち、第一巻は全部、天狗の考証で埋められているほどである。

彼がこの書を準備中だった文政三年のころ、江戸に「天狗小僧」という奇妙な坊やが出現し、篤胤と知り合い、この学者がたちまち狂信的支持者となってしまった。

天狗小僧は江戸下谷池の端七軒町の裏店に住んでいた越中屋与惣次郎の次男で、生れたのが文化三年十二月、大晦日の朝七ツ時である。

寅の年、寅の日、寅の刻、と偶然にそろったので虎吉と名付けられた。

五、六才のころから予言めいた事を口走り不思議に的中して、早くも評判になったという。

文化九年、七才の時、上野山下の辺に出ていた魔法の壺を持つ幻術使いと知り合い、壺の中へ入って空中を飛行し、仙界を見聞したという。

それ以来、精神分裂症的傾向をたどって「天狗の修業をした」と自称するのだが、この半天才型精薄児に心酔した篤胤が、学者仲間を誘って座談会などを開催したわけであ

る。

奇妙奇天烈な虎吉の幻怪談は、くたくだしから省略するが、当時、江戸の学者を虎吉はすっかり煙に巻いてしまったのである。

篤胤は虎吉を研究材料として、さらに「仙境異聞」三巻を著作した。

日本で初めて月世界へ行った者は、どうもこの虎吉君だということになるらしく、彼は「天狗の飛行術で、日本国中はおろかロシアの涯で、遂には月世界にまで到達した」と称し、篤胤に、その様子を語って聞かせた。

「あの、月な、月で兎が餅をついているというのは、あれは嘘なんだな、やっぱり。ボクが月に着いた時見たのは、大きな穴だったな。」

その穴の処から、兵隊の位で云えば少佐ぐらいの星が、向うの方に見えてたな……」などと報告しているのである。

篤胤は文政三年十月十七日に、神童虎吉の為に五首の歌を詠んでいる。

「車屋虎吉、今の名は白石平馬が、神の道を修業に、山に入るを詠みて送る——」と前書して、

虎吉が山にし入らばかくり世の

知らえぬ道を誰にか問はん

いく度も千里の山よ在り通ひ

こと教へてよ虎吉の子や

神習ふ人のよろづ世祈りたべと

山人たちにことづてをせよ

よろづ世を祈りたまはんみやしろは

わが身のほどに月ごとにせむ

神の道にをしこそあれさもなくば

さしも命のをしけくもなし

というキョーク感激ぶりなのである。

この篤胤の思想が宮中に入っているのだから、日本の皇室には多分の迷信が、今からさほど遠くない時代まで、種々と行われていた。

幸い、若きプリンスと、プリンセスとの近代の知性は、そういうものの残滓などがもしまだ存在しているものならば、たちまち一掃してくださるだろう。

と、直接何の関係もないけれども、筆者も国民の一人として、何となく期待はしているのである。

マンハント

4月号より

少年は手ずれのした写真を、ジョニーに渡した。ジョニーはちょっと見てから、おれにわたした。確かにジーン・フエ

「どんな写真を？」
「写真ですよ。彼女の写真ですよ。男といっしょの。そういうやつです」
「エロ写真のことか？」
「ええ」
「どこで見たんだ？」
「ある男が持ってたんです」
「お前は持っていないのか？」
「持ってません」
「おれたちは持ってるんだぜ。捜査令状をな。……」
「一枚だけ持っています」彼はしぶしぶ言った「一枚だけです」
彼は紙幣入れを出して、紙片を一枚、注意ぶかくひっぱり出した。……

秘密写真の女

STILL LIFE



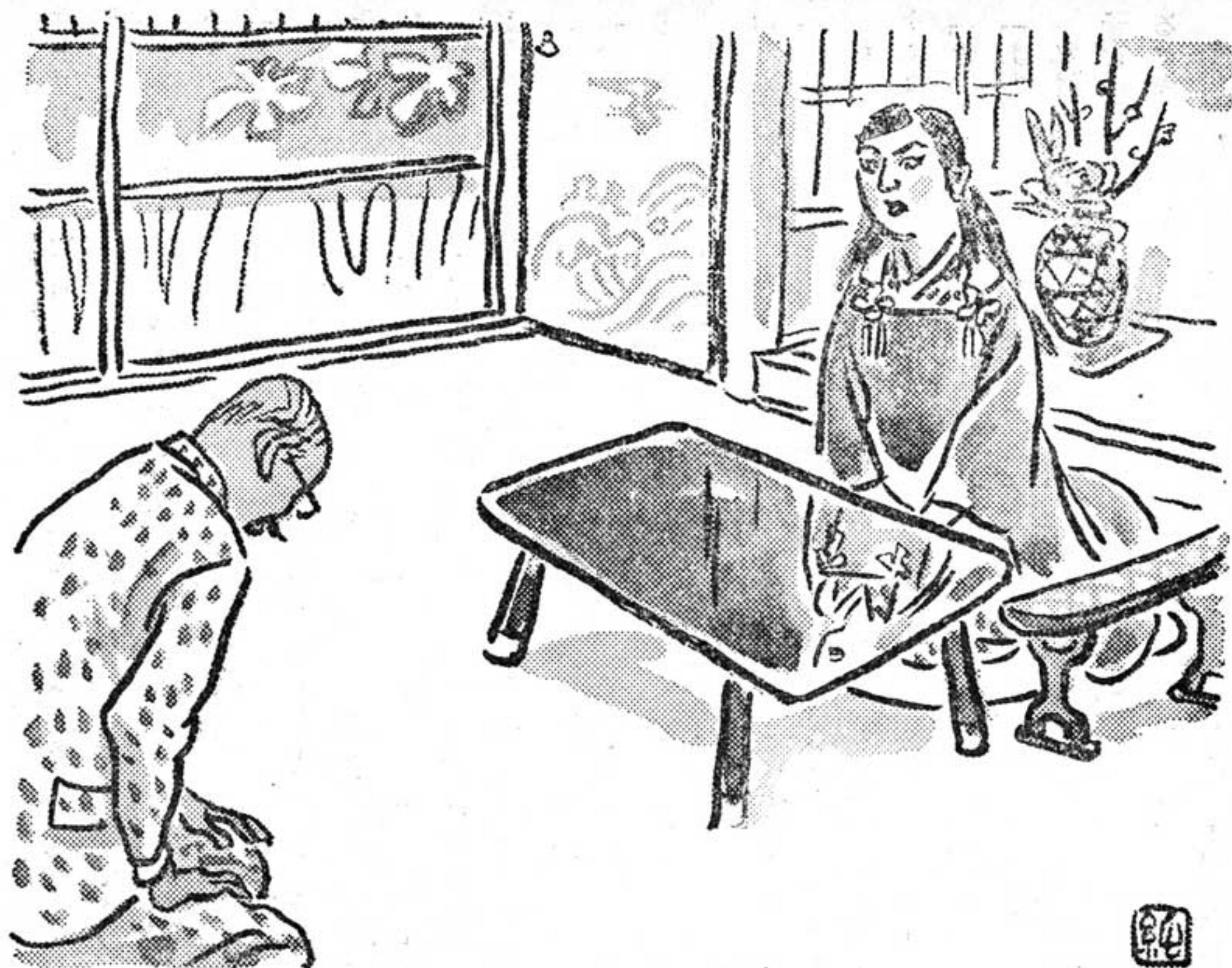
エヴァン・ハンタア

ロニの写真だった。ジーン・フエロニそのものだった。若わかしいからだを隠すものは、なにも身につけていない。掛値なしの彼女だった。どこもブラッシをかけて消してあったりは、してなかった。彼女は絨緞の上に両手、両膝をついて、コンクールに出場した名犬みたいな恰好で、こっちを向いて笑っていた手足のあいだに大きな

乳房が地球に引力のあるおかげか、いっそう大きく見えている。それとお尻が完全な円みの競いっこをしていた。……
こっちの一枚では、ジーンはベツドにおおむけになっていた。……構図をきめているうちに、演技のつもりがそうでなくなってしまうた、という様子だった。断末魔みたいな顔をして、両手で自

分の乳房をぎゅっつつかんでい。こっちでは、相手は足だけの存在だった。少年が噂を信じこんだとしても、これではあまり責められまい。
「この男を知っているかい？」
最初の写真をしめして、おれは訊いた。
「知りません」
「どこかで見かけたこともないか？」

「ありません」
「わかったよ、坊や」と、ジョニーが云った。「勤めにいきな。へんなことはしないで、大人しくしてろよ。また来るかい」
リチャード・トツカはおれの手の中の写真に、残念そうな視線をそそいで、もじもじしていた。……
殺された美女のボーイ・フレンドのリチャード・トツカはエロ写真を持っていた。果してそれは殺人のきめ手となったのだろうか？ くわしくは三月上旬発売の「マンハント」四月号「秘密写真の女」をどうぞ。



娘予言師の夜

馬乗り仙女

美しい娘予言師の行状を聞いた
ボクは妖しい妄想の虜に……

藤 見 郁

芦 屋 純・画

ヤキトリ酒場の客

客が五人も坐れば満員になってしまう、小さなヤキトリ酒場である
その夜――

土曜日だというのに、十時をすぎると、客は二人きりになってしま
った。

独身のサラリーマンである私と、もう一人は、まだ春さきのウソ寒
い気候だというのに白っぽい背広を着た、若い男である。

私はこの店の常連なのだが、その男をみるのは、はじめてだった。
ほかに客のいない気やすさから、私とその男は、いつのまにか隣り
同志に坐りあって、酒を酌みかわしていた。

よく見ると、面長で、色の白い、端正な容貌をもった青年である。
鼻のあたまのところ、なぜか黒ずんでいて、そこだけ、妙にテラテ

ラと光っているのが気になったが、まず美青年といえよう。

サラリマンではなさそうだし、商人というタイプでもない。

「——ボク、いま、悩んでいるんです……」

と、その青年が、私にむかって、いきなりそんなことをいいだした。顔にはでないが、ひどく酔っている様子である。

「ほう……。その悩みごとを、あててみましょうか。——恋愛問題でしょう？」

私も酔っていたので、調子よく受けた。

「いえ、そうではないんですが……。やっぱり、女性のからんでいる問題なんです……」

青年は、黒く濡れた眼を伏せた。その表情は、いかにも愁いに満ちていた。

「おもしろそうだな。きかせて下さいよ」

私は、興味をそそられていった。酒のサカナになりそうな話だと、私は睨んだのだ。

「きいてくれますか？」

「ああ、いいとも」

私は、店の奥にいるおかみに、新しいお銚子を追加した。皿の上に、つめたくなっているヤキトリを、一串頬ばった。

青年も私にならって、ヤキトリを口にいった。顔の上品な割に、妙に歯を鳴らして食べ

る様子が、ちょっと異様にみえた。

青年は、うまそうに口の端をぬぐうと、それからボソボソと語りはじめた。

——ボク、実はいま、鎌田美子姫さんの邸に、厄介になっているんです。

鎌田美子姫……ご存知でしょう？ 最近になって、ずい分有名になりましたからね。

一部の芸能人や、この界隈の商人の方たちのあいだでは、もう四、五年も前から、かなりの評判になっているんですが……。

ええ、美子姫というのは、祈禱師です。予言師、占師といったほうが、適切かも知れません。

この店から、二キロほど離れた邸町の一劃に、彼女は母親と一緒に住んでいます。以前は蒲田のほうの貧民窟で、苦しい生活をしていたということですけど、彼女が無意識につぶやく予言が、ピタリピタリとあたりだしてから、そのおかげで、少しずつ収入もふえてきて、いまは立派なお邸におさまっています。

美子姫が予言をするようになったのは、なんと、小学校の六年生ぐらいからだというから、おどろくじやありませんか。

ええ、いまは、二十三才ですから、もう十年間も、娘予言師として生活し、信者をどんなふやし、すっかり財産を残してしまったわけです。

しかし、ボクのもとでは、たしかに美子姫は感受性の強い、天才的なひらめきをもった娘ですが、彼女が今日の隆盛をみるようになったのは、母親の経営的な手腕が、大いにモノをいってゐるんですよ。

美子姫教の信者たちを、より一層幻惑し、惹きつけさせる演出は、心得たものです。真の教祖は、あのババアかも知れません。

信者には、映画スタアなんかも多いんですよ。

「この頃、ちっとも役がつかないけれど、どうしたら、もっといい役につけるだろうか」

とか、

「他の映画会社から、ひきぬきの話があるのだけれど、応じたほうがよいか、それとも、断わるべきか」

といった調子です。

美子姫は、十畳ほどの座敷のま

淫祠邪教・特集

んなかに、床の間を背にして、黒いウルシ塗りの机の前に坐り、それらのお伺いや相談にスパスパと指示や返答を与えます。

頭にひらめいた靈感が、そのまま無意識のうちに言葉となって、ほとばしるのだそうです。

若いテレビ女優がきて、

「プロデューサーが、こんなことをいうのです。きみの処女をくれれば、連続ドラマにだしてあげるよ。——私は、どうしたらいいでしょう……」

なんて、お伺いをたてます。美子姫は、ズバリと答えます。

「処女なんか、あげてしまいなさい。いい役について、有名になったほうがトクです」

すると、テレビ女優は、わが意を得たりというような満足げな表情で帰っていきます。

商人は、将来の景気の動向から、株の買いか、商品の仕入れの相談まで。家を新築するについて、方角のお伺い。生れた子供の名前から、結婚の是非のお伺いに至るまで、種々雑多です。時には、政治家が選挙戦の予想や作戦をききにきたりします。

ちか頃では、週刊雑誌までが、読者の人生相談の回答者として、美子姫を登場させるの

ですから、おどろきいった次第です。

ナニ、美子姫の予言なんて、当るも八卦、当らぬも八卦のうちですよ。当たったときに、大宣伝をすれば、信者はますますふえて、商売大繁昌というわけです。

春夜の誘惑

いや、どうも話が横にそれました。

ボクの悩みを、お話するんでしたっけね。まア、きいて下さい。

美子姫は、もちろん、まだ独身です。父親は、彼女が小さいときに亡くなり、母親と二人だけの女世帯では、いくら女子言師の家だからといって、不用心です。

女中が一人いますが、いざという時には、あまり力にはなりません。

そこで、五年前から、ボクが雇われることになったんです。

ええ、もちろん、住み込みです。

食事は、とびきり上等のものを食べさせてくれるし、立派な部屋に寝かせてくれます。親娘とも非常によく可愛がって、面倒をみてくれました。

生れたときに、すぐ親からひき離され、いまでは身寄り頼りのないボクにとっては、天

国のような、恵まれた生活でした。

ところが、そうです。去年の春ごろから、どうした風の吹きまわしか、美子姫が、急にボクを苛めるようになったのです。

いや、イジめる……という言葉は、あるいは、当たっていないかも知れませんが……。

美子姫は、その名のとおり美しい娘です。

神秘的な、まっ黒い瞳と、つめたいほどに高く上がった鼻をもっています。身体も現代女性らしく、よく均斉のとれた、すばらしいボリウムです。流行の形容でいえば、身長はざっと一六〇センチ、バスト及びヒップ九五センチという、グラマースタイル。

こんなところにも、美子姫教の人氣が上昇する理由があるのかも知れません。いや、きっとそうです。

あれは——去年の春、なまあたたかい風の吹く晩でした。

徹夜で邸の内外を警戒するのが、ボクの任務でしたから、その夜もボクは裏庭を、ゆっくりと見廻っていました。

と——縁側の雨戸が、中からそっと開かれて、白い手が、ボクをまねくのです。

「——サブちゃん。ちょっと、私の部屋へいらっしゃい……」

美子姫です。彼女が自分の部屋へボクを呼ぶのです。こんなことは、はじめてです。

三郎というのは、ボクの名前で、つまり、愛称サブちゃん。これは。彼女がつけてくれたのです。

「はい……。でも、あのウ……」

ボクは、ためらいました。

「いいのよ。お母様はもう向うの部屋で寝ちゃったわ。——こんななやましい春の晩、なんだか、胸のなかがモヤモヤして、とても眠れやしないわ。少し、私の相手をして遊んでおくれ」

「でも、ボクみたいなものが、お座敷にあがると……」

「さっさとおあがり！」

美子姫は、強い声でボクを叱りました。

「はい……」

ボクは、おそろおそろ廊下に這いあがり、彼女の部屋に通ったのです。

「お坐り……」

彼女は、ボクを手まねきし、微笑しているのです。信者相手の気の疲れる一日の仕事が終って、彼女は、ピンク色の、なまめかしいパジャマに着替えていました。

ボクは、オズオズと畳の上に腰をおろしま

した。妙な心もちです。

彼女の美しい瞳が、やさしくボクを睨みます。ふかい眼の色です。パジャマ姿の美子姫は、予言師などという不気味な存在でなく、普通の年ごろの娘にかえっていました。それ

が、ボクには、とてもまぶしくて、思わず眼を伏せました。

胸がドキドキと鳴って、身体が熱くなりました。ただ、モジモジと、うつむいているだけでした。



彼女は、だらしなく膝をくずし、横坐りになって、テーブルの上の、果物だの、ケーキだの、キャラメルなどを、ムシャムシャ食べながら、とりとめのない話を、ボクにしかけるのです。その手と口の、よく動くこと。

それから――

彼女は、おとなしくしているボクに、どんなでもない悪戯を、しかけてきたのです。

乱暴な悪戯

悪戯……そうです。彼女は、菓子を食べ飽きると、ついと立ちあがって、いきなり、ボクの背中の上に、またがってきたのです。そして、ボクの首すじを、両手でぎゅうっとおさえ、

「サブ。そら、走れ、走れ」

と、いうのです。

なんとという乱暴なことをする娘でしょう。

ボクは、馬ではありませんから、背中に人間を乗せて走ることは、ニガ手です。まして、美子姫は、体重五五キロという、すごいグラマーです。

ボクは、たちまち、押しつぶされました。

彼女は頭から畳の上に投げだされました。

「チェッ。いくじなし！ そんな大きな図体

をしていて、私ひとりが乗せられないのもっと力をだすのよ、もっと！……」

彼女は、怒って起き直ると、またボクの背の上に、勢いよくまたがりました。

ズシン！……

ボクは背骨が折れたかと思いました。

彼女は、こんどこそ落ちないように、その両足を、ボクの脇腹のところへ、グイと押しつけ、折りまげて、自分の身体をささえました。

ウウッ……

ボクは、思わず息をのみました。仕方なく足を踏んぱり、彼女の身体を持ちあげます。ご主人の命令です。服従しないわけにはいきません。

ボクは、苦しさを耐えて、そろそろと歩きはじめました。

「そうよ。うまいわ。がんばれ！ サブちゃん！ しっかり！……」

彼女は、声をあげてよろこびました。子供みたいです。

その上、調子にのって、手をのばすと、机のひきだしから、長いモノサシをとり、それを鞭にして、ボクの尻を打ちはじめました。

ピシリ！

ピシリ！……

痛くないはずはありません。ボクは、思わず泣き声をあげました。

「走れ、走れ。もっと早く！ 部屋をぐるぐるまわるのよ」

彼女は、馬に乗ったつもりで、いい気なものです。

ボクは、必死で走りました。いや、走るところまでいきません。足をひきずるようになって、ヨタヨタ歩くのが、せいっぱいです。

背骨が、ミシミシいいます。

部屋のなかを、三まわりぐらいくると、彼女は、ボクにビスケットを投げてくれます。

ただし、彼女が、自分の口のなかで、クチャクチャに噛んだやつです。彼女の唾液が、たっぷりふくまれていました。ボクの首をおさえつけ、それをムリヤリに食べさせます。食べないと、横ッばらを蹴とばされるのです。

なんとも、乱暴なご主人様です。

「ハハハ……。私はね、お前のその大きな図体をみると、いつも、その背中にドシンとまたがって、思いきり走りまわってみたい気になるの。やっと今夜実行してみたんだけど、思ったとおり、おもしろいわ。なんだか、と



てもいい気持よ。胸がスツとするわ。これから、チョイチョイお前を馬にして遊ぶことにするわね。いい？ わかったね？」

美子姫は、畳の上に両足を投げだし、胸を大きくはずませながらいかにも楽しそうにそんなことをいうのです。汗ばんでキラキラ光った額に、長い髪の毛が四、五本、ベツトリとはりついた表情は、妖艶といってよいほどの、なまめかしいものでした。

苦痛のよろこび

美子姫は、それから毎晩のように、ボクの背中にまたがって、部屋の中を走らせるのです。ボクの腹を両足

でハサミつけ、尻をモノサシの鞭で打って、ボクの苦しむ様子を眺めては、よろこんでいるのです。

ボクは考えました。

彼女は、どうして、ボクを苛めることが、あんなに好きなんだろう？……

ボクは、毎日毎日考えて、やっと一つの答えを得たんです。

彼女は、抑圧された欲望を、ボクをいじめることによって満たし、発散させているのではないだろうか？

いや、どうも、ナマイキないかたで恐縮です。

しかし、ボクを馬にして責めるときの、彼女の表情、姿態、動作を、注意してみていると、どうも、そんなふうに思えるのです。

たとえば……。いや、やめましょう。そのところを、こまかくしゃべると、どうも話が卑猥になりそうです。

——美子姫は、小さい時から、男女関係についての予言やら占いをして、普通よりは、よっぽど性についての成熟した心をもっています。

二十三才の、娘さかりの豊満な肉体をもっています。

しかるに彼女は、ここ当分のあいだ、結婚はおろか、恋愛すらできない境遇にあるのです。神がかり的な美貌を売りものにする娘予言師が、年ごろになったからといって、一般人なみに、亭主をもったら、とたんにその値打ちがさがすることは、わかっています。

だから、彼女の母親は、彼女のそばに、決してそのような気配のある男性を近づけさせん。まだまだ、娘を使って、金儲けがしたいのですからね。

つまり、美子姫は、いま孤独なのです。

考えてみれば、可哀そうなんですが、その孤独をまぎらわすために、彼女のオモチャになるボクだって、たまりません。

たいへんな重労働です。苦痛です。

身体にツヤがなくなり、痩せてきました。

ボクの悩みというのは、つまり、ここなんですよ……。

どうです、おどろきましたか？……

あの美貌の女予言師が、夜になると、そんな妖しい悪戯にふけるなんて……。

ボクはいま、あの邸から逃げだそうと思っています。

だけど、こんなセチがらい世の中ですからね。あの邸をでたら、とたんに喰えなくなる

のは、わかっているんです。

それに、この頃なんだか、美子姫に苛められるのが、前ほど苦痛ではなくなってきたんですよ。不思議です。馴れてきたんでしょかね。

いや、苦しいことは、たしかに苦しいんです。なにしろ、五五キロが、まともに押しつぶさってくるんですからね。

それに一ヵ月ばかり前、彼女、どこからか乗馬用の皮鞭なんか買ってきましてね、それで思いきり尻を、ピシピシやられるんで……

だけど、ちか頃では、その苦痛のなかに、なんともいえない、よろこびというか、快感のようなものが湧いてきましてね、ええ。少しずつ、彼女の鞭が楽しみになって……。

なにしろ、相手が若い美しい女性なもんですから……。

え？　なんですって？——

それじゃ、悩みどころじゃないって、おっしゃるんですか？

ええ、そりゃまア……フッフ……そうなんですけど……。

美子姫邸の白犬

ふと気がつくと、青年の姿は、いつのまに

か見えなくなっていた。

私は、腕時計をみた。ひどく酔っているの

で、文字盤が読めない。「もう十二時すぎましたよ。カンバンにしますよ」

と、おかみがアクビを噛み殺しながら、私にいった。

この小さな酒場には、もうすっかり火の気が失せて、ひえびえとした空気に、私は肩をすぼめた。

その翌日は日曜日だった。

私は、前の晩の深酒がたたって、ひるすきまで起きられなかった。

午後になってから、外へ散歩にでた。タバコを買ってからブラブラ歩いているうちに、昨夜の青年のたわごとを、ヒョイと思いだした。

(へんな奴だったな……)

鎌田美子姫か……。あの青年は、その娘予言師の邸の書生でもあるんだろう。

散歩の足を、十五分ほどのぼした町の裏通りの一劃に、その美子姫邸のあることを、私も知っていた。

二、三度、その邸の前を通りかかったことがある。美子姫が、どこかへ車で外出すると

淫祠邪教・特集

ころを、偶然にみかけたこともあった。

昨夜の青年がいったように、すばらしいスタイルの現代美人だった。私は感嘆し、その神秘的な美貌は、眼の底に灼きついていた。

私の足は、いつのまにか、美子姫邸にむいていた。

門の前にきた。迷える人間が、足をとめずにくぐれるような、入りやすい構造になっている。

私は、好奇心が湧いた。

昨夜の青年がいるかどうか、のぞいてみたくなった。ひょいと門をくぐり、邸内へ踏みこんでみた。広くはないが、なかなか金のかかった庭である。人の姿は見えない。敷石が玄関までつづいている。玄関の脇に、立派な犬小屋があった。なかには、大きな白犬が寝そべっていた。私の顔を見ると、ジロリと顔をむけた。

私は、ギクリと立ちどまった。

(あッ!……)

胸のなかで叫んだ。

その犬の顔!……

面長で色の白い端正な容貌。鼻

さきだけが黒く、テラテラ光っている。

ゆうべの、そうだ、ゆうべの、あの青年の顔に似ているのだ。春さきだというのに、白っぽい背広を着ていたあの青年に……。

思いなしか、その白犬が、私をみて、ニツコリと笑った。こくりと頭をさげた。

私は、背すじがゾオーッとした。全身が鳥肌だった。

白犬は、のそりと起きあがり、私のほうへ歩きかけた。

(わあッ!……)

私は、門の外へ駆けだしていた。

私は、そのまま、昨夜の小さな酒場にかけてこんだのである。まだ店はひらいていなかったが、戸はあいた。

「マ、マダム! き、きみは知ってるな。ゆうべ、おれが遅くまで、どこかの若い男と話していたことを!」

私は、おかみにむかってどなった。

「まア、どうしたっていうんですよ。そんなにあわてて……」

おかみは、あっけにとられて私の顔をみあげた。

「ゆ、ゆうべ、おれに、いろいろ悩みごとを話していた男だ。マダムだって、そのカウ

ターの向うできいていたじゃないか!」

「ゆうべ、あなたとお話していた男の人?

さあ?……ああ、そうそう、ゆうべはあなたひどく酔っぱらって、土間にまぎれこんできたどこかの大きな白犬に、景気よくヤキトリを食べさせながら、一人でなにかブツブツしやべっていたじゃありませんか」

「大きな白犬?」

私は、またゾオーッとした。

「へんでしたよ、ゆうべは……」

おかみは、ニヤニヤ笑った。

私は、怖い夢の続きをみているような気が持った。果然となって家に足を運んだ。畳の上にひっくりかえって、頭を抱えた。

あの白犬、自分の不思議な体験を告白したために、青年に化けて私の前に現われたのだろうか……。

そんなバカな!……すると、すると……。

しばらくたって、冷静にもどった私は、やっと一つの結論を得たのだ。

ゆうべ、あの青年の語ったことは、ひとめ美子姫の姿をみて、心を惹きつけられた私の日頃から抱いていた、ひそかな願望ではなかったか、と……。その願望が酒によって、妄想となって現われたのではないだろうか。

邪道
行者

腰紐呪法

島本春雄

秋吉 巒 鬼・画

死呪の相

不気味な空の色である。

雀色の黄昏を、逢魔——の刻と呼ぶのなら
これは、地獄の一瞬と称してよいのである
う……。

暗い。

それも、墨一色の夜の色でなく、沈んだ死
灰の色と、どす黒い墨汁の色が不規則な縞目
をつくった天地である。

つい先刻までは、強烈な陽射しが雲間を洩
れていた。



111

悪鬼

ギイッ……ギイッ……

櫓のきしむ音にまじって、船頭のつぶやく
ような声が聞えたのは、ほんの寸刻前である、
「ひと雨くるかな……」

西の空に黒い雲が出た。

そいつが、みるみるうちに天空を支配する
形になり、しかし、雨は一粒も落ちてこなか
った。

——一瞬、といってよい速さである。

「寒い」

首を縮めて梨絵は船をおりた。

「濡れないうちに……」

と、乳母のお島がいったのは、やはり雨を
心配してのことであつたろう。が——

この二人の行手に待っていたものは、雨——
ではなく、不気味な一人の修験者であつた。
積材の間を抜けて右へ曲ったときである。
「あっ！」

二人の足が同時にとまった。

眼の前に、ふわり——と、白い影のような
ものが現れたのである。

無言。無音。

大地に払呪の金剛杖を突きたてて、射るよ
うな鋭い眼が、梨絵の眉間を睨んでいる。

ひと目でわかった。

それは、頭に頭巾をかぶり、袈裟、篋懸を
身につけて、腰に太刀を佩いた一人の修験者
だったのである。

一瞬……

二瞬……

お島が何かいいかけて、しかし、そのまま

☆美女の柔腰をなまめかしく締めあげる緋鹿子の腰紐に、怖ろしい呪法が……………



口を閉じてしまった。

「——兇！」

修験者がはじめて声を発したのは、この時である。太い、底力のある、威圧するような声であった。

（——兇？）

同時に二人は、胸のうちに鸚鵡返しにつぶやいていた。

そして、ぞくりとなった。

「兇じゃ」

念を押すように、もう一度いつて、修験者は一歩前に出た。

お島の頬に痙攣が走った。

そして、梨絵を守るように、この女も一歩前に踏みだしたが、それはおそらく無意識の動きであつたろう。

両者の間隔は一尺たらずである

「死呪の相じゃ」

と、修験者が冷たくいった。

「え？」

「緋鹿子呪法」

淫祠邪教・特集

修験者の眼は、梨絵の、その美しい顔を見詰めたままである。

「緋鹿子呪法……?」

「そうじゃ。おぬしは死ぬ。このまま捨ておいたら必ず死ぬぞ。——が、案ずることはない。死呪を秘めた緋鹿子を解いて、払呪の加持祈禱をおこなえば、その死相も払拭されよう」

梨絵とお島は思わず顔を見合せた。

疑心。恐怖。

その二つが錯綜して、二人の顔を歪めている。

「おぬし、緋鹿子の腰紐を用いておろう」

「はい」

「眉間の兇暈はそのせいじゃ。緋鹿子の腰紐には、立石寺邪道士の死呪の念力がこめられておる。ただちに解き放ちて払呪の加持をなさずば、おぬしの命数今宵限りじゃ」

カチン

修験者の右手の金剛杖が大地で鳴った。

一瞬…… 二瞬……

梨絵は、まるで憑かれた者のように、男知らずのその柔腰をしめている緋鹿子の腰紐を解きはじめていた。

空はいよいよ暗く、墨汁のような妖雲が、

地を這うように低迷しはじめている。

しかし——

冷たいものが落ちはじめたのは、梨絵とお島が蒼白になって伊勢屋の店先にたどりついたときであつた。

娘 三人

腰紐呪法。

邪道死呪。

——緋鹿子の腰紐には、羽前国立石寺邪道士の死呪の念力がこめられている。一度でも腰に巻いたことのある女は、その腰紐に払呪の祈禱をせずば命がない。

そんな噂が、ご府内一帯にパツと拡がったのは、それから間もなくの事であつた。

立石寺……

それは、慈覚大師の開基になる羽前村山郡の寺であり、呪法の験力の顕著な道士が、しばしば姿を現わす事で知られていた。

が——

腰紐呪法の噂を拡めたのは、伊勢屋小町の梨絵でもなく、あの修験者でもなかったのである。

雨……

雨……

雨……

妖雲のあの日から、江戸の町は半月も続く長雨になやまされていた。

この雨の中で、噂を拡める惨劇が、続いて三件も発生したのである。

六日。お駒 十九才。

七日。お光 十八才。

八日。お文 二十才。

奉行所の記録によると、この三人の娘が、白蠟の肌に一条の傷痕もとどめず、冷たい骸となって夜の路上に発見され、揃ってその死体から緋鹿子の腰紐だけが姿を消していたのであつた。

この惨事と、お島の口から洩れた修験者の言葉が絡みあって、噂は野火のように拡がった。——というのが真相である。

「えれえことになりアがったな」

「そうよ」

「噂がもし本当なら、江戸の町から年頃の娘が、あらかた姿を消してしまうぜ」

「けっ。あい変らずてめえの口ア大げさだ」

「大袈裟なもんか」

「ふっ」

淫祠邪教・特集

「考えても見な。緋鹿子の腰紐なんざ、そこらにさらに転ってるぜ。年頃の娘なら誰だっ
て締めてらアな」

「馬鹿野郎！」

「何をっ」

「大きな口をききアがつて。そういう手前が
一度でも娘の腰紐を解かせた事があるかよ。」

「どうだ。ねえだろう？」

「大きなお世話だ」

「ふふふ……緋鹿子の腰紐はな、この春伊勢
屋が売出すまで、ここ五、六年途
絶えていたしろものなんだ。数も
そんなに多くは出ていねえ。いい
若いもんのかせに、それぐらいの
ことア覚えておくもんだぜ」

「ふへえ」

そういう兄貴分の方も、あんな
り出来のいい男ではなさそうであ
る。

二人の背後に駕籠があった。

これは、客待ちの駕籠人足が、
陽なたぼっこの噂ばなしである。

「しかし……」

「なにがしかしだ？」

「江戸中の娘は大袈裟にしても、

つまるところ、緋鹿子腰紐の数だけの女が死
呪の念力で殺されることに変わりはあるめえ」

「心配するな」

「ほう」

「捨てる神あれば救ける神あり。金峯小角と
名乗る修験者が現われて、人騒がせな立石寺
の邪法をぶっこわす大祈禱を、稻荷横丁の加
持堂でおっぱじめていやアがるのさ」

こいつは、かなり早耳の男である。

「へへえ」

と、首をふって、弟分の方は黙ってしまっ
た。

（けっ。一つの駕籠を前と後ろに担いで江戸
の町を走っているんだ。そのくせ、兄貴の奴
アおれより二倍も三倍も物識りでいやアが
る）

面白くない勘定だ。

べっ——と唾を吐いて、何とかこの相棒を
へこますような話題はないものかと首をひね
ったときである。

「駕籠屋さん」

と、右手から若い女の声であった。

「へい」

「稻荷横丁まで」

「へっ」

とたんに、びいんときた。

（稻荷横丁……するってえと、この女ア例の
緋鹿子腰紐か……）

口には出さず、眼と眼でうなずきあって、

二人は景気よく走りはじめた。

ホイッ……ホイッ

道のりはいくらかもなく、大した駄賃にはな
らないが、しかし今日は朝からのシケ続きで
これがはじめての客であった。

護 摩 堂

加持堂の中央に護摩壇がある。

方形で、中央に火炉、壇の四隅には四椀を
釘打ち、その椀頭には五色の金剛線をめぐら
し、壇上には関伽、塗香、華鬘、火舎、飯食
灯明、灑水、漱口、五瓶——の諸器が置かれ
ていた。

壇の前には礼盤があり、その上に坐ってい
るのは、伊勢屋小町の梨絵の前に忽然とその
姿を現した、あの修験者である。

金峯小角。

これがその修験者の名であり、この男の左
右に置かれた脇机の上には、護摩木、房花、

香炉、白芥子、粳米、扇、そして呪火……
があった。

護摩壇が燃えている。

弘呪。

降伏。

いま、右手に杵、左手に鈴を持って、行者
小角が不乱の祈禱であった。

下手に女が六人並んでいるのは、いずれも
緋鹿子腰紐の持主で、噂におびえての参堂で
あったろう。

先刻、駕籠から降りた娘の顔も見える。

「呪物を」

今まで、加持堂の片隅に、まるで木像のよ
うな形で黙念と正座していた白衣の男が、こ
の時はきすてるようにいつて立ちあがった。
右手に三宝を捧げている。

一步……

二歩……

そして三步目の足は、ちょうど左端に坐っ
ていた十七、八の娘の前になる。

「妙、十七」

表情のない声でいつて、左手の三宝を娘の
鼻先に突きつけた。

「はい」

娘は、おびえたような声で答えて、手に持

っていた緋鹿子の腰紐を、その三宝の上のに
せた。

こういう約束になっていると見える。

「美加、十九」

「登勢、二十」

左の端から順々に女の名と年をいえば、三
宝の上に腰紐の数がふえてゆく勘定だ。

千代、志津、浜——この三人がいずれも二
十一才で、都合六本の緋鹿子腰紐が、弘呪の
加持を受けるために三宝の上に集められた。
と——

このときである。堂内の灯明が小角行者の
手によって、一灯一灯滅入るように消されて
いったのは……。

反対に護摩壇の火が勢いよくめらめらと燃
え上った。

鈴が鳴る。

杵を振る。

弘呪の念誦陰にこもって物凄く、一念、一
誦、尻あがりに高くなり、やがてフツ切れる
ようにびたりと熄んだ。

一瞬……

二瞬……

護摩壇の火も消えはじめている。

（——くそっ。ここが正念場だ）

堂外にあって、ひそかにこの情景を見張っ
ていた般若の若五郎が、胸のうちでつぶやい
て懐の十手を握りしめたのは、このときであ
った。

——臭い。

こう睨んで、前々から張込みを続けていた
のである。

何かあるとすれば、護摩壇の火も消えて、
堂内が暗黒となったときであろう。女が六人
に男が二人……しかも、女たちは、金剛流の
異妖なふんい気と、小角行者のあやしい声に
まどわされて、法悦の境地に誘われつつある
（——危ねえな……）

若五郎十手は全身を耳にした。

（ちよつとでも妙な手出しをして見やがれ、
ただじゃアおかねえ）

と、思う。何しろ堂内には、若五郎十手が
想いを懸けた水茶屋娘のお登勢がいるのだ。

「ほうっ」

と、かすかな吐息が聞えた。

とたんに、若五郎の眉が吊りあがる。十手
を握った手が汗でぬれはじめている。

が——

期待した異変はついになく、拍子抜けの形
であった。

「これまで！」

修験者の冷たい声が、払呪の加持の終了を告げたのである。
加持堂の扉が開いた。

はじめに顔を出したのが亭主もちのお浜で

その次が尻軽女のお志津、続いて大国屋の一人娘お千代……この三人は大した器量でなくあとなったお登勢、お美加、お妙の三人娘

が揃って輝くような美貌の持主である。

女たちの美醜はともかく、いずれも激しい愛撫の後のような、なまめいた疲労の色を見せていて、そいつが若五郎にはいまいまして



恋鬼

った。

首締め袈裟八

「袈裟八、よさねえかつー」

不気嫌な声でどなりつけたのは、あの修験者金峯小角である。

「うるせえな」

と答えたのは、加持堂の白衣の男だ。

しかし、いま、この男の身に白衣はなく、

小角行者の肩に篠懸も袈裟もなかった。

奸者。

といってよいのであろう。金峯小角は派手

な寝間着姿の大あくらで、毛脛をぼりぼり搔

きながら茶碗酒をひっかけていたし、袈裟八

と呼ばれた男は、夜具の上に腹這いになって

何やらニタニタ悦に入っているのである。

「けっ」

舌打ちして修験者は、荒々しくするめのあしを引きちぎった。

行灯の灯が消えかけている。

「うふふふ」

いきなり袈裟八が、不気味な喜悦の声を洩らした。

「気色のわりい野郎だな」

「へへへへ」

「一杯やったらどんなもんだ？」

「ふふふふ」

「勝手にしろ」

修験者小角は片頬を歪めて立ちあがった。

「手前の、その妙なくせを見ていると、こっちまで気が変になりやがる。おい、おれア外で一杯やって来るぜ」

外は絹糸のような陰気な雨である。

「うふふ……」

袈裟八の奴は、仲間の姿が消えたのも気づかず、一人で悦に入っている。

腹這いになって、その眼の前に、緋色の蛇がとぐろを巻いていた。

否。

緋色の蛇と見たのは、緋鹿子の腰紐であった。

一本……

二本……

数えてみると、十六本の腰紐であり、とぐろを巻いたり、長々とのびたり、波をうったり、絡みついたり、まるで生あるもののような不気味な形に見えるのだ。

「お妙……」

つぶやいて、袈裟八の手が一本の腰紐にのびた。

二皮眼で、瓜実顔で、受口で、笑うと糸切り歯が色っぽい……そんなお妙小町の、抜けるように色の白い美貌が、ありありと眼蓋の裏に浮んでいる。

（そして、あの腰、尻……）

いま手にしている緋鹿子の腰紐は、お妙小町の柔軟なその細腰を締めあげていた乙なしものだし、この男にとっては、お妙小町そのものより有難いしろものでもあった。

「うふふ……」

不気味に笑って袈裟八は、やがてその腰紐を、おのれの首に巻きつけはじめた。

妙な奴だ。

眼を閉じ、唇を歪め、首に巻いた腰紐の両端を、じり……じり……じり……柔かく、少しずつ、おもむろに、一寸二寸と引きしほる「うう……うう」

こめかみの血管が怒脹し、顔に血がのぼった。

しかし、袈裟八の表情は、苦痛のそれではなく、どちらかといえば、愉悦——といったよいのである。

——手を放した。

首に巻かれた緋鹿子の腰紐は、まるでいのちを失った蛇のように、だらりとたれ下ったが、この男は夢の続きを見るような表情を崩さず、口尻にはのかな微笑さえ浮かべている。

そうだ。

夢……妖しい夢を見ている袈裟八だった。

（お妙小町が、にっこり笑って、おいでおいでをしている。その手の中に、緋鹿子の腰紐があった。——輪になっている。袈裟八は、その輪の中へ首を入れた。——と、お妙小町のその美貌が、瞬転して夜叉の形相となり、輪にした腰紐を引き絞りはじめたのだ。——う、う、う……苦しい、気が遠くなる。眼の先がぼうつと霞みはじめた。乳色のもや……霧……の中で、お妙小町はいつの間にか素裸になっている。白い、丸い、形のよい乳房が大きく起伏して眼前に迫って来た。……）

夢……

自分で自分の首をしめて、気の遠くなった瞬時の幻覚——それを夢とするなら、袈裟八は、こんな夢を見たのであった。

今にはしまったことではない。この男にとって、女の腰紐は、その女自身の化身でありそのみにくい猪首を締めあげて、彼を恍惚境に誘い入れてくれる菩薩であった。

腰紐十万両

古机の上に巻紙がある。

修験者小角が、にがりきった顔で、筆を走らせた。

第十五日 三本 無し

書きあげると、いまいましそうに、前のほうへ眼をやった。

第一日 六本 無し

第二日 六本 無し

第三日 二本 無し

第四日 四本 無し

——こんなふうに、ずらりと並んでいて、数えてみると、全部で六十八本になる。

これは、おそらく緋鹿子腰紐の数を意味するものに違いなく、しかし、その下に書かれた二つの文字——無し……とは一体何を表現するものであろう。

「袈裟八」

ふりかえって小角が、どなるようにいった。

「なんだ？」

と、へんじはしたものの、この男はなかば夢うつつの状態である。

腹這いになり、頬杖をついて、絡み、もつれた六十八本の緋鹿子腰紐にその瞳を奪われている。

否。

魂——を奪われている、といったほうがより正確かもしれない。

「六十八本も集めたが、みんなカスだ」

「……」

袈裟八はこたえなかった。

「おい、聞いているのか？」

「けっ。ひっぱたくぜ！」

いきなり、荒々しく足首を掴んで、ひねるように持ちあげる。

「何をしやがる！」

袈裟八は、しぶしぶ腰紐から顔を離して、大あくらの形になった

「六十八本だ」

と、小角が繰り返した。

「うむ」

「わかってるのか？」

「あた棒よ」

「けっ」

「ふふふ……妙な顔をするねえっ！人間はな、十人十色だ。てめえが三十年増の色っぽいのを見ると、

淫祠邪教・特集

たまらなくなるのとおんなじで、おれア腰紐

を手にとるとドキドキしてくるんだ。――し

かし、土性骨までぐらついていやアしねえ」

「あぶねえもんだ。生身の女を毛嫌いして、

女の腰紐にうつつを抜かす。おれア半分狂っ

てるんじゃねえかと時々思うぐれえだぜ」

「ふん」

と袈裟八は鼻先で笑った。

「そうしているぶんにアそうでもねえが、自

分で自分の首を締めたりするのは、一体どう

いう料見だい？」

「ふふふ……てめえにアわからねえのさ」

「ちっ」

舌打ちして小角行者は、古机の横の一升徳

利を、そのまま口もとへもっていった。

ゴクン

ゴクン

二合ちかく残っていたろう。そいつをすっ

かりたいらげると、叩きつけるようにドシン

と置いて、

「六十八本」

思いだしたようにいったのである。

「くどいぜ。伊勢屋の下男に化けこんだ疾風

の仁太郎が、緋鹿子の端布でこしらえた腰紐

は七十本……てめえのいいてえのは、こうだ

ろう」

「うむ」

「じれじれするなよ」

「しかし……」

「残りの二本はあしたにでも手にへえるさ」

腰紐が呼んでいる。

袈裟八は、吐きすてるようにいうと、まる

で色事の最中を中断された男のように、うね

くる緋鹿子の蛇の中へ、その鼻づらを押しつ

けていった。

翌日。

巻紙に向って筆をとる小角行者の手は、こ

ころもちふるえていた。

第十六日 無し

翌々日。

第十七日 無し

巻紙の記録は、第十六日以降、丸五日続け

て、腰紐の収穫が皆無であったことを告げて

いる。

加持堂を訪れる女の足が、びたりと途絶え

てしまったのだ。

「袈裟八」

と、どなるようにいう小角行者の眼が、赤

く血走っていた。

「うむ」

と、袈裟八も腕を組んで、珍らしくにがい

顔になっている。

「どうする？」

「先方からやって来なきやア、こっちから出

向くまでのことだ」

「殺るか」

「ふふふ」

どす黒い邪気が、こいつら二人の全身にあ

ふれて来た。



「十万両の腰紐」

と、いったのは小角行者であり、

「侍の娘の腰紐は、また一段とたまらねえ」と、いったのは袈裟八である。

綿殺し行者

自源流小柴道場

檜の一枚板に、いかにも武芸者の道場らしく、筆太で、達筆にかかれた看板がある。

が――

立派なのは、その看板だけで、お義理にも堂々たる道場とはいえなかった。

狭い。

古い。

塀はところどころ崩れていたし、羽目板も腐りかけて穴があいている。

剣術の道場でありながら、めったに竹刀の音を聞かないのは、道場主の小柴源太左衛門の腕がなまくらで、弟子がつかないからでなく、原因はその反対であった。

源太左衛門は無類の剛剣である。

そのうえ泰平の世相を考慮することなく、その稽古は乱暴なほど荒かった。



はじめ、一人娘の里乃の輝くような美貌を目当てに集った弟子たちも、源太左衛門独特の荒稽古に悲鳴をあげ、一人去り……二人去り……そのうちかんじんの源太左衛門が病臥したりして、今では里乃を狙う心棒強い狼たちが四、五人通ってくるのみ……

そういう道場であつた。

暗い。

深夜といつてよく、人通りはまるでなかったが、しかし、道場の裏手の闇の中で、何やら動くものがある。黒い影が二つ……

「おい」

と、いったのは小角行者の声であり、

「しッ」

と制した声は、袈裟八のそれであつた。

一瞬……

二瞬……

二人の動きがとまって、屋内の気配をうかがう形である。

「用意はいいな？」

「大丈夫だ」

「よし。左前の腐れ道場だ。八方隙だらけで戸締りもなにもねえが、娘の里乃は女だてらにやっとうが出来る。不意を突かねえとしくじるぜ」

「うむ」

「親爺の源太左衛門は、酒毒で寝たつきりだから勘定に入らねえ。忍びこんで、まずおれが娘の両手を押さえつける。——てめえは、いつもの通り、例のものを……」

「合点」

うなずきあつて、羽目板の穴から忍び込んだ。

奥の四畳半では、娘の里乃が内職の疲れでぐっすり寝入っていた。

暗い。

二人は、闇の中で、しばらく微かな寝息に耳をかたむけ、寝具と里乃の位置をたしかめると、いきなり小角行者が躍りかかった。

「あっ！」

驚いて撥ね起きようとしたときには、行者の丸太ん棒のような腕が、のしかかるような形で白魚の両手首を押さえていたし、同時に袈裟八が頭の方から廻って、里乃の鼻と口へ何やら白い物をおしつけていたのである。

綿。——白い物は綿であつた。

それも、水にひたして、ぐっしりと水気を含んだ大きな綿のかたまりで、鼻孔と口をおさえられては、何しろ不意の事でもあり、相手が大の男二人では、かなり鍛錬の出来た

自源流の里乃も、むなしくもがくばかりで救いを求めることも出来なかった。

「ううう……う」

もがく力も次第に弱くなってくる。

闇の中で、どす黒い邪氣と殺氣と恐怖と疑惑と、そして死の影が、黒い旋風のように渦をまいた。

「やった！」

ぐたり——と力を抜いて袈裟八がいったのは、ほんの瞬後である。

死——は、意外に早く来たのだ。

「腰紐」

と、いったのは小角行者で、こいつは早速目的の緋鹿子腰紐を探しはじめている。

疾風組

礼盤の横にある脇机の上の灯明が、心細い光りを堂内に投じている。

「いよいよ、あと一本」

護摩壇に向つて、呪詛するようにつぶやいた小角行者の顔は、すでにその本性を現わして物凄いい悪相になっていた。

「こうなるとは思わなかったな」

集めた六十九本の腰紐のうち、小町娘の持物であった六本の腰紐……手放し難い、その六本の緋鹿子腰紐を首から下げて、しかし、袈裟八も片頬を歪めている。

「伊勢屋の奉公人に探りを入れて、売り渡した相手の名前が知れている腰紐は四本……。そのほか、伊勢屋の娘の梨絵と、養女のお須美が一本ずつ持っているのは、はじめからわかっていたんだ」

「ふん」

と、袈裟八が自嘲するように鼻で笑った。

「いまいましたいな」

「全く」

「疾風小僧の、腰紐を集めるために、まず伊勢屋小町に呪詛を吹っかけ、続いて名前の知れている買主の三人娘を、つぎつぎと綿責めで殺して噂を拡める軍略は、まず図に当たったといっているだろう」

「ふふ、女たちア、続々と押しかけて来やがったからな」

「しかし、そうして集めた六十八本の腰紐にア、疾風の仁太郎が仕込んだ絵図面は入っちゃいなかった」

「くたびれもうけの悪党二人……ふん、うまく出来てやがる」

「あと二人」

「てっきりと思って忍び込んだ自源流の道場も、へっ、空腰紐——と、来やアがったな」

「とんだ廻り道をしたが、これで疾風小僧の絵図面は、最後の一本、伊勢屋の養女お須美の腰紐の中……ときまつたぜ。見ろッ！ はじめおれがいった通り、持主の知れているやつから先に一本一本片づけていたら、こんな手間はとらずにすんだんだ」

「へっへへへ」

「何がおかしい？」

「絵図面も絵図面だが、おいらは腰紐もほしかった。見てろ、十万両を手に入れたら、山分けの五万両で、関八州はおろか、松前、薩摩の隅々に至るまで、美人という美人の腰紐を、全部この手に買いしめてやる」

「けっ」

あきれ返って小角行者はまじまじと袈裟八の、そのノッペリとしたつらを今更のように眺めたのである。

（こいつやっぱり狂ってやがる）と、思う。

「ふふふ」

袈裟八は不気味に笑って、首から下げた腰紐を鼻づらに押しつけていた。

二人とも、まともな奴じゃアない。

袈裟八は、寺小姓あがりの盗っ人で、かつて上方を荒し廻った疾風小僧の子分だった小角行者も、同じ一味で、こいつは坊主あがりの悪党である。

——疾風一味が盗みためた金子は十万両といわれ、頭目の疾風小僧仁太郎が、一部の分配金をのぞいた大部分の金は、そのつと秘かに埋没して、奉行所の追求の手がゆるむ五年後に山分けする約束になっていた。

が——

約束のその日、豪雨の辻堂に再会した一味の者は、疾風小僧の奸計で一人残らず毒酒に倒れた。

一人じめを狙ったわけである。

しかし、悪運の強い奴は、どこにでもいるもので、袈裟八と小角坊主だけが、毒酒によって三途の川ちかくまで踏みこみながら、根強い生命力——といってよいのであろう。かろうじていのちをとりとめたのであった。

復讐……

二人は必死になって仁太郎の行方を探した

淫祠邪教・特集

一年……

二年……

そして三年目の春に、やっと江戸で、伊勢屋の下男に住込んでいた疾風の仁太郎を発見したのである。

（——野郎、生かしちゃおかねえ）

さっそく、おびき出して引っ捕え、石を抱かせ、逆さに吊り、爪を裂き、耳を削いで、ようやく白状させた十万両の絵図面は、仁太郎が退屈しのぎのつもりで緋鹿子のはぎれからこしらえた腰紐……その中に封じこめてある。——ということであった。

いうなり、仁太郎はいきが絶えてしまった。

「仁太郎の腰紐」

「緋鹿子の腰紐」

しかし、この事実を知ったときは、すでに手遅れだったのである。

番頭の藤六が、下男部屋の腰紐を発見し、気をきかしたつもりで売りに出した後であった

辟足

娘

伊勢屋は、呉服太物商として日本橋でも屈指の老舗であり忍び込むのは容易でなかった

「どうする袈裟八」

「伊勢屋は、自源流の破れ道場と違って、ちよつとやそつとじゃラチがあくめえ」

「かといって、相手は評判の蠻娘だ。護摩堂をおっぴろげて、おいでおいでの百万遍をやらかしても出て来る氣づかいはねえしな」

「てめえの法力で蠻娘の足が立たねえかよ」

「けつ。からかつちやいけねえ」

「ふふふ」

「たとえ蠻でも、来る氣があれば駕籠という手もある。あいつもお梨絵の話は聞いているだろうし、命がおしけりアやってくるはずだ。」

——それが、待てど暮せど姿を現わさねえところを見ると、自源流の娘同様、案外氣のつええ娘なんだろう」

「ふん。蠻小町は強氣でおじゃるか。……へへ、おれアなんだか、お須美小町の腰紐が無性にはしくなって来たぜ」

袈裟八の眼が光りはじめた。

「いっちょようやるか？」

「うむ」

あせることはないのだろう。——二人は、いらいらしながら豪雨の夜を待ったのである

雨……

雨……

豪雨の夜を待って、むなしく十日の日が流れた。

豪雨の夜は物音を消す。伊勢屋の屋内に忍び込むには、どうしてもその頑丈な雨戸を破らねばならず、物音を立てずにこれをやりとげる力が、この二人にはなかったのである。

機会は十日目に来た。

「袈裟八」

「合点」

宵からの雨が、丑の下刻を過ぎる頃から、風をとまなう豪雨となった。

雨を待つ十日の間に、それとなくお須美の寝所もたしかめてある。

雨戸。廊下。

この二つは、首尾よく通り抜けたが、思わぬ破綻が、かんじんのお須美の寝所に待っていた。

（寝息の調子では熟睡だな……）

寝所の障子の外にうずくまって、二人は眼と眼を見合せた。

手筈は、いつもの通りである。

まず小角行者が躍りかかって、お須美の両腕を押さえつけ、間髪を入れず、袈裟八が水にひたした綿を用いる……

（行くぜ）

(合点)

うなずきあつて、小角行者の手が障子にのびた。

竹筒の水を流してある。

障子は、音もなく、軽く、無抵抗にスルスルと動いた。

暗い。

——が、寢息でお須美の位置は見当がついている。

ニヤリ……

不気味に笑つて、小角行者が一步踏みこんだ。——と、同時に異妖な悲鳴である。

「ぐえッ！」

驚いたのは袈裟八だ。

悲鳴は小角行者の声であり、ギョッとなつて、思わず泳ぐような形になってしまった。

一步……二歩……

よろめいた三歩めの足が、ツーンと脳髓を痺れさせるような、細い、鋭い、異様なものを、もろに踏んずけて、こいつも行者同様、ぐえッ——と呻いて、なかば気が遠くなったのである。

「——う、う……は、針……」

行者が唸つて、のたうち廻っている。

「に、逃げろ」

袈裟八は、四つんばいになって、よたよたと出口を探す。方角の見当がまるでつかなくなっているのであつた。

そんな袈裟八の首へ、いきなり、何やら柔かい物が巻きついて来た。

「うっ」

(紐……腰紐?……)

気づいたときは手遅れである。

ギリッ……ギリッ……ギリッ……

力一杯、締めあげてきたのだ。

「ははは……」

嘲笑するような女の声……お須美の声が耳

もと近く聞えたのは、袈裟八が、なかばもう

仮死状態になったときである。

「お前たちのくるのを待っていたんだよ」

と、お須美がいった。

「伊勢屋の店先で拾われて、鬘娘に育ったわたしは、ふん、疾風小僧の仁太郎が棄児した娘だったのさ。十万両の絵図面は、そら、こうしてお前を締めている緋鹿子の、この腰紐の中に入っているよ」

十万両の腰紐……しかし、そいつは、死——

の腰紐でもあつた。

「あたしは聞かなきアよかったのさ。——でも、下男に住みこんだ疾風小僧の口から、あ

たしは何もかも聞いてしまった。大泥棒の娘……汚れた娘……足の立たない鬘娘……あたしは恨んだ。でも、でも……血のつながりはこわいわねえ。だんだんあたしは、疾風小僧のお父っあんが好きになつてしまったの。十万両あれば何でも出来る。おりを見て長崎へゆき、きつとお前の鬘をなおしてやる……お父っあんはいったわ。——でも、そんな時、お前たちの姿を町で見て、急にお父っあんは何もかもあきらめてしまったんだよ。——だから、お父っあんが姿を消したとき、すぐに殺されたんだとわかったし、殺した奴も、あたしにはわかつていた」

小角行者の呻き声で、店の連中がもう起きだしている。

「腰紐呪法……。ふん、あたしは待った。十万両の絵図を探すお前たちは、最後にはあたしの所へやって来る。内緒で、木綿針をうえこんだ板を幾つもこしらえて、毎晩、毎夜、お前たちがやって来るのを待っていたのさ」

袈裟八は、すでに脈切れたむくろであつた——が、鬘娘のお須美は、なかば狂つたように、どす黒い呪詛の言葉を吐きながら、ぎり……ぎり……ぎり……力の限り締め続けていた。



怪異靈教

飯田豐吉

山田彬弘繪



右手に拳銃、左手に詩集、あまい抒情詩を口ずさみながら、あらゆる悪事を請負う、冬島真吾とその弟分、机田英二。

ある夜は殺し屋、あるときは婦女誘拐、綿密な計画のもとに、つぎつぎ大胆な行動をおこす二人であった。

池袋のバー「白夜」のマダム峯子は、真吾の情婦である。ある夜その店にチンピラをひきつれて、千鶴という娘が飲みに来た。

この娘こそ、新興宗教、愛霊教団の娘霊媒「チズルノミコト」であった。真吾は、不敵な野望を抱いて千鶴を誘惑し、その身心をわがものとした。

愛霊教の教祖は、千鶴の父、篠原仙之助であるが、彼は完全な神がかり状態となり、教団の経営と実権は、軍人あがりの策師、大道寺剛造が握っていた。教団の大祭日。真吾は、千鶴に教えられた秘密の地下道から、教団の奥神殿へ潜入し、剛造の金庫を破って、極秘の重要書類を盗みだした。

バー「白夜」のマダム峯子も、この真吾の仕事に手を貸すが、怪しまれて捕われた。峯子は、破邪之室とよばれる怪奇の部屋で、数々の拷問をうけるが、真吾のことを白状しない。

奸策師、大道寺剛造は、破邪組と称する部下の鬼塚、黒林らに命じて、真吾の

★魔殿の侵略者真吾の挑戦に怒った剛造は、罪なき女体の膏血をさらに絞るのだった！

可愛がる盲目の少女、美雪を誘拐した。

そして美雪を責め、その悲鳴を電話にきかせて、真吾の挑戦に応じた。ところが、剛造に囲われている情婦の三津子こそ、その美雪の姉であった。……（前号まで）

色仕掛の取引

石神井のアパート、鶴亀荘――。

その二階の一室。広くはないが、こぢんまりとまとまった洋間である。

窓の外は、もう暗い。武蔵野の夜の冷えた空気が、窓ガラスに貼りついている。

冬島真吾は、ベッドのなかで腹這いになり、闘いの思索にふけっていた。

（……さすがに、全国百万の信者をチヨロマカシて、莫大な利益をむさぼっている怪物だ。ヤクザの芝鉄や、銀座の富豪マダムを相手にするのとは、わけが違う……）

愛霊教の秘密書類を、うまく盗みだしたのはいいが、こちら側の三人の女を、人質におさえられてしまった。敵ながら、あざやかな手際だ……。

真吾は、枕に顎をのせ、一人苦笑する。まず、女たちを救いださねば、思うぞんぶんの仕事はできない。それには……

そのとき、ドアをノックする音がした。

「はい、どうぞ」

英二かな、と思ったが、それにしては、いつもの車の音がしなかつ

た。真吾はギクリと半身をおこし、ベッドの脇にひいたカーテンから眼を光らせた。

「こんばんは……」

細目にあげたドアのあいだから、黒い魔物のように、するりと女があらわれた。

三津子である。今夜は、黒いモヘアのコートを着ている。真吾は、安心して拳銃をマットの下にいった。

「やあ、あなたは……」

五日前に、このアパート近くの散歩道で初対面をした。その翌日も愛霊教奥神殿で、巫女姿の三津子と顔をあわしているのだ。だが、真吾にそれはわからない。

「美雪の姉の、三津子です……。先日はどうも……」

そしてこの女は、大道寺剛造の情婦である。このことも、まだ真吾は知らない。

「どうぞ……。まア、おかけください。いまお茶をいれましょう」

真吾は微笑して、パジャマ姿のまま立ちあがった。

コーヒーをわかしながら、美雪のことをきかれたら、どうしようかと思っている。美雪が愛霊教にさらわれたのは、真吾にその理由と責任のすべてがある。

「あたし、今夜は、冬島さんにご相談があつてきましたのよ」

三津子の眼が、あやしいうるみをみせて、真吾を仰いだ。

「さア、なんででしょう？」

「あたしを、あなたのお仲間にいれて頂きたいの」

「ホウ。あなたに、宝石の趣味がありますか？　ぼくの仕事は、宝

石のセールスマンでして、まず鑑賞眼が……」

「ホホホ……」

三津子が、カン高い笑い声でさえぎった。

「冬島真吾さん。——このあいだは、痛かったわよ。ずいぶん、ひどく縛ったわ。おまけに、拳銃の先で、お乳のところをグリグリ突っつくんですもの……」

真吾の表情が固くなった。

（この女は、いったい何者だ！……）

「でも、あんたの度胸には、感心したわ。グツときたわ。惚れぼれしたわ……」

三津子には余裕がある。赤い爪の先で、タバコをつまみだし、火をつける。

（そうか！ あのと時の巫女か！……）

やっと思いたった。あの巫女が、美雪の姉の三津子だとすると……

「ねえ、真吾さん。いままで美雪にも隠していたんだけど、こうなったら、めんどくさいから、ズバリいうわ。あたし、大道寺剛造の女、つまり、メカケよ」

赤い唇を天井にむけると、フワリと白い煙りを吹いた。

「ウフフ、ハハハ。そうか、いや、こいつはどうも……」

真吾は笑った。あまりの意外さに、なんだか楽しくなったのだ。

「笑いごとじゃないの。美雪は可哀そうに、ひどい目にあって泣いているわ。それから、あなたの仲間の、峯子という女も……」

「もう一人、ユミ子という娘を知らないか」

真顔になって、真吾はきいた。

「さア……。あの子は、もう生きていないかも知れないわよ」

「なんだと！」

「くわしいことは、わからないけど……。破邪組の鬼塚という男にきけばわかるわ。アラ、この部屋には灰皿がないのね」

「破邪組の鬼塚……」

「真吾さん、あたし、峯子さんと、美雪を助けだしてあげるわ。——そのかわり……」

三津子は、テーブルの脚でタバコをもみ消した。

「そのかわり？」

「いま言ったことよ。あたしを仲間に入れてちょうだい。愛霊教のつとめのお仲間……」

「……」

たいした女だ。真吾は、腹のなかでうなった。

「あたし、いつも剛造のそばにいるでしょ。教団の経営のことだってよく知っているのよ。宗教って、あんなボロい商売ないわ。金を儲けるのは、貧乏人と病人を相手にしろっていうけど、ほんとだわ」

「ふうむ」

「ねえ、真吾さん。あたし、役にたつ女よ」

三津子の身体が、少しずつ真吾ににじり寄った。香水の匂いが、真吾の鼻さきに、あまくとどく。コートをぬぎ、胸が静かにくねりはじめると、妖しい色気が、ムンムンとにじみでてくる。

（こんどは、色じかけか……）

だが、そのアイデアも悪くはないな、と真吾は思った。

峯子と美雪を助けだせれば、それだけでも収穫ではないか。

「三津子……といったな」

真吾は、三津子の両肩に手をのせて、もう一度、その顔を読んだ。この眼の色なら、大丈夫だ。剛造からのまわし者ではない。

三津子は、眼を半分つぶった。唇を半びらきにして真吾を待つ。息がもう熱い。咽喉の下白い肌が、ぬめぬめと光って、みだらな誘いをみせる。

（この女の肌の、どこに顔を寄せても、剛造のあぶらと汗の匂いがしそうだ……）

乳房のふくらみをおさえて、真吾はちょっと、イヤな気持がした。その反面、興味もあった。

（楽器なんてものは、鳴らし手によって、また違った音色がでるものさ……）

下着一枚になった三津子を、真吾はかるがると抱きあげる。

ベッドの上に、どさりと置いた。部屋の鍵をかけ、ベッド脇のカーテンをひいた。

危険な脱出

愛霊教奥神殿、その座敷牢のなか。

十畳ばかりの畳敷きの部屋。その周囲には、鋼鉄製の格子がスッポリとおおいかぶさっている。

まるで、巨大な鳥籠だ。その鳥籠の中に、いま白い裸身をうつ伏している女二人――。

峯子と美雪である。

数々の責め苦にあい、ぐったりと身を投げだしている。しかも、二人の縄目は、まだ解かれていないのだ。両手を背中にねじあげたままきびしくかかっている縄。

（む……。なんて、ひどいことを……）

こんな鉄格子の中におしこめてまで、縄を解こうとしないのか。大道寺剛造の惨忍さは底がしれない。

峯子は、畳に顔を這わせたまま、苦しい息を吐いていた。くくりあげた両手首は、すでに苦痛の感覚はなくなっているが、乳房をしめつける縄が、呼吸を圧迫するのだ。

「――み、み、美雪さん……といったわね」

不自由な身体をねじまげて、同じ捕われの美雪に声をかける。

「ハイ……」

虫の鳴くような返事で、美雪の肩のあたりが、かすかにうごいた。

「しっかりしなさい。負けちゃダメよ」

「ハイ……」

「せめて、あなたの縄ぐらい、解いてくれてもいいじゃないか、ねえ……」

美雪の青白い透きとおった肌が、荒々しい縄の対照のもとに、なおさら青くみえる。竹刀の鞭のあとが、紫色のアザになっている。

「おねえさんは、どうして、こんなところへ……？」

見えぬ眼を峯子にむけて、美雪はいった。

「私より、あなたがみたい可愛らしいお嬢さんが、どうして？……」

「それが、ちっともわからないんです……」

うしろにまわされ、肩のあたりまで吊りあげられている美雪の手首。その指を、とじたりひらいたりする。それだけが、むなしい美雪の自由であった。

「あなた、真吾さんと、どんな関係なの？」
多少の嫉妬心をふくめて、峯子はきいた。

――そのときである。



鉄格子の外へ、人影が近づいた。足を忍ばせている。

「もし……」

座敷牢のなかへ、そっと声をかける。

また残酷な拷問の呼びだしかと、ギョッとしておののく峯子。

人影は、鉄格子に手をかける。

「真吾さんに頼まれて、あんたがたを助けにきたの。安心してちょうだい」

女の声——しかも、意外な言葉である。

「えッ！」

峯子の顔に、みるみるよろこびが溢れた。

（やっぱり、あの人は私を見殺しにしなかった……）

カチリ……と錠がはずされる。

「さ、早くでるのよ」

この女は、三津子である。剛造や破邪組の隙をねらって、この二人を逃がそうというのだ。鋭利なナイフで、峯子の縄をブツブツ切りほどく。手がふるえている。なにしろ、危険な冒険だ。

「あ、痛ッ」

ナイフの先が、裸の腕を突いた。血がふきでる。

「がまんしてよ。いそがなけりや危いの」

つづいて、美雪の縄も——

「どうもありがと。あの、あなたは誰でしょうか？」

美雪の問いに、三津子はこたえられない。こうなったら、いつかはわかることだが、こんなところで、姉とはいいたくない。

「さ、早く！」

この座敷牢は、剛造の部屋のすぐ裏側にあたる。三津子は、二人の

手をひいて、奥神殿の暗い廊下を走った。

千鶴之命の衣裳室。——その衣裳ダンスの扉をあける。この奥神殿のカラクリは、すべて知りぬいている三津子である。

秘密の地下道。三人はかけぬける。

「あの、なにか着るものは……」

息をきりながら、峯子がいった。峯子も美雪も、まっばだかなのだ。パンティー一枚、つけていない。

「心配しないで。この地下道をぬけると、すごい洋服ダンスがあるのよ」

地下道をつきあたり、階段をのぼる。ドアをあけると、なるほど豪華な洋服ダンスの中に、自分たちがいる。

「どう？ よりどりみどり。勝手に着ていいわよ。どうせあのキチガイ娘のものなんだから……」

手にふれたものを、峯子が先に着て、盲目の美雪には、頭からワンピースをかぶせてやる。

もちろん、ここは千鶴の私有する洋館のなかだ。あるじの千鶴は、いま不在である。三津子としめしあわせ、時間をはかって真吾が呼びだしているのだ。

「ね、あなた、もしかしたら、私のお姉さんじゃないかしら？」

三津子に顔をむけて、美雪がいった。

「さ、早く！」

それにはこたえず、三津子はせかせせた。

「声が、なんだか？……」——と美雪。

三津子は、二人をひっぱって外へでた。

夜である。月もない暗黒の空。教団の巨大なコンクリート塀のかけ

に、英二のオースチンが待っている。

「マダム、お疲れさま！」

英二が、ハンドルを握りながら、峯子をみて片眼をつぶった。

「あら、英二さん……」

峯子と美雪をのせると、英二の車は、フルスピードで走りだす。それを見送る三津子。

（ああ、うまくいった！……）

ホッとすると、膝が急にガクガクとふるえだした。

（これから、あとしまつをして、あたしも早いところ逃げださなけりや……）

大いそぎで、また地下道をひき返す三津子である。

三角木馬の恐怖

「おや？……」

座敷牢の錠があいている。

破邪組の鬼塚は、あわてて鉄格子のそばに寄った。うす暗がりの中にいる筈の、二つの白い裸身を眼でさがした。

「居ない！ 逃げた！」

だが、逃げられるはずはない。かたく縛ったまま放りこんでおいたのだ。

廊下にとびだし、二人の女を眼で追った。

（たとえ逃げたとしても、まっばだかだ。遠くへいけるわけではない！）

と——千鶴之命の衣裳室が、内側からそっとあいた。

鬼塚は、さっと身をかくした。

衣裳室のなかから現われたのは、三津子である。足音を忍ばし、あたりをうかがっている。怪しいそぶりだ。

「お三津さま。ミコトさまの御衣裳部屋は、私ども禁断の場所となっている筈ですが……」

鬼塚は、三津子の前に、ぐいと立ちはだかった。

「あっ……」

「座敷牢の囚人を、逃がしましたな？」

「さア、なんのこと？」

三津子は、とぼけてききかえした。

「捕えておいた二人がいないのです」

「あたし、知らないわよ」

三津子は、鬼塚の横をすりぬけようとした。その腕を、鬼塚がささずつかんだ。

「おッと……」

「なにをするの！ いやらしいことをすると、理事長にいつけるわよ」

「その理事長のところへ、一緒にいってもらいたいんですア」

すごい腕力で、三津子の身体をズルズルとひきずった。

（しまった！……）

三津子は、胸のなかで歯がみした。

大道寺剛造、ガッシリと腕を組んで三津子をみすえた。

「——おかしいな。あの女たちを逃がさねばならない理由が、お前にあるのか？」

剛造の部屋である。

「あの牢の錠が自由になるのは、理事長とお三津さまだけですからな……」

鬼塚が、鋭い眼で三津子の首すじのあたりをみおろしていった。

「三津、こたえろ。誰かに頼まれたな？」

「……………」

「冬島真吾という男か？」

「……………」

「この三年のあいだ、お前のめんどろは、ずいぶんみてやったつもりだぞ。いまさら裏切る手はないだろう……………」

「……………」

フン、なにいつてやがんだ。さんさん身体をオモチャにし、こき使っただけ使いやがったくせに。ゾウキンなら、もうとくにすり切れてらァ…………。三津子は、白い眼で剛造をみあげた。

「こたえなければ、おれがどんなことをするか、お前はもう、知りつくしているはずだな。よけいな手間をかけさせるンじゃない」

さとすように剛造はいった。

三津子は、唇を噛んで覚悟した。いまさら弁解は無駄だ。

（わかってるよ。さっさとはじめたらどうだい。お前の縄には馴れているさ）

そのとき、ゆうべのあの真吾の身体に包まれたときの陶酔が、なぜかふいに三津子の胸によみがえった。

剛造と真吾、どちらも同じ男性なのに…………しかも、真吾に抱かれたのは、ゆうべがはじめてなのに…………

（ああ、そのたった一度が、私の心と身体をうばってしまった。冬島真吾、おそろしい男だわ。女殺し…………。だが、もうあたしは、あの男から、はなれられない！）

この緊迫した場にもかかわらず、真吾の熱い息づかいを想って、三

津子の血がみだらにうずく。

その三津子の不敵な表情に、剛造は業を煮やして立ちあがった。鬼塚にむかい、眼で合図する。

唇をむすんで、うなづく鬼塚。

「——ううむッ…………」

三津子のうめき。破邪之室である。

しかも、早くも、三角木馬の上。かって、多くの無知な女信徒の血と汗と脂を吸いこんだこの木製の妖しい形をした馬。

「あ、ああッ…………」

まさか、自分が裸にむかれて、これにまたがるとは、夢にも思わなかった三津子。喰いしる歯のあいだから、苦痛がほとばしる。

「うふふ、痛いかな」

剛造、鬼塚、黒林、ほか三人の破邪組の荒くれ信徒たち。

うしろ手に縛った縄。縄で責められるのなら、三津子には耐えきれぬ自信があった。しかし、いきなり木馬の上にのせられるとは…………。

「む、むむッ…………」

身体を海老のように折りまげて、三津子はこらえる。落下しそうになると、五人の男がまわりから竹刀の先で突っついておさえるのだ。

木馬の背中、三角に削りとがらせた頂点が、みずからの重みで三津子の腿のあたりへ、メリメリと喰いこむ。背中から、頭のとっぺんまです、突きとおるような苦痛。

「いえ。なぜ峯子と美雪を逃がした！ 誰に頼まれたんだ！」

「……………」

「いわぬな。——よし、こいつの身体にもっと重みをつけろ！」

「はっ」

荒くれ男が二人、直径十五センチほどの鉛玉をもってくる。それを木馬にまたがった三津子の左右の足首にくくりつけるのだ。

重さ、三キロ。それが二個、六キロの重量が足に加わり、三津子の腰は、なおもぐんと木馬の背に沈む。

「ひいッ……あぁッ……」

股裂きになるかと思われる苦痛。腹のなかに、火の棒を突っこまれたかと思うほどの激痛。

「どうだ、痛いかな、苦しいか」

「あ、あなた、ゆ、ゆるして……。いうわ、いうわ！……」

ヒクヒクと咽喉があえぎ、うめくように訴える。

「おお、白状するか。おい、鉛玉をはずしてやれ」

左右の足首から、鉛玉がはずされる。前のめりになった三津子の顔が、わずかにもちあがる。

「あたし、冬島なんて男は知らないのよ。だけど、冬島をここへ手引きして、あんたの金庫を破らせた人間を知っているわ」

「なに、誰だ、そいつは！」

「チ、チズルノミコトよ。あ、あの女が、冬島を、自分の秘密の地下道から案内して、あんたの部屋へつれていったのよ」

剛造ばかりでなく、破邪組の信徒たちも、この言葉にはおどろいた。「まさか！」

思いもかけぬことである。愛霊教の司霊姫、千鶴之命が賊の手引……。

「ほ、ほんとうよ。でなくて、外部の人間が、こんな奥殿にまで入ってこられる筈はないじゃないの……」

剛造、大きな眼をギョロリとさせて、宙の一点をにらんだ。

「峯子と美雪を逃がしたわけは？」

「美雪は、あたしの実の妹なの。峯子はいでに逃げただけだよ」

「なに、美雪がお前の妹！……」

剛造には、これも意外である。

「あぁッ、早くおろして、股が！……」

三津子は、また馬上につつ伏した。髪の毛をつかんでひきおこすと、三津子はガックリと気を失っていた。

愛欲と金欲

さて、その千鶴之命は――

いま、真吾から呼びだしをうけ、世田谷豪徳寺裏のれいの旅館「梅月」で、はげしい愛欲の火を燃やしているのだ。

「――この頃はもう、あなたに三日逢わないと駄目なの……。夜一人だと、身体が熱くなって眠れないのよ。ねむっても、あけがたになると、あなたの夢をみるの……」

「女の身体は、そういうものなんだよ、千鶴……」

いいかげんな返事をして、真吾はべつのことを考えている。

（――三津子は、うまく峯子と美雪を助けだしてくれただろうか……）
うまくいってれば、いまごろ英二の車にのって、英二の新しい隠れ家にむかって走っている頃だが……。

「なに考えているの？ 千鶴と一緒にいるときは、ほかのことを考えちゃいや！」

汗でねばった千鶴の手足が、蛇のように真吾に巻きついていて。枕もとには、ピンクに染めた行燈。いつもの離れの日本間である。

郊外の夜は静かにふけて、二人きりの世界だ。

髪の毛のひどく長い千鶴と寝ていると、真吾は時代錯誤する。その長い髪を愛撫し、口にふくみ、ホッホッと噛む。

「かわいい、かわいい、ぼくの千鶴……」

ささやきながら、真吾は、頭のなかで、今夜これから千鶴にうちあけ、説得させる重大な言葉をさがしている。

「ねえ、千鶴……」

「なアに？」

「ぼくはこのあいだ、ホラ、渋谷のナイトクラブへいった晩、きみに近いうちにたいへんなことを相談するから、おどろかないでくれといったね？」

「うん。あたし大丈夫よ。たいていのことにはおどろかないわ。あたしは愛霊教の霊媒なのよ。信者を相手に、困ったことの相談、人生案内、失せ物、縁談、予言までやるのよ」

この人、いよいよあたしに結婚を申しこむのかな。あたし、この人を好きだけど、結婚なんてめんどくさいな。このままの関係のほうがスリルがあつていいじゃないの……と千鶴は思った。

「それをきいて安心したよ。——じゃ、まずこれをみてくれ」

真吾は、千鶴の手足をやさしく払いのけて、布団からぬけてた。

床の間の飾り戸棚の中から、中身のふくらんだ鞆をとりだす。

なんだ、結婚の話じゃないのか……。千鶴はちよつとガツカリして腹這いのまま、首をのばした。

「おどろくなよ」

鞆をあける。中からひきだしたのは、黒表紙の書類、帳簿類。ぜんぶで二十センチほどの厚さがある。

「なアに、それ？」

「まア、みろよ。一ページだけでも、読んでみる」

千鶴は腕をのばす。白い腕が、寝巻の袖から、肩のあたりまでまくれる。帳簿をパラパラッとめくって、その一箇所を読む。

「——青森支部特別奉納金、三百万円、岩手支部例年献上金、五百五十万円、宮城支部奉納金、七百三十万……あつ、これは、教団の……」

千鶴の眼が、まるくなった。

「そうだ。これは、きみも知らない、教祖もほかの理事たちも知らない、愛霊教団の秘密財政簿だ。全国の信者からかき集めた莫大な金。大道寺理事長が、いかに一人占めしているか。うまい汁を吸っているか。金を溜めこんでいるか……。そして、いかに怪しげなところに、出費しているか……」

真吾は、ページの一点を指さした。

「みたまえ。越中島の堂本甚太郎に、一千万円の支出。この堂本という男は、城東一帯のヤクザのボスだ。そして堂本は保守党の議員、川岸正五郎の子分だ……」

「……」

「大口脱税の立派な証拠も、この書類と帳簿の中に、ぎっしりと詰っている……」

「あ、あんたは、これを、どこから、どうして手にいれたの！」

「フフフ。教団の大祭日、きみが霊肉の舞を踊っているあいだに、大道寺の金庫からね……」

「じゃ、あのとき！ あんた、おそろしい人ね。それで、これから、なにをはじめようというの！」

「警察へもっていかうか。税務署へもっていけば、もっとよろこぶかな。フフフ」

「そんなことしたら、すぐ手入れよ。大道寺も、父もあたしも、理事たちも、ぜんぶ引っぱられるわ。せっかく苦労して築きあげた教団がつぶれてしまうわ！」

「ハハハ、そんなことはしない。冗談だよ。——ねえ、千鶴。そこで

相談だ。愛霊教の教祖は、神がかりで不能者、いや、これは失礼。きみの父親だったな。つぎに大道寺理事長——こいつが一番実力者だがその下に理事が五人いて、それぞれ経営の責任をもっているといったね？」

「ええ、そうよ……」

夢遊病にかかったように、千鶴はぼう然とこたえる。



その、五人の理事の名前は――

植草徳松。川内圭助。吉岡政二郎。新藤利貞。森辰蔵。……

「――なるほど、みなさん立派な名前だ。そこでだ。いいかね、ぼくは、その五人の理事に逢って、この帳簿をみせる。彼らはおどろく。大道寺剛造が、一人でこんな儲けていたのかとね。彼らは動揺する。剛造に対して不信の念を抱く……」

「……………」

千鶴は、あっけにとられて、真吾の顔をみつめるだけだ。

「――そこで、ぼくは彼らにこう言う。『剛造を理事長の座からひきずりおろして、ぼくを新理事長にしろ』とね。そして、それを承服させるために、その五人の理事たちに、五百万円ずつの現金を贈呈する。つまり、ワイロだ……」

「一人に五百万、合せて二千五百万、合せて二千五百万よ。そ、そんな大金、あなた持っているの!」

「持っている。いままで危い橋を渡って、せっせと溜めこんできたんだ。なアに、このボロい商売にありつけば、二千万や三千万、すぐ取り返せるさ。もちろん、これからは、きみにも教団の利益はわけ……」

「……………」

「なにしろ、ぼくには、信者たちに絶対の人気をもつ、チズルノミコトという、うしろだてがついているんだ。この計画は、必ず成功する……」

「大道寺が承知しないわ」

「ひきずりおろす!……どうしても抵抗するようなら……殺す。……あんな強欲非道の男、生きていても、世の中のためにはならないから

ね」

「南田さん、あんたって人は!」

「その南田というのも、実は偽名なんだ。ごめんよ。ぼくは生れつき用心ぶかいんだ。本当の名は冬島真吾――」

「まあッ……」

「――以上の話は、もちろん、内緒だよ。命にかけても守らなけりやならない秘密だ。わかってるね? いいね?」

真吾は、笑顔をつくって、子供のように指きりげんまんをした。それから、千鶴の上に荒々しくおおいかぶさった。胸をはだけ、その咽喉に、胸に、乳首に、狂おしく唇をおしつけた。

傷ついた心

東京の東はずれ、葛飾区の小菅――

たんぼの多い町である。やたらに雑草の茂った空地があって、田舎じみた風景。といっても、このあたりの空気は妙に埃っぽく、夏になると、大きな蚊がブンブンさわぐ。

かたむいたわら屋根と、バラックのような安普請の家が、無造作に隣りあっている。

うそ寒い枯木が五、六本立っている野原のはずれに、一戸建ての古い小さな家がある。家の横に黒塗りの車が一台、ひっそりと置いている。

ここが、真吾の弟分、机田英二の新しい隠れ場所であった。

これは、真吾の命令である。つまり、峯子と美雪をかくまうための家だ。東京の西端から東端へ、思いきって移転してきたのだ。

ここなら、破邪組という荒くれを駆使する剛造といえども、ちょっと気がつくまい。この家のうしろには、荒川の土堤がある。前のほうには、皮肉にも小菅の刑務所の高い塀がみえる。

「——いくら愛霊教が血まなこになったって、まさか刑務所の塀のかげに、おれたちが隠れているとは思わないでしょう。ねえ、マダム」
峯子を相手に、英二がすっかり悦に入っている。

「でも、お店のほうはどうなってるのかしら？ あたし心配だわ」
池袋のバー「白夜」を留守にしてから、もう十日ほどになる。

「そんなことは大丈夫。マダムは急用があつて旅行ということになって、店員たちがうまくやっていますよ。売り上げは少し落ちるでしょうがね。ま、それは兄貴にまかしておいて、マダムはひどい目にあつて身体を痛めているんだ。傷が傷だから医者を呼べないのが残念だが、ゆっくり養生してくださいよ」

「ええ。ありがとう……」

峯子と美雪は、終日布団のなかで、地獄の恐怖に痛めつけられた心と身体を休めた。

英二は、真吾に命令されたとおり、かいがいしく看病する。

「英二さん……」

と、美雪が呼んだ。

「なんだい、美雪ちゃん」

英二は美雪の枕もとに膝をすすめる。

「ほんとうのことを教えて。——冬島のおじさんやあなたは、どんなお仕事をしているの？」

「……………」

英二は、にがい顔をしてうつむいた。盲目の美雪には、その表情が

カンでわかる。

「宝石のセールスマンなんて、ウソね。なにか、あぶない仕事をしているのね？」

「……………」

英二は、この感受性の鋭い娘が、どうもにが手である。

（チェッ。兄貴はまた、なんでこんな気味のわるい小娘を可愛がったんだろうな……）

英二は返事につまづいて、古畳のケバをむしっている。

「それから、ゆうべ私たちを助けてくれた女の人、どうも私のお姉さんのような気がするの。でも、私のお姉さんが、あんなおそろしいところにいる筈はないし……。なにがなんだか、私にはもうわからない！……」

美雪は、寝がえりをうつと、はげしく顔をおおった。

「美雪ちゃん、あなたも疲れているんだから、もう眠ったほうがいいわ。明日になれば、真吾さんもきつときてくれるわ……」

峯子が助けぶねをだした。そして、自分はすぐに軽い寝息をたてはじめた。

だが——美雪はカンがたかぶって眠られない。

信じていた隣室のおじさん。親切で詩の好きな真吾さん。そのおじさんが、なにかあぶないことをして命を狙われている。自分までが、その巻きぞえになって、ひどい目にあわせられた。それなのに、警察にも訴えないところを見ると、おじさん自身が、よくないことをしているに違いない。

すると、いままで、あの人は私をだましていたんだろうか……。

けがれを知らぬ少女の心は、いま、むざんに傷つき、血を流してい

た。

裸にされて縛られ、柔肌に鞭うたれたときよりも、真吾に裏切られたことのほうが、美雪にはショックだった。はげしい心の痛手だった。

(おじさんのバカ、バカ！……)

それから、そうだ、やっぱりゆうべ助けてくれた女の人、姉さんだ。わざと声を低めて変えていたけれど、お姉さんに違いない。

お姉さんまで、私に嘘をついている！……

美雪は、唇を噛んだ。

長いまつ毛のあわせめから、透明な涙が、ホロリとこぼれた。あとからあとから溢れて、枕をぬらした。

長いあいだ声をしのばせて泣いたあと、美雪は、そっと寢床をぬけだした。隣りの峯子は、よく眠っているらしい。

英二は、さっき車にのってどこかへ出かけて留守である。

美雪は、そろそろと手さぐりでスカートをはき、セーターをかぶった。コートを着て、外へでた。夜風がつめたい。

馴れない道を、一步一步、足を踏みしめて歩いた。美雪には、もうこの家にいることが耐えられなかった。

死にたかった。あまり遠くないところで、電車の通る音がした。私鉄の東武電車が走っているのだ。

かたく凍りついた道を、美雪は、その電車の走る音の方角へ、そろそろと足をむけていた……

復讐の炎

同じころ――

英二は、小菅から車をとばして二十分。本郷東大裏の、青葉荘というアパートで、鼻の下を長くしていた。

真吾から「二人の女のそばから絶対に離れずに、充分にめんどろをみるように」といわれている英二である。

その真吾の命令よりも、彼の心を左右する女が、このアパートにいるのだ。

――鮎子である。銀座の富豪マダム酒井信乃の一人娘。かつて白昼に誘拐し、ホテルの一室ではげしい辱しめを与えた娘だ。そのことが原因となって倫落し、新宿のキャバレーにいたるところを見つけた英二は、金をだして彼女をこのアパートに囲ったのである。

「――今日は遅かったのね。さびしかったわ……」

英二の首に腕を巻きつけると、ズルズルとベッドにひきずりこむ。「待てよ。そうあわてるな」

英二は、洋酒棚からウィスキーをついで飲む。その彼の背中を、じつと見つめる鮎子の眼に、ギラギラと燃える憎悪。

情夫気どりで、いい気になっている英二は少しも気がつかない。鮎子にとって、英二こそ、母と自分を同時に犯し、すべての幸福を

踏みにじった男だ。こうして近づき、身体を与えながら、復讐の機会を狙っている。

だが、鮎子の狙う仇敵は、英二だけではない。もう一人、英二の兄貴という男がいる。そいつこそ、鮎子の運命を狂わせた首謀者なのだ。

(あいつの名前を知り、居どころをたしかめたときにこそ、あたしは捨身の復讐をしてやるんだ！……)

だから、折にふれて鮎子は、英二にその男のことをきく。しかし、英二もそこまでは女に気をゆるしていない。

「——好き、好き、あんたが大好き！ もっと強く、強く抱いて！」
乳房をつかんでおしつける。

「鮎子。おれはいま、兄貴と一緒にすげえ仕事にとりかかっているんだ。こいつが成功すりゃ、こんな安アパート暮らしはさせねえぜ。静かなところ、気のきいた家でも建ててやらあ……」

「あんたの兄さんという人、どこに住んでるのよ。逢わせてよ。あたし、おぼえてるわ。ガッチリしていて、すごくエネルギー感を感じた人。ステキだわ。もう一度逢いたいわ……」

「お前を兄貴に逢わせたらな、おれの顎は、顔にくっついていねえよ。ヘタをすりゃ、叩ッ殺されちまう」

「アラ、どうして？」

「兄貴は用心ぶかい男なんだ。お前は、おれ達の仕事の目撃者であり被害者だからな」

「ふうん……。もうあんなこと、あたしは忘れちゃったんだけどな」
チクショウ！……だが、いつかは見つけたし、恨みを晴らしてやる。

あたしの手におえなかったら、そのときは警察に訴えて、二人ともブタ箱にほうりこんでやる。それだけじゃ、あたしのくやしさはどうにもならないんだが……。

英二の胸に顔をうずめながら、鮎子は炎のような決意をかためるのだ……。

そして、やはり同じそのころ——

愛霊教団本部の祈禱室では、教祖、篠原仙之助が、ただ一人、神殿にむかって冥黙合掌。祈禱の最中であつた。

千鶴のいうとおり、仙之助は、すでに神がかり的状态におちいって

この一室に閉じ籠ったきりである。

「教祖さま——」

部屋の外で、声がした。

「誰じゃ……」

金襴をあけて入ってきたのは、大道寺剛造である。

「教祖さまに、ちょっとお耳を……」

「剛造か。なにことじゃ」

仙之助は、尊大にふりかえる。顔、手足の肉はおち、枯木のように痩せ細った老人である。白髪が眉が、瞼にまでたれ下っている。

「——重大なご相談がありまして……。わが教団の浮沈にかかわる問題でございます」

相手を教祖として、丁重な言辞を弄しているが、腹のなかでは、この半狂人の年寄を侮蔑している剛造である。

仙之助も、十二年前は金儲けが目的ではじめた教団であつたが、いまはこの乱れた世を救うものは自分意外にないと信じている。救世主になったと錯覚しているのだ。このほうが、剛造にとっては、まことに都合がいい。

「——実は、ミコトさまのことなのでございますが……」

「千鶴が、どうかしたのか？」

「いいにくいことなのですが、申しあげます。——近頃、俗世の男と愛欲に走り、情痴に溺れ、目に余る所業がつづき、私ども憂慮しております。このことが、信徒たちのあいだに知れ渡ろうものなら、わが教団の権威尊厳は失墜、まことに由々しき一大事……」

剛造は、時代がかった熱弁をふるう。

「なに、千鶴が男を？……」

「それも、なにやらタチの悪い、無頼の男と……」

「ふうむ……」

仙之助教祖は、眉をひそめた。愛霊教の司霊姫が俗界の男と情痴に溺れる……。真実だとすれば、たいへんなことだ。

さらに剛造は、千鶴の素行について、誇張と創作のいり混った報告をつけ加える。

「——で、ございますれば、この際、たとえ相手が姫であろうと、このような悪霊に身心をむしばまれていることが判明した上は、おそれながら、破邪浄霊の儀を行なうほうが、姫のおんため、わが教団の繁栄のためにも、よろしいかと……」

「うむ……」

仙之助は、眼をつぶった。

「禍根は早いうちに絶てと申します。姫がそれで目ざめ、心を改めてくだされば……」

のしかかるような口調で、剛造はいった。

「うむ。そなたにまかせる」

ぜひもない、という表情で仙之助はこたえた。

（しめた！）

しかし、顔にはださず、剛造は重々しくうなずいて立ちあがった。

大文字柱のいけにえ

「——ミコトさまが、お帰りになられました……」

剛造の部屋に知らせにくるのは、破邪組の鬼塚。

「よし。したくはできているな」

剛造の眼が、ギョロリとうごく。

ふたたび、破邪之室——

いつのまに組みたてたのか、白木の十字架……いや、厳密に言えば十字ではない。大の字型のハリツケ柱である。

この部屋の中央に、ギッシリと不気味に立っている。

「——あたしに用って、なんなの？　もう夜遅いのよ。あたし眠いわ。明日にしてくれない？」

千鶴が姿をみせた。コートの下には、真ッ赤なバルキーセーター。腰にはびっちりタイト・スカートを付けて、スマートな現代洋装。身にせまる危険を、彼女はまだ少しも感づいていない。

「——千鶴さま。今夜は、あなたの肉体から、わしが悪霊悪鬼を追ひ払う。覚悟なされ」

うす笑いをうかべながら、剛造がいった。

「あたしの身体に悪霊？　ホホホ、じょうだんじゃないわ」

千鶴は、剛造に背中をむけた。

「お待ちなさい、千鶴さん。今夜も冬島真吾の腕に抱かれてきたのですか？　フフフ」

千鶴の顔色が青さめた。そのとおりである。そして、たったいま、真吾の愛霊教のとり計画に、加担の約束をしてきた千鶴だ。

「ほほう……顔色が変わった。よもやと思ったが、やっぱりそうだったのか、うぬ！」

剛造の声音に、嫉妬のひびきがある。

「なんのことよ。あたし知らないわ！」

かろうじて千鶴はたちなおった。

教祖の娘であり、司霊姫という地位にある自分だ。理事長ごときに



脅かされてなるものか。あたしには、あの不敵な男、冬島真吾がついている。

「知らなければ、その身体にきいてやる。教祖には、ことの次第をすべて話し、お前を、破邪浄霊することの許しを得てきた……」

「えッ、お父さんの許しを！」

千鶴は敏感に剛造の腹中を察知した。その巧言で父を説得したにちがいない。

破邪組の狂暴なリンチは、百も承知の千鶴である。本能的に身をひ

るがえし、出口の扉に突進した。だが、すでに鬼塚がその前に、たちはだかっていた。

「鬼塚、どいて！」

「エヘヘ……」

この男は、剛造の命令だけしかきかない。

「千鶴、いつか一度は、お前の肌をゆっくり責めてみたいと思っていたのだ。お前は美しくて利口で高慢ちきだ。痛めがいもあるというものだ。——それッ、千鶴をハリツケ台にくくりつけろ！」

剛造が、手にした弓の折れをピュウとふった。

「いやッ、いやッ」

千鶴は、部屋の中を逃げまわる。五人の男が、手をひろげてそれを追う。逃げられる筈はないのだ。ただ、壁を伝いくるぐるまわるだけである。

一人の手が、ついに千鶴の襟首をとらえる。羽がいじめにする。コートをはぎとる。

「やめて！ バカ！」

千鶴は、手足をめちゃくちゃにふりまわしてあばれる。

「うふふふ。いままで、ほかの信者たちがやられているときには、平気な顔で眺めていたくせに、いざ自分の番になるとこわいというのか。勝手な娘だ……」

「バカ！ バカ！ はなせえ！」

女が全力をだして抵抗すると、男五人でもてあます。

「よくあばれるな、フフフ。よい、裸にせずとも、そのまま縛りつけろ。うごけなくしてから、ゆっくりと裸にしてやる」

大の字型のハリツケ柱。両手は横に水平にのばし、両脚は八の字型

にひらいて——

「ああ、痛ッ！……」

手首に足首に、ギリギリと縄がまきつく。柱に縛りつけられる。スカートが裂けた。

もう、うごけない。胸をゆすつても、腰をふるわしても、縄目はかたい。もう駄目だ。

網にかかった魚。罟にはまったウサギ。

「——それでよい。わしは千鶴さまに話すことがある。お前たちは、ここから出ていってくれ」

「は——」

五人の男は、ゾロゾロと姿を消す。

ふたたび、内側から錠をおろす剛造。

台上の千鶴を、ゆっくりとみあげる。剛造の立つ、目の高さに千鶴の腿のつけねあたりがある。

「——さて、千鶴。わしも気が短かい。話は早くすまそう。——お前や、冬島の考えていることは、すでにわしにもわかっている。愛霊教をのつとる……ハハハ、バカバカしい話だ。なア千鶴、そんなどの馬の骨だかわからぬ男の、あまい口なんかにだまされずに、ここでもう一度、わしと仲良くしよう。手を握ろう……」

「……………」

「そうすれば、これからは金のわけ前も、望みどおりにしよう。もつとすばらしい邸も建ててやろう……」

「フン……」

蒼白になりながらも、千鶴は鼻のさきで笑った。

金が欲しくて真吾と約束したのではないのだ。真吾を愛しているの

だ。真吾のためなら、命も投げだす気になっている千鶴だ。

この恋に狂った女の心が、剛造にはわからない。

「——いやか。それでは、わしが困る……」

「困るもンか。いままで、さんざん儲けたくせに……」

「いや、困る。おれは、もっと儲けたいのだ。もっと儲かるのだ。この商売は……。それには、チズルノミゴトという、ありがたい司霊姫が必要なのだ」

「あたしはもう、あんたみたいな奴に使われるのは、いやだよ」

「そうか——。だが、必らず、うんといわせてやるぞ」

いつのまにとりだしたのか、剛造の手には、大きなたちバサミが握られている。

それを、ぐいと千鶴の顔につきだし、パチパチと鳴らした。

「ひえッ……」

たじろぐ千鶴。なにをしようというのだ。千鶴の長い髪を切ってしまおうというのか。

と——剛造は、千鶴のスカートの手をかけ、その裾からハサミでぞりぞり切りはじめたのだ。

「ああッ、なにすんのよ、バカ！」

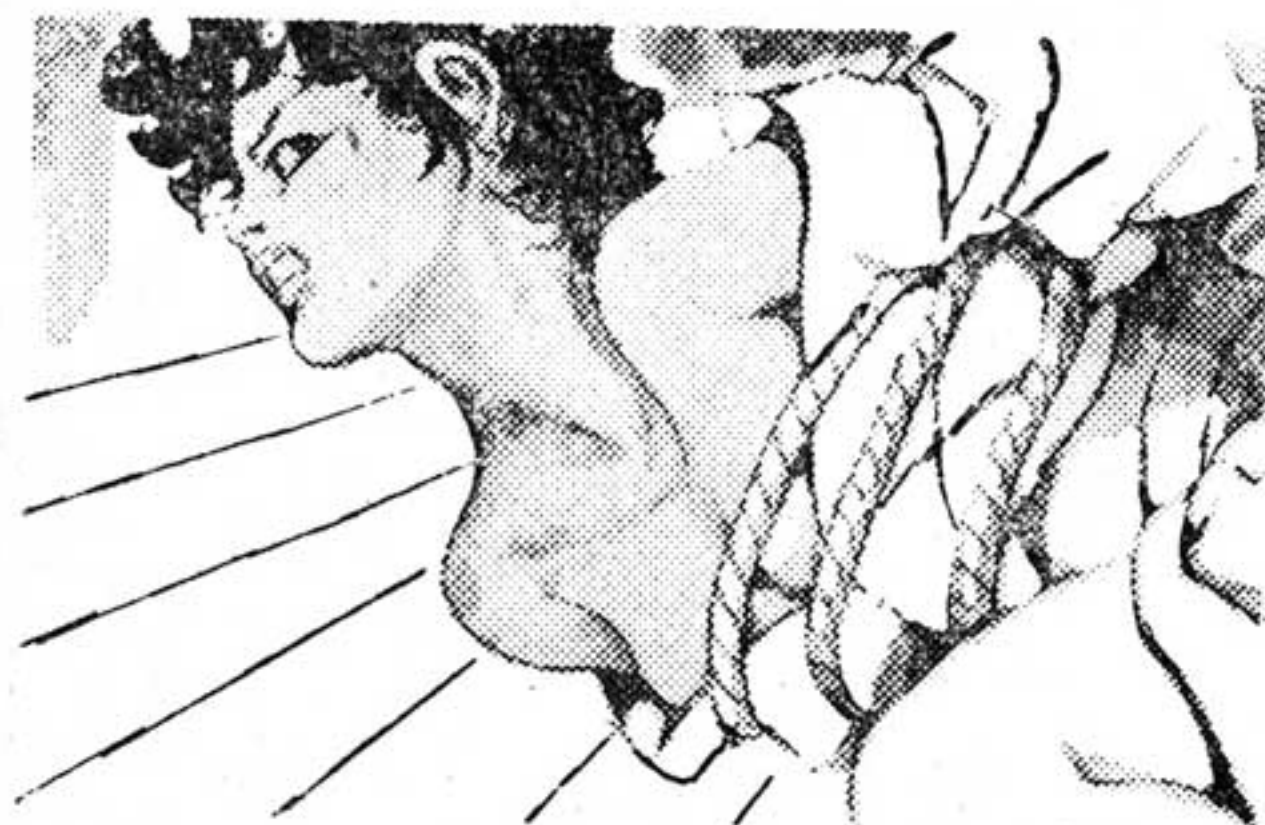
スカートを縦に切り裂き、ひきはがす。

つづいてセーターに手がかかり、裾から胴、胸へと、ジョリジョリ音をさせて切り裂いていく。そして、ひきちぎる。さらに下着を……つまり、裸にしていくなのだ。

ジョリ、ジョリ……

その音、その手ごたえ、肌着のぬくみ……

それらを楽しむように、剛造は眼を細め、わざとゆっくりと、千鶴



妖異サスペンス・連載第五回

怪異愛霊教

怒りに狂った剛造の網にかかった女は苦悶に白い四肢をもがらせる。／盲目の処女は絶望の身をどこまでさまようのか？

★次号最高潮。／

飯田 豊吉 画・山田 彬弘

(以下次号)

の身にまとうものを少しずつ切り離していく。

「いやッ、やめて、やめて！」

皮膚に触れる不気味な刃物の冷たさ。

「うるさいッ！」

剛造は、のびあがると、切り捨てた肌着の布で、千鶴の口に猿ぐつわを噛ませた。

ギリギリと、頬に喰いこむほどの力で……

「むウ、むむむ……」

千鶴は、胸をのけぞらせ、白い腹を波うたせてもがいた。

裏窓 既刊号目次

34年(三月号) 凄艶毒婦妖婦特集

○グラビア・牛の骨と女……………藤沢 修

○絵物語・剝製幻想曲……………画・古正 英生

○絵物語・妖艶娘縛絵……………中島 喜美

責め絵芸者……………矢桐 重八

キスで血を拭け……………杉本 駿

獄門首お銀……………小田桐 爽

姐妃のお百……………橋爪 彦七

閻魔のお秀……………中林 節三

毒蛇のお美津……………葉田 光

地獄沼の妖女……………藤見 郁

罪だぜ警部……………橘 新太郎

女体と蠅……………黒羽 新

連載・怪異愛霊教(三)……………飯田 豊吉

まぼろし侍・人肌将棋……………黒木 忍

開化女囚吟味……………鈴木 和夫

抱き寝如来……………円城寺 達

泣き方を教えて……………鳴滝 三郎

銃口は笑った……………東 零児

皿を割る女……………伊達 徹

つばくろ道中……………明石 汐子

女間諜散華……………藤山 秀緒

(定価百二十円・送料十二円)

34年(二月特大号) 変幻俠盗義賊特集号

○グラビア・ヌード傑作選……………藤沢 修

○絵物語・誘拐に気をつけろ……………画・古正英生

○絵物語・続肌地獄……………画と文・中島喜美

○絵物語・蛇夜庵の女……………画と文・歌川大雅

魔女の神酒……………南村 蘭

湯文字盗賊……………島本 春雄

俺は義賊だ!……………小田桐 爽

幽霊小判……………中林 節三

山荘のヘリオトロップ……………黒羽 新

賄賂裸人形……………葉田 光

盗っ人傀儡師……………橋爪 彦七

女に瓶はいらない……………橘 新太郎

変化中条流……………矢桐 重八

お龍月夜がさ……………藤見 郁

警怨私刑抄(二)……………鈴木 和夫

骨に憑かれた女……………溝呂木寂子

肌責め稲荷……………円城寺 達

信長奇矯録……………志摩 不二

連載・怪異愛霊教(二)……………飯田 豊吉

まぼろし侍・生首往生……………黒木 忍

ガラスの檻……………蝦蟇家一美

洞窟の蠟人形……………川野 京輔

矢部駿河守端書……………明石 汐子

烈しい女……………京極 美岐

美胡の足……………潮 寛二

泰西俠盗伝……………峠 浩介

貞女サートリー……………北羽 奥男

(二月特大号、定価百五十円・送料十六円)

34年(新年号) 裏窓忠臣蔵特集

○グラビア・手と足の表情……………藤沢 修

○絵物語・紅蜘蛛と殺人鬼……………山田彬弘・画

○絵物語・悩乱犬小町……………中島 喜美

肌絵凶悲願……………中林 節三

魔俎侍始末記……………藤見 郁

引き廻し小町……………小田桐 爽

妄執美女どもえ……………夏本圭之助

糊紅地獄……………松井 籟子

陰陽元禄侍……………島本 春雄

義央をめぐる人々……………橋爪 彦七

狂異忠臣蔵……………宇治川 龍

輪廻ごよみ……………杉本 駿

お軽と三平……………葉田 光

遥泉院切腹……………蝦蟇家一美

覗き見平内……………矢桐 重八

連載・怪異愛霊教(一)……………飯田 豊吉

まぼろし侍・蛇神異変……………黒木 忍

黒い唇……………京極 美岐

海底のハレム……………橘 新太郎

肌責め稲荷……………円城寺 達

復讐陣……………明石 汐子

男装十文字腹……………藤山 秀緒

押入れの中のひとりごと……………柱 安佳

(定価百二十円・送料十二円)

33年(十二月号) 奴隷と圧制特集号

○グラビア・若いヌード……………藤沢 修

○絵物語・裸女島綺談……………文・夏本圭之助 画・山田彬弘

○緋縮緬草紙……………画と文・中島 喜美

煩惱奴隷宮……………小田桐 爽

売春奴隷街……………飯田 豊吉

鵬(じょうう)雨……………衿垢 残

象牙の王座……………橘 新太郎

虜囚美人伝……………葉田 光

女奴隷船事件……………檀 達二

女奴隷の宝石……………藤見 郁

奈落の檻……………志摩 不二

その箱をあけるな……………佐々木 力

悲願八丁堀……………橋爪 彦七

伽羅肌ごよみ……………岩堀 光

白い炎(二)……………河野 春雄

外国雑誌に現われた女奴隷……………峠 浩介

処女の代償……………蝦蟇家一美

隠密覚書・髑髏提灯……………島本 春雄

穴倉菩薩……………円城寺 達

黄色い毒蛾……………溝呂木 寂子

壺地獄……………川口 直樹

泡(あわ)……………松井 籟子

化身歓喜女仏……………梅田 楠雄

奇妙な自殺者達……………神戸 裕一

(定価百二十円・送料十二円)

33年(十一月号)陰謀叛乱秘録特集号

○絵物語・廃坑は知っていた……………秋吉 櫛

○「ドクトル魔美の唇……………歌川 大雅

○グラビア・みのりの夜……………藤沢 修

無頼征韓党……………葉田 光

張孔堂秘策……………橋爪 彦七

妄執菓子絵巻……………岩堀 光

烏羽玉侍……………高木 龍二

泣き叫ぶ人工衛星……………海部 陽三

おせいさまと隠亡……………加山 和雄

讐怨私刑抄……………鈴木 和夫

ナチス秘密諜報部の魔女……………樋口 逸馬

淫らな釣師……………京極 美岐

紅蓮の女……………志摩 不二

白い炎……………河野 春雄

隠密覚書・船若狂女……………島本 春雄

女漁り旅……………野田 淳

ゲヘナの火……………麻布 義朗

夜の秘潮……………松井 籟子

穴倉菩薩……………円城寺 達

臀の下の男の小指……………藤見 郁

ザルドの帝王……………竹谷 十三

裏窓のぞき(読者評論)……………天野 謙

(定価百二十円・送料十二円)

33年(十月号)怪異復讐譚特集

○絵物語・女水芸師……………〔文〕櫛笥重三郎

○絵物語・地獄舟……………〔文〕古正 英生

○絵物語・鬼火河岸……………〔文〕中島 喜美

○グラビア・光と肌と……………〔文〕歌川 大雅

○絵物語・蝙蝠座の秘密……………〔文〕夏本圭之助

○絵物語・死棺小町……………〔文〕飯田 豊吉

連載完結篇・地獄の乳房……………〔文〕島本 春雄

隠密覚書……………橋爪 彦七

旗本閨房譜……………高木 龍二

続肌呪文……………竹谷 十三

ストック・ホテルの怪……………矢桐 重八

お島仇討旅……………葉田 光

膚塚美女因果……………三国沢 隆

変化若衆……………小田桐 爽

妖異死神旗本……………宇治川 龍

もうじき命日……………

傲れる女達……………股野 元

足にひそむ悪魔……………溝呂木 寂子

毒蝶の宿……………松井 籟子

妖氣を誘う家……………猿若 屯平

死を売り歩く男……………尾島 新

怪異変幻抄……………鈴木 和夫

(定価百二十円・送料十二円)

33年(九月号)敗戦落城秘史特集号

○絵物語・夢魔の殺人……………〔文〕山田 彬弘

○「雪姫受難……………〔文〕歌川 大雅

○「女夜叉……………〔文〕東 桂史

○グラビア・夜のえくぼ……………〔文〕藤沢 修

落城悲愴譜……………宇治川 龍

餓鬼供養……………伊能 孝

関ヶ原悲歌……………橋爪 彦七

父恋い娘旅……………矢桐 重八

怒りの焰……………麻布 義朗

落城洞窟地獄……………高木 龍二

疾風馬賊黒鷹団……………南村 蘭

琴姫散華……………葉田 光

戦国女房……………小山龍太郎

アポロの少年……………砧 真砂男

切支丹殉教史(下)……………鈴木 和夫

変性の破戒尼……………梅田 暖雄

髪地獄……………志摩 不二

邪宗門小町……………小田桐 爽

隠密覚書・妖雲小倉城……………島本 春雄

おつや櫛……………鷺尾 素人

連載妖異・地獄の乳房……………飯田 豊吉

(定価百二十円・送料十二円)

33年(八月号) 一揆殉難秘史特集号

○口絵・泥人形	画と文・歌川 大雅
グラビア・渴きの夜	カメラ・藤沢 修
天保血笑録	小田桐 爽
美作一揆秘譚	葉田 光
独立黒月党	南村 蘭
一揆に咲く花	曲 二十八
四郎時貞の復活	宇治川 龍
美女門一揆	高木 龍二
黒旋風一揆	小山龍太郎
人魚と短剣	画・沖 涉二
切支丹殉教史	鈴木 和夫
宗吾秘命	橋爪 彦七
お綱草紙	画と文・東 桂史
天正あじさい若衆	大門 正人
黒い陽炎	浜松 武
隠密覚書・幽霊奉行	島本 春雄
佐渡夫人の魅惑	尾嶋 新
蜥(とかげ) 蜴	伊能 孝
秘密のよろめき	三国沢 隆
連載・地獄の乳房	飯田 豊吉

(定価百二十円・送料十二円)

33年(七月号) 裏窓妖異譚特集号

○口絵・花鬘饅頭	画・古正 英生
蒼白い手	画・高須信次郎
黒猫小町	画と文・歌川 大雅
あおみどろの座	宇治川 龍
七化け死霊	矢桐 重八
怨霊狂い化粧	橋爪 彦七

変化屋敷

妄(もうきょう) 鏡	高木 龍二
寄生人の恐怖	酒井 皓介
かっぱ沼の魅惑	前田 勇
近松門左衛門の血	伊能 孝
天使をいじめるな	平林 啓子
苛責厳刑譚	佐々木 力
黒い陽炎	鈴木 和夫
いざりが夜にやってくる	浜松 武
ハラハラ場面オンパレード	否笠 一郎
K君の女装系図	高円寺 一郎
隠密覚書・裸女小判	滋賀 雄二
お町の罪	島本 春雄
危険な曲り角	小田桐 爽
連載・地獄の乳房	竹谷 十三

(定価百二十円・送料十二円)

33年(六月号) 女忍者女間諜特集号

○口絵・女城鶴巻地獄	画・岩堀 光
○グラビア・夜の砂時計	構成・喜多 玲子
蛇林洞秘文	南条 慎一
間諜曉に消ゆ	黒羽 新
伝奇怨霊沼	曲 二十八
血染曼陀羅	橋爪 彦七
間諜散華	藤見 郁
雪肌密書	葉田 光
紅紐呪縛	小田桐 爽
傾城忍者	高木 龍二
慶安女忍道	円城寺 達
連載・地獄の乳房	飯田 豊吉

隠密覚書・妖異呪文鏡

極刑秘抄	島本 春雄
女館南蛮船	鈴木 和夫
卯の花くだし	画と文・歌川 大雅
蛇使いの王女	大門 正人
死者は蘇える	藤 琴也
悪魔は見えていた	矢桐 重八
	神行 京一

裏窓増刊・第七集 耽奇小説③

33年(五月号) 裏窓妖異捕物特集号

○絵物語・乱世艶色隠密記	画・山田 彬弘
○絵物語・血まみれマリー	画・秋吉 修
グラビア・別離の詩	撮影・藤沢 修
新連載・地獄の乳房	飯田 豊吉
愛憎血潮傘	松井 籟子
大名屋敷の怪	橋爪 彦七
獄門首供養	宇治川 龍
麝香肌小町	高木 龍二
妖異お告げ狸	矢桐 重八
吸血艶魔伝	青木 憲一
アマゾン流刑奇譚	大町 三郎
女刺青師	歌川 大雅
戦国刑譚	真野 麗
黄色い帯をしめた少女	竹谷 十三
海賊貴族	川野 京輔
拷問と処刑	鈴木 和夫
マダム僕をどうぞ	青葉 繁
連載伝奇・お小夜嵐	高月 大三
隠密覚書・美女秘巻	島本 春雄
服地がほしい	岬 洋之助
波に笑う女	柳生 亘

(定価百二十円・送料十二円)

裏窓増刊・第六集 耽奇小説②

33年(四月号)あぶちっく・さすぺんす特集

(定価百二十円・送料十二円)

黒い王座……………ワトスン・独田
地獄部隊……………大宮敬一郎
隠密覚書・幽鬼大名……………島本 春雄
飯面の青春……………藤川 博
連載伝奇・刺青弁天……………中林 節三
白い顔の悪魔……………矢桐 重八
連載伝奇・お小夜嵐……………高月 大三

魔の二十分間……………横山 正勝
野鷲復讐奇譚……………神行 京一
手提金庫の鍵……………三国沢 隆
肌絵を蒐める男……………大河内常平
桃色の替え玉……………京極 美岐
冷酷な雌獣……………宇治川 龍
鼻から上だけを見た……………橋爪 彦七
情炎千姫絵巻……………黒木 忍
禍夜草紙……………島本 春雄
隠密覚書・闇若衆伝奇……………大門 正人
十寸髪執念……………榎 剣吾
仁俠恋まんじ……………中林 節三
連載伝奇・刺青弁天……………飯田 豊吉
美代吉捕物暦……………鈴木 和夫
伝馬町牢屋敷……………滝 一平
蛇女郎呪文……………高月 大三
連載伝奇・お小夜嵐……………高月 大三

裏窓増刊・第五集(耽奇小説)①
(定価百二十円・送料十二円)

美しき奴隷ジェリスナア……………海部 陽三
闇に生きる義士……………島本 春雄
元禄二枚道……………橋爪 彦七
黄泉路の影……………宇治川 龍
投電燈秘聞……………松井 籟子
妖説絵図まんじ……………窪村 弘
元禄御安曆……………真野 麗
雪嵐お美代さんげ……………伊能 孝
血まみれ観音像……………飯田 豊吉
元禄乱れ小袖……………黒木 忍
二人の内蔵助……………小山龍太郎
あしのうら源内……………岬 洋之助
こんばんわ……………鳴海 玄吉
墓屋敷……………神行 京一
狐(きつねび)灯……………松井 籟子
白い芋虫……………否笠 一郎
SS秘密クラブ……………横山 正克
隠密覚書・逢魔娘……………島本 春雄
連載伝奇・刺青弁天……………中林 節三
リユカ大王の宝庫……………藤 琴也
放浪の記……………伏見 和夫

33年(三月号)裏窓妖婦伝特集号
(定価百二十円・送料十二円)

33年(二月号)裏窓遊俠伝特集号
(定価百二十円・送料十二円)

32年(十二月号)あぶちっくすりらあ特集
(臨時増刊・定価百三十円・送料八円)

○口絵・お百化粧草紙……………画・東 啓三郎
十六夜お新……………橋爪 彦七
白狐呪伝……………青木 憲一
奴の小せん……………松井 籟子
刺青百万石……………高木 龍二
まぼろしお徳……………伊能 孝
松風吟味……………宇治川 龍
からす猫お紋……………飯田 豊吉
らしやめん駕籠……………小山龍太郎
紅筆さんげ……………岬 洋之助

33年(新年特大号)あぶちっく忠臣蔵特集
(定価百二十円・送料十二円)

32年(十一月号)あぶちっくすりらあ特集
(臨時増刊・定価百三十円・送料八円)

妄(もうしゅう)執.....大河内常平
 輪(りんね)廻.....三谷 春樹
 殺(さつ)意.....岬 洋之助
 夢(むえん)魔.....岩堀 光
 死体工場.....大町 三郎
 妖夢呪薬譚.....窪村 弘
 青い顔の男.....飯田 豊吉
 歪んだ眼.....真野 麗
 狐(きつね)灯.....松井 籟子
 死を弄ぶ女.....花町 右門
 紅燈夢.....横山 正克
 血の蜜月旅行.....陶山 密
 刺青弁天.....中林 節三
 (定価百二十円・送料十二円)
 32年(十一月号)あぶちくみすてりい特集
 ○口絵・魔屋の妖精.....秋吉 鬱
 人差指の妬み.....朝山 蜻一
 闇(やみ).....大河内常平
 悪魔の祈禱師.....神行 京一
 闇入者.....三宅 一郎
 地獄から殺しに来る男.....真野 麗
 金曜日の戦慄.....鳥羽 暎子
 殺意の黒白.....宇治川 龍
 窓(まど).....岬 洋之助
 傷痕だらけの人魚.....松井 籟子
 なめくじ幻想曲.....坂 みのる
 宝石呪縛.....黒木 忍
 連載伝奇・刺青弁天.....中林 節三
 隠密覚書・鬼姫変化.....島本 春雄
 恋人形.....鳴海 玄吉
 罠にあえぐ女.....波戸 容
 手裏剣.....狭山 温
 死体買います.....柳生 亘
 妖虫.....京極 美岐

女炎脂地獄.....岩堀 光
 コレラの正体.....田井 良栄
 黒いマニキュアの女.....木原 康夫
 偶奇談義.....川口 映治
 放浪の記.....伏見 和夫
 (十一月号、定価百二十円・送料十二円)
 (裏窓臨時増刊・第三集)ムード
 32年(十月特大号)時代伝奇小説特集号
 ○口絵・妖異羽子板呪法.....秋吉 鬱
 海外グラマア写真集.....編集部・編
 書き下し長編・猿鰐伝奇.....島本 春雄
 悲曲梟雄伝.....岩堀 光
 女犯経秘図.....円城寺 達
 笄呪文.....松井 籟子
 隠密覚書・地獄大名.....島本 春雄
 播摩灘の裸女.....稲垣 史生
 紅毛七秘筐.....鳴山 能平
 続肌邪宗門.....杉 良平
 甲斐の舞面乱.....宇治川 龍
 耽奇亭秘舌.....真野 麗
 人肌菩薩.....橋爪 彦七
 放浪の記.....伏見 和夫
 悪魔の情婦.....否笠 一郎
 女妖の檻.....京極 美岐
 (十月特大号、定価百二十円・送料十二円)
 32年(九月号)耽美小説特集号
 ○口絵・日光浴.....絵口 浩
 悪のホザナ.....真野 麗
 女足の賦.....円城寺 達
 女犯経秘図.....夢野 蓉古
 毛.....

黄金の処女帯.....柳生 亘
 チーズ臭い三人の女.....花町 右門
 ヒーイズ・マイ・ギャグ・マン.....鳴山 能平
 虹の罠.....早川小夜子
 マヒトの告白.....岬 洋之助
 花吹雪天保女地獄.....須崎 龍平
 悪魔に呪われた三人の男.....神行 京一
 放浪の記.....伏見 和夫
 罪をたたく女.....広尾麻津夫
 隠密覚書・十人小町.....島本 春雄
 ウェストニッパの枷.....竹谷 十三
 殺された七人の裸女.....北小路一郎
 偶奇坊主.....岩堀 光
 鐘ヶ淵因果絵巻.....稲垣 史生
 (定価百円・送料八円)
 (裏窓臨時増刊・第二集)よるとひる
 (臨時増刊・定価百三十円・送料八円)
 32年(八月号)異色読物特集号
 ○口絵・裏窓裸天国.....松井 籟子
 贅の花.....村岡 良平
 狂恋懲罰監房.....竹谷 十三
 貞女お道.....麻布 義朗
 いぬ.....伏見 和夫
 放浪の記.....鳴山 能平
 蝦蟇物語・肉ごたつの群.....佐々木 力
 隠密覚書・首吊り中蔵.....島本 春雄
 最大の逃亡者.....陶山 密
 日本ムスメを売買した男.....ワトスン・独田
 黒髪さんげ.....真野 麗
 仇情お浜船.....加藤 晋三

道化地獄図絵……………夢野 蓉古
山西の黒い嵐……………大町 三郎
兎男と猫女……………神行 京一
あ(虹)ぶ……………三宅 一郎
女形地獄……………稲垣 史生
生人形の夢……………阿部 佐治
吹雪とお花……………佐木 勉
胡蝶秘文……………岩堀 光
(定価百円・送料八円)

32年(七月号) 倒錯の手記特集号

○口絵・映画緊縛場面集……………佐々木 力
蝦蟇物語・むしだんご……………新津 勉
あべじの足……………西条恵美子
金色に魅せられる女……………鳴山 能平
草雙紙の世界……………伏見 和夫
放浪の記……………三宅 一朗
あ(虹)ぶ……………岩堀 光
悦唐濡れ肌地獄……………神行 京一
乳房を舐める男……………花町 右門
死に誘う天使……………柳生 亘
ノーマン氏の不思議な実験……………稲垣 史生
情炎白肌双紙……………雪俊 遥
弄(ろうじゅう)獣……………杉山 清詩
青(あおせん)線……………梅崎 登志
魔(まぐつ)窟……………松井 籟子
妬(とけい)刑……………大町 三郎
脱(だつごく)獄……………島本 春雄
隠密覚書・女人駕籠……………竹谷 十三
耽美小説・紫夫人……………(定価百円・送料八円)

32年(六月号) 女隠密・スパイ特集号

この号は売り切れしました。
(裏窓臨時増刊第一集) よるもひるも

○第一集は売り切れしましたが、臨時増刊第二集『よるとひる』との合本がございます。

32年(五月号) 女の隠謀・お家騒動特集号

○口絵・裏窓はだか天国……………加藤 晋三
○〃・内外映画緊縛場面……………真野 麗
児小姓を犯した浅岡の局……………戸山 一彦
雌雄まんじ……………稲垣 史生
染血の百物語……………瀬戸口寅雄
大奥狸囃子……………西尾 富岳
癡狂院の相馬子爵……………三宅 一朗
天保素走り小僧……………花町 右門
ボルシア家罪悪史……………松井 籟子
ブレンヴァリエ家没落始末記……………否笠 一郎
仇(あだばな)花……………竹谷 十三
カザレス公爵夫人の秘密……………ワトスン・独田
カルカッタの生地獄……………雪俊 遥
聖アガートの乳房……………柳生 亘
悦唐の女にせ聖女……………島本 春雄
一家を狙う復讐鬼……………戸山 凡太郎
隠密覚書・丹州鬼の巢城……………藤 琴也
祖国を売った女スパイ……………桜井 純二
監獄十字路……………(残部僅少・定価百円・送料八円)
秘録・暴帝略譜……………25
32年(四月号) 妖奇犯罪実話特集号
○口絵・泥靴にけがされる小羊……………秋吉 巒
男装の淫婦モーパン嬢……………花町 右門
邪恋京人形師……………若尾 鋭介
囃られる女体……………瀬木 敏郎
女性憎悪者(ウーマン・ヘータ)……………柳生 亘
カザレス公爵夫人の秘密……………否笠 一郎
女囚を奪う怪盗団……………瀬戸口寅雄

アミアン街道女教師殺害事件……………大町 三郎
夫は満足していない……………宮下 潔
ちりめん赤い紐と女……………雪俊 幸雄
煮られた女達……………川越 八郎
淫草(みだらぐさ)……………柏倉 欣造
モイ族の媚薬……………稲垣 史生
秘境女人国……………島本 春雄
死棺屋敷(隠密覚書)第一話……………神谷 欣二
姉妹奴隷……………竹谷 十二
若妻地獄……………三上 綾子
呪われた神々の地獄……………(残部僅少・定価百円・送料八円)

32年(二月、三月合併号) 妖艶毒婦姦婦特集号

32年(一月号) 凄艶妖奇読物特集号

31年(十二月号) 名刑事特異犯罪捜査特集号

31年(十一月) 戦慄犯罪特集号

○第二巻・32年三月号までは売り切れしました
○32年九月号まで定価百円・送料八円
○32年十月号より定価百二十円・送料十二円
○特大号は定価百五十円・送料十六円
○臨時増刊は定価百三十円・送料八円
○三冊以上御注文の際は、送料は本社で負担いたします。
○三ヵ月以上月ぎめ購読をお申し込みの方も送料は当社で負担いたします。
○お買い洩れのないよう、月ぎめで御予約ください。
○御送金には振替御利用が、もっとも確実でございます。

東京都中野区江古田一〇二三〇二

株式会社 久保書店

振替口座・東京一〇七五八番

淫祠邪教・特集

悲浄
願欲

女によ
体たい

苦く
患げん
教きよう

瀬谷 伴 八

石塚 芳幸・画

う
ず
き

りようよう、じょうとう、
よはふけて、
ありあけづきの
かげうすく

——くそ、縁起でもない。

死んだ人、思い出しちゃうじや
ないか……

「婆や、そのお縁の障子しめてお
くれな。あの歌を聞くと、気がむ
しゃくしゃしてくるんだよ」

秀龍は、洗い髪をうしろに束ね
ながら、お勝手へ向かって、甲高
い声を出した。

日清戦争が終って足かけ二年。

去年また、土浦まで鉄道が開通したせいもあるが、上野山下、神田、浅草と、盛り場一帯は景気がいい。

ここ牛込の神楽坂も、土地柄がものをいって、お客の足が随分つきはじめ、どの店も活気があふれていた。

お国は隆盛、お家は安泰、商売繁じよう、さい先はよし——と、四拍子そろってるから自然かしわ手を打つ音も高くなるうというものだ。

坂をあがって、すぐの右手、秀むらの女たちはいま起きたばかり。うららかな春の光が昼近いやわらかな風をそっと包んで、茶の間やら、座敷やらに、のんびりした陽だまりを落としている。

——いい陽気になって、ありがたいよ……
久しぶりで、のんきなつぶやきが口からで

て、やれやれと膝を崩したら、とたんに通りから聞こえたのが、いまの唄だった。
暦を見ると、明治三十年、四月十七日とある。

——おや早いもんだね。あの人が遼東半島に一番乗りして、大連のさきで神さまになったのが、二十七年の十二月だから……。

でもね、わたしや、ちゃんとして、あなたの写真を、お守袋の中に入れて持っているのさ。もう二度と旦那は持たないつもり……。

だが、胸でたたんだそのひとりごと、しまいの方になると、なにか腰がくだけた感じで、息がみだれたように、しっくりと心に落ちていかない。

——これは、きっとゆうべの、あのせいだよ。



秀龍は、臉を落とすと、人眼に隠れるようにして、そっと胸にさわった。
 ゆうべ、酔客の手で、力まかせにくっと押さえられたふくらみだった。
 「いやっ！」

といって、その手を払いのけはしたものの彫りの深い、黒い眼が、妖しく遠くかすんでおっぱいだけが、ゆらゆらと気持よく揺れているような気がしてきて、すると、なんとなく情ない、せつない気持になって、その場で

鼻をつまらせ、涙を流してしまったのだ。
 —まったく、口惜しいよ。なんであんなフ・ヌ・ケな格好になったんだろうねエ……。
 秀龍は、豊かにみのった二つのまるみを押さえながら、われとわが身からキリキリとそ

この豊かな乳房が柔肌が、われ知らず人恋う血を
 騒がせるのだ！女心につけこむ邪教ののぞき穴！

れをもぎとってしまいたい焦躁に駆られてくるのだった。

明けて二十六の四月を迎えた秀龍だ。女の花を咲かせてから五年たつ——が、一人の男の血で染めた、その柔肌は、いよいよ白く、いよいよ磨きがかかって抜けるように美しい。それだけに、座敷へ出て誘惑が多かったが、遼東半島で戦死した幸介を思えば、身がすくまってしまうのだった。

しかし、昨夜の客はこう云った。

「死んだ男に操を立てるのは、なかなか殊勝なものだが、しかし、からだの方が許すまい……」

「あら、いやらしい……」

思わず、はにかむように、頬を染めると、

「いや、世の中に男と女と、二つの性がある間は、そんな決心など多愛ないものだ。お前の帯の上の、そのふっくらした固まりがだまっているものか……」

「えっ……!?!」

と、下を向いて、帯の上からこぼれるようにかぶさっているふくらみへ眼を投げたのが隙をつくった。

いきなり、その客の手が、肩のうしろへまわると、あっとも云わせず、またの手を広げ

て秀龍の乳房をわしづかみに押さえたのだ。

——だけど、わたしは本当に、幸介さんに操をとおせるかしら……。

放心したように、じっと鏡の前に坐りこんだ秀龍の眼の底に、深いみぞができた。

——事実、あれからのこのからだに、妙にいらいらした神経が住みこんでしまったようだ。腹の中が、熱いもので掻き廻されているように、じっと落ち着いていられない。寢床のなかで、かわるがわる乳首へ爪を立ててみたのも、そのせいだし、今朝、緋鹿の子の長襦袢の細紐を、いままでになくぎゅっと強く締めつけたのも、なんだか、そのせいな気がする。

秀龍は、ふっくらとした掌へ、形のよい顎を乗せた。

——いったい、どうしたというんだろう……? 激しい流れのなかで、いくら身悶えしても、ずんずんと押し流されて行くような、得体のつかぬ不安。

——いけない、いけない。大体、わたしは信心が足りないから、こんなことになるんだよ……。

と、そのとき、ふっと浮かんだのが、そのまた客の言葉。

「わたしや、神田小川町の雑貨商で、倉田屋というんだが、すぐ裏手に宇宙天明教という看板の下がった家がある。そこには、お前さんのような、若い女ばかり集まってくる。みんな後家さんばかりらしいが、あれだって、やっぱり同じこと。神さんにすがって、からだの悩みを忘れようとするらしいが……」

赤い唇が、鬱積した霞を吹き飛ばすようににっこりと微笑を浮かべた。

——そうだよ……。わたしもその宇宙天明教とやらへ行ってみようじゃないか……。

のぞき穴

「倉田屋さん。なかなか、どうして、まったくいい女ですぜ……」

「しかし、平円。あまり日もたたないが、よく、こうまで教えこんだもんだな」

ここは神田小川町の商家通り、この並びでは五本の指に入る大店の雑貨商倉田屋千蔵のすぐの裏手。

宇宙天明教と白木に筆太でしたためた、平家造りの奥まった一室で、小さな小穴から隣の部屋をのぞきこんでいるのは、どうやら当の倉田屋だが、そのうしろで、殊勝げに額を叩いて、浅ましく猪首を抱えたのは、三車平

円という坊主頭の男だ。

それでも、白羽二重に黒の角帯をしめて、でっぴりした二重顎をひいてすましこめば、眼の鋭さと、あぶらぎった顔の色艶が調和して、いかにも教祖らしくなるから、この坊主頭、なかなかの曲者らしい。

「なあに、心頭滅却すればの一本槍で……」

「それに、一人の男に操を通すなら、まず情念を捨てること。それでも情念が湧いてくるなら、その湧いてくるところをいためつけてからだから精を抜くのだ……というだろう」

「へえ。それが宇宙の平和、ひいては己れの幸せ……と、こうくるンでさあ」

肉太の鼻が、その語尾を卑猥な感じでにこしながら、上を向く。

「それで、秀龍がああして、宙に吊るされながらも、熱心にお題目をあげるようになったのかい」

倉田屋の口ぶりに、じわっとからみつくような皮肉まじりの嫉妬を感じたのか、平円はぐっとくだけた物腰となると、ぴしりと、その大きな額を叩いた。

「へっ、へっ。それにしても旦那、いい商売じゃありませんか。あの薄っぺらな白い浄衣が一枚二円。二円といやあ、日本橋の今清へ

行って、上等のロースで牛鍋をつついたって五日は楽に通えるンだ。いや、浅草の田原

町まで足をのばす気だったら、まぐろの刺身で一杯飲んでも一カ月は楽に持つ。それだけなら、まだいいが、こんどは邪念退散の神の鞭、靈驗あらたかな天の紐……みんな一円ずつ値があがる。普通だったらこっちが金を出して楽しみてエくらいだ……」

「わかった、わかった、わかった。お前に喋らせたなら朝までかかる。それより、早く秀龍に鞭を買わせるようにしろ」

「そりゃ、云われなくなつて……」

舌なめずりするような平円の声を、背中に聞きながら、倉田屋はまたのぞき穴に、両の眼を運ぶのだ。

祈りの間と呼んでいる板敷の部屋。

祭壇の前に、一間ほどの間において、合わせ鏡のようにおいてあるのが、太陽を形どった等身大の円い鏡。一方が銀、一方が金の光りを放ち、これがこの部屋を一種壮厳な雰囲気をつくっている。いま、この円鏡の真ん中にはさまれて、宙にぶら下っているのは秀龍だ。

腕の付け根を、白と赤で綾織った細紐でしっかと縛り、そのまま上にして、天井のはり

から体を吊っている。

白い浄衣の下は、腰のもの一枚、やがて襲った苦痛に、乳房のふくらみがこぼれると、もだえてからだを振るたびに、白いふくらはぎがちらちらと鏡に映った。が、まもなく、喘ぎと汗がいっしょになって、はだけた衿の奥から、

「うーっ……！」

と、しびれた声を吐きだした。

と、それを待っていたように、出てきたのは、白羽二重に黒い袴をはいた三車平円だ。

頭の上に、菱形の神主帽をかぶっている。

「秀龍さん。その玉の汗は尊いものですぞ。その汗といっしょに、あなたの邪念も流れ、去っていく……。しかし、また信心が足りませんな。それは、この乳じゃ……」

平円は、二つの盛り上りを、力まかせに指で弾いたのだ。

「いたっ……！」

と身を震わせると、秀龍の背が根かぎりにくの字を描く。

「そうれ。痛かろうが。痛がるう

淫祠邪教・特集

らはまだ邪欲があるのじゃ。ただ一心にお題目をあげて、心頭滅却すれば、痛がるどころか、その苦しみ、痛みが、たまらないよろこびと変るのじゃ……。まだ、祈りが足りぬ。これだけの苦痛では納まらぬほど、そなたの邪欲が強い。そうだ、神鞭じゃ。神鞭に打たれて、お題目をあげることです」

秀龍は、白いなめし皮の鞭を、三円で買った。いや、いまの秀龍の気持なら、三円が五円でも、その鞭を買ったに違いない。

二円出して浄衣を買ってから、まだ一ト月たつたかたぬかだが、この宙吊りのあとのぐったりしたあとから、云い知れぬ昂奮が新しい歓喜の情をもたらしながら、一種のよろこびとなって心気を刺戟するのに気づいたとき、おや？ と、思った秀龍なのだ。

それに、男が嫌いになってきたことも、不思議だった。奇妙な自尊心が、からだを包んで、

——ヘン……、男なシか……。

と、思うようになってきたのだ。

——いったい、わたしって女は……？

だが、薄紫ににじんだ紐のあとを見つめると、憑かれたように、また神田へ足が向いて

しまう。

そして、このごろは——、

あの、しびれるような呻きをあげる瞬間の陶酔が、いとおしいほど忘れられない満足となった。

——邪念も、情欲もあるもシかい。わたしやあの苦しみが、とっても好きなシだよ。まったくそのとおりだ。

秀龍は、少しも不自然な行為だと思わなくなっている。むしろ、なによりも深遠で、女の情熱を燃やす、激しい行為だと思いこんできている。

そんなとき、そんな日の帰り道。

秀龍は、ぼったりと幼な馴染みの里枝に出会った。

黒いかげ

「おや……？ 里枝さんじゃないか。おなつかしいわ」

上野の森が、すぐの上。浅草の十二階の赤煉瓦が、春の陽を吸ってかげろうのようにゆらゆらと彼方で揺れていた。

「まア、秀子さん。……すっかり、おきれいになって……」

いま流行の秩父縞を羽織ってはいるが、こ

れはあまり高価なものでないな……と、秀龍は持ち前の値ぶみのくせを出してから、ああそうだったなと、眼を動かした。

「里枝さんの旦那さまも、日清のいくさに出征したんだったわね。すっかり御無沙汰したけど、御無事だったンでしょう……」

「ええ、ありがとうさん。おかげ様で……」
細おもてをひきたたせている切れ長の眼がなぜか、その言葉とはうらはらは、黒い翳を浮かべた。

——おや、様子が変わだよ。

と、秀龍は敏感に、それを感じとりながら、
「おけがもなくってかい……？」
「ええ……」

と、妙に気づまりな返事、しかも問い詰めれば、泣き出しそうに肩をすくめたものだ。

秀龍は、突然、子供のような、あどけない表情で、唇をほころばせながら、

「あんた。急ぎでなかったら、わたしと少しつきあわないかい。いま神田小川町まで用足しに行った帰りなシだけど、陽気がいいから日本橋へでも出て、なシか精のあるものでも食べようかと思ってたのさ」

「……………」

戸惑うような里枝の背中を押すようにして



秀龍はふところから金側の懷中時計を出しながら、

「ちようどお昼だよ。たまには氣道楽でもして、のんびりしなくっちゃ……」

それにしても、ずいぶん変わったものだとか、つくづく里枝の顔を見ずにはいられない。しかし、この前出会ったのは、浅草観音さまの裏境内で、弁財天にお賽錢でもあげようかと小さい石段を登りかけたときだった。いくさのはじまって問もなくだったが、あのときの里枝は、旦那が第二軍の兵卒で出征したというのに、吹き出すような冗談ばかりいって、稚いほどものを隠さなかった。

「うちの人ったら、おれが帰ってくるまで、このあざを残しておけっていうのよ」

袖をたくしあげて、犬に咬みつかれたように、くっきりと黒くくぼんでいる齒のあとを見せて、勘定したら八本ある。

「まあ、すごい……」と、眼を剝くと、

「だってあなた。そりゃ、こわいくらい口を大きくあけて、鼻をふくらませて、次のニコライの鐘が鳴るまで離さないんですもの」

わたしは、また、そこで、

「まあ、すごい……」

すると里枝は、口を押さえるように手を振

りながら、さざなみたつように、眼をしばたかせると、

「でもね、本当は私の方がすごいよ。たつ前の晩ね。うちの人の咽喉ンとこから、おへその下まで、ずっと一直線に爪のあとをつけてやったの。向うへ行ってチャンチャンの女と浮気したら口惜しいから、いまのうちにっねってやるンだって……」

お腹を押さえて、赤くなって、苦しいほど笑いこけたものだったが、それがどうだ。

いまの里枝は、陰気な建物のように、門を開けようとしない。無表情で、耳もとで誰が呼んでも返事をしないような顔をしている。

秀龍は、我慢の糸が切れたように、プツンと云った。

「里枝さん。なにかあったンでしょう。なにもかも話してごらんさいな。なにかできるかもしれないよ……」

「そうだったの。それじゃ、旦那さまはけがをして、もう男の用は足せないし、かといって、別れることは世間が許さないし……」

「……………」

里枝の眼に、涙がもり上り、落ちそうになった。

「それで、旦那さまはなンというの……？」
秀龍にかすかな好奇心の閃きが湧かないこともない。

「……それだけのことで、男をつくるのはいい。だけど別れない……って」

云いながら、里枝は、このごろ鋭いほど顎がとがってきた佐一郎の顔を、チラッと眼に浮かべながら、また、あらためて日頃のみじめな生活を思い出してみるのだった。

つい、四日ほど前だったろうか。

いまは寢床もちがえて寝ている佐一郎だが里枝は我慢できなくなって、佐一郎の布団へ入っていったのだ。

一度、火ぐちのついた情欲は、かんたんには静まらず、そうなると、気が狂うほど全身の血が熱くなるのだった。

しかし、佐一郎は云った。

「里枝、俺も苦しいのだ。お前の白い腿、お前のすべすべした丸い腰。できたらそれを目茶苦茶に傷つけて、二度と見られない片輪のようなからだにしてやりたい。しかし、それでもできない。だから……俺は夜がこわい。頼むから見せないでくれ。さわらないでくれ……！」

羞恥と、後悔に、本能の火が渦をまいて、

ぐるぐるまわった。里枝は、無意識にはだけた胸の乳房を自分の手でつかむと、半身を布団から転げ出して、畳の上に押しつけたのだった。

夫の帰るのを待ちわびて、毎日たん念に磨いたからだなのだ。男の肌に荒れていないだけに、みずみずしく、われながらうっとりとして、二の腕のふくらみをつまんでみたものだ。

戦が終わったと聞いたとき、若い顔をほっと弛めて、今度こそ生んでやろうと、子供を持たぬならかなお腹の線を、なん度撫でたことだったろう。

それが、なにかかもむなししい期待で終わったのだ。

——ああ、いつそのこと、死んでしまいたい……。

里枝は、唇をぐっと噛みしめて、心の嗚咽を隠そうとしたが、秀龍の異妖な眼の光りにはっと気づいて、まぶしいような、いぶかるような顔つきをつくった。

「ねえ、里枝さん……」

果して、なにかを思いつめたときの重量感のある声だ。里枝が、青くなつた顔で顎をおとすと、

淫祠邪教・特集

「あなた、邪念を捨てれば救われるのよ」

「邪念……?」

「情欲ですよ。あなたのからだから、その方の欲だけ取ってしまうのよ」

「だって、人間ですもの……」

「ところができますよ。しかも男が汚なく見えてくるんだから……。本当の女の情熱は、もっと別にあるんですよ」

「……?」

「いいわ。わたしにまかせなさいな。明日、もう一度上野のお山で会いましょうよ」

心にはずみをかけるような、秀龍の云いぶりなのだ。

里枝は、吞まれるように、うなずいていた。

神 鞭

「ねえ、旦那……。宇宙天明教の看板も、まんざら捨てたもんじゃなかったでしょう」

目脂のたまった眼を、ギラリと光らせて、せい一杯の追従笑いを見せているのは、三車平円だ。

「秀龍の連れてきた里枝という女

も、また味の違った楽しみがありますぜ。どうです、ごらんなせえ……」

鼻先をくすぐられたような表情で、倉田屋はのぞき穴に眼を突き出したが、その眼の隅が、いままでにない光りのようで、奇妙な笑いをたたえた。

「こいつはちよつとした見せ場だが、いったい、どうしたわけなんだ」

平円は、目顔で意味ありげにうなずいて見せてから、囁き声を出した。

「実は、あたしも驚いたんですよ。あの里枝がきてから、今日で十日たらずなんですがね。そいつを無理やり秀龍が裸に剥いて……。さあ、それからが大変なんですよ」

——ともかく、里枝の驚きようといったらなかつたのだ。

話を半分も聞かぬうちに逃げ腰だった。

「いやいや。腕を縛られて、からだを吊るなんて……。とてもわたしにはできやしないわ、そんなことするぐらいだったら、まだ死んだ方がいい」

着物を脱いで、腰のもの一枚になって、いつか読んだ加賀騒動の老女浅尾ではないが、キリキリとからだを縛られるなんて……。包み切れぬ驚きが、里枝の切れ長の眼に光って

いる。

平円は、例によって、いかめしい表情で二人の話のやりとりを聞いていたが、細面の輪郭にとどめている気品のよさと、瞳を大きく見張いてうるみを含んでいる、かなしげなその風情を眺めながらチラリのぞいている、その豊かな肉づきの腕を後手に縛りあげて、胸を、腹を、鞭で根限り打ち続けるときの己れの姿を想像していた。

思わず、よだれを落とすような声がでた。

「里枝さんといいましたな。聞けば、あなたほど、不幸な人もないものじゃ。金やもので換えられぬしあわせを失ってしまった。そこでつい、あらぬ邪念をおこしてしまう。やはり信心が大切。でなければ、身を墮としますぞ。宇宙天明教は……」

すると、秀龍が、突然燃えるような、烈しい視線を里枝に向けて、その話を横にとった。「それじゃ、里枝さん。わたしにお願いがあるの。この神の鞭でわたしを打ってくれないそれだったらできるでしょう。そのうちあなたの邪念が、どんなものか気がついてくるわ」

これは、秀龍でなければわからない、複雑な反撥だった。いや、秀龍とても、口では説

明できない、いわばものに憑かれている心理が、勝手にうごめいて、勝手に云いだしたのかもしれない。

「おお、それもよい……」

その、烈しい眼のうちの心を、ちゃんと読みとって、胸算用した平円は、つい小膝を叩いて、あさましいほど昂奮した表情となったが、ふっとそれに気づいたのか、あわてて尊大な面構えとなった。

「秀龍さんの御親切は、まことに宇宙天明教の真髄ともいいたいもの。ぜひそうなさい」

里枝は、おずおずしていたが、やがて固いものをのみ下すように、コクンコクンとうなずいた――。

「ふーん。それで、十日もたつと、ああなるものか……？」

倉田屋は、平円の手ぶり足ぶりを混えたその話しぶりに耳を傾けていたが先を聞くのもどかしげに、またのぞき穴へ腰をあげた。

里枝は、十日も鞭を振り続けているうちにやがて不安定な心の状態に落ち入っていたのだった。

はじめのうち、柔かく振っていたが、
「もっと強く打って……」

と、酔ったように、艶やかな黒髪を、ふっくらとした腰まで垂らして、抵抗するように肉づきのいい白いふくらはぎを人魚のようにもだえさせている秀龍の眼が、意外にも声とは似合わぬ、激しい情熱をこめて光っているのを見出すと、一瞬、全身がひきしまつて、耳鳴りがしてきたのだ。

そして、不可解な笑いに似た影が、里枝の片頬に走ったとみるや、力まかせに鞭を振った。

心の中に突如、火のようなものが湧いてきて、それにけしかけられたのだ。

――そうだ。このお乳が憎い。このお腹がお尻が憎い……！

里枝のからだの深い底で、むらむらと妙な復讐心が燃え立った。それが五体にくすぶっている欲情の火に燃えうつったのかもしれない。

里枝は、秀龍の乳といわず、腹といわず、めくら滅法に鞭を振るった。

異様にむごたしく、妖しいまでに美しい影が、左右の金と銀の円鏡に映って反射したと、突然、膝前から割れて、浄衣よりも白く、つややかな色を上気させて、その衣の外にのびていた両の足に、里枝がしっかとしが

みついたのだ。

「ね、秀龍さん。わたしも。わたしを打って……ね、お願い」

帯上げや、帯止めを手早く解き捨てると、長襦袢を足もとに脱いで、観念したように眼を閉じる。だがその長襦袢も、秀龍はむしり取って、なんの抵抗もしない里枝をうしろ手に縛りあげた。

紐が乳房の上から二重にまわると、桃色の乳首がはねるように、上を向く。

「いたいっ……！」

はじめてあげた、思わぬ悲鳴に、一瞬、里枝の足が苦痛をこらえようとして宙を蹴ったが、それがかえってわれから紐をしめつける結果となった。

若い、しかし熟れきった細身のからだだが、波立つようになだらな下腹に線を描くと、秀龍は、そこを目がけて息を荒く吐きながら、まず鞭を一振りくれた。

ぐらりとからだだが、大きく揺れると、慎しみも忘れて、「うっ！」と身をくの字に曲げながら、白い腿をかくそうともせず震わせるだが、そうされながらも、里枝は喘ぎあえぎ叫ぶのだ。

「秀龍さん……。お乳を打って……。お尻も……」

わたし、そこが憎いの……。うんと打って……」

——倉田屋は、底光りした眼を据えつけて咽喉をひくような声を出した。

「まさか、あの二人……。ここからのぞいているとは気がつくまい……」

「それなんですよ。ねエ旦那……」

急に、平円の眼が糸のように細くなると、その眼の奥の、白く濁った瞳が、意味ありげにチラリと動いた。

妬心

黒沢佐一郎は、いらいらしながら浅草境内を歩いていた。

観音堂と清雲閣の十二階が、ひょうたん池の水面に、みことな色合いで映っているが、その静かな調和が、いまのこの心情にそぐわない感じで、かえって足運びが荒くなった。

病人のようにふさぎこんで、いじいじしていた妻が、このごろはすっかり明るくなったのだ。いや、むしろ、

「あなた」と呼ぶ声など、戦に行く前よりも華やかで、生き生きとしている。

あまりのその豹変ぶりは、どうにも病的な感じで、薄気味悪いほどだったが、聞けば、わたしは信心して救われたという。

そう云えば、このごろ、決まって昼過ぎ三時間ほど家を空けるようだ——とは思っていたのだが、昨夜、チラッと見たのが、乳の谷間に細長くついている、なまなましい紫色のあざなのだ。

佐一郎は、昏々と深い穴のなかへ落ちて行くような、黒い嫉妬にとりつかれた。

——畜生……！ 俺が出征するときの……あれと同じだ……。

戦で、男のものをなくして以来、なにかに



つけて、すっかり氣力を失っていたからだに
久しぶりで異常な力が湧きあがった。

頬がこけ、目が凹んで、青く濁った瞳に、
チロチロと不気味な焰が燃えてくる。

「里枝、裸になってみる……！」
と、それは命令だった。

「えっ!？」

ぎくりと、肩をひいたが、ためらうように
「いやです」と、云ったのがいけなかった。

「なにっ……！」

理屈もなにもない。荒々しい昂奮が、両の
掌へ血を注いだ。

いきなり平手打ちを食わせて、ひるんだ里
枝の上へ馬乗りになると、衿元へ手を入れて
二つの肩をひん剝いたのだった。

意外、里枝はとみれば、両手を突っ張り、
のしかかってくる佐一郎を必死に蹴り上げよ
うとするではないか。

「貴様は、そんな……！」

もう人間ではない嫉妬に狂う一匹の獣だ。

この獣は、雄の猛々しい力を奮いおこして
女の帯や紐を剥ぎ取り、黒い髪といわず、胸
のふくらんだ肉といわず、爪のような手でひ
きむしるのだ。

からだにつけていたものは、ほとんど剥ぎ

とられ、むき身の白いからだ、畳の上で左
右に荒れ、上下にもがいた。

そして口にふれるものは噛み、手にふれる
ものは引掻くのだ。

佐一郎は、二の腕に歯をあてられた痛みに
呻きながら、それでも、空いている腕をまわ
して里枝の首を絞めた。

息がつまって、うっとうめき、最後の力を
ふりきるように、佐一郎の腿の下で、せい一
杯に揺れ動いた。

だが、腕はゆるめなかった。

「貴様なンか、殺してやる……！」

と、その刹那。

里枝の頬に、さっと赤味がさすと、

「あなた……」と、うるむような声を出した
のだった。

荒い呼吸が、すうっとひいた。思わず身を
反らした。が、里枝の瞳は歓喜するように、
一点を見つめて動かなかった。

「あなた……。力いっぱい絞めて、そしたら
お乳の上を縛って、踏んでもいい、蹴っても
いいわ……」

——観音堂を右に見ながら、弁天山という
小高い丘のところまできて、佐一郎はふと足
を止めた。

——俺も氣が狂っていたが、しかし、あい
つも氣違ひみたいなことを云っていた……。
不思議な焦躁と怒りが、また胸を黒く包ん
できた。

いらいらと荒れてきた足先が、いつか田原
町の紅ちようちんへと向いている。

「旦那、馬鹿に不景氣な顔で飲んでるじゃね
エですか。酒を飲むときは、それじゃいけ
ねエ」

春が氣ままに、もしなるならば、

梅とさくらと、ともに咲き、

そして、あらしがなけりやよい

桃割れの髪に、編笠をかぶった門付けがい
ま流行の氣まま節を口ずさみながら、抱えた
三味線の爪弾きに合わせて流しているのを、
のれん越しに眺めて、盃を傾けていた佐一郎
だったが、真向いに座って茶碗酒をあおって
いた車夫らしい紺の腹巻、脚絆の男がこうか
らむように話しかけてきた。

「あの唄ではないが、氣ままにならないこと
があると、つい、不愛想になる……」

酒が入ったせいか、さっきの怒りは幾分遠
のいて、いまは溜息の出るような佗しさが、
腹の底で冷たく流れている。つい、ぐちめい
た言葉になった。

車夫は、眼の中まで赤く染めて、ますます能弁だ。

「そりや旦那は欲が多いからですぜ。たとえばこの牛鍋にしたって、同じ並鍋でも日本橋の今清や、神田の中川に行けば三十銭とられる。しかし、ここでは、たったの五銭……。女子にしたって、あの女を裸にして、おっぱいにさわってみてエと思うから、つい気ままにならねエ。だけど、ただみるだけってんなら話は別だ……」

と、その男は、なにを思いついたか、急に顎を落として、問うような、つぶやくような小声となった。

「そうだよ、旦那。その不景氣面をふっとばすには信心が第一だ」

「信心……?」

信心と聞いて、ふっと里枝の顔が浮かんできた。

「そうですぜ。神信心だ。おもしろくてたまらねエ宗教だ。宇宙天明教というんですがね。なにも神様を拝まねエでもいい、のぞくだけでいいんだ。寄附金はたったの三円で……」

「三円とはずいぶん高いな……」

「なんの、なんの。知らねエからそういうがこの神様を信仰したら、五円が十円でも出し

たくなる」

「……?」

浮かぬ顔で、すげなく手を振るのを、その男は、たかぶったように眉をひそめて、眼尻を落とした。

「水もしたたるって女が、素裸で縛られて、大の字になったり、一本棒になったりしてお題目をあげるんですぜ。こちとらは、そいつをすき見しながら、口から出まかせ、南無妙でもナミアミダでもいいんだ……」

佐一郎に、はじめて混乱した表情があらわれた。

妙に、胸の音がせきたてて、眼が寒そうに光ってくる。

「おやじ、その宇宙天明教とやらに行ってみようじゃないか……」

強いて、落ち着かせているような、佐一郎の口調だった。

火 炎

「いま、隣りの祈りの間では、女の信者が五人ばかり、心の邪念を打払うべく、なにもかも脱ぎ捨てて、身一つになってお祈りしている。これを、穴からのぞいて、御神体といっしょに拝みたい方は、御寄附を二円いただき

その後は、拝みにくるたびに十銭銀貨のお賽銭をあげてくださればよろしい。しかし、女の信者のなかには、己れの身を責め、いためつけて、過去の罪をあがない、邪念を捨てようとしている熱心な方もいる。その神になり変って、この御神衣と袴をはき、頭巾をかぶり、紐で信者を縛ったり、鞭を振るったりしたい方は五円の寄附のほか、その都度五十銭銀貨で御神体へ御礼をしてくださればけっこうです」

もっともらしい、三車平円のその説明は、まったく板について、よどみがなかった。

聞きながら、佐一郎は妙におびえた感覚を背裏に感じてくるのだ。

——もしや……という不安。

——里枝がいるのでは……という疑念。

しかし、それも一瞬だった。咄嗟の表情で顔も額も暗くしながら、懷中から二円とりだすと、それを投げるようにして、のぞき穴にしがみついた。

祈りの間の中は、さながら生き地獄のような、しかし、極彩色をみるような妖しい眺めだった。

全裸の女がその膝の上に大きな石を乗せながら、海老のように体を曲げていた。くくら

れた後手は、神衣を着た男に持たれ、それでもなお足りないのか、その男は背中をぐいぐいと押しつけながら、前に垂れた二つのふくらみを、石の上で横に広げて押さえつけている。

白の浄衣を着た女は、宙に吊られていたがすでに、疲れた犬のように、唇から赤い舌をのぞかせ、頭の重さを持てあました格好で、がつくりと首を垂れていた。

三人目の女——、横顔が白く、象牙のように、気品があった。白く脂肪がういて、成熟した背中から腰へかけての曲線は、脂汗ばかりでなく磨いた香りを感じさせてなまめかしかった。

それが、紅色の紐の間から、豊かな乳房をこぼして、がんにがらめに縛られているのだ。

——いったい、この女をどうするつもりなのだ……？

佐一郎の心は、微妙な好奇心にそそのかされて、眉も眼も口も、胸の鼓動と一つになつて呼吸した。

——が、そのとき、女はもたえるように、顔を反らしたのだ。

瞬間、佐一郎の全身が冷凍した。身も心も

★いきものをいじめるな！



逆毛だって、へたへたとその場に座りこみたい悪感に襲われた。

——里枝だ！ まさしく里枝だった……！
そうか、そうだったのかと思う前に、のっぴきならない感情が胸を絞めつけてきた。
「どうかしましたか……」

という平円の平たい顔を、異妖な眼で睨みつけると、白痴のような声を出して、大きく全身をゆすぶって笑いだした。

「なるほど、うまいところへ眼をつけたもんだ。宇宙天明教か……」

この笑いを、なんと受けとったか、平円が下から顔を見上げて、
「それじゃ、あなたも御神衣を着けて……」
といったとき、いきなり、傍にあった大き

左次郎・え

なランプが、その額に飛んだ。

「あれっ……！」
叫び声と同時に、床にこぼれた油に火がついたのだ。

火だるまの平円めがけて、また別のランプが飛んでいった。

それから二時間ほどたって、神田の方に燃えあがる火炎と黒煙を指さしながら、上野の山でしきりに手を叩き、笑いこける男がいた。そうだが、羽織の裾が少しこげていたというから、おそらく黒沢佐一郎ではなかったろうか。

それに、渋谷の佐一郎の家は、その日から誰れも帰ってこず、ずっと空家だったということだ。

終り

裏窓
絵物語
裸形
半天

半天
中鳴

①猪牙が——花川戸から
山の宿、山谷堀にとさしかかった時だ。
「姐御、今の音を……」
「身投げだね」
声の主は、唐棧の半天を引っかけ、髪はじれ
った巻きにした夜目にも色白ない女だ。姐
御と呼んだ船頭は船足をゆるめると波間に浮
き沈みしている白いものに近よって行った。
「早くあげてやんなよ」
「合点だ」
船頭は器用な手つきで引き上げた、見ると
体に一糸もまといっていない若い娘だった。

②春といっても夜の太川へ飛びこんだのではたまらぬ。死んだようになつて舟底に仰向きに寝かされている娘の胸から下腹へ、腰から太腿とすつかり水気を拭きとった女は、いきなり帯をするすると解くと続いて下紐をほどいた。着物の前が割れて形のいい二つの乳房が見える。女は躊躇もせず、緋縮緬の腰のものをとりはずすと、娘の体の上へかぶさるようにしてしっかりと抱きしめた。



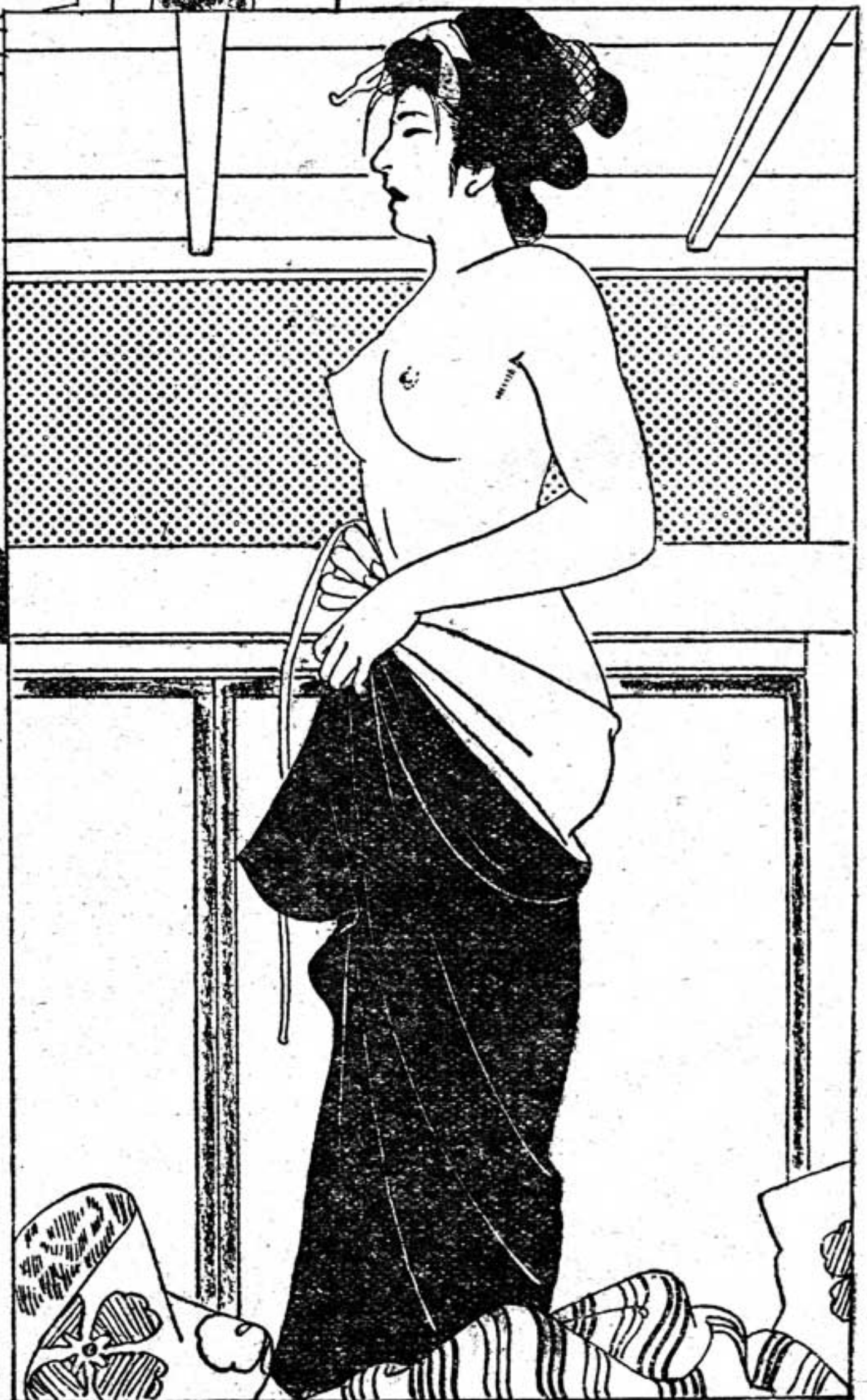
③あれから一刻ほど経った舟宿の二階で、すつかり生氣を取戻した娘を前に、姐御と船頭が娘の語る話を聞いていた。

娘の名はお京、八丁堀の相模屋と云う油屋の一人娘だ、相模屋夫婦は近頃噂の高い金峯教に凝りだして何をするにも生神様の行者に御伺いをたててもらうと云うありさまで、商売そっちのけの狂信ぶりだった。最近一人娘のお京に縁談が持ち上ったのでその吉凶を占って進ぜると云う行者の言葉に、嫌がるお京を無理やりに金峯教の本部へ行かせたのが今日の夕刻だった。信者の帰ってしまった広間に一人お京はぼつねんと坐っていた。

④「こちらへ」

白衣の若い男が先に立って階段をのぼって行く後からお京はこわごわついていった。祭壇の前には鏡や櫛が飾りたてであり、その前に黒い法衣をまとった四十五六のむずかしい顔をした行者——金峯教の生神様と云われる龍善坊吞海が厳然と端坐している。お京は思わず板敷の上に震えながら坐った。「お手前が相模屋の娘、お京か」

「は、はい」



⑤行者は何か呪文を唱えながら鈴を振り、「わしの眼をじっと見よ、まばたきをせぬようにしてじっと見て……よいか！」お京は云われるままに行者の眼を見つめている内に心が蕩然となり、腰をふわふわとゆすると静かに立上った。お京は帯を解いた。下締めが足先に落ちると着物が肩からすべり落ちる。長襦袢が続いてはらりと着物の上へ落ちた。お京の手が湯文字の紐を解いた…。

⑥お京の顔は能面のように無表情だ。毬をのんだような双つの乳房、豊かな曲線が下腹へゆるやかに流れて謎を秘めたような臍、腰のくびれ、一糸もまとわぬお京の裸身を祭壇の幕の陰や、襖の隙間から食い入るように見つめている眼をお京は知る由もなかった。夢を見ているような手ぶりでお京は宙を見つめながら踊っていたがやがてその場へ倒れてしまった。行者はにったりと下品な笑いを口元に浮べるとお京のそばに近より輕輕と抱きあげて階下へ……

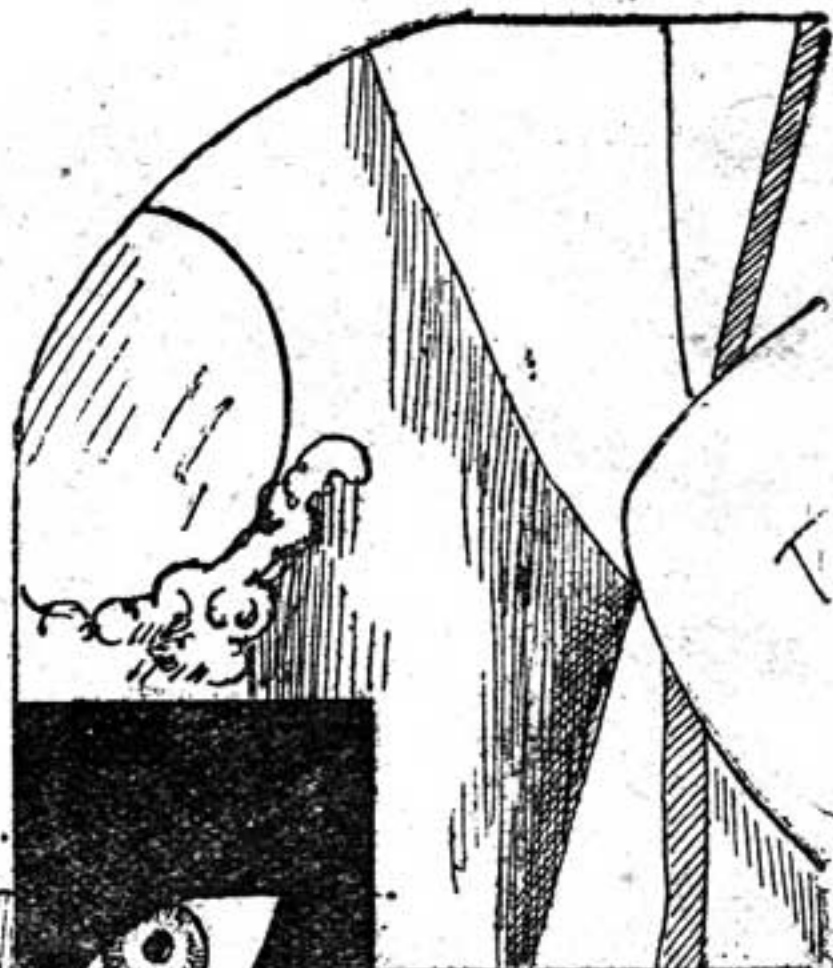


⑦ふっと深い眠りから醒めた。
「あっ」

お京は友禅の布団から身を起しかけて驚いて声をあげた。無理もない、催眠術をかけられた後のことは全く知らなかったのだから、今全裸のまま布団に寝かされているのに気がつくと驚いて床の上に坐って辺りを見た。

——逃げよう——

前後の思慮もなくそのまま廊下へ出た。



⑧「どこへ行く」

「あっ」

思わず立ちすくんだお京の背後から行者のいやらしい手が伸びて、お京の二の腕をつかまえてずるずると引き戻した。

「いやっ、はなして……」

お京の体は行者ともつれるようになって廊下の雨戸にぶちあたった。お京の体当りで雨戸がはずれると一緒に、お京も庭先に転落した。

夢中ではね起きたお京は行者につかまってはと思うと無我夢中で暗い庭の中を突走った。二人の足音がその後を追った。



⑨お京

は庭の隅に

追いつめられてし

まった。大川の水がひ

たひた音をたてている石垣の

上だ。行者の手があわやお京にふれ

たと思った瞬間、お京の体は宙に大

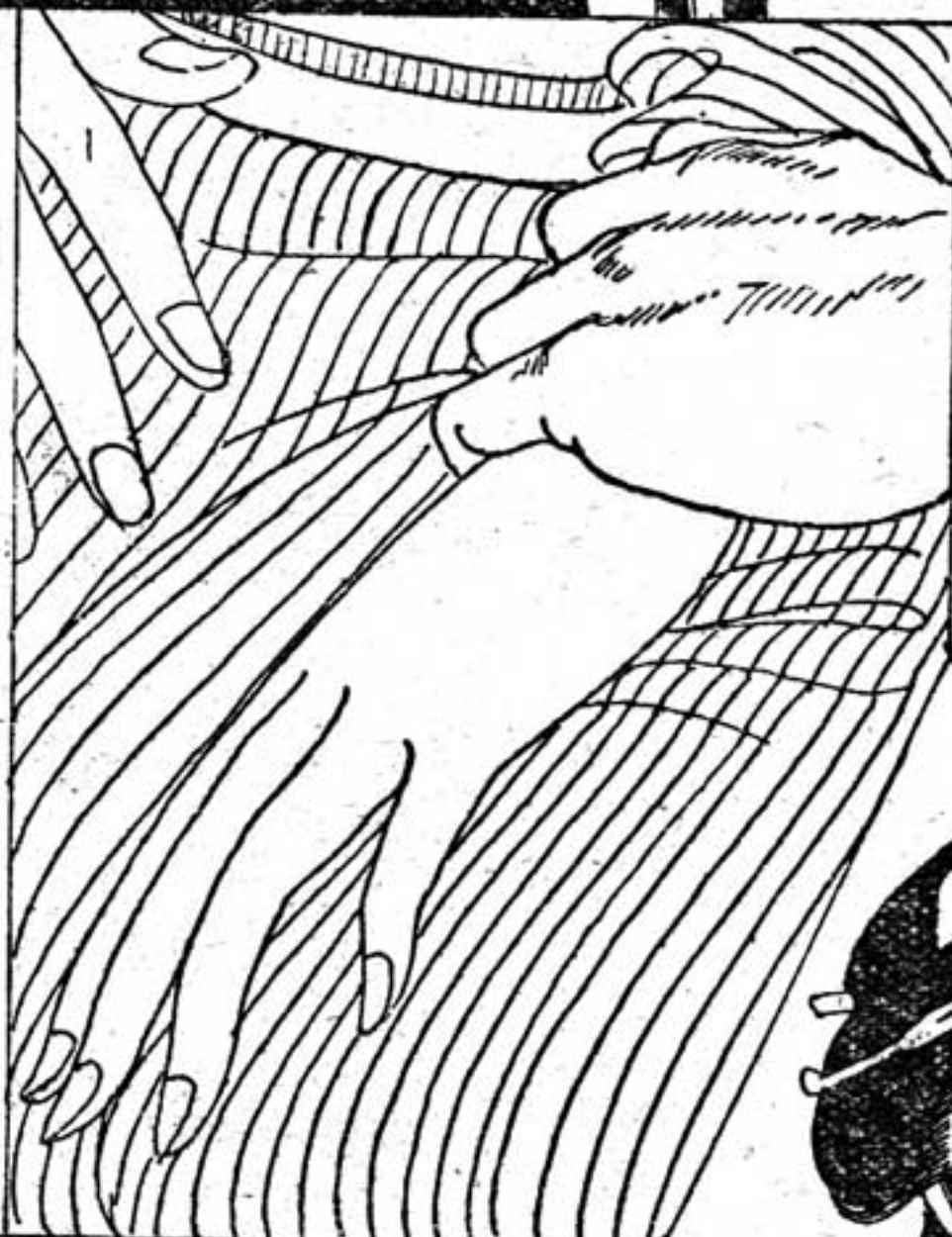
きく泳いだと見るまに大川の中へ落

ちていった……。

お京の話が終ると二人は顔を見合せてにっこりとうなずいた。



⑩「お手前の名はなんと云われる」
「はい、梶と申します」
行者の前に神妙に坐っているのは例の姐御だ。身のこなしがきわだって美しかった。脂粉の香りに



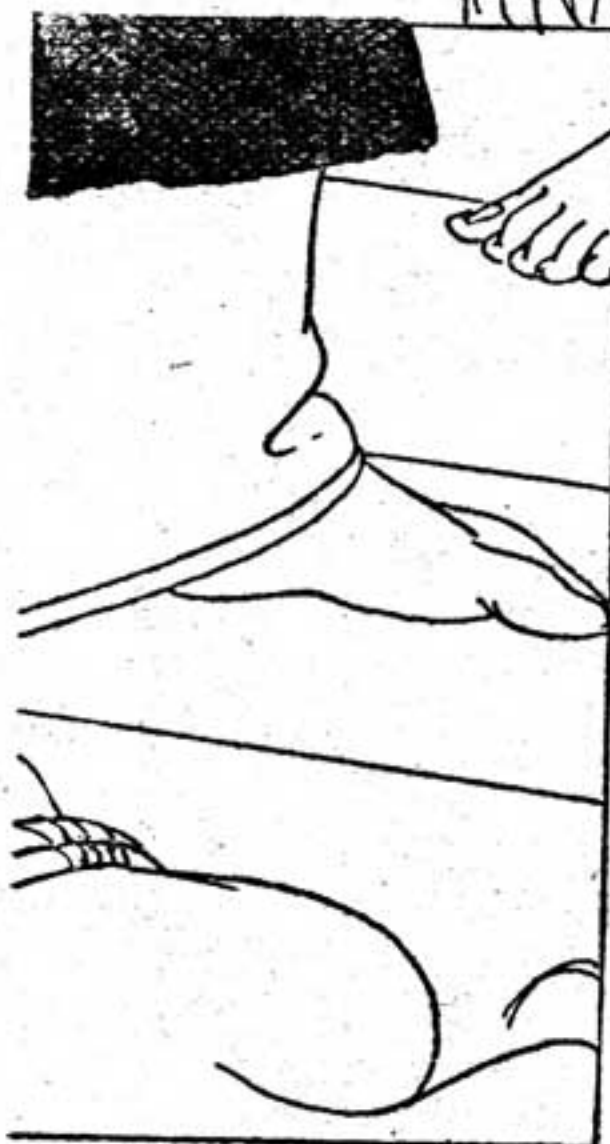
いささかとまどった面持の行者はやおら呪文を唱え出した……。
「そなたの手は動かぬぞ、なんとしても動かぬぞ」

お梶は苦しそうに手を動かそうとしたが、



自由にならない。それを見た行者は一膝のりだすと、いきなりお梶の左手を握り引きよせようとした瞬間、
「ばか……」

姐御の一喝と一緒に平手打が頬へとんだ

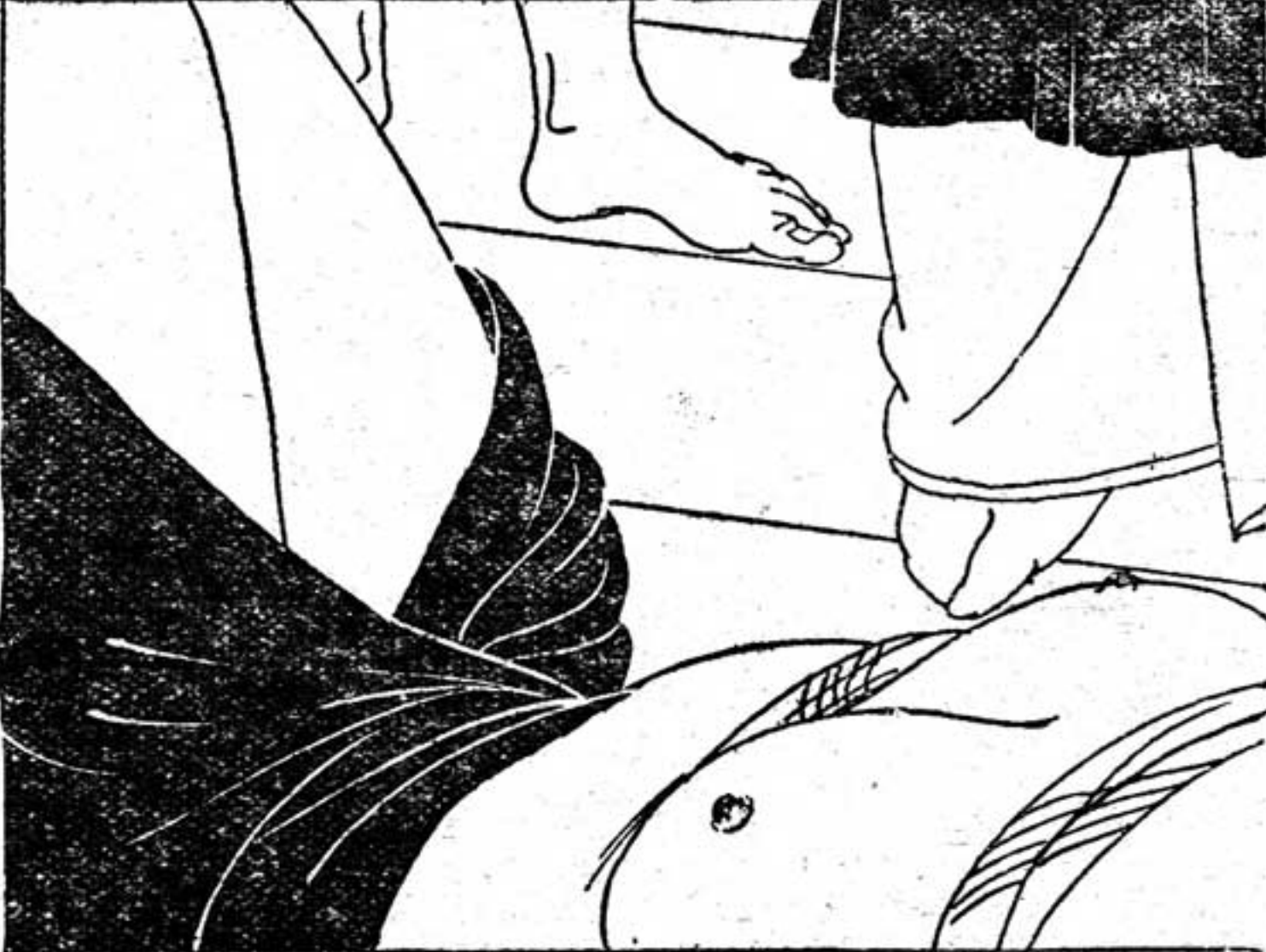




⑪「見そこなっちゃいけないよ、お前なんか
にままだにされちゃたまらないやね」
ぱっと蹴出しが見えたと思うと、女だてら
の大胡坐をかいた。龍善坊はいまいましたう
に立上ったと見ると左右の襖を開いて白衣の
男が二人いきなりお梶に組みついて来た。
「あっ、何をするんだ」
二人の男は有無を云わせずむき卵のように
お梶を裸にすると高手小手に縛りあげた。



⑫「この龍善坊に刃向うとは飛んで火に入る
夏の虫だ、切支丹の催眠術で眠らせて置いて
ゆつくり可愛がってやろうぜ」
「ふん、問うに落ちず語るに落ちるとはこの
ことさ、御禁制バテレンの龍達が御上の目を
ごまかして生神様とはとんだお茶番さ」



⑬「畜生、手前は俺を知っていやがったの
か、それを知られちゃしかたがねえ、手前
も仲間に取り入れてやるから覚悟しろ」
と入墨針を持ち出してくると、
「その白い腹の上に仲間になった印にクル
スの入墨をしてやるのだ」
仰向けに引倒したお梶の真白な肌に、入
墨針を刺そうとした時、



⑭ピシッ——石礫が龍善坊の右手にあたって針がとんだ。

「誰だッ」

と顔を向けた瞬間、その額にもう一つ、

「ウッ……」

額を押えた龍善坊はその場に倒れた。

「姐御、礫の三太がお迎えにきやした」

飛びこんできたのは例の船頭舟の子分だ。

「三太、早く縄を解いておくれ」

「合点で……」

と云いながらも石礫が白衣の男の顔に投げつけられた。

お梶は着物を着ると屋根伝いに逃げた。



⑮「姐御、番所に云って置きましたよ」

金峯教の本部は御用提灯に囲まれている。

「相模屋の娘の話で龍達だと思ったが乗り込んで確かめたまでさ。だがちっとやばい目にあっちまったけれど……」

「その代り奴の処から五百両浚ってきやしたから……それにしても姐御の裸は見料が少しおたこうござんすよ」

「よけいなことをおいいでないよ……。あたしや、善人をだまして金儲けをする奴は一番嫌いさ」

弁天お梶は吐き出すように云った。 終



陥

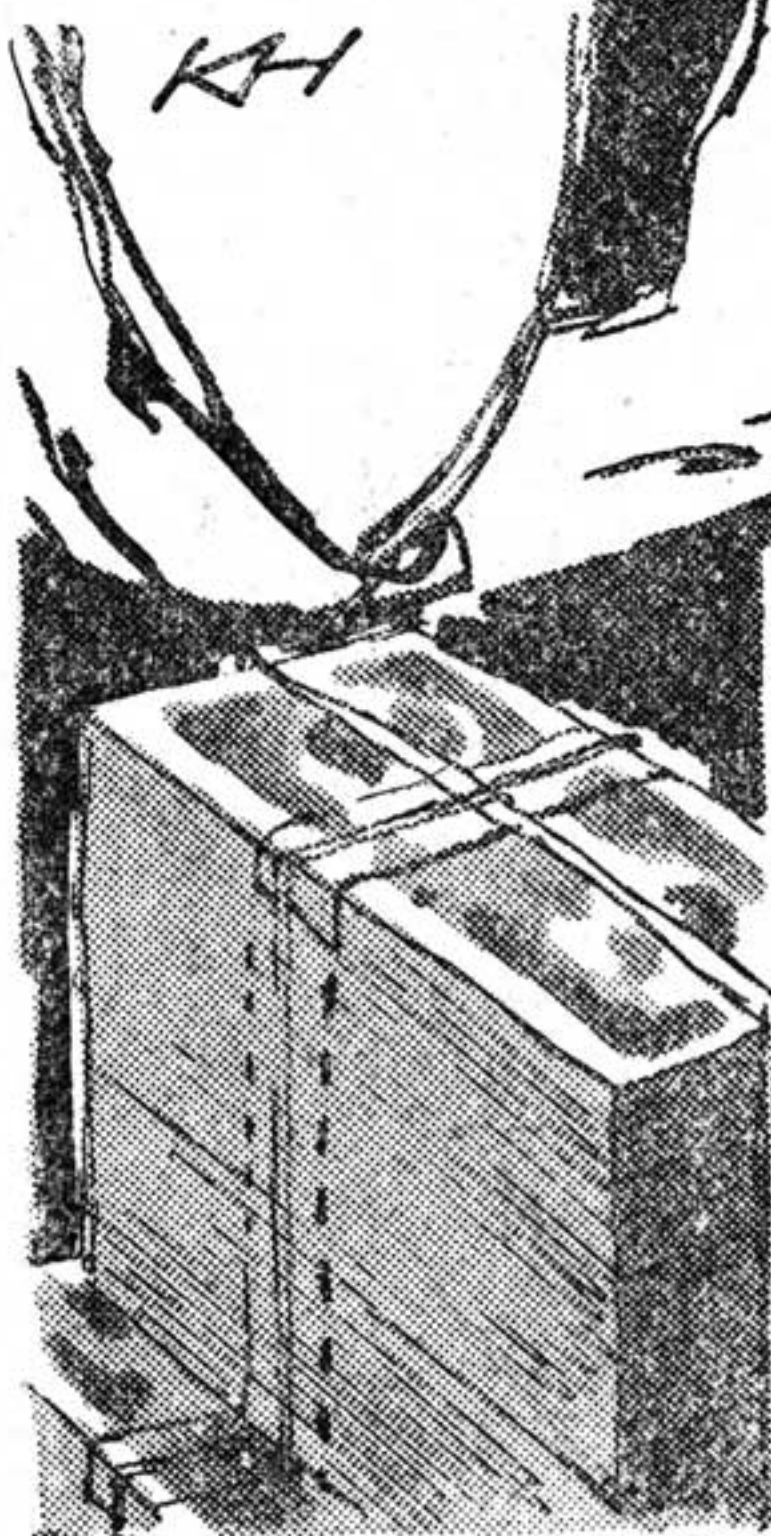
窞

綿密に、おちついて、完全な計画の下
にやるのだ！ アリバイは作ったし、
準備は完了あとは決行するばかりだ！

窮地

ただでさえ暑い公衆電話ボックスの中で、葛西公一は血の気の失せた唇を噛み、額一面に玉の汗を浮べて、ほとんど一方的に相手の言葉を受け入れている。
眼を伏せたまま時折低い声でうなずくことに、大粒の汗の玉をほとりほとりと足下に落していた。

「はあ、おっしゃることは一々ごもつともだし、それにおたくの立場もよくわかるんですよ。ですがもうほんの僅かの間待ってくださいませんか。必ず二、三日うちに元利とも全額お返ししますから」
葛西は、すがりつくような声で低くそういった。
「実は、さっき上司と打合せ中だからといったのは、ありや嘘なん



潮井 拓
笠井 一画

です。僕は会計主任ですから、金銭的な信用が何より大切なので、お宅とのこんな話はとても役所で

はできないのでここまで来る時間が欲しかったのですよ。電話でさえそうですから、まして給料差押えなどということになると、僕の将来は滅茶苦茶になっちゃうと思うんです。ですから、お願いですからもうほんの少しだけ時間の余裕を与えてくれませんか」

相手は齋藤ふじえという女の閨高利貸だった。

「そう。そりゃ今までだって二度も三度も催促を受けています。僕だって、決して誠意がなかったわけではないのですが、御承知の通り家内が長患いをしているためにその日の暮しに追われてどうにもならなかったのです。でも、今度こそは必ず都合をつけるつもりですから——」

「そ、そんなふうにおっしゃったって、そりゃとてもできない相談というものです。え?! ——そう

ですか、どうしてもそうおっしゃるならやむを得ません。じゃあ何とか今日中に……」

葛西は、齋藤に五万円の借金があった。日歩三十銭という高利のために、総額は今ではもう七万円を上廻ろうとしていた。尋常の手段では到底回収できそうもないと見て、相手は給料差押えの強硬手段に出ることを通告して来たのだった。

電話が切れると、彼は眼を往来へ向けたまま力なく受話器をかけた。そして、ズボンのポケットから汚れたハンカチを取り出して額の汗を拭いた。

給料日は明日に迫っている。今日中に何とかして七万円という大金を都合しなければならぬのだが、その当ては全くなかった。

よしんば給料を差押えられてしまっても、生活費に必要なだけの金額は法律によって保護されるだろう。だがそうなれば、五万円の借金の理由を総務課長から根掘り

葉掘り問いただされるにきまっていた。一介の公務員が、日歩三十銭などという高利の金を借り入れるのは尋常のことではないからだ確かにそうだった。

その五万円は、公金の穴埋めに用いられたものだったのだ。

彼は、その五万円の金を最初から横領するつもりは毛頭なかった妻の気管支拡張症に対する医療費や、病療中の妻のピンチヒッターのために必要な費用として、相当のまとまった金が欲しいことは欲しかったのだが、彼はその時金庫に眠っていた五万円を投資に利用して、その利ザヤだけを稼ごうと試みたのだ。

最も短期間の投資がある日曜日の競馬場で行われた。残念なことに、彼の思惑はずれて資本金はたちまち三分の一に減少した。そして、次の日曜日の午前中に彼の資本はついに破産の憂き目に遭わなければならなかったのだ。

こうして、直接には一厘の役に

も立たなかった五万円の穴だけが残った。その公金の穴が高利の借金に振替えられたのが、先々月の会計監査の時であった。

「今日中に七万円か……」

葛西は、なおもぼんやりとした視線を窓ガラス越しに舗装道路の上に落したまま、まるで思考能力を失った人間のように低くつぶやき、唇をぎゅっと噛みしめた。

玉の汗が、再び血の気のひいた彼の頬を幾すじか伝い始めていた「おいおい、あんたはそこでいつまで考え込んでいるんだね」

そう外から声がかからなかったなら、彼はおそらく一時間でもそうやっていたことだろう。はっと我に返った葛西は頬をこわばらせて、

「これはどうも失礼」と歪んだ唇で小さくいつて、午後の陽ざしのまぶしい街頭へ出たのだった。

閃き

ひどい暑さだった。胸板や脇腹

を汗が糸をひいて流れ落ちるのが

よくわかった。葛西は、やがて頭をはっきりさせるように一つ振ってから、けだるいような、たよりない足どりで歩き出した。役所とは正反対の方角であった。

何とかしなければならぬ、その簡単な一句だけが山のように頭の中に充滿していて、いまにも口から溢れ出て来そうだった。考える場所を求めて、彼はとある喫茶店の中へ入って行った。薄暗い店の中は冷房がよく効いていて、ひんやりとした空気が澱んでいた。客は少く、静かなクラシックが流れているだけであった。

冷いお絞りで顔から首すじのあたりをすっかり拭うと、全身からたちまち汗が引いて行った。彼は熱いコーヒーを注文してゆっくりと巻煙草に火を点けた。

さて、どうしたものだろう？

おもむろに頭をソファによせかけて眼を閉じた彼は、まるで自身にいい聞かせるように、その

言葉を頭の中に置いた。

薄給の出先官庁の官吏にとってその七万円という現金は途方もない大金だったのだ。三ヵ月分の給料を全部合せてもまだ足りないほどの額だった。彼は、その金を貸してくれそうな顔を一生懸命に思っている範囲ではそんな顔ぶれはただの一つも見当らなかった。

ではそのほかの方法は？

自分の管理する金庫の中に、それに足るだけの現金があれば一番好都合なのだが、この前の年度末の時とは違って、到底一時立替えるだけの金額は入っていなかった。高い利息の金を借りているので、今までにそれは幾度考えたかわからない方法だったが、その方法はあると数ヵ月先にならなければだめなことがよくわかっていた。

残る手段はただ一つ、自分の退職金を当てることだった。十数年間勤続して、彼の計算では少くとも十五万円程度にはなる見込みだ

った。

これならば借金を返済して充分に余りある額なのだ。どうせ斎藤に給料差押えを喰って使い込みの一件がバレて懲戒免官になる位なら、いっそのことこちらから一身上の都合として辞表を出した方が得策ではないだろうか？

彼はふとそう考えた。懲戒免官では退職金の額もずっと減ってしまうのだ。退職金で返済するからといえば、いくら斎藤でも少しは待ってくれるだろう。自分はまだ三十才を少し越したばかりなのに、すべてを御破算にして再出発するにしたらところが、決してまだ遅すぎはしないのだ――

彼は、いつの間にか前に置かれてある熱いコーヒーを手にとって砂糖も入れずに一口すすった。苦い香気が、暑さに弛緩していた葛西の脳髓をたちまちひきしめた。彼はふと、今も何喰わぬ顔で勤めている、秋山薫の顔を思い浮べた。彼女は葛西と同じ役所にいた。

一年も前から妻の道子のピンチヒッターを果してくれているのだがその関係は恐らく誰一人知る者がはいはずだった。もし彼女は、葛西が役所をやめた場合でも、今までのように彼と交際してくれるだろうか？

そう思うと、急に彼の心の中には未練が沸いた。すると今度は、役所をやめては都合の悪い事情ばかりが次から次へと連鎖的に頭の中に浮んで来始めたのだった。

第一番には、彼には何一つ手についた特技はないということだった。この就職難の時代に職を失うということは会社が潰れるというようない己むを得ない理由ならいざ知らず、人生の半ばまで続けて来た職場を放擲したという事柄一つだけで、世間は自分の社会に対する適応性の欠如を疑ってしまうものなのだ。特技がないということ、使い道がないということと同じだった。

明日から自分は一体どうやって

生きて行くつもりなのだ？ 生命保険の勧誘員か？ だが、保険勧誘員に限らずありとあらゆるセールスマンには、人に好感を抱かせるような物腰と、もの柔かで、しかも強い説得力のある弁舌の才能が要求されるのだ。実社会に出てこのかた、一挙手一投足に至るまですべて職権というものに保護される習慣のついている自分に、どうしてそんな仕事ができるだろう

商売か？ だが、商売こそはひ

たすらに儲けるという根本的な理念に徹しなければできないというではないか。役人や先生から商人に転業した人で、成功した例の極めて少ないのは、役人商法というものがいかにまずいものかということを実に物語っているものだ。

それに、葛西には何よりも大切な資金というものがなかった。

友人達の顔が次から次へと浮んで来た。その中には総務課長の顔もあった。

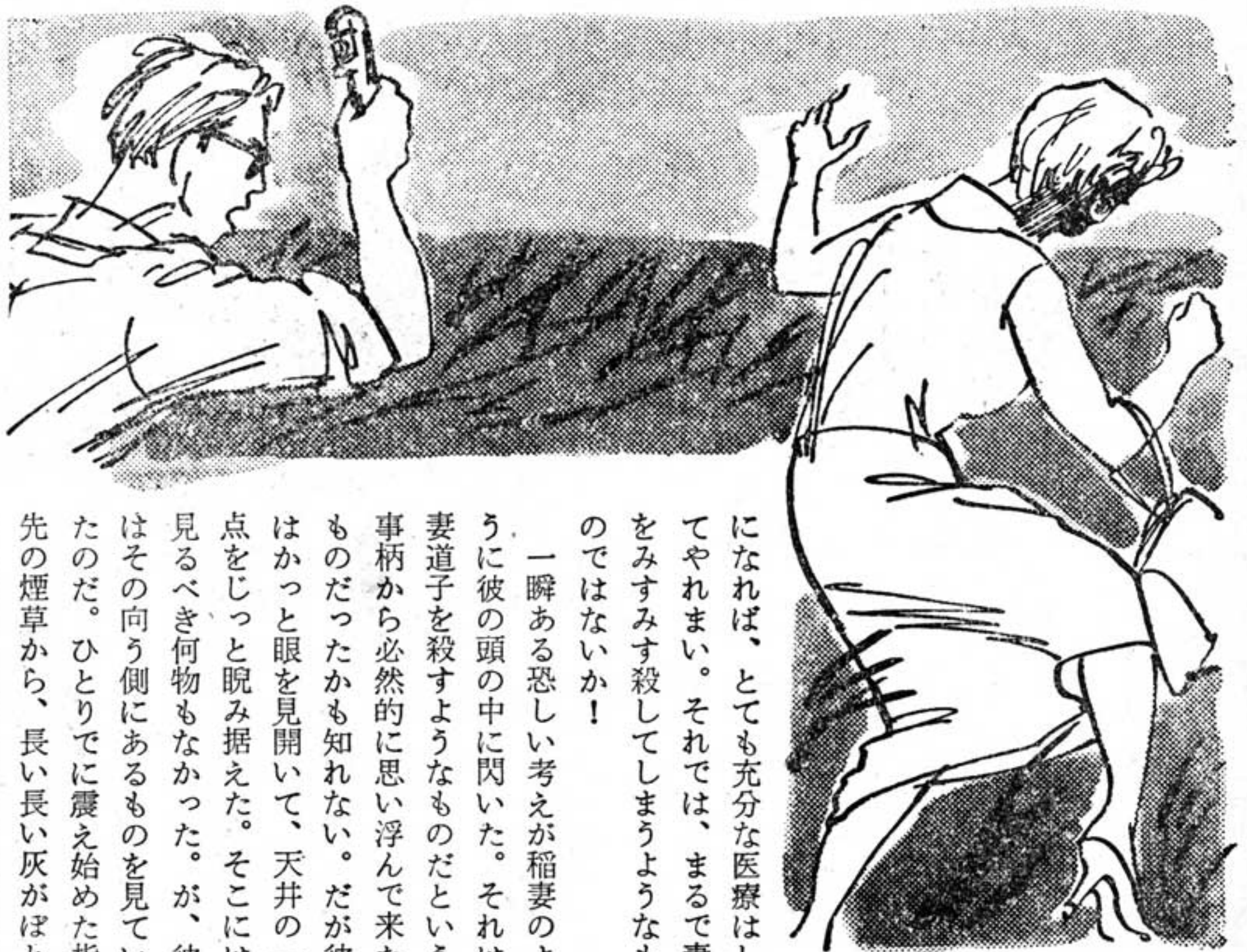
「君ももう、そろそろ係長になってもいい頃だな」

「どうしまして。僕はとてもまだ係長なんて器じゃありませんよ」「いや、そうじゃない。実は私は今年の暮の勤務評定の時には人事部の方へ内申してみようと本気で考えているのだよ」

それは一週間ほど前のことだった。昇進こそは役人の最大の念願であった。その幸運は、今や彼の眼の前まで来ているのだ。

妻の顔が臉に浮んだ。一生涯癒る見込みがないという気管支拡張症に苦しむ彼女は、このところ一層やつれて見えた。愛情というより今は哀れさが先に立った。自分が今役所をやめたと聞いたなら、どんな思いをすることだろう。それに、これから先の医療費は――

そこまで考えて彼ははっと胸を衝かれた思いだった。今でこそ健康保険証の御利益があるが、退職してしまつたらもうそれきりではないか。全額自費負担ということ



になれば、とても十分な医療はしてやれまい。それでは、まるで妻をみすみす殺してしまうようなものではないか！

一瞬ある恐しい考えが稲妻のように彼の頭の中に閃いた。それは妻道子を殺すようなものだという事柄から必然的に思い浮んで来たものだったかも知れない。だが彼はかっと眼を見開いて、天井の一点をじっと睨み据えた。そこには見るべき何物もなかった。が、彼はその向う側にあるものを見ていたのだ。ひとりでに震え始めた指先の煙草から、長い長い灰がぼとりと膝の上に落ちたが、彼はそれ

に全く気づかなかった。

何も聞えなくなった葛西の耳に自信に満ちた悪魔の声がささやいていた。やってみろ！計画に誤算さえなければ絶対にバレない。お前は何物をも失わずに済むのだぞだが、やがて彼はあわてて激しく首を振った。ややさめかけたコーヒーを一口と息に飲み干し、短くなった煙草を一服大きく喫って残りを灰皿の中へ突込んだ。息が弾み、胸の動悸は激しく鳴っていた。腋の下には冷たい汗が流れていた。

落着くのだ！彼は自分自身に強くない聞かせた。いいか、そんなことをしたが最後、お前は二度と自分の良心の責苦から逃れられなくなってしまうのだぞ！

彼は、少しでも気持を落着けようと卓の上の冷たい水を半分程ぐっと飲み、眼を静かに閉じて頭を後によせかけた。だが、一旦思い浮んだその恐ろしい考えは、どうしても彼の心を捉えて放そうとし

ないのだった。

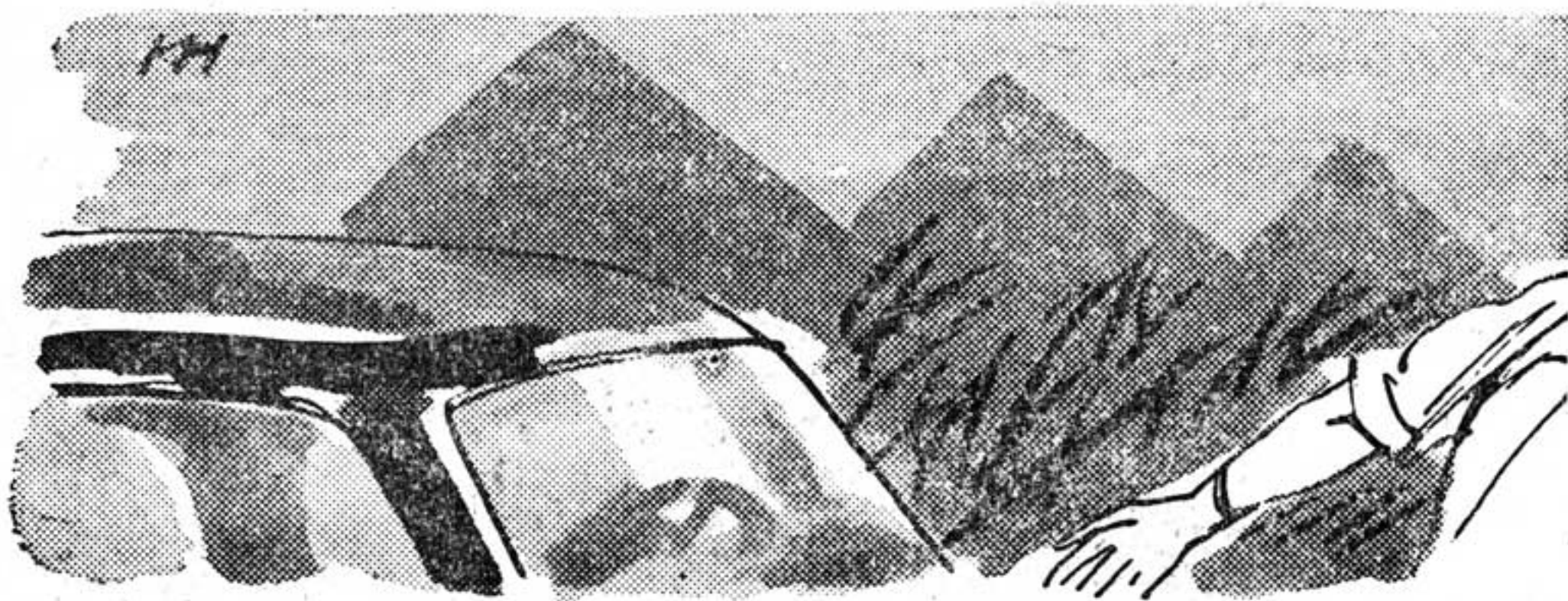
「殺してからあわてて弥縫策を講じてもほとんど無駄に近い。だが充分に計画を立てて行った犯罪は発覚しないものなのだ。発覚する可能性のある計画など誰も立てないし、また実行に移されもしないからだ」

何かの本で読んだことのあるこの恐るべき一句が、まるで暗闇の中の一条の光のように、あるいは道に迷った山中で見出した古い道標のように、彼の心をぐいぐいとある方向に引きずって行くのだった。

好 運

自分の机に戻った時、葛西の態度は日頃の彼と全く変わるところがなかったが、彼の胸の中には、今まで考えてみたこともない恐ろしい人殺しのプランが秘められていた。

「今夜の宿直は誰だったかね」
彼はそう、さり気なく尋ねた。



「第二課の山田さんですよ」

若い雇員がすぐに、書類の山越しに答えた。彼は机の上の決裁箱の中にある宿直日誌をばらばらと繰りながら、

「おや。玉井君の次は佐藤君じゃなかったのか？」

「いや」と今度は総務課の佐藤という男が代って答えた。

「この前の土曜日に、山田君が午前三時に起きて鮎釣りに出かけたというのでね、奴と交替してやったんだ。何か用事でもあるのかね？」

「いや、別に……。ひょっとすると電話があるかも知れないのでね」

ありがたい！思わず彼は、誰にも聞えない大声で叫ばずにはいられなかった。ついている。そうも思った。彼の立てた計画の中では自動車がきわめて重要な役割を果たすのだが、ドライブ・クラブで借り出したりすればすぐに足がつかおそれがあるので、彼は役所の

自動車が無断借用するつもりだったのだ。

むろん会計主任の地位を利用すれば、借り出しぐらいはできたろうが、それでは取調べを受けた場合におもしろくなかった。彼が思わずついていると喜んだわけは、山田が酒をたしなむということであつた。と同時に、麻雀狂ではな

門雑誌を探し、立ち読みでその映画のストーリーを幾度も幾度も繰り返して読んだ。誰に尋ねられても、立ちどころに返事ができるようにしておくためであつた。

外はまだ、かなり明るかつた。だが、すべては彼の幸運をもたらす方向に動いているようであつた。映画館への道すがら、彼はひよいと二人の友人に出会つたのだ。

いう。幸運はまだ続いた。彼が睡眠薬を買いに薬店へ入った時、店内にはまだ電燈がついていなかった。要するに、彼は外の明るみを背にして立っていたのだ。つまり店の中からでは彼の顔かたちはおろか服の色に至るまで、黒いシルエツトとしか見えなかつたはずだつた。使用した印鑑は出鱈目の三文印に過ぎなかつたし、葛西公一という人間が睡眠薬を購入したという証拠は何一つ残さずに済んだはずだつた。

もしこれが佐藤だつたなら、必ず仲間を誘つて来て午後十時頃まで麻雀をすることだろう。また、車を盗み出すためには睡眠剤入りの酒を飲ませねばならないのだが

「帰つたら映画の筋を話して下さいな。この頃とても疲れやすくて、お洗濯の後など横になつてうつらうつらしているせいか夜分涼しくなるとかえつて眠れなくなつて困る時が多いのよ」

「いや、その前にちょっと寄つて行くとところがあるんでね。どの辺にいます？」

映画館の前までやつて来た時、彼は一瞬ふと戸惑つた。窓口嬢に話しかけて印象を与えておく必要があるものかどうかということだつたが、万が一、さつき出会つた連中の中で会えなかつた場合を考えると、やはり用心をするに越したことはないと考えた。

酒の嫌いな佐藤では恐らく至難な事柄だつたに違いないのだ。

「よし、話して上げる。ついでに何か旨いものでも土産に買って来るよ。何が食べたい？」

「これは好都合だと、その時彼は考えた。彼は映画館へ入つたことを確認させるために、入口で、何か口実を設けて窓口嬢に印象を与える必要があると考えていたのだ

腕時計を見ると、きっかり午後七時だつた。どこかの店で、ラジオの時報が鳴つた。

役所が退けると、彼はまっすぐに映画館へ向つた。そして、上演中の映画の題名と上演時間をしっかりと頭の中に刻みつけてしまった。

「よし、楽しみに待っていないさい」

「よし、楽しみに待っていないさい」

いよいよ本番開始だ。ブツツケ

最終回の始まりは午後六時五十分で、終映は九時四十分。それから彼は書店へ行つた。映画演劇の専

「よし、楽しみに待っていないさい」

「よし、楽しみに待っていないさい」

いよいよ本番開始だ。ブツツケ

の、しかも決してMGのきかない絶対絶命の本番なのだ。葛西は氣持を落ちつけるために煙草を取出してひと息大きく吸い込み、切符売場の窓口へ進んだ。

「まだ間に合うかね？」

「今始まったばかりですよ。まだニュースでしょ」

窓口の女は不愛想に、節のない乾いた声で横を向いたままめんどろ臭さそうに返事をした。よし、こっちの思う壺だ。

「え、何だって？」故意に彼は聞えないふりをした。

横を向いてくだらない雑誌を読んでいたその女は、じれったそうな表情を窓口の中にのぞかせた。

「今始まったばかりだといっているんですよ。聞えませんか？」

顔さえのぞかせればこっちの目的は一応果たしたわけだった。だがもう一と押ししておこう。不自然にならない程度に。彼は少し声を尖らせていった。

「おい、客に向って君は妙ないい

方をするね。僕はいま、まだ間に合うかと尋ねたはずなんだぞ」

相手の女も負けてはいなかった彼女は、そっくり彼の口調を真似ていい返した。

「え、何ですって？」

小面憎いのかお茶目なのか見当のつかない女だと彼は思った。もうこの程度で充分だろう。あとで万が一取調べを受けるようなことがあっても、この女は自分がここへ入場した時刻をはっきりと証言してくれるはずなのだ。

彼は切符を求めて中へ入った。友人達のいる場所はすぐにわかった。彼は傍へ寄ってささやいた。「いま来たんだが、二階に連れがいるんでね」

一人がいった。

「むろん女性だろう？明日は奢って貰うよ」

「御想像にまかせるさ。じゃ、済まないけど失礼」

彼等の傍を離れた葛西は、少しの間最後列に立っていた。が、彼

等が様子を見に来ないことを確かめると、落ちついた、きわめて自然な静かな足どりで音もなく外へ出て行った。入口には、さっき入る時切符の半片をちぎり取った女の子がいたが、傍らに立っている軟派風の学生とおしゃべりに夢中で、今入ったばかりの葛西が出て行くのを少しも気づかない様子だった。

歩 一 歩

映画館を出ると、葛西はあらかじめ用意しておいた濃いサンングラスを掛けた。これで、たっぷり二時間半という時間が宙に浮いたのだ。

この間に彼は斎藤ふじえをおびき出して殺し、屍体を発見されにくい場所へ埋めてしまう計画だった。屍体を隠すべき場所はすでに見当がつけてある。

だが、もし斎藤が彼の呼び出しに応じなかった場合は？

それはまたその時のことだった

すべては計画通り行われなければならないのだ。

「——あらかじめ発覚しないように樹てられた計画的な犯罪は——」

その金料玉条が彼の胸の中にあつた。今や彼の固い信念と化していた。計画にそこを来した場合はあと半歩という所まで迫っていたとしても必ず引返す。そうすれば再び新たな計画の下に行動するこ

とができるのだから。

短い時間に事を行うために、まず彼は自動車を手に入れなければならなかった。時間節約という点からすれば当然タクシーを利用すべきだったが。運転手に顔を覚えられないように、用心深く彼はバスに乗った。知った顔がいはいかと、恐る恐る一とわたり中を見廻してみたが、それらしい人物は一人も乗り合わせてはいなかった。日はもうすっかり暮れて、夜の巷はショウ・ウィンドの照明が美しかった。

バスを降りると、昼間の照り返

して生温いむんとするような空気の濃んでいる舗道を足早に歩いた貴重な三十分近くの時間が費されて、あと二時間程しか残っていないのだ。

幾組となく浴衣がけや軽装の夕涼みの男女に行き会う。風がすっかり死んでいて、ほとんどの家々の前には人が出ている。彼は、無意識に顔を車道の方へ半ばそむけヘッドライトに照らし出されてはあわてて下を向くような動作を幾度も繰り返した。

役所の百米ほど手前にある酒屋で彼は冷えていないビールを三本買った。そして自分は、焼酎を一杯だけぐい飲みした。一升飲みと定評のある彼だけに、そんなことくらいで決して酔いはしないのだが、これから宿直員山田を相手に演ずる一芝居をより効果的にするための下準備だった。

役所の門を入った彼は、足音をしのばせて裏手にある宿直室の方へ廻りながら、山田のほかは誰も

いませんようにと祈った。もし誰かがいれば、そいつが帰って行くまでは彼の計画は絶対に進められないのだ。

そこだけに明りのついている宿直室の窓の下へ、葛西は呼吸をつめて忍び寄って、耳をすました。はっとした。中から不意に若い男女のしのびやかな話し声が聞えて来たのだ！ だが、その声は音楽の伴奏入りであった。ラジオだった。

伸び上って虫よけの金網越しにおそろおそろのぞくと、中には山田が一人で雑誌を顔の上にのせて大の字になっていた。ラジオはつけっ放しになっていたが、彼はそれを聞いていたのではなかった。微かないびきが聞え、そばにはウイスキーのポケット瓶が空になって転がっていた。

葛西は、思わず片頬に微笑を浮べた。彼はそれまで掛けっ放しだったサングラスを怪しまれないようににはずしてポケットにしまい、

普通の足どりで入口へ廻って、扉を開けた。その物音で山田は眼をさまし、半身を起して眩しそうに眼をこすってから、

「やつ葛西さんですか」といって急にシャンとなり、ラジオのスイッチをあわてて消した。

「あまり暑いんで、陣中慰問にやってきました」

葛西は、少し酔った声でそういった。もとより酔い真似に過ぎないのでオーバーアクションにならぬよう充分注意しながら、

「いいかね。絶対に秘密だよ、僕が今夜ここへ来たということは。いいかね。実は、ある連中とある処へ飲みに行った。そして、途中でズラかって来た。ただそれだけのことなんだが」

「わかってますよ。会計主任たるもの、辛いかなだ。いや、私も官吏のはしくれた。知り得た秘密をみだりに口外するときは、……罰則があるんでしたな？」

山田の方がよほど酔っていた。

「その代り、口留料を持って来たよ。おい、コップを出してくれ」

葛西は、栓を抜いてビールを注いだ。かなり生温いのでコップの半分は泡で満たされた。

「ほう！ これは豪勢ですな」

喉の乾いている山田は、眼を輝かせて一と息に飲み干したが、たちまち変な顔をして、

「葛西さん、こりやもったいないただ酒に文句をいっては済まないが、こいつは少しぬるすぎますな少し待っていて下さい。私が一つ走り氷を買ってきます。それと、どうせツマミもいるとこだろうから」

「そうかね。そりやありがたい。ぜひそう願おうか」

実に今夜の俺はついている、と葛西は内心思わずにはいられなかった。故意に冷えていないビールを買ったのは、山田にそういわせる作戦だったのだ。計画は全く彼の思惑通りにすすらと運ばれて行くのだった。

山田が出て行くと、葛西は別のコップに水を注ぎ、睡眠薬を全部溶して、今栓を抜いたばかりのビール瓶に混ぜ、それを手許に置いてほかの二本の瓶も栓を抜いてしまった。こうすれば、手許にあるつまり山田に注いでやるビールだけが睡眠薬入りになる勘定になるのだ。

宿直員が酒を飲んでいるのを見られないためにという口実を設けて、彼は宿直室の電燈を消した。これはむろん、彼自身の姿を外部の眼から隠すというのが目的だった。

「いい月じゃないか。どうだね、



気の遠くなるほど冷えたビールで月見かな、とは」

何のかんのと話しかけては相手にしゃべらせて、睡眠薬入りのビールをしきりに強制したのだ。ウイスキーの下地もあった関係で、ものの三十分もたたぬうちに山田はゴロリと横になると、たちまち大酺をかいて眠り込んでしまった

決行

あと時間は、一時間半足らずしか残っていなかった。横手にあるガレージから小型乗用車を持ち出した彼は、一直線に国鉄の駅までやって来た。時間の余裕はそれほど

どなかったが、それでも充分に成算はあった。彼は駅前にある公衆電話に飛び込むと、斎藤の家の電話番号を廻した。

「モシモシ！」

一かばちかの方法だった。もし誰かほかの人間が電話口に出れば危険率はぐっと増すのだ。斎藤は女一人の世帯だと知っていても、裏面がわからないので不安だったが、幸いにも相手は本人だった。彼は低い、だが熱意をこめた声色で早口にいった。

「金ができる見通しが、ようやくついたのですよ！ ええ、元利とも全額です。叔父なんです。とこ



ろが、困ったことが一つだけ、あるんですよ。本当に借金があるのなら、証書を見せろ、金は今すぐにでも現なまで渡してやると彼はいつて、きかないのです。それでまことに恐縮ですが証書を先に渡しては貰えないでしょうか？」

「……そりゃわかってます。お金と引換えにするのが当然なのですが、叔父もなかなか頑固な人だしそこを何とか——」

「じゃあですね、これはまことに御迷惑なことですが、僕としても大事の瀬戸ぎわで必死にお願いするわけなのですが、あなたの日当として千円だけ余分に払わせて貰いますから、僕と一緒に叔父の家まで行っていたくわけにはいかんでしょうか？ そうでないと、僕は本当に進退きわまっちゃうんです。ええ、お願いです——」

「え?! 本当ですか。そりゃありがたい。じゃあ駅前で待っていて下さい。叔父の家の車に行つて貰います。今のあなたの服装は？」

そうですか。じゃあ、二十分以内に——」

万事が思う壺にはまってるのだった。葛西は用意のポマードを頭にこつてりと塗った。そうしておいて濃いサングラスを掛けるとこれはどこから見ても、多少グレかかっている運ちゃんに見えた。

どうぞ、とドアを開けて彼女を乗せた時も、相手は全く葛西だとは気づかない様子だった。彼は計画通り一直線に車を市外に向つて走らせた。次第にヘッドライトの数も減り、人家もまばらになって来たところ、ようやく彼女は尋ねた

「随分遠いじゃないの？ ここはどの辺かしら」

「は、もうすぐです」

葛西は含み声で、気取られぬようにそう簡単に答えた。もういいよやらねばならぬ。そう思うとひとりでに指先が震えて来た。

眼の前に、黒々と堤防が見えはじめていた。建設省の、巨大な砂利上げ機械が夜空に浮き出して見

える。そのてっぺんに、小さな赤い航空安全灯が明滅していた。ピラミッド型の、高さ十数米にも及ぶ砂利山が幾つも幾つも並んでいる。この砂利山は、すぐにブルドーザーで平坦にかきならされて堤防の一部分になってしまうのだが斎藤ふじえの墓場は、このピラミッドの一つになる予定だった。

彼は、突然イグニッション・スイッチを切った。不快な音を立てて、自動車は急停車した。

「あら、どうかしたの？」

斎藤は、不安そうな声でそういった。彼は答えずに、スイッチを断つたままスターターを踏んだ起動するわけがない。うう、ううと奇妙なモーターの音がするだけだった。

「ちょいと。故障を起したの？」

「待って下さいよ。クランクで廻してみますからね」

その声で、あるいは気がついたのかも知れない。急に彼女は心配そうな顔つきになって黙り込んだ

一応葛西は外へ出た。そして後部のトラックを開けたが、中から取り出したのはクランクではなくて大型のスパナだった。

見廻すと、向うの方からヘッドライトが一つやって来ていた。トラックらしい。時刻はかなり遅いので、外に人影らしいものは一つも見えなかった。そのトラックをやり過しておいて、彼は車の中に向つていった。

「奥さん、済まないが、ちょっとこいつを抑えていてくれないかね？」

充分調子を押えていったつもりだったが、相手はたちまちそれと覺つたらしい。

「あつ、葛西！」

悲鳴に近い叫び声を上げるなり向う側のドアを突き開いて外へまろび出た。その後から、スパナを振り上げた彼の真黒な影が襲いかかった。

事故を起すな、冷静に行動しろ

そんな言葉を、彼は心の中で幾十遍となく繰り返し返していた。ハンドを握る指先はまだガタガタと震えていたし、アクセルを踏む足も不安定だった。だが、とにかく車の中には少しの痕跡も残していないはずだった。文字通り闇の中へ葬り去ってしまったのだ。時間はまだ三十分あまり残っている。これだけあれば十分に映画館の終了に間に合うはずだった。

ヘッドライトの光茫の流れをようやくの思いで乗り切った彼は、できるだけ静かに車を車庫の中へ納めて宿直室の方へ歩み寄った。さつき出掛ける時、万一を慮って出口のドアに小さな紙片を挟んでおいたのだが、それは元のままになっていた。もし誰かがドアを開ければ、ひとりでに落ちるようになってあったのだ。

宿直室は静かだった。電灯は消えたままになっていたが中からは軒声一つ洩れては来なかった。雲

間から出た月の光が、窓ぎわだけを白々と照らし出し、その冷い光は畳の上にも少し落ちていた。そして、光の中に山田の足の先端が投げ出されていた。

「ほう、よく眠っている」

彼は、ビール瓶を片付けてしまおうと電灯をつけた。さつき出掛ける時は真赤だった山田の顔色は今や真っ蒼になっていた。少し口をあいて、白い歯並が妙にニヤリとした表情を作っていた。そして変に静かだったのだ。

どきりとした。ふっと、不吉な考えが彼の頭をかすめた。思わず彼は前かがみになって手を彼の鼻先へ持って行ったが、規則正しく当然感じられなければならぬ生温い風は、少しも彼の手に感じられはしなかったのだ。

あつ！ 葛西は思わず山田の肩口をつかんで揺すぶってみた。だがもはや何の反応もなかった。ぐらりと首が反対側に傾いただけだった。彼は強く手首を握ってみた

だがその手は、脈膊どころか体温すら感じられなくなっていた！

彼は一瞬飛び退き、そして呆然となつて、転がっている山田の死

体を見下した。睡眠薬の用量を誤

ったために、彼は死んでしまった

のだ。めまいがした。耳が鳴っ

た。おお！ どうしたらよいのだ

ろう。窓ぎわの、花壇に残した足

跡。ドアの把手やビール瓶に残っ

ている自分自身の指紋。その他無

意識裡に残した無数の痕跡を、今

やどうやって消したらよいのだろ

う！

混乱しきっている彼の頭の中に

やがて忘れがたい陥し穴のような

あの言葉が浮かび上って来た。

「殺してからあわてて弥縫策を講

じてみたところで、もはやそれは

ほとんど無駄に近いものなのだ」

ハガキをください！

目録を無料で直送します！

★春の夜のつれづれをかこつひとときに「あまとりあ社の書籍は如何でしょうか？」

★あまとりあ社では、皆様にじゅうぶん楽しんでいただける、数多くの単行本を出版しております。

★出版目録を見るだけでも、結構タノシメます。ハガキに、あなたの御住所とお名前をハッキリ御記入の上「裏窓四月号で見た、目録送れ」とだけお書きになってスグお申し込みください！ 無料で目録を送ります。

申込先 東京都中野区江古田一の二三〇二

あまとりあ社

色巫女
邪教殿

女 色 金 猫 教

矢 桐 重 八

栗 原 伸・画

金毛の猫はニヤンと鳴いたか怪教祖の糸にたぐられ色巫女の

黒髪にからまれて夜な夜な通いつめる妄信の男たち！

金猫教教祖

取次ぎの男が、両手をそろえて、静かに神殿の金襴をあけた。

うやうやしく一礼すると、殿内の教祖に声をかける。

「——次の方、日本橋弥左衛門町の大黒屋八右衛門どのにございます」

祭壇に合掌し、冥目していた教祖は、唇の端にニヤリと微笑をうかべた。

「うむ。お通しなさい……」

教祖——名は道玄。もののしく朱印の押された白衣に、肩のあたりまで垂れさげた総

髪。落ちくぼんだ眼窩

の底に、細いが鋭い眼

光を秘めた四十年配の

男である。

（大黒屋八右衛門——

うふふふ。だいぶ熱心

にかよってくるな。い

いカモだ。しほれるだ

け、しほりとらねばならぬ……」

道玄は笑みを噛み殺し、ことさらに高く、胸の大数珠を揉み鳴らした。その白袴の膝の上には、金色に光る毛並みをもった一匹の猫がうずくまっている。

この金色の猫こそ、この金猫教の使い猫なのである。そして道玄は、この怪教の創始者であり、教祖であった。

まもなく、大黒屋八右衛門が、今日は番頭の要助と共に、案内されてくる。二人は、膝をそろえて、教祖道玄の前に平伏する。

「おお、大黒屋どの。今日は番頭どのと一緒でござるか」

道玄は尊大にかまえて、八右衛門主従を見おろす。





「はい。これは恐れいりました。ご明察のとおりに、これにひかえまするは、当家の番頭、要助と申す者にございます」

商家の主と番頭の見わけぐらい、教祖でなくともわかりそうなものだが、八右衛門は感服した態で、また頭をさげた。

「——で、本日の願いごとは？」

「はい。実は昨夜、店の帳場から、百両の金、何者かのために盗まれたのでございます……」

ひと膝すすめて訴えるのは番頭の要助。四十前後の実直な風態の男である。

「ふむ。百両といえは大金じゃな」

道玄は、要助の眼の奥を凝視した。

「はい。それが、いくら考えてみましても、外の者が盗んだとは思われず、店の恥を申すようでございますが……」

「うむ。金は家内の者に盗まれた気配があるので、その者の名を、こっそりと金猫さまにお伺いしてくれと、申すのであらう……」

「さようでございます。このことをおおやけにして、もし家から縄つきなどだすようなことになれば、たいせつな店ののれんに、傷がつかますので……」

二人は、額を畳にすりつけた。

「よろしい。では、さっそく奥の霊寄せの部屋に通られるがよい。

——八右衛門どにはお係の巫女がおられたな？」

道玄の問いに、

「はい、あの……お篠さまでございます」

とびつくようにこたえる八右衛門。

「おお、さようであつたな。——

番頭の要助どのは、別の巫女部屋にご案内致そう。しばし、お籠りをなされい。そなたには、お浜が

淫祠邪教・特集

よからう……」

道玄の唇から、また、かすかな笑みが洩れた。この教祖、人の表情物腰から、すばやくその性情を読みとる術に長けていた。

巫女部屋

江戸、下谷の東はずれ、鶯谷をのぞむ金杉村の一劃。四方を田畠にかこまれた疎林のなかに、大きな癡寺があった。

その寺に、いつのまにか改築の手が加えられ、この金猫教という怪教が出現したのは、一年ほど前のこと。

たちまちのうちに、百数十の信者を獲得したのは、道玄の抱く、金色に光る猫をおがめば、財を招く靈驗あらたか、という噂がひろまったためである。加えて、教祖道玄の巧妙な弁舌、予言。さらにもう一つ、この金猫教には、とくに男の信者の心をとらえてはなさぬ、秘密の設備があった。

いま、神殿奥の靈寄せ部屋の一つでは——「おお、お篠さま、逢いたかった……」

五十をすぎた大黒屋八右衛門が、若者のように頬を上気させて、巫女のお篠を抱きしめている。

四畳半の小部屋であった。一隅には、申しわけ程度に小さな白木の祭壇がある。御幣、縄が飾られ、小皿に燃える燈明は、いかにも靈媒の部屋の気配をただよわせているが、その祭壇のすぐ下には、眼にもあでやかな友禅のしとねがのべられてある。

「ほほほ……。大黒屋さま、そのように、あわてずとも……」

まといつく八右衛門の手をやわらかく払いのけ、巫女のお篠は、ゆっくりと白袴の紐を解きはじめるのである。

——この部屋の壁一重隣りにも、同じような巫女部屋があつて、その祭壇の下では、番頭の要助が、巫女のお浜に手を握られてたじろいでいた。

「も、もし、巫女さま。早く靈寄せをなされて下され……」

うろたえながら、要助はさいそくした。

「ホホホ……。これが金猫教の靈寄せ。けっこうな靈寄せでございましょう？」

熱い息をふきかけながら、お浜は妖しいまなざしで、要助の膝ににじり寄る。

「め、めっそうもない。このようなたわむれをしていては、金猫さまの罰があたりませぬか。いや、盗まれた百両の金のゆくえを、早

くお伺いしてみて下さいませ」

要助は、あつけにとられて、首にまといつく白い腕から逃げまわる。

「ホホホ……。私の胸乳に顔をうずめて、楽しい夢をこらんなされば、お金を無くされた憂いなど、たちまちに消えてしまいます。さア、この御神酒を……」

細く白い指さきで、造酒徳利の酒をすすめる。ねっとり濡れた赤い唇が、要助の目の前で、牡丹の花びらのようにふるえてささやくのだ。

（——なるほど。この三ヵ月ほど前から、旦那さまが、夢中になってこの金杉村へかようわけが、これでやっと読めた……）

要助は、盃をうけると、口をつけた。よく吟味された上酒である。つぎつぎと注がれる酒を飲んでいくうちに、こころよい酔いが、要助の心を、次第にやわらかくときほぐしていった。

やがて——教祖道玄の明察どおり、お浜の肩に腕をまわしている要助であった。

「真言秘密加持祈禱、御神靈判断」と、いかめしい表看板。

それを一皮むくと、十数人の巫女に春を売らせる淫教の邪殿であった。

淫祠邪教・特集

黒髪を背中から腰のあたりにまで長々とすべらかし、神秘の白衣に身を包んだ若い女の風情は、あらゆる遊びに飽きた富裕の好色男たちにとって、新鮮な色気をそそられるのである。

寄進金の多い男たちにだけ、この巫女の肉は捧げられる。日本橋の呉服問屋、大黒屋の八右衛門が、足しげく姿をみせれば、教祖道玄が思わず、ほくそ笑むゆえんであった。

(——察するところ、うちの旦那さまは、お篠とかいう巫女に、ご執心なのだな……)

十年ほど前に女房に死なれたがその後、二十も年下の若い後ぞえをもらったくせに、女遊びのはげしい八右衛門だった。

あちこち河岸を変えて遊び歩くのが好きだったその八右衛門の足が、三月前からびたりと金杉村にむいて、それも三日おき、四日おきに通うという気のいれよう。

おすべらかしの黒髪、神秘をよそおった若い巫女の肌に、よほど魂を奪われたのであろう。

ふと——要助は耳をすました。

隣室の、八右衛門とお篠の気配が、壁を通してかすかにきこえるのだ。

要助の口が、苦笑にゆがんだ。

手をとられるままに、要助も赤い絹布の布団に身を横たえる。お浜の長い髪の毛が、ハラリと要助の顔を撫でた。

——しばらくたつと、要助の眼がパチリとあいた。巫女はもう、寝息をたてている。

「ふふふ……」

暗い天井をにらんで、彼は意味ありげな微笑を洩らした。何事かを、しきりに考える眼である。

——店の帳場から百両盗まれたなどというのは、彼の嘘であった。主人の八右衛門が、なにゆえに足しげく金猫教に参詣するのか、それを知りたいための、要助の小細工であった。

毒殺水死人

それから、三ヵ月ほどたった、ある朝——三の輪に近い山谷堀の水面に、白髪頭の町人の死体が浮かんでいた。

たちまち、大騒ぎになって、死体は岸にひきあげられ、検屍の役人がきた。

このあたり一帯、吉原田圃のはずれで、あまり人通りもない、さびしい場所だが、物見だかい下町の野次馬が、いつのまにか死体のまわりをとり巻きはじめた。

「——身体に傷らしいものはみえねえから、この仏は自分で水の中に飛びこんだんですかね、親分」

下っ引の梅次が、親分の伊三郎の顔をみあげてきいた。

「いや、毒を飲まされてから、堀の中へ放りこまれたんだ。腹に水を飲んでいねえし、第一、この死顔は、ただの土左衛門じゃねえ」

浅草花川戸の岡っ引、伊三郎は、かがんで菰の端をめくった。

死人の唇は、赤黒く腫れあがり、半びらきの歯のあいだから、固まりかけたトス黒い血が流れている。顎から咽喉、首すじのあたりに、紫色の死斑が点々としみついていた。虚空をつかんでいる。

「なるほど。こいつア、岩見銀山でも盛られたな」

梅次は、近々とのぞきこんで、むざんなその死顔に眉をひそめた。

「おい、梅。これをみろ」

伊三郎の眼が、鋭く光った。

死人がかたく握りしめた右手の指に、黒く長い髪の毛が糸のように巻きついている。

梅次は、こわばった死人の拳を注意ぶかくこじあけて、それをつまみあげた。三尺ほどもある髪の毛で、七、八本もある。

「親分、こいつはどうも女の髪の毛らしゅうござんすね？」

「ひどく長い毛だな。しかも、油っけがなく、結び癖がねえ。まさか、馬の尻っぽじゃあるめえにな」

「結いもしねえで、こんなに長くのびしっぱなしにしている女？」

「その女は、すくなくとも、この年寄りが毒をのんだか、のまされたかしたときに、そばにいたってえことだな」

伊三郎は、なおも念をいれて、死体のあちこちを調べた。

やがて、新しく顔をのぞかせた野次馬の一人から声があつて、この死人は、日本橋弥左衛門町の呉服問屋の当主で、大黒屋八右衛門と判明した。この不幸の知らせは、すぐ大黒屋へ届けられる。

（日本橋に店をもつ呉服問屋の主が、なんでこんな三の輪在の田圃の近くで殺されているんだ？……）

伊三郎の胸にうかんだ、第一の疑惑であつた。

まもなく、大黒屋の女房、お菊と、大番頭の要助が、早駕籠でかけつけてきた。

「おお、旦那さま！」

二人は、死体にとりすがると、たちまち、わあっとばかりに泣き伏した。

ひとしきりの興奮が去ったあと、伊三郎はまずお菊を木蔭に呼んで訊問をはじめた。

八右衛門の先妻が病死したあと、ずるずるべつたりに入りこんでしまったという、水茶屋あがりの女だけに、ちょっとした物腰が妙に色っぽい。

「——どうもこの度は、とんだ事だったな。

さつそくですまねえンだが、旦那がこんな目にお逢いなさったことについて、なにか心あたりはござんせんかい？ たとえば、誰かにひどく恨まれていたというような……」

伊三郎の問いに、内儀は袂を嚙んで嗚咽をこらえたまま、顔を横にふった。

そばから、番頭の要助が口をそえた。

「旦那さまは、心のやさしい、まことに実直なお方でございました。そんな、人から恨みをもたれるようなことは、あろう筈がございません……」

泣きくずれるお菊の背に手をかけていたわりながら、要助はひどく青ざめた顔色でいった。指のさがが、こきざみにふるえている。

「ふうむ。それじゃ、番頭さんにきくが、旦那は、なぜこんな三の輪近くのさびしい山谷堀で殺されたんだろうね。追い剥ぎが毒をのませる筈はねえし、まさか、こんな田圃ばかりの田舎に、主人がわざわざ出向くような商用もあるとは思えねえが……」

「さようでございます。お店のおとくい様があるわけでなし、さっきから私も考えているのでございますが、どうもわからないのでございませう。旦那さまが、どうしてこんな方角へ足をむけられたのか……」

要助は、顔の半分を手拭いでおおい、伊三郎の前に顔をさげてこたえるのだった。

地下室の絶叫

八右衛門殺しの山谷堀から、北へ十四、五丁いくと、根岸お行の松が見えて、その先はもう金杉村。村はずれの疎林のなかにひっそりと建つ邪殿は金猫教——

祭壇の真下に掘り下げた地下室に、いま、半裸の女がおしこめられている。部屋の中央

に立つ、五寸角の柱を背中にうしろ抱きにした姿で縛られていた。

裸ろうそくの燃えるうす暗がりのなかに、背をまるめてかがんでいるのは、教祖の道玄である。そして、この受難の女は、巫女のお篠であった。

白衣の胸もとが大きく乱れて、二つの乳房が、むっくりとまるくさらけでている。その乳房の上と下に、荒縄がびしびしとかけまわされ、柔らかな肉に痛々しく喰いこんでいるのだ。

ああ……苦しい息を吐き、また吸う度に、つきだしたうす赤の乳首が、こまかいふるえをみせる。

「さア、いえ。なんのために、大黒屋に毒を盛った？　なぜ殺した？　あの年寄りはおれにとっても、お前にとっても、だいじな客ではないか。これから先、当分のあいだ、いくらでもしほれる金ヅルだ。それを、なぜあんな馬鹿なマネをしたのだ！」

道玄は、手にもった割れ竹で、お篠の肩をピシリッと打った。

「う、ううむ……」

白くなめらかな肩に、赤紫の痕がはしる。割れ竹の鞭をこらえて身をかめると、柱を

うしろ抱きに縛られた腕が、その角にゴリゴリとこすれる。柱のうしろで一つに重ねてくられた手首は、もぎれるかと思うばかりの痛さ。

「やい、お篠。お前はたしか、葛飾の水吞百姓の餓鬼で、吉原に売られる身をはかなんで首をくくりかけた女だったけな。すんでのところであの世いきのところを、運よく通りかかったおれが助けてやったんだ。いわば、おれは、お前の命の恩人だ。それなのに、こんなどえらい裏切りをしでかしやがって！」

この道玄の言葉は嘘ではない。道玄がいまこの金猫教の巫女に使っている十数人の女た



ちは、みなお篠と同じような哀れな境遇のもとに育った者ばかりであった。そして、道玄の手に救われ、または買いとられたばかりに巫女の仮面をかぶせられ、肉の地獄にあえいでいる女たちである。

「てめえらは、おれのおかげで、毎日やわらけえ着物を着て、白い米の飯を喰い、夜は絹の布団にくるまって寝ていられるんだ。しかも、毎晩ちがった男に可愛がられてな。そのおれのだいじな金ヅルを殺してしまやがるなんて、なんてえ馬鹿女だ！」

口惜しくてたまらない道玄、割れ竹の先をお篠の縄目のあいだに、ぎゅうとさしこむ。柔らかい肌をぐいぐいとこじりまわす。憎悪の折檻であった。

「むむ……ああッ……」

長い髪をふり乱し、齒を喰いしばって苦悶するお篠。しかし、口は割らない。

道玄は、その髪の毛をひとまとめにつかむと、足を踏んまえ力をこめ、荒々しく上へひきあげる。ぐうっとのびあがるお篠の顔。

「どうだ、いえ、白状しろ！ 大黒屋に毒を盛ったのは、どういうわけだ！」

がむしゃらにひっぱり、左右にゆする。長い黒髪が、頭の地肌から、すべてひきぬかれ

るかと思うほどの苦痛、恐怖。

「ああッ、痛ッ、いいます、いいますから、手を、手をはなして！」

孤のように眼をつりあげて、お篠は絶叫した。暗い地下部屋に、その声がわんわんとひびいた。

黒髪の謎

浅草花川戸にある岡っ引伊三郎の住居。

家といっても棟割長屋の片隅。三疊と四疊半という、中途半端な間取りだ。隣りの婆さんが、ひとり者の伊三郎の飯炊き洗濯の世話をみている。

「——おい、梅。おれもともとマヌケだったよ。一晚考えてやっとわかったぜ。この結い癖も油つけもねえ、やたらに長い毛の持ち主は、ひよっとすると……」

「おっと親分、あっしもいま、ふっと思いついたところなんで」

調子よく受けて手をうったのは、子分の梅次。この梅次という男は、聖天町の「うめぞの」という小料理屋の次男坊で、立派な板前の腕をもちながら、道楽が嵩じて、こうしていつも伊三郎の腰にくっついていてる。

いま、二人の膝のあいだには、懷紙にのせた黒髪が七、八本、まるめて置いてある。殺された八右衛門が、右手につかんでいた髪の毛である。

「——粹筋のねえさんが、風呂あがりにもせ、ちょいと仇っぽい洗い髪にしたって、いくら油つけは残ってるものなんですがね」と、梅次は首をひねる。

「なんだ、わかっちゃいねえのか。それじゃおれの見込みをいおう。——つまり、こいつは、神主さんのそばで、赤い袴をはいている女のものと思われねえ……」

「ちげえねえ。髪の毛をずんと長くおすべらかしにした、お巫女さんというやつだ」

梅次、また調子よく膝を叩いた。

「八右衛門の殺された近辺で、巫女なんていうシロモノのいる御殿に、心あたりはねえかい？」

伊三郎の問いに、梅次は腕を組んで考えていたが、

「あつ、ありましたぜ。金杉辺りにたった一つ、たしか、金猫教とかいった、怪しげな神さま。なんだか、若いお巫女さんが、妙にくさんいるってえ噂です」

「きんみようきょう？ きいたことのねえ宗

淫祠邪教・特集

教だな」

「全身、これ金色の毛におおわれた猫を抱いている、道玄とかいう祈禱師あがりの坊主が教祖ということです。金談、縁談、失せ物判断、すべての願いごとに効めがあり、その金猫さまを拝めば、金がザックザックと入ってくるという噂なんですがね」

「猫が御託宣を垂れるのかい。変っていやがるな」

「願いごとに対して、お猫さまがニャアニャア鳴いてこたえる。すると道玄坊主が、その鳴き声の意味を通辞して、信者にきかせてやるという仕組みで……」

「ふうん。怪しいな。巫女がたくさんいるというのも何だか気になる。とにかくあたってみようか」
二人は、草履をつっかけると、花川戸をあとにした。

詐欺坊主

聖天町から姥が池、吉原田圃をぬけて、しばらくいくと根岸の行の松。二人は四半刻あまりで金

杉村につく。

どうせ寺社奉行の正式認可を得ている宗教でも神社でもない。伊三郎と梅次は勝手に金猫教の門をくぐり、取次ぎの男に十手の先を見せると、ずんずん奥の神殿に通る。

「さっそくですが、日本橋弥左衛門町の大黒屋八右衛門を、ご存知ですかい？」

金猫を膝に抱いた道玄と相対した伊三郎、いきなり本題に入った。

「存じております。わが金猫教の熱心な信者でござった。このたびは思いもかけぬ大層なご災難、私どもも胸を痛めております」

道玄は、悪びれずこたえる。

「殺されたのを、もうご存知なんで……。すると、大黒屋さんは、こちらへはたびたび来られたわけですね？」

「さよう。よくお見えになられた。近ごろでは、月のうち五、六度、いや、七、八度も参られたかな……」

「そんなに？……」

おかしいな……と伊三郎は思った。

道玄の言葉が本当なら、大黒屋の番頭要助のいったことが嘘になる。

伊三郎の問いに対して、要助はたしか、
「旦那さまは、こちらの方角に足をむけられ

る用はない」といった筈である。

大番頭ともあろう者が、月のうち七、八度も家を留守にする主人の、その行く先を知らない筈があらうか。もっとも、内儀のお菊でさえ、八右衛門の出歩く先は少しも知らないと答えているのだが……。

「大黒屋が堀に浮かんでいたのは、おとといの朝だった。その前の晩あたり、こちらへ姿を見せていると、足どりがハッキリして、私らも助かるんですがね……」

「いや、せつかくだが、八右衛門どのは、この七日ばかり前にこちらへ見えられたが、その後は一度も参ってはおらぬのじゃ」

ぶすりといって、道玄は鼻のわきにしわを寄せ、唇をへの字にむすんだ。

（この野郎、何か知ってやがるな！）

伊三郎は、敏感にさとったが、おどして口を割るような、ナマやさしい相手ではなさそうだ。そこで伊三郎は、からかい半分にとぼけてきいた。

「じゃ、その大黒屋殺しの下手人を、そこにいる金猫さまにお伺いしたら、教えてくれますかね？」

「いや、それが、いつもなら、たちどころに御暗示致すことができるのじゃが。あいにく

とお猫さま、今朝がたから、ちと風邪気味でな、咽喉を痛めておりますので、残念でござるが……」

道玄も、そらっとぼけてこたえる。

(ちくしょう！ たいした野郎だぜ……)

伊三郎は、ややムカッ腹をたてて、そのお猫さまをにらんだ。猫は、赤い口を思いきり裂いて、大きなアクビをした。

なるほど、毛なみ全体が、にぶい金色に光っている。

と——伊三郎は、猫を抱く道玄の指先も、かすかに光っているのに気がついた。

根っから生えた金色の毛なら、抱いたぐらいでその金色が人間の指に染まる筈はない。

(ふん。身体じゅうに金粉をまぶしてこしらえあげた金猫さまか。どうせそんなことだろうと思った。子供だましの詐欺坊主め！)

だが、伊三郎は、わざとそのことをあばきたてなかった。なにも気がつかないフリをして、こっそりこの坊主の身辺を洗いたかったのである。

悪党同志

その夜の四ツ、亥の刻すぎ——

金猫教本堂の裏手。高い廻廊の縁が、四方に張りだしている。その高縁を支える太柱のかげに、一人の女がたたずんでいた。

——お篠である。いつのまにか地下部屋の縄から、解き放たれていた。

十日ほどの月が夜空にはりつき、この邪堂の裏庭を、冴えざえと照らしている。

と——

土塀脇の通用門が、外からソロリとひらかれて、頬かぶりをした男が一人、背をまるめて忍んできた。と見た柱のかげのお篠が、身体を左右にうごかして、自分の存在を合図した。男は、つうつとお篠に寄ってくる。

「——お篠か。いまごろ呼びだしをかけやがって、いったい何の用だ。金はたっぷりやった筈だぞ」

男の声は低いが、とがめるようなはげしい口調である。

「ふん。なんだい、たった百両ぼっち。あたしや、百両に目がくらんで、大黒屋の旦那を殺してしまったけど、よくよく考えてみるとね、旦那が死んだあと、お前さんのふところには、大黒屋の身代五万両がとこ、そっくり入ってくるという寸法じゃないか」

「な、なにをバカな！ おれは、ただの番頭

だ。そ、そんな大それたことが！」

月光に半面を照らしたされたこの男、意外にも、大黒屋の番頭要助である。

「大黒屋夫婦には子供がない。旦那が死ねば財産はおかみさんのものだ。そのおかみさんとお前さんとは、すでに密通の仲……」

お篠の言葉は、鋭くつめた。

「ふふふ……。おい、お篠、お前をただの淫売巫女だと思って軽くみていたのが、どうやらおれの間違いだったな」

要助は、いきなりお篠にとびかかった。その白い咽喉に両手をかけると、ぐいぐいしめつける。どうせはじめから殺す積りだった。

「ぐうっ……」

お篠の背中が、弓なりにのけぞる。

夢中でのかかる要助の身体が、そのとき強い力でうしろから弾きとばされた。

「あつ、誰だ！」

地の上に横転した要助の胸もとに、抜身の小脇差がピタリと突きつけられる。

「おい、要助さん。おめえの腹のなかを読みとったのは、お篠じゃねえ。このおれだよ。百両盗まれたなんていやがって、はじめておれの前に現われたときから、くせえ番頭だとにらんでいたんだ」

要助の目の前に、ぐいと顎をつきだした男は、教祖の道玄である。

「あつ、きさま！」

「ふふふ……。お篠をオトリにして、お前をここに呼びだしたってえわけだ」

「きさまがおれに、なんの用があるんだ！」

「わかっているじゃねえか。大黒屋殺しの仕組みを、こうして一切合財おれに読まれたからにや、おれにも口止め料をださずばなるめえよ。といっても、おれのはちと高いぜ。そうだな、一万両ほどだしてもらおうか。いや、どうして、近頃の堅儀はやる事がでけえ。さすがのおれもたまげたよ」

「うぬ！」

そこまで知られたからには、生かしてはおけない。隙をみて起きなおった要助、ふところから、あいくちを抜いて身がまえた。

「ほう、やるのか。だが、そのへっぴり腰じゃ、おれを突くことはできねえぜ」



互いに白刃をぬいた二人は、殺気をはらんで夜の庭にむかいあった。

二人のかたわらには、咽喉をしめられたお篠が、ぐったりと倒れている。

「そら、ゆくぜ！」

じりっ、じりっ と歩幅をせばめる。道玄には要助の命を奪う気はない。ひき倒して咽喉もとに白刃をつきつけ、大黒屋の財産山わけを承知させる気である。

と——その一瞬。

ひゅうん！……ほそい白蛇のような捕縄が二本、風を切って宙にとんだ。

かまえている二人の手首に、キリキリとからみつく。

「主殺しの番頭要助、御用だ！」

「ついでに邪教坊主、御用だ！」

神妙にしやがれ！」

縄をひきしほりながら、闇のなかから躍りでたのは、花川戸の伊三郎に、その子分梅次であった。

めざしの祝宴

辛抱強く金猫教の本殿に張りこんでいた伊三郎と梅次の網に、三人の男女がうまうまとひっかかったというわけである。

「――ですが親分。こんどの大黒屋殺しの張本人が、女房のお菊とは、要助が吐くまで気がつきませんでしたねえ。もっともあの女、呉服屋の女房にしては、ちょっと色っぽすぎましたがね」

花川戸の伊三郎の家で、梅次が馴れた手つきで酒の燗をしている。伊三郎は欠け七輪の火の上で、めざしを焼いている。

「うむ、直接には手を下さずとも、番頭の要助にいいつけて、旦那の八右衛門を殺させたんだから、やっぱり張本人といえるかも知れねえな。ひでえ女房もあったもんだよ」

色と欲に目のくらんだ要助は、その機会を狙っているうちに、八右衛門が金猫教の淫売巫女お篠にうつつをぬかしているのをつきとめた。

そこで要助はこっそりとお篠に近づき、百両の金をやるから、八右衛門を殺せと命じたのである。うまく殺したら、次に今度は要助

がお篠を始末してしまうつもりだった。そうすれば、八右衛門殺しの疑いは、自分から遠くなるに違いないと考えたのだ。

百両という大金に目のくらんだお篠は、自分の霊寄せ部屋で、八右衛門に毒入りの酒を飲ませた。死体の指が握っていた数本の長い毛は、八右衛門が苦悶のあまり、お篠の髪につかみかかったときのものである。

巫女部屋の異様な気配にいぶかった道玄、お篠の部屋をあけてみておどろいた。

八右衛門が、口から血泡をふき、虚空をつかんで死んでいる。そのままにしてはおけない。役人に訴えできれば、金猫教内部の正体がみんなバレてしまう。

そこで道玄は、夜蔭に乗じて死体をつきだし、山谷堀まで運んで、水のなかに投げ捨てたのだ。

それから、お篠を地下部屋で責めて、口を割らせたのである。

「――大黒屋に毒酒を盛った大罪人だが、おれはどうもお篠という女が、憎めねえよ。うな気がする。百両欲しさの知恵のねえ人殺しだが、お篠はその金をもって、あの地獄のような邪のクサリから、逃げだしたかったんじゃないかねえのかなあ……」

お篠は、要助に首をしめられたまま、とうとう息をふき返さず、あの本堂裏で死んだ。これだけは、伊三郎の失敗であった。

要助は獄門。大黒屋の女房お菊は、直接に手を下さなかったので、死罪はまぬかれて遠島。

もちろん、金猫教にも大手入れが行われて教祖道玄にも重刑が下った。

「――ですがね、道玄の入牢十年というのはちょっと刑が軽くありませんかね、親分。若い女を巫女にさせて縛りつけ、その生き血をさんさんに吸いとり、善男善女をだまして金を儲けるなんていうのは、いちばん罪深いとは思いませんか」

梅次は、ひどくふんがいの口調である。

あの夜、本殿奥の廊下の両側に、ずらりと並んだ巫女部屋にも、手先たちがいっせいに踏んこんだ。

巫女はもちろん、その巫女と一緒に妖しい夢をみていた男どもまで、片端から叩き起して縄をかけた。

キリキリとうしろ手に縛られ、数珠つなぎにつながれてひきだされてきた巫女の数はおよそ十四、五人。

男たちも同数で、いずれもしどけない格好

であった。

「たけえ金をだして色巫女を買う好き男や、金粉をふりかけた三毛猫に、手をあわせて拝み奉まつる信者どもは、おれにいわせりや、善男善女どころか、救いきれねえ愚男愚女にみえるよ」

「まったくねえ……」

「いつの世になっても、迷信というやつは、罪深いものよ。当人は正しいと信じているだけに、まったく救われねえなア……」

伊三郎は、暗い顔で詠嘆するようにいったが、すぐまた思いなおしたように、明るい表情にもどった。

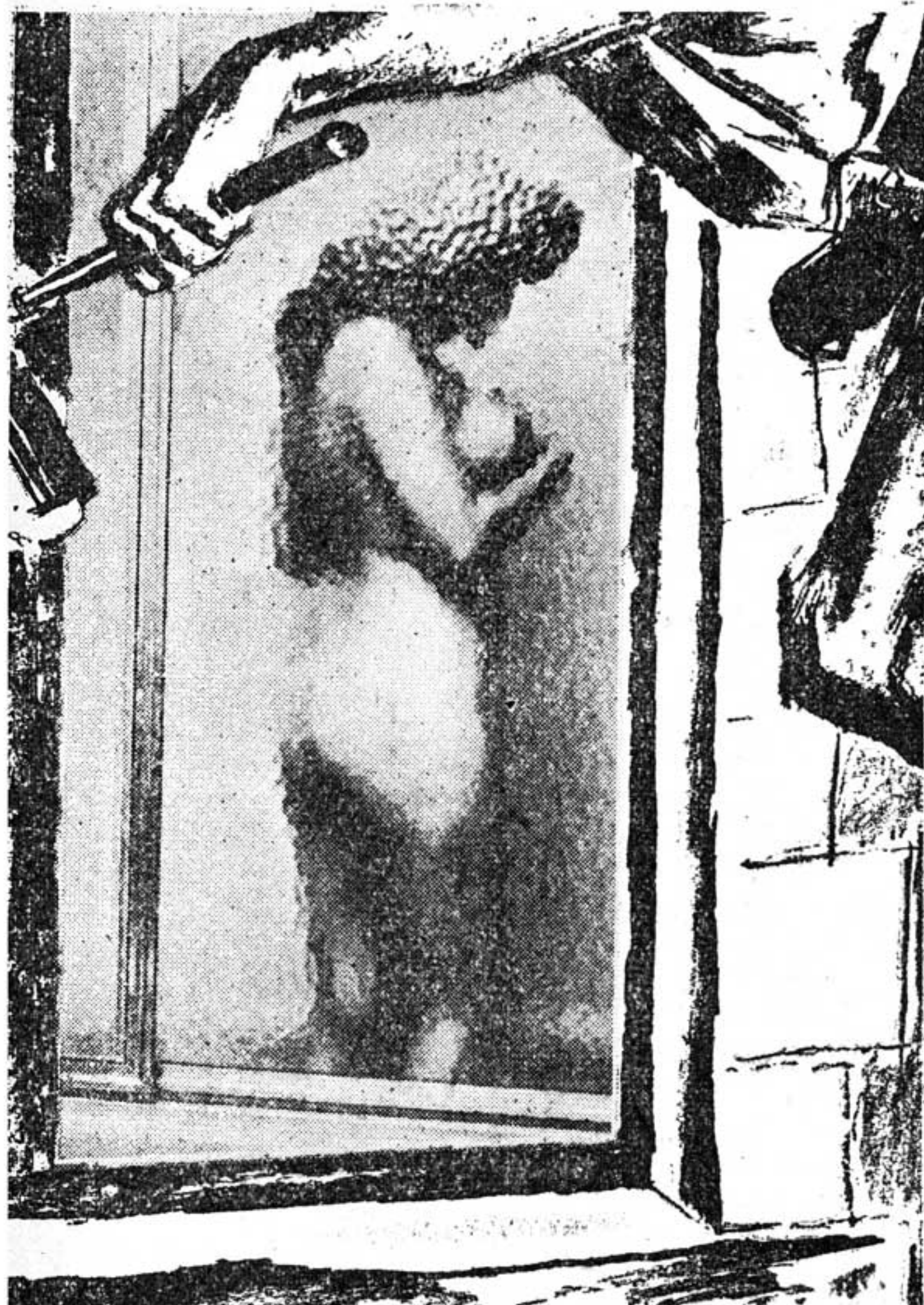
七輪の上の、焼けためざしを一匹ちぎり、ひょいと頬ばった。

「む、うめえ。焼けたぞ。そっちの酒のほうの仕度はどうだい」

「あちち……。いけねえ、こいつはすっかり熱燗になっちまった」

あわてて耳たぶをつまむ梅次。

親分子分というものの、同じ年頃の若い二人である。黒こげに焼いためざしだけの膳をはさみ、仲良く盃をとって、二人だけの事件落着の祝宴を、これからはじめようというのである。



★裏窓五月号は御要望にこたえ

女性解放悲史 特集です！

御期待にそむかぬ力作揃いです！ 三月二十三日

発売予定

この女優

○隠し砦の三悪人

いささか旧聞に属するが、今年の正月映画「隠し砦の三悪人」は、いろいろの意味で、話題を残した作品であった。

最近プロダクションをつくることになったという監督の黒沢明は「世界の巨匠十人」の中に数えられ、そ



れも比較的上位にランクされるほどの評価を受けている鬼才ぶりだが、それだけに演出に熱のこもることおびただしいものがある。

黒沢天皇と呼ばれる彼は、無類の凝り屋であり、アクション場面などは徹底的なりアリズムで貫き通す。その撮影は時には決死的を通り越しまさに殺人的な様相を呈してくるので有名だ。

レギュラーの三船敏郎などは、たびたび危機に瀕している。「隠し砦——」でも侍大将真壁六郎太を演ずる彼は猛スピードで走る馬上にあつて、両手で刀を握り、逃げる敵を二人斬り殺すのである。何しろ手綱を持たずに疾走するのだから凄じスリルで、これはもうサーカスの曲芸以上の放れ業である。

この映画でデビューした新人上原美佐は、野性の啞娘を装って敵中横断を敢行する姫君という役だが、いま一息で同盟国の領土へ到着するはずのところを、ついに敵軍に捕わ

れる。三船と上原と百姓娘を演じる新人の三人が太縄で後手に縛られ、三本の柱に繋がれるのだ。姫君は男まさりの勝気な性格という設定で、二の腕や太腿もあらわな服装で縛られ、三船同様あくらをかいて坐っている。百姓娘の方は顔が見えないほどにうなだれ、中腰の姿勢で括り付けられて膝を折っている。

姫君は表面、いささかも哀しまない。愉しかった火祭りのことなどを語り、祭りの唄を歌う——という、かなり長い場面だ。

翌朝、三人は馬上に縛られ敵の城へ曳かれようとする。馬上で後ろを振り返った六郎太と姫君は、目的地を目の前にしてこの不運！とさすがに無念そうな表情をみせる。

この三人の縄目は、名にしおう黒沢天皇のことだからいい加減な縛り方はしていない。

芝 利 泰

あの場面

嚴重そのものみたいに手首を縛つてある。

六郎太は極刑、百姓娘は奴隷に、姫は敵将の後宮にでも追い落される運命か——と見るうち、藤田進演ずるところの敵方の猛将田所兵衛に救われる。田所は槍で縄を切り解くのだが、もちろん、安もの時代劇に時々ある胸の縄目を切って済ますような不自然な切り方はしない。チャンと手首の縄を切る。縄は弾けるようにパッと宙に躍って、三人は自由を取戻す——という具合だが、いくら黒沢でも、実際に槍の刃を手首に当てる訳ではない。

この場面は三人が後ろ手の形で縄を握っている訳だろうが、ズルズルと縄が下へ落ちるような演出を避けたところがミソで、パラリッと縄が舞うように切れて飛ぶのである。

近頃は大分少くなったようだが、救出者が縛られた者の胸の縄目を切っただけで済ましているのは一体どういう神経なのか、演出者の精神を

疑いたくなる。山下清クンなら、多分こんな事を云うだろう。

「あの映画ナ、映画で女が悪い奴に縛られると、殺されないうちに良い人が助けにくるダナ、やっぱり。これはどういう訳かと云うと、殺されては映画にならないから、危ない時にはチャンと助けにくるのデス。アアイ。その時に、刀で胸のところの縄を切ると縄が全部解けるのは、あれはどういう訳かな？ 手首が縛られていないのなら、救われる前に自分で解いた方がいいと思うのでそういう映画を作る人は、兵隊の位で云うとどのぐらいの人かというときっとそれは二等兵ぐらいだろうとボクは思います。アアイ」

というようなことになるのである。アメリカ映画「手錠のままの脱獄」は、スタンレイ・クレマア作品で、この名プロデュウサアは、「見知らぬ人でなく」から演出もやり、「誇りと情熱」に続いて「手錠——」が第三回目の演出作品だ。クレマアも

只者ではないのだが、この映画ではつまらぬミスをしでかしている。白人トニー・カーチスと黒人シドニー・ポワエティは手錠で片手を繋ぎ合されたまま逃げる途中、何かの工事場で捕まり、背中合せに柱へ縛りつけられる。胸へ二巻きほどの縄がかかっていてただけなのに逃げようともせず絶望的な会話を交わしている、というのはどう見ても不自然で馬鹿な話だ。何しろ二人の片手は全く自由なのだから、縄をはずすのに一分とはかからない状態にあること明らかなのだ。監視人もいないのであるから逃げない方がおかしい。

いかに力作でも、こういう点に無神経では、これからの観客を納得させることはできないのである。おまけを云うと、トニーと黒人が逃げる途中で、泥水の中に飛び込んだり、ドシャ降りの雨の中に居たりするのに、手品のようにポケットの中からピョコピョコ新らしい煙草とマッチを出して吸ったりする不思議さも気

あの場面この女優

になったが……。

世界的なグランプリ役者の三船は「羅生門」の盗賊多讓丸の時もそうだが、縛られる場面では両腕を最大限に肩の方へ吊り上げるような姿勢をとっており、高手小手という感じを出す。（同じような場面は「柳生武芸帳」にもあったが……）するとそれらの人物がいかに強そうに見えるのだ。強い豪傑が捕われたので厳しく縛られている——という感じが出るのである。多分、英語には高手小手というような微妙なニュアンスを持つ言葉がないのだろう。日本は世界の警察史上でも最も遅くまで捕縄を用いていたほどのお国柄だから（あまり自慢にはならないがね）縄に関してはちよつとウルサイ演出者がいるのかも知れない。

○羅生門についての 一考察

黒沢の「羅生門」は今までにあらゆる論評が出揃っているほどの名作

だが、一つだけ、見逃がされている事柄がある。以下、筆者が初めてそれを書く事になるのだが、再上映の機会には読者諸兄はよろしく注意して見て欲しいと思うのでアル。

あの映画は、一つの事件で数人の人物の証言がめいめい喰い違う、という構成である。グラン・プリを受ける前、封切当時は大した評価も受けず、中には「一度見ただけでは話のみにこめない」などと書いた愚かな批評家もいたが、そんな事はない芥川龍之助の小説「藪の中」のみごとな映画化で、あれがわからないのは、よほど頭がお弱い御仁だったに違いない。

さて、決闘をするため、縛られた森雅之の縄を三船が刀で切るのだが嘘の証言をする場面では胸の縄を切って済ましているのである。筆者は最初「天下の黒沢でもこんなものか」と思い、その無神経ぶりが気になったのだが、実はそうでなかった。志村喬演ずるところの木こりが語る事

件の真相の場面だけはリアルに手首の縄へ刀を当てて縄を切っているのだ。

この着想は微妙すぎて一般には気がつかなかったようだが、筆者などは大いに感心し、同時に、安手な時代劇の救出場面を黒沢が皮肉っているような意味にも思えたのである。

黒沢は時代劇に迫真のリアリズムを持ち込んだ人で、「羅生門」以来、殺陣に新しい演出をみせている。そして、縄の扱い方にも一工夫みせているわけなのである——。

少しはめすぎたようだが、最後に一言、黒沢作品の女は、いつも云われる事だが、どうもただけないで困る。女を描く事にも大いに凝って欲しい。それができないうちは黒沢最大の弱点として観客は何か物足りない思いをいつも覚える結果になる。

なお、せりふの聞きとりにくいのも黒沢演出の弱点だが、今度の「隠し砦——」は比較的良好に聞こえた方

である。

○伊藤大輔の「弁天小僧」

去年の暮れに伊藤大輔監督が「弁天小僧」を作った。市川雷蔵主演の大映作品である。この監督は今さら云うまでもなく時代劇の巨匠であり古くから活躍しているヴェテランだが、約二年ほど前に大映最初の大映映画「地獄花」を演出して失敗し、その後仕事をしなかった。これが再起第一作となり、幸い好評で、目下は「女と海賊」をクランクしている主演の雷蔵はこの作品と「炎上」の演技によってブルーリボン賞を得たのだが、実は雷蔵の弁天氏は特にどうというほどのこともない。巧く見えたとしたら脚本と演出の功績だと思う。出色だったのは黒川弥太郎でエロキューションの的確さはみごとと云ってよい出来だった。それかあらぬか、この耳のバカに大きい咽喉仏のゴクゴク動く俳優は主演級に返

り咲いたのである。もともと二本立合戦で役者不足のせいもあるのだろう。

この映画では、本格的な時代劇は初めてという青山京子が、縛られたり、弁天氏に鞭で打たれたり、首をしめられて犯されそうになったりという御苦労な役をつとめている。

最初は不良旗本の邸へ奉公に行つて妾になる事を強制され、従わないので縛られ、責められる。もつともこのくだりは柱に縄尻を繋がれていゝ場所が一カットと、弁天小僧に救われる場面で、ヨロヨロと歩いてくゝるのがそれまでの責め折檻を暗示する、という程度の描写で大した事はない。弁天氏は「輪王寺の宮の使い……」などと身分詐称をしてゆすりに来るのであり、どうも河内山めいたシチュエーションである。

弁天は情婦に矢場を経営させているやくざ者で、その二階へ引っぱり込まれた京子は、一難去つてまた一難式に弁天から責められる。

逃げられないように梯子をはずすと、階下の女達の忍び笑いなどあつて、このマスターは女癖がよくないのである。ヒューマニティ溢れる二枚目にしないところが一つの工夫という訳だろう。京子は貞操観念の強い娘である関係上、弁天のいうことをきかない。弁天は弓のこわれたのを鞭の代用品として、つるで女を烈しく叩いて責める。「雷サマがあんなヒドイ役をするなんて！」などと純情なファンは驚くのであるが、何の事はない、この場面、イタリア映画「にがい米」の焼直しなのである。

出稼ぎの田植女シルヴァナ・マンガ・アノが俄雨の野良道で、やくざ男のヴィットリオ・ガスマンと出会い、ガスマンから木の小枝でいきなり鞭打たれ、アレヨアレヨアレヨと見るまにどうにかされてしまうのと同趣向なのだ。

だが、浪人の娘の京子は犯されなゝい。悲鳴を上げながら逃げるのみである。ついには弓のつるを首に巻か

あの場面この女優

れて締め上げられるのだが、この絶對絶命という時に、思わず「お母さん！」と娘が叫ぶ。みなし児の弁天は水を浴びせられたように欲情が消え——という具合でどうやら事なきを得るのだが、この辺りも意地悪い見方をするなら「四十八才の抵抗」の「お嫁に行けなくなるからイヤ！」からアイデアをいただいているみたいだ。この場面の影響でか、バアなどへ行くと「お母さん！」と悲鳴を上げてみせる女の子が、当時あったのである。むろん、筆者はまれに見る紳士である関係上、そういう店の女の子をからかったりはしないのでただの傍観者だったのであるけれども——。

さて、京子は後半、不良浪人の杉山昌三九と尾上栄五郎に捕まり、ある家の二階に縛られる。この時は近藤美恵子とアヴェックで縛られるのであり、縛尻が一メートルぐらいの長さで繋ぎ合わされている。昌三九たちは半分バクチ打ちみたいな二本

差しで、丁か半かで娘を選ぶ。それに気づいて二人は逃げようとするが縄尻が連結されているので巧く走れない。浪人二人は、めいめいの相手を征服しようとせいぜい憎たらしく振舞う。この辺り、二人の女優はことさらに後ろ向きになって手首をカメラの前に接近させたりするのが奇妙であり、リアルに縛られているところを見せるつもりなのか、不思議な演技をつけられている。

座敷から物干台まで、ゴタゴタと揉み合ううち、近藤美恵子の方は、片手だけが縄から抜けて自由になるのだが片手は後ろへ廻ったままなので危機には影響しない。この辺りは伊藤演出、凝ったつもりなのだろうが格別効果が出たということもなく、珍らしいというだけのものである。アワヤ！二人の美女の運命は？という際になって役人を避けながら弁天氏が駆けつけ、死闘の果てに二人の浪人を刺し殺す。この立ち廻りの間、縛られた女はハラハラオロオ

ロしているという寸法で、すぐには自由にならない。やがて縄が切り解かれると、二人の娘の帯や紐の間へ縄がはさまって、手は自由になったが、切れた縄はそのままラストシーンまで体から離れないのである。青山の方は猿轡の手拭いを首へぶら下げているありさまで、黒沢ほど鋭くはないが一風変わった演出となっている。

他に、弁天の情婦の阿井美千子が役人に取囲まれて「御用だ！」となるが、縄を打たれる場面はない。

なお、青山京子が責め場を演じたのは「弁天——」が最初の作品である。

伊藤作品の前作「地獄花」でも京マチ子が太縄で縛られ馬で追い放される責め場があったのだが、七、八年前の松竹作品「次郎吉格子」にも秀逸な責め場がある。高峰三枝子の単小僧の情婦が、兄の進藤英太郎に縛り上げられて囹に使われる場面だ。進藤は十手捕縄を預る悪党で、その

為でもあるまいが妹を本縄にかけて縛り上げる。やはり二階の座敷で梯子がはずされているのである。ガンジガラメに足まで縛られた女は身悶えをしながら「次郎さん逃げて！」と叫ぶ。

この作品はスチル写真よりも内容の方がよくできていた珍しい例で、スチルの方はつまらん責め場を想像させる構図だった。そのためか当時、「一向にいただけない責め場である」という意味の文章が活字になった事があったが、あれは当てずっぽうに書いたのだろう。本当は上出来の方だったのである。進藤に責められる高峰は、縄目に十手をさし込まれ、無残にもグイグイと締め上げられて哀しい悲鳴を上げる。この辺りを「オーバーな演技だ」と評した人があるが、実はこの演出、歌舞伎の責め場のような調子を狙ったものらしかった。ただ、この二人が兄妹だという点が、どうも後味がよくなかったのだが――。

まあ、そんな訳で伊藤監督も調子を取戻したらしい、だから「女と海賊」も期待してよさそうである。海賊船に捕われ女たの恋を描くものでサイレント時代の旧作の再映画化だ。

○新人はまだまだいる

大映の正月映画「雪女の足跡」は平次シリーズで例の如きものだが、ラスト近くで香川京子演ずる石原の利助の娘お品という女目明かしが荷車の中へ縛られる。並んで縛られるのが中村玉緒で、特にどうという事はないのだが、香川京子が縛られる映画はこれが最初である。

もっとも、彼女が新東宝にいたころ「暁の急襲」とかいふギャング映画で、椅子へ後手に縛りつけられ、田崎潤扮するギャングの親分から責められる場面がありはしたのだが、予告編には出ていたその場面が封切の時にはカットされて陽の目をみなかった事がある。この後、彼女は田

崎に犯されるのであって、純情スタアとしては好ましくない役だったわけだろう。

大体が女優というものは、新人の時か、人氣が下火になってからのものが、われわれには向くのでアル。高峰三枝子でも木暮実千代でも年増になってから責め場のある映画にも出るようになった。

「早く山本富士子が老けないかねえ」などと云っている向きもあるのだから、ファンの期待というものは千差万別である。

いま一つの可能性は、信望のある名監督が劇的必然からそういう場面を撮ってくれる事だ。「黒い河」の有馬稲子や「柳生武芸帳」の久我美子「純愛物語」の中原ひとみ等の場合が、そういう例である。

目下のところ映画界の「責め場処女」というと（つまり、まだ一度も縛られた事のない女優ということ）デス）北原三枝、渡辺美佐子、稲垣美穂子、中原早苗等の日活勢。これ

あの場面この女優

は日活が時代劇を作らない方針の会社なので、ギャングもの等に望みをかける以外は期待薄だが、「得も云われぬお色気を発散する渡辺美佐子など、何とかならんもんかねえ」などと嘆いておられる御仁もアリマスこれもファンの中だから、悪く思い給うな、と申し上げておこう。

団令子、司葉子、白川由美、水野久美等の東宝勢には、そのうちお鉢が回ってくる事もあるだろう。小悪魔的な団令子など、異色なものができる事受け合いである。白川由美あたりは怪物トリック映画で脅やかされる半裸の女などを演じて片鱗(?)をみせている。

この社には「何でも別格」的な原節子もあり、すばらしいアンヨの持主、重山規子や、大姐御越路吹雪などもいらっしゃる。もともと越路は舞台の方で何度か責められる女を演じているが、映画の方も頼みます！と云っておこう。

野添ひとみ、仁木田鶴子、紺野ユ

カ、金田一敦子、刈田とよみ等の大映多摩川勢は清純映画に切り換えるとあって、あまり望みはない。

御存じ新東宝さんや東映さんは、注文をつける余地がない。

松竹さんは有沢正子に杉田弘子という辺りだ。高千穂ひづるは大騒ぎの末に東映から飛出したのが幸いして一人前の主演女優になったが、時代劇にもせいぜい出て貰いたい。

○全裸体の責め場

吉川英治原作の「ひよどり草紙」は前後二三回映画化されている責め場の入る時代ものだが、六、七年前東映が最悪状態だった時に、製作した事がある。江見渉、三田隆が出演していた。この時の事を書く人がいないのは、あまり大胆なので封切後にカットでもされたのか？と思う。

何しろ全裸の縛り場面でふき替えなしなのだから、そんな事もあったろうと想像されるのである。

女優は、今は大映や宝塚で仕事を

している年増女優である。この女優は相当に大胆な場面を演じる人だが「ひよどり——」のそれが最高なのだろう。

木の枝に手首を縛られ吊り上げられているのが、白昼であり、まさに全裸で一糸まとわぬ姿であった。ただし、前手縛りだが、接近撮影で乳房や腰の辺りまでが大きく写るのだリアルなことこの上ない。

そこへ江見渉（今は江見俊太郎といい、テレビで売って新東宝でも再び使い出している）の若侍が通りかかり、驚いて縄を切る。女は失神、乃至は疲労しているの、若侍は女をかかえて歩き出す。縄を切ったから抱き上げるまでが一カットで続いているので、正直正銘の全裸だという事がわかるのである。

まことにきわどい撮影もあったもので、江見は途惑ったような表情で女を抱き、視線のやり場に困っているのがよくわかった。むろん、ぶっつけ本番で演じたのだろうか、間違

うらまどスコープ

いもなく野外ロケであった。

これが実は毒婦の仕組んだ狂言で若侍に接近するため、子分に縛らせたものなのである。

もうこうなると黒沢映画のリアリズムなんか……。ということになるのだが、多分あれば、封切直後に映倫さんが驚いてカットさせたのだろう。

(ノーカット版を見た人は手を上げて!) この映画で本当に責められるのは星美智子であり、後手に縛られた上、朝雲照代に足で踏みにじられるのである。いやはや、何とも当時の東映さんは荒っぽかったものだ。

また、その頃の東映は貧乏で有名な会社で、東映東京撮影所などは「東映大イシメ撮影所」などと云われていた。練馬の大泉にあるのだが仕事をしても金を払ってくれないので大イシメだ、と云った訳なのである。

ちょうどこのころ、島本春雄氏の小説が京都で映画化された事がある

「快傑鉄仮面」というような題のもので、善悪入り乱れて大いに闘い馬で颯爽と追っかけを——とやりたいところなんだが、馬に金を使う事ができないのだ。

何事も経費節約で、馬は主役の乗



るのが一頭だけだ。そこで悪人達が主役を追跡しようという場面になって、いとも珍妙なせりふが入ったものである。

「すぐに追いかける!」

「はい!」

「馬はどうした?」

「川へ洗いに行つて一頭もありません」

「馬鹿者奴! ええ、仕方がない、皆、走って追いかける!」

「は!」

てなもので、悪人達は駆け足で追跡したものである。

この無理な命令を出す男は、不遇時代の太友柳太朗だったように記憶するのだが、あの「いつ潰れるか? それはもう時間の問題だ」と云われていた東映が、今日の隆盛を得るようになったのだから、まことに世の中はわからんものである。

なお、この映画には月丘千秋の責め場や磔刑の場面があった事を附言しておく。



切支丹秘事

八坂の妖巫

橋爪彦七

東 桂 史・画

前 章（まえおき）

文政十二年の春、大坂町奉行所の名与力大塩平八郎は、事件の審理を終えてから、「実に苦勞をした。切支丹の詮議は、よほど學問がないと無理だ」と、云った。

大塩平八郎が、王陽町學派の傑物であつたことは誰でも知っている。その平八郎が學問がなくては——と云つたのだから、切支丹の事件に手をつけるとなると、よほどの決意がないと、中途半端になりやすいのであつた。

だが、これから話す事件は、平八郎が与力在職中でいちばん真剣に行動した——いや取ッ組んだ事件で、それだけにまた、平八郎の眞価を飛躍的に高めたとも云えるものなのである。

ところで、その事件とはなにかというと、京都の八坂の塔のそばに、堂々と門戸を



「何を筋ちがいな——」

と、はじめは、ふりむきもしないほど冷淡な扱いだったのである。

だから平八郎の苦心は並たいていでなく、

「見る、今に——」

と、歯を喰いしばっての努力、最後に凱歌をあげるまでには、必死

の活躍がつづけられたはずなのである。

しかし、それほど有名になった豊田貢——八坂の巫女の召捕も、朝日新聞の記者だった三田元鏡の「切支丹伝承」には、ただしく豊田貢となっているが、本山荻舟の「近世数奇伝」による大塩平八郎の項では豊田の姓が益田とあって益田貢になっている。そして事件が平八郎三十四歳のときとしてあるが、事実は三十六歳で、平八郎隠居の前年のことだし、またこれを、辻善之助博士の「大日本年表」によると、豊田貢が福岡貢となっている。福岡貢は「伊勢音頭恋妬刃」——古市の十人斬りで有名な遊女、油屋のお紺の情人で、その貢は本当の名は齋で——などと、どうも話がいろいろの方面へ飛びたがる。

元来、京の豊田貢は、五十路に近い女性——御老女型の、すこぶる

張って、神易と称する占いや、万病を治癒するという加持祈禱など、いうところの祈禱師の巫女豊田貢の逮捕で、これを禁教の切支丹だと見破った平八郎が、大坂町奉行所——天満与力という身分で所管ちがいの手入れ——一つまちがえば腹切り仕事を覚悟の上で、とうとう摘抉に及んだものなのである。

平八郎としては、充分の確信があつての上なのだが、周囲はもちろん、かんじんの協力をたのむという京都の町奉行所など、

権式の高い婦人で、婦人である以上、遊女お紺の情夫である道理もなく、第一また時代もちがう。

そこで、辻博士の年表にある福岡が正しいか、それとも三田元鏡の豊田か、または荻舟の益田か——と、手近の三人のをくらべて見て、どれが本当なのかちよっと迷う。

——しかし。

世の多くの切支丹ものに邪教として出てくる八坂の巫女は、たいてい豊田貢だから、実在の人物——女性であったというだけわかれば、豊田貢でさしつかえないとおもえる。で——ともかく、文政十二年といえ、十一代將軍徳川家齊の治世、子を産ませること五十一人という、おそろしく女性方面に派手で忙しい公方様の時代だが、ことが、禁教の切支丹となると、

「それ邪教だ！」

「伴天連だッ」

と、眼の色を変えて追捕に懸命だったものである。

姫君の奇病平癒、切髪は眉も動かさずひそかな布教の足場に……

淫祠邪教・特集

それというのも、徳川幕府は過去において、この切支丹宗徒蜂起に苦い冷戦のくるしさや、地獄図絵を見るような宗教戦のむごたらしい経験から、極端にその取締りをきびしくしたもので、考えようでは、この八坂の巫女の豊田貢なども、殉教の一女性にかぞえられるかも知れぬのだった。

殉教といえ、時代はさかのぼるが、三代將軍家光が、もっとも神経をなやましたという島原の乱に、ちよつぱり触れておく必要がある。寛永十四年十月二十五日の暁かけて、九州島原半島の南端、森田城のある城下町が真ッ赤な炎につつまれていた。

史にのこる肥前の島原一揆——それなのである。

城主松倉豊後守重政のあまりにきびしい重税の取りたてと、切支丹弾圧の非道さとが、とうとう農民を蜂起にまで追いつめたのだった。

「お役所をぶちこわせ！」

「役人をやっつけろッ」

「ひごろの恨みだーッ」

「仕返しだぞーッ」

四五万人のこの声が、千、二千——五千となるうち、世をしのんで機をうかがっていた切支丹宗門の武士も町人も農民も、

「時節到来！」

とばかり、この一揆に合流したというよりも、武士たちは、こぞつて一揆の指揮者となった。

武士とは——むろん豊臣の残党である小西行長の遺臣たちであったつづいて肥後の天草にも宗徒が蜂起した。そして、廃城となっている原城に拠って、はげしい勢いとなってきた。

戦闘準備は着々と整えられ、いよいよ事実上の宗教戦としての形態

となった。

そして、総数三万七千の大戦団が、盟主——総帥とあおいだのが、天草四郎時貞なのであった。

時貞は、少年期を長崎で過ごし、ひそと帰依した切支丹宗門の教義をふかく身につけた十六歳の青年だった。美貌で、聡明で、文武に秀でて、弁舌さわやか——と、それだけで、宗門の人びとから賛仰されるのに充分なのに、この時貞が、緋威の鎧を着て、その上に純白の陣羽織をはおり、背には紋綸子にラテン語で、

「——いとも尊き秘蹟を讃仰されよ」

と誌した十字の聖旗を指物に——この武者振りの華やかさ、澆刺とした若さ、勇ましさをを見ると、一揆の中の娘たちは、あまりの凜々しさ、気高さに、

「ゼスス・マリヤ——」

を口々に叫びながら、随喜の涙をこぼすのだった。

そして三万七千の大衆が、花のような盟主のもとに血みどろになって戦った宗教戦も、十二万四千という幕府の鎮圧軍だけなら、まだまだというところだったが、原城攻略に腐心した幕府軍が、和蘭の艦船に援護をたのんで、大砲を原城内へ海上から撃ちこませた非常手段には、支えも潰えて城は落ち、血戦四ヶ月の凄惨なたたかひの幕は降りたのだった。

——が、落城のとき、城中の謀將森宗意が、八名の若い宗徒を呼んで、

「後図を——」

と、云いふくめて、ひそかに城の搦手から落ちのびさせたことは、ながく、史のそとに忘れられてしまった。そうして、この島原の乱を

淫祠邪教・特集

契機として、前より以上に嚴重になった切支丹宗門の弾圧は、ほとんど、二世紀ちかくにわたって、すこしもゆるめられずに、世は、文化から文政という徳川家齋將軍の時代となった――

瑞宝亭の禱り

「あ、生神はんや」

「どこ行きなはるのやろ？」

滅多にないことなのである。

京の三条の大橋を、祇園の方からきた女乗物――四五人の女をまじえた供人を連れた一行が、急ぎ足で渡ってゆくのだ。

それを、いま、すれちがった中年の女が二人、乗物の主を、八坂の生神様と知って、見送っているのである。一行は、妙満寺の角を寺町へぬけ、丸太町へまがると、高倉の前の九条家の門内へ、吸いこまれるように入って行った。

それから、ものの半刻ほど過ぎて――

九条家の奥庭にある四阿の瑞宝亭が、四方を白布でかこわれ、その中央に祭壇が設けられ、何基かの燭があかあかとともされた。

やがて、館の方から敷石づたいに、足音がきこえて、白綸子の小袖に緋の袴、切髪を紫の打紐で束ねた神々しい女性があられわると、その四阿――瑞宝亭のうちに消えた。五六歩おくれ、従者らしい緋の袴をつけた若い二人の女性、これは、瑞宝亭の入口に敷きつめられた荒蕪の上にきちんと坐った。

おりから、陽も落ちてたそがれ――夕風が、さわさわと庭木の梢をねたって塀をいそぐ鳥の群が、糺の森の方へ飛んでゆく。

ものみな、しんとして、無気味なほどのしずかさの奥庭に、突如リン！リン……と鈴の音が響いてきて、汚穢をはらう香の煙りが、瑞宝亭の廂を匍って流れてきた。

「……高天原に神つまります、すめむつかむろぎかむろぎのみこと……」

中音に洩れ聞こえる大祓除ののりと――だんだん声に熱がこもってきて、それが終るとしばらくして、また別の祝詞が、朗々と、だが厳肅に、四方の白布をふるわせるほどに唱えられてきた。

見ると――荒蕪の上の緋の袴たちが、さっきから額づいていた上体を起して、合掌のままの全身を、最初はゆるやかに、そして次第に激しく震わせてきている――

これこそ、いうところの八坂の生神様の祈禱――豊田貢が、九条家の瑞宝亭へ、仮に、山城の藤の森の宇賀魂――稻荷明神を勧請して、諸病平癒の修法を、一向専念に行ずるあらわれだったのである。

九条尚忠の信頼

館の奥では――

主公の九条尚忠卿が、厳そかに聞こえる修法の鈴の音に、じっと耳を澄ませていたが、

「申しあげます」

と、召使の声に、

「何か？」

と、ふり向いた。

そろ——と襖を開けて、敷居際にかしこまった腰元が、

「房姫様、ただいま、お寝みなされました」

「ほう、眠ったか？」

「はい」

「不思議じゃの、あれほど苦痛をうったえていたに……」

「あの、とても御氣先が開かれましたそうで」

「左様に申したか」

「はい、快い、いつにないこと——と、仰せられまして、間もなくすやすやと」

「重畳じゃ、じきに、磨も見舞おう、そちたちも替りおうてやすむがよいぞ」

「はい」

「よし、退ってよい」

「はい——」

腰元を退らせて尚忠卿は、脇息に肱をついて小首をかしげた。

「まさか……噂ほどでもあるまいと存じたが、溺れる者はのたとえで

姫のいたつきにはかえがたく、あの祈禱師を招いたのだが……」

考えながら、しずかに立った。

愁眉を開く——そうした面持の尚忠卿が、それでもまだ、どこか暗影のまつわるような姿で、房姫の病室へと、足を向けるのであった。

尚忠卿の鐘愛の房姫は、脳を患っているのだった。

痛みの激しいときには、胸まで張り裂けそうになる——何とも知れぬ奇病だった。京中はおろか、洛外までさがして、本道医という本道

医を招いてみたが、さらに験しが見えぬのだった。

それで、とうとう祈禱というところにおちて行ったのだったが、尚忠卿にすれば、かなり疑いを抱いていた。

（何を一婦人の祈禱師ごときが？）

そうした嫌隙さえもっていたのが、豊田貢の修法によって、もしも房姫のいたつきを薄らげることができるならば——と、たった今までの、ひそかな軽侮を、悔いる気持にまでなってきたのである。

そして旬日——

奇蹟が起った。さしも難症とされていた房姫の脳病が、一日一日と快癒に近づいてゆくのである。

「不思議じゃ、実に不思議じゃ」

尚忠卿の顔も、声までも——明るくなってきた。

——万病平癒、修して験しの見えざるなし！

京中の、そうした噂は嘘でなかった。八坂の巫女の加持祈禱をねがう信徒は、日に日にまして、豊田貢の生神様としての存在は、ゆるがぬものとなってきていたおりからなのである。

「実にそうじゃ、八坂の女性は生神とも尊ばれようぞ」

尚忠卿の、こう云い出すころには、房姫が、その難症から完全に脱していた。

「其許には、何と礼を申してよいか——言葉には尽せぬが、何ぞ礼物の望みもあらば？」

そう云う尚忠卿に、生神様の貢は、

「いえ、やんごとなき御当家様に、御出入り御許しをねがえますほどならば、貢、望外のしあわせとこころえまする」

こう云って、あのふさふさとした切髪に、眼に見えぬほどの顫えを見せるだけだった。

「おう、それならば曆よりも望むところ、永く出入りを致しくれますように」

——かくして。

洛東八坂の生神様豊田貢の門前には「九条家御用」の高張提灯が、麗々と立てられることになったのだった。

濡れた眸

そこは、貢の寝所だった——

常時、寝泊りをしている八人の若い巫女でも、許しなくしては入れぬ一室、そこが、貢の心神をいこわせる密室なのである。

その夜——貢は、全身の埋もるほどな絹布の夜具に横たわっていた。

「……軍記さま」

ふと、声にして、貢は、おもわず四辺を見廻した。そして、ほーッと深い息を吐いて、しずかに濃い睫毛の瞼を閉じた。

瞼の裏——それははてもなく広く、心の視野が過去から現在へ自由に展く。

貢は、いま、自分を、そのこころの視野へ放してみた。

彼女は、肥前国長崎在の茂木浦で育った。幼く、父母をうしなった貢は、やがて、茂木浦の天神様の神官の家に引きとられて、下婢

となった。

主人は、水野軍記といって郷土の家柄だった。

——十六。

千々石灘から吹いてくる東南風は、みずみずしい彼女の肌を、あたたかく撫でてゆく——蕾の頃。今年三十という主人の軍記は、彼女を愛し、彼女を教育することに楽しみをもっていたが、一夜、ひそと彼

継



女を呼んで、

「貢、今夜お前は、洗礼を受けるがよい」

「……………」

「キリシタンの——」

「……………」

無言で、だが彼女はおどろかなかった。

厳しい上にも厳しい禁制の切支丹——それゆえにこそ根強く、反抗的にも伝承してきた切支丹が、迫害されればされるほど、隠された信仰の英雄たちが、たえず無形の絡脈をとってきていることを、さとも気づいている彼女だった。

そして、茂木天神の祭神——御神体が、十字架を背中に印した菅公の像であることも、ひそかに見知っていた彼女でもあった。

とは云え、それは、十六娘の貢から云いたいこと——だが主人の軍記には、数年の間、彼女を教え導いてきた指導の眼があった。

（たしかだ——この女は）

みがけば光る！ そうした素質と、従順だが堅固な思操とは、切支丹宗徒として、完璧に近いものだった。

「——洗礼を……」

そう云ったとき、最初はぎょつとなった貢の顔に、春風のわたるような和やかな微笑みのうかんだことを、軍記がはっきりと見て取っていた。

その夜茂木浦のある地点で、その界限にひそむ切支丹たちによって貢は、神聖な洗礼を受けた。

いまは、神秘的な切支丹宗門の一員である彼女が、一夜——さらに、軍記の愛の腕に抱かれたことも、それは主イエスの御名において、ゆ

るされた結合のあかしでさえあった。

「貢——わしの名を呼んでごらん」

火よりも熱い軍記の息吹きが、純情な彼女の耳にささやかれたとき彼女の腕は軍記の頸へ、乙女の情熱のあらん限りの力で、はなさじ！と絡みついていたのであった。

「軍記さま……」

「……………」

それを待っていた軍記は、狂おしいまでの動作で、ひしと貢を抱き締めた。

貢は、そのとき瞼を閉じていた。いくばくかの時が移る間、貢は、唇に唇を受けた恍惚感で、処女のからだは、感激の波のうねりに乗る無抵抗であった。

やがて、その一瞬蒼白んだ彼女の頬に血の色がのぼると、濡れた眸が、軍記の視線を、しっかり受けとめていたのである。

亡き人に告げる

今。——夜具に埋もる貢の瞼の裏には、遠い過去の、こうした、女としての唯一の思い出が、スベクタクルとなって映し出されているのだった。

「あのとき……」

貢は、軍記のからだのどこから、あんな力が出たかと思えるほどの強い抱き締めを、いまも、感覚にのほることができるのであった。

その軍記も二た昔も前に、亡き数の人となって、いまは思い出の彼方にある——そうしてその軍記が、死を予知したときのこと。

「お前も、水野家の人として切支丹の秘密を護ってゆける修行を積んだ。今こそ、この小宮をゆずる——」

そう云って、一個の小宮を授け、ちよつと宮の蓋をとった。

合掌——貢も、軍記と同じように合掌しているうちに、掌で握れるほどの小宮の蓋はとじられたが、そのなかに黄金の十字架が秘められてあることは、貢に、はつきりとうなずけた。

「これは、十数代にわたる水野家の祖先たちが、連綿と伝承してきた大切な守護神だ。おそれて敬をうしなわず、尊んで礼拝をおこたらぬよう。なお口授すれば、わが祖先は、寛永のころ原城の焰の中を脱して、地方に散じた八人衆の一人——伝え来ってお前の代となる——」

それは、忘れられない敬虔な軍記の態度だった。小宮を、貢の掌にのせて、

「サンタ・マリア様、あなたの危急存亡のとき、私どもはいつも御守護いたして参りました。すべてを御照覧のあなたは、どうぞ貢の一身をお救い下さい。わが宗門、わが家系の繁栄は、この貢の将来にかかっております。どうぞ聖なる思召をもちまして、貢をおまもり下さいますように……」

熱心に禱りつづけた厳肅な軍記の面影が、過去を想うたびに瞼の裏にうかんできて、貢の胸へ、あらたな感激を呼ぶのだった。

貢は、なつかしい過去の人へ、

「軍記さま！」

と、声なく呼んで

「よろこんでください！ あなたのあのこしになった布教

淫祠邪教・特集

の業績をお手本に、不断の精進をいたしております貢は、こんど、九条家のお出入りがかない、高貴のかたがたにお会いする機会がもめられましょう。そうなれば、いかな探索のたくみな宗門役人でも、おそらく貢に手出しはできません——」

そう告げる貢の顔はいきいきとして、更年期をすぎた女性とは思えぬ若さ、美しさ、気高さにうるおって、艶やかに輝いているのだった。

剔抉一途

事実、そのころから八坂の巫女——行者としての貢の身辺は、絶えず信者でかこまれていた。ことに貢が修法によって護る収益を公共のためにつかい、大半を割いて賤民を賑わす資とする方針をとったために、生神様のおさずけにすがろうとする人たちの集団は、結社の様相をしめして侮りがたい勢力となってきた。

「たかが稲荷の女行者、流行神のたぐいであろう——」

そう見くびっていた京都町奉行所が、これは——と見返したときには、行者貢の門前には、すでに、九条家の高張提灯が立てられた後だった。

(まずいぞ——)

と、思いはしたが、噂の手前、一応奉行所に貢を呼んで、

「御手前は？」

と、尋ねにかかると、

「修法の徳——疑わしくば九条家へお問合せ下さるよう」
従者と、云い切る貢に、どうも暗さがみとめられない。

与力の関根忠五郎が、奉行の佐橋長門守に伺いをたてると、
「関根、触らぬ神にのたとえじゃ。公卿殿上人が引合いになると面倒だぞ」

「では？」

「御身の勘考——一存ということにいたしての」

佐橋長門守が都合よく逃げる。根関与力が、

（これは不問に——）

思案をして、

「御苦勞にごさった」

と、そのまま貢を帰してしまった。

しかし——。

この取扱いを耳にして、

（うかつな！）

と、はるかに京の八坂を睨んだ吏員に、大坂天満の与力大塩平八郎があつた。

（臭い！）

そう思うと、夙くから京に手を廻していた彼だけに、矢も楯もなく

剔抉の一途をゆく奔心で、

「石島」

と、部下の同心を呼んで、

「京の噂を聞いたか？」

「噂……？」

石島小三郎が、

眉をひそめて聞き

かえすのへ、



「豊田貢——邪法つかいの妖婦と思う。京の奉行所では、証拠固めもいたさず、呼び出して放免、何のことかわからぬ。貴公、京表へ乗り出してくれ」

「は」

「因循姑息な京役人が手をつけぬとあるならば、天下大法のため、平八郎が自力をもつてでも取押えてくれる。その心ぐみで、充分に洗い出して来てくれ」

「承知しました」

石島同心、旨をふくむと、その日のうちに、京表へ——

化ける捕吏

来てみると——

豊田貢の豪勢な構え。九条家の紋をつけた幔幕を張りめぐらしたところなど、どうして、稻荷行者の玄関どころではないのであつた。

まさしく洛東の生神様の名にふさわしい壮重なもの。終日——信者の足が絶えない。

（なるほど喰わせものかも知れぬぞ）

石島同心、そのまま、ぶいと姿を消した。

そして夜——八坂の塔の物蔭から、孤影、その辺をうかがったり、また翌日は深編笠の浪人に化けたり、しきりに町方役人の勘をはたらかせていたが、四、五日で切りあげると大坂表

へ急行した。

平八郎に会うと、

「駄目です。昼夜、眼をくばってみましたが、

外部からではつかみどころがありません。せん両三名協力をねがえますか？」

「よいとも」

と、平八郎は、すぐ加勢の組下をつけた。

三日たった――

京からは何の沙汰もない。

五日、六日とすぎると、平八郎の気構えに、焦燥の翳が見えてきた。

(しずかに……)

しずかに……)

押さえるのだが、突きあげてくるようないらだたしさが、平八郎の眉宇を曇らせる。

また二三日――

急激な彼の個性



は、どうやら安閑と、京からの吉左右を待っていられなくなってきた。

だが、石島同心だとして、決して凡愚の器ではない。

緊張の幾日かを送っているだろう京表で、その夜――

真夜中の子の刻から丑満にかけて、云うところの生神様の豪壮な邸の客殿やら、宇賀魂の勧請してある神殿、それにつづく宝物の倉などが妙に人臭くにおっていた。

そして、ときどき、ミシリ……と板敷を踏む音がしたり畳のふちを踏みちがえる気配など、たしかに人の動きだったが、やがてのこと、なにか、ほそほそと、ささやきかわす人声がしてきた。

いうまでもなく、彼等は、平八郎の待ちわびている石島たちなのだが、ここ数日この連中、目立たぬように銘々が、病氣平癒の祈禱を頼むとか、家出人の足止めを修してもらうなどの名目で、邸内の間取りを調べたり、神殿その他の構造を偵察したりして、ようやく見取図をつくりあげ、庭に入って巧みに邸に忍びこむと、本格な探索に没頭しているのだった。

むろん、盗ッ人同様の闖入で、見張りを屋外においてある黒装束の石島たち、暗さになれた

眼の三人が、神殿脇の隅ッこにかたまつて――

「石島さん――」

「なんだ？」

「今日で七日だ。とうとう最後の今晚というのに、これぞといった収穫がない。われわれは、なんのために京くんだりまでやって来たのです？」

「それを云うな、筆頭与力の大塩氏が、これと睨んだ眼に狂いはなかった――」

「そうでした。だが、こんどの的ばかりははずれた。切支丹だとか、邪法だとかの話だったが、それらしい何の仕掛けもない様子ですぜ」云われると、石島同心、反駁の言句につまった――と見て別の一人が、

「ねえ石島さん、京の連中が手を引いたというのに、何もわざわざ大坂から出張るものはなかった。こう見えてもみんな、大坂には相当に仕事をひかえているのだ、そうでしょうが？」

「もつともな法だ。――が、邪教の詮索はむかしから、気長い忍耐と苦心がはらわれている。うわべは、どう見てもいかがわしくない――そういう奴が、一つほころびると意外なことが往々にあった」

「しかしです――」

云いかけたとき、

「しッ！」

石島同心が、小声で鋭く叱声をくれた。

耳をすますと、どこからともなく、

ひいーッ……

たしかに女の苦鳴なのだ。三人は、云い合したように、全神経を耳

にした。

邪宗門捕り

ちょうど、そのころ――

貢は、地下の密室で、鞭をふるう手を休めていた。

「どう？ 大丈夫……？」

白衣姿で、ここみかげんに云う貢の眸が、淫らな血に燃えていた。

「ええ、もつと――」

答えるのは、貢の足もとに転がっている裸女の唇からだった。しかも無慙！ 麻の細引で後手に縛られた全身の、統のような美しい肌が打ちおろされた鞭の数だけ、暗紫色に腫れてきている――その残酷な皮膚の色へ、百目蠟燭の炎が、光りを艶を投げているのだ。そして、その裸女をよく見ると、なんと、いつも貢の手元でまめまめしく仕えている美女で、巫女の一人のお町なのだ。

「ねえお町、だいぶん夜もふけた様子――今夜はこれで……」

胸もあらわに、妖しいまでに上気した貢が云うと、

「あ、お師匠さま」

と、檜の床板に流した黒髪をさつと振ったお町が、

「あの、もう一度……もう一度だけでも……」

「打てとお云いかえ？」

「はい……」

お町は、後手のまま、顔をあげた。その頸すじに、細引が、痛々しいほど喰い入っているのだ。――が、それから腋の下へ流れる肉のくびれた緊縛美は、じつとりと滲んでいる汗とともに、むしろ嵩高な肉

の喘ぎを表わして、貢には身に沁みわたる情をうずかすものだった。

「打つぞえ！」

貢の手で、鞭が、びしッと鳴った。

「ひいーッ……」

お町が、海老のようになって身をくねらせた。それでいて、激痛をこらえる彼女の顔には喜びの微笑さえ浮いてきている——

「いくぞえッ」

と、貢が、また一揮——お町が、悲鳴をつんざいた。

とたんに——

地震!? いや、それとはちがう激しい響きが、物のこわれる異様な音をまじえて、にわかに玄関の方から聞こえてきた。

「お町ッ、変だぞえ！」

云うと、貢は、やにわにお町の縛めを解いて、地上への階段を、飛ぶように駆け上っていった。

そこは、突風のような人間の渦が舞っていた。

門扉をこわし、戸を蹴破り、襖際子をぶっ払って行く町方役人と手先たちの侵入だった。

「容赦なくやれ！ 眼をさえぎる物はことごとく取り払えッ」

指揮にあたる烈しい声——手に一本の寒竹の筥を持って、余人でない天満与力の大塩平八郎が、果断——大坂城代の指示をおおき、京都所司代、町奉行を強引に動かした宗門改めに手を染めた捕物陣形だ。貢は、見るより柳眉を逆立てて、

「夜中何者なれば、みだりに神前を冒すぞ！ 退れッ、退れッ、このうえ乱暴に及べば、神罰たちどころに下るぞ！」

すっくと立ちただかる形相は、さすがに冒しがたくも見てとれた。

——が。剛毅の平八郎である。

「申すなッ、邪法つかいの妖婦と見る眼に狂いはない、神妙に致せ」

「ええ！ 聞くもけがらわしいッ、不束ながらこの貢、町方役人などの調べを受くる覚えはないッ、退れッ、退れと申すに！」

血相をかえて、眼を釣りあげて、妖婆の怒りそのままの凄さだ。

「問答無益！ 引ッ捉えてくくしあげいッ」

断——平八郎のくだす指揮に、ばらばらと四、五人の影が貢のからだに襲いかかった。——その間に、石島同心などの合流した別の捕方は、神殿、客殿、その他の部屋々々を、残りなく改めて廻ったが、祭壇裏の地下の密室から、出た！ 金色にかがやく切支丹祈禱の用具が……なお、十字架、経典、血をそそいだと思われる聖像まで——ことごとくが、唐櫃のうちに秘められてあったのである。

切支丹の伝承！

稲荷行者豊田貢は、免れぬ証拠に、法縄を受けたのだった。

八坂の邸は、むろん破却されて、貢の腹心四名の者と、若い女性の巫女なども、残らず召捕られて、一時、世上尊崇の的となった八坂の生神様の正体が、あますなく知れ渡ったのである。

豊田貢——彼女は、

「法度きびしき邪宗門をひろめし為、不屈き至極——」

とあって、大坂一郷引廻しの上、斬罪におこなわれた。のこりの帰依の連中も、それぞれ刑に処せられたが、ひどい飛ばッちりを受けたのは京の与力関根忠五郎だった。

邪宗門の大罪人を取り逃がした——放免したという不明は覆うべくもなかった。一日、彼は、自分の不明を詫びた書を町奉行佐橋長門守に呈して、従容と、屠腹をしたのであった。

パリの裸体教

愛神の生贄

北羽 奥男

根元 裕・画



片手を切られた美女を拾って、ハートレイの
カンは妖しいにおいを嗅ぎ出したノ円柱に悶
える女をとりまく狂乱の渦は次第にはげしく

自動車事故だ！

真昼のような月明りだ。見渡す限り果てし
もなく続くこの一本道路は、ヴィシーからヴ
エルサイユ、そしてパリへとつながる三十三
号国道。その舗装道路の上を、いま猛烈なス
ピードでスポーツカーがつつ走っている。や
がてシャルトルを過ぎて、国道は下り坂とな
る。車にますます速度が加わって速度計は時
速百十キロを示している。

九月、残暑の候とはいいいながら、車上の風
は冷たく、寒い。ハートレイはハンドルから
片手はずしてレインコートの襟をたてた。
ついでに腕時計の針をチラリと眺める。

——午前四時。夜明けには予定通りパリに
入れる。午前九時の欧州特派員会議には充分
間に合うはずだ。

チェッ。とんでもない人騒がせだ。せめて
一日前に知らせればいいじゃないか。おかげ
で週末休暇が台無しだぜ。くそおもしろくも

淫祠邪教・特集



ねエ。

ハートレイは、眼尻の皺を不満で締めながら、アクセルを踏み続ける。

車は、うなりをあげて風を切り、並木が将棋倒しになって、後へ飛んで流れて行く。

大体、フルシチョフが宇宙ロケットなんか飛ばすから、われわれも忙がしくなるんだ。下手をすると、今度の会議でモスコイ行きに

なるかもしれねエぞ。

せっかく、ルイと逢引きするところまで漕ぎつけたのにさ。どう考えても、ツいてねエな。

とたん、アクセルを踏む足が強くなった。速度計の針は無人地帯を矢のように走って、百三十キロまではねあがる。千メートルほど先から、道路は上り坂だ。

ハートレイは真正面を向きながら、肩を上げた。

よし、このまま、一気に登ってやれ……！と、その時、右のまなじりに、パッと赤い光がさしたのだ。反射的にハンドルを左へ切りながら、急ブレーキをきしらせて首をまわした。

事故があつたらしい。赤い光と見たのは、実は赤い炎だったのだ。一台のルノーが、並木に正面衝突して、その瞬間、ガソリンが洩れて発火したらしく、尻の方から火の手があがつて、車のなかのシートにまで炎がまわっている。

馬鹿な野郎だ。おおかた、酒でも飲んでやがったんだろう——。

このまま、通り過ぎようとしたが、新聞記者特有の好奇心が、つい、車を停めた。そして、急いでドアを開けるとルノーへ向かつて大股で近づいて行った。

右腕の無い女？

運転台をのぞきこんだハートレイは、一瞬ギョツとした。ハンドルに俯伏せになっっているのは、白いドレスを着た金髪の女で、しかも、右腕が肩の付け根から消えてなくなつて

いる。考える余裕もなく、ドアを開けて、いそいで女をひきずり降ろしたものの、そこでまた、彼は二度びっくりだ。

なんと、両の足首が針金で固く縛られていてのだ。しかもはだしときている。

これには、きつとなにか？　だが、ともかく、片方の腕を探さなければなるまい。ルノーの前部が、屑鉄のようにグシャグシャになつているところを見ると、衝突のショックで腕が飛んだのかもしれない。火炎の光をたよりながら、ハートレイは急ぐ眼つきで、もう一度車のなかをのぞきこんだ。

なかにはなにもない。しかもルノーは一個の火の塊になろうとしている。

こいつはあきらめるより仕方がねえ。

彼は、引き返して、しみじみと女の顔を見つめた。

年格好は二十七、八というところか。唇に塗った紅のいろから判断すると、おそらく芸人か、バーの女給といったところだ。そう云えばアイシャドウも念の入った塗り方だし。

——だが、なんで、この女の足を……。ハートレイは太ももまでまぐれているドレスの裾をなおしてやりながら、両の足首にまかれた針金をほどこうとするのだが、深く足に食

いこんでいて、なかなか解けない。必死になつて、唇を歪めて、指先に力をこめながら、はて？　と、そこで、いつものように推理をめぐらせたことだった。

この女は、片腕を切り取られて、足首を縛られて車にかつぎこまれたのではないか。そこで隙を見つけて、左手で運転しながら、縛られた両足でアクセルを踏んで逃げだした。しかし出血多量で力尽き、ついに並木に正面衝突——。

月並な推理かもしれないが、それにしても片腕をもがれるとは尋常でない。どうにも犯罪の匂いがするようだ。さしずめ、この女、麻薬か密輸の片棒かつぎ——。よし、だれも見ちゃいねえ。御婦人の死体検分といくか。

こうなると、ハートレイは敏捷だった。汗と埃で、すっかり小ぎたない顔つきとなつたこの伊達男だが、両の眼をキラキラと光らせると、血で煮しめたようなドレスに手をかけ白いからだを上からつぎつぎと裸にさらしていった。結局は、それも時間の浪費で終ってしまった。

すんなりと長くのびた、形のよい足と、細い首、からだのわりに、大きく突き出た二つのふくらみを眺めただけで、多少気になる

淫祠邪教・特集

云えば、二つの眉がバカに吊り上っていることだが、それは衝突で受けたショックのせいかもしれない。ともかく、美人の裸体を、こうして眼の前にしたにせよ、右腕を切り取られた跡の白い骨が、鉤でそいのように、ニユッと気味悪く、夜明けに近いほの暗さのなかで浮いてまる前には、なんの感慨も湧いてきやしない。

チェッ！俺はどうかしてるぜ。昨夜からきょうにかけて、全然ツいてないじゃないか。ハートレイは、心のなかでくすぶってくる黒いかたまりに、腹を立てながら、とりあえず死骸をうしろの座席に積みこむと、車を再びパリへ向けた。

ルノーは、完全に一つの炎となつた。

Sという字の刺青

ブランシュ広場の一角から明るい日射しが、微かに流れこんできた。ようやくパリの街に着いたのだ。ハートレイはやれやれといった顔で、大きくあくびしながら、寝不足の眼をしばたかさせたが、

やがてその眼が前方に向いて据ったまま、漁火のように青く光った。

五人ほどの警官が、いちいち車をとめて、なかを点検しているのだ。五百米ほど先には六、七台の車が、すでに列をつくって停っている。

こいつはいけねエ。うしろに厄介な荷を積んでいるンだぜ……。

素直に渡すにしたって、下手をすれば証拠いん滅の疑いか、死体運搬でエことになる。

会議に出るところか、警察の留置場で二、三日泊ることになるぞ……。よし、のるか、そるか、やってやれ！

ハートレイは、ブレーキを踏んで車を停めた。人波をかきわけて警官の前に立つ。

「なにかあったンですネ」
「ころしき」

「それでいちいち車を停めるのは？」

警官は、うさん臭い眼で、いぶかしげに振り向いた。明らかに不愉快な顔つきだ。

「別に仕事の邪魔をするつもりじゃないのです。ほくも忙がしいからだなで……」

いいながら、遠くに離して停めてある、自分の車に顎をしゃくってみせ、内ポケットから紙幣入れを出すと、その中にしまっている

英国政府の旅行免状、仏国政府発行の海外新聞特派員の証明書、パリ警視庁の身分証明書、ポスト・オブ・ロンドン本社の記事証などずらりと並べてみせたものだ。

警官は、それに一応眼をとおしてから、皮長靴のかかとをカチンと鳴らして、いかめしく敬礼した。

「失礼しました。すぐお通り下さい。車が出られるように整理します」

急に変った愛想のよさに、ハートレイは苦笑まじりに、その四角く張った肩を叩いた。

「いいや結構です。それじゃ回り道していきますよ。でも、なぜ車のなかを？ そんなことをしたって……」

警官は、重々しく、分別臭くうなずいて、

「無駄かもしれませんが。しかし事件を発見したのは二十分前です。若い女が額に『発！』と、ぐるぐると人差指をまわして、自分の額を指差しながら、さっきの無愛想な表情とは、打って変った愛嬌を見せて、まくしたてる。」

「昨夜半に、ムードンの森で女の片腕が発見されたんですが、その死体が、まだわかりませんし、その腕のしなやかさと、指のマニキュアから推察すると、それも、若い女と断定

できる。しかも、不思議なことに……」

警官の喉咽仏のヒゲが生きもののように動いて、その眼は、とたん、手品師のように宙を向いた。

「不思議なことに、右の掌に同じ彫りものとしてあるんです」

「ほう……。いったい、どんな？」

そのハートレイの語尾にからみつくようにじわっとした云い方で向うの声が重なった。

「小さな円い輪のなかに、これもまた小さな字でエス」

「エス？」

「そうでさア。Sですよ」

ハートレイの身うちに、あさましいほどの昂奮が襲った。新聞記者の取材欲が、むらむらと頭のとっぺんまでのぼってきて、いても立ってもいられないほどだ。

「そうかネ。どうもありがとう」

ハートレイは急ぎ足で車に乗る。

——うしろの女の右腕に違いない。パリの警視庁には申訳ないが、この女の死体は、今日一日預かるぜ。もう一度、明るいところでゆっくり死体を調べるんだ。

胸のなかで、ひとりごとを噛みしめながらアクセルを思いっきり強く踏んだ。スポーツ

カーは跳ねるようにバックする。ヒゲの警官は遠くから敬礼している。ハートレイは、軽く片手をあげてこたえながら、車を横道に入れ、狭い道路をモンマルトルの住居に向けて走らせた。

パリは、もう、すっかり朝だ。

女の名はマリーヌだ！

モンマルトルのサクレ・クール寺院に近くハートレイのアパルトマンがある。地下のガレージに車を入れてから、彼は入口の小窓を叩いた。

「あら、ムッシュ・ハートレイ。どうしてこんなに早く。二、三日は帰らないと思いましたが……」

門番の女房のルンダ夫人が、けげんの皺を額に寄せていうのだが、ハートレイは返事を

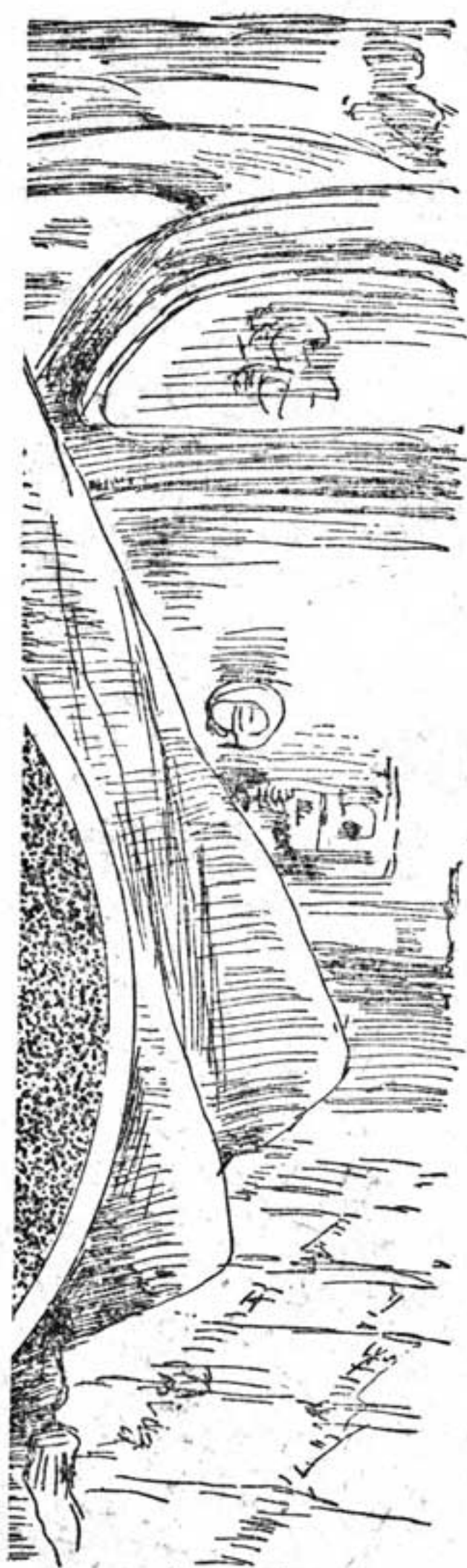
するのもしどかしい。いつもなら五階の部屋までエレベーターで行くのだが、今日は二段越しに、大股で階段をあがった。

体中が火のように熱い。そして、神経的な素早い動作で、大きなトランクから衣類をベツドの上にあけてしまうと、泥棒猫のような足どりでガレージにとって返すのだ。

不安と期待を織りませた、この作業は、それでも十五分ばかりで終わった。息をはずませて、ようやく大型トランクを部屋まで持ち運んでくると、油断もすきもない眼つきで、内側から鍵をかけた。

疲れが、どっと一度に、ハートレイの全身に圧しかぶさってくる。

——まず、ひと眠りしてからだ。食器棚から、パンとハムと葡萄酒を出す。裸のまま、その簡単な食事をすませ、彼



は寝台にもぐりこんだ。

だが、いったい、どうしたということだろう。ある物の影が、絶え間なく心の壁を叩くのだ。せきたてるような呻き声を聞いている気持に似ている。

ハートレイは、つかみどころのない不愉快さに心を抉られて、そんな自分をせせら笑うように唇を歪めた。

——畜生！ あの女は俺を寝かせないつもりなんだな。

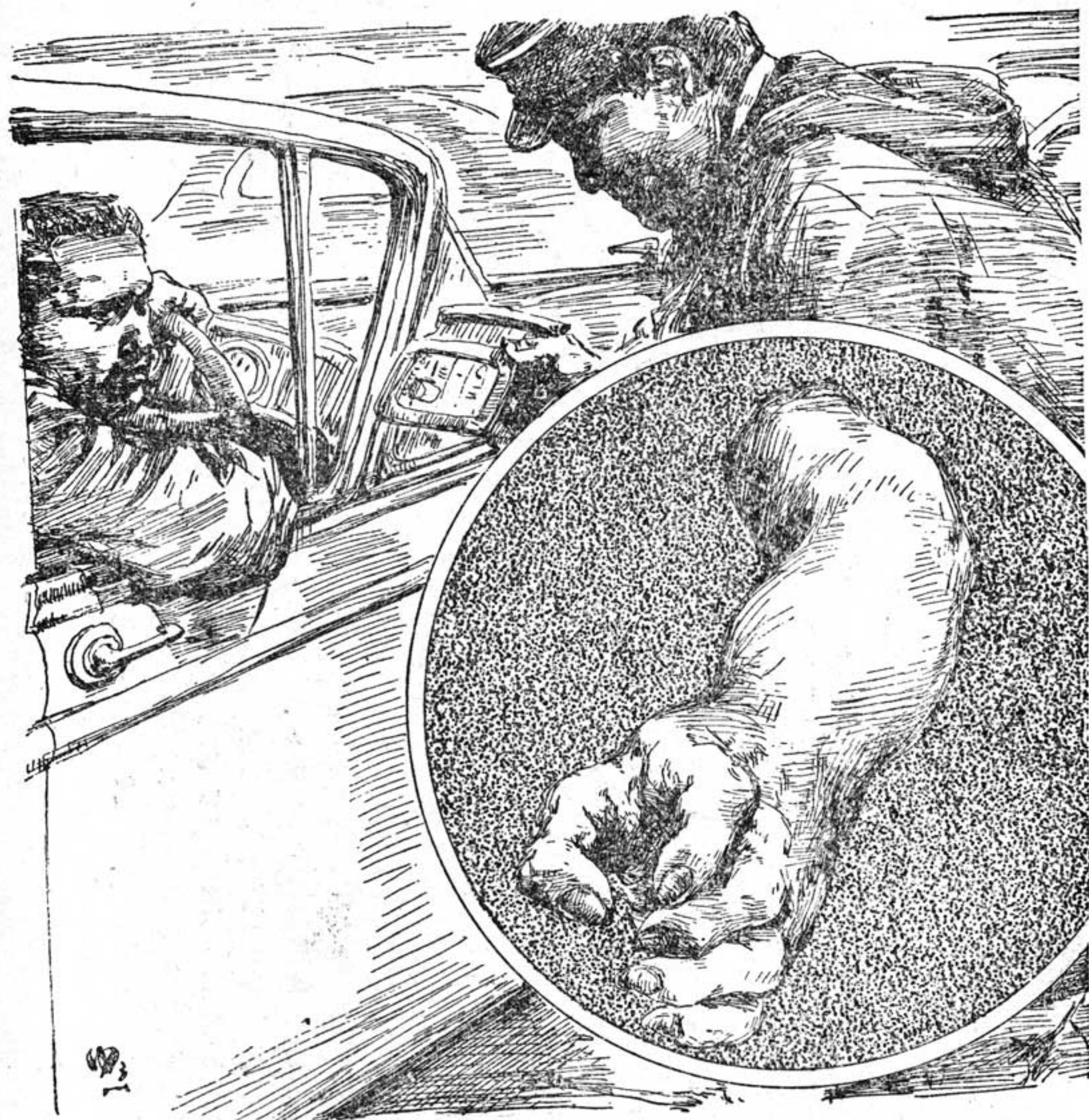
しぶしぶと、ベッドから起きあがると、彼は怒気をふくんだ顔で、トランクの蓋をあける。

あらためてみる女の顔は、さして苦痛めいた歪みを見せていない。上半身は血で染まっているが、腰のふくらみは、玉子のようになめらかで、足首にぐるっと一線を描いている針金の跡がいかにもいたいたしかった。

切られていない左腕をとり上げて、掌をよく見たが、そこには、さっき警官から聞いた円い輪のなかにSの彫りものはない。

——やっぱり右の掌だけなんだな……と、思いを凝らして、ドレスを広げてみた。

そして襟元にメーヨン衣装店と印したトレードマークが縫いつけてあるのに気づいたの



だ。

急いで電話帳を調べると、パチニョル通りとある。ともかく電話をかけてみることに。すぐに呼び出すと、交換手らしい声がする。

「得意係を出してくれ」

「まだ見えてません。時間が早すぎますわ」鼻にかかった甘い声だが、職業的な冷めた断り方だった。

「ま、まってくれ。それじゃだれでもいい。ちょっと聞きたいことがあるんだ」

電話を切られてはこまる。一分も早く、ここから糸をたぐって、死んだ女はともかく、俺の胸のうちに晴れ間を見せなきゃやりきれない。

「どんなことなんでしょうか」

けげんな重々しさを伝えて、ハートレイの耳に甘い声が響いてきた。

「白いドレスを新調した女を知りたいんだ。ちょっととした小ぎれいな女で、金髪。爪にピンクのマニキュアをしていて、眼は二重だ。ガラスでつくったつぼの形のイヤリングをつけているんだがネ」

「その方……、いつでも眼の下につけぼくろしてませんか？」

「えっ!? つけぼくろ?」

焦燥に駆られた彼の眼が、トランクのなかをのぞきこむ。左の瞼の下、とりわけ目立ったほくろ、あれはつけぼくろなのか。

「そのとおりだ」

語調は、めざす獲物をしとめたように、生き生きとはずんだ。

「マリーヌですわ。とっても愛嬌のいい方だから覚えています。ムードンの森のひばり亭にいる踊り子ですわ」

「ありがとう。美人さん!」

ひばり亭の踊り子――

ムードンの森――、夏の間、パリから涼みを兼ねて遊びにくる人たちのために、しゃれた料理店が、この森のあちこちに建っている。

パリの芸人たちも、いまが稼ぎどきとばかり、ムードンに集まって、料理店は華やかに幕を切って落す。夜も十二時に近いとはいいながら、この森はいまや乱痴気騒ぎの真最中だ。

ひばり亭は、七色の虹でなまめかしく壁が彩られ、真ん中につくられた円舞台では、いれかわり、立ちかわりに踊り子たちが、頓狂な踊りを見せて客を笑わせている。

「なんてきれいな手だ。すべすべして気品があつて。ねエ、今夜つきあわないか?」

ハートレイは舞台から降りてくる踊子を、さつきから幾人とななく席に呼んでは、シャペン抜いた。いまもまた、瞼に張りのある、美しい肢体の銀髪に向かってウィンクしたばかりだ。やがてドレスに着かえたその踊り子が隣に腰を降ろすと、にわかに彼は鼻の下を長くして、こういったのだった。

「名前は?」

「サティよ。でも今夜はだめ……」

「どうしてだい。金がたんまり入ったんだ」

「それでもだめなの……。明日にしない?」

「チェッ! もう先約があるのかい」

「ちがうわ。店がハねてから……」

と、急に女は口をつぐんだ。内側になにか秘めていて、わざと無表情をよそおうとする、しいて落ち着くふうな感じだ。

ハートレイは、わざと小さな浮かぬ声で、「店がハねてからどこかで彼氏と逢引か?」

女は、のっぴきならなくなったように、突然、そわそわとして返事もせず立ち上る。彼は咄嗟の鋭さで、女の眼の方向を一べつした。なにかにおびえているのだ。

この女の掌にある小さなシミのようなもの

——確かに円い輪にSの字と睨んだ。話はこれからじゃないか。

それが、なんで途中で、こうもそわそわしだしたのだ。

ハートレイの眼と耳がはてり出した。なんでもいい、このサティのあとをつけるんだ。

「ねエ、もう少しつきあえよ。シャンペンが嫌ならアルマニャックでもいいぜ。あれは強くてうまい酒だ」

「もう沢山よ。どうも御馳走さま。また明日ネ……」

サティは、駆けるようにして、客席の間を縫い、踊子の溜り場のドアを押して、なかへ消えた。

そのあとを眼で追いながら、ハートレイが素早く立ち上ったときだ。

「あの娘は、今夜はあきらめるンですな。下手にあとを追っても無駄ですよ」

肩を軽く押さえられて、うしろを振り向くと、顔の色艶のよい、しかし、油断なくよく動く眼をした男が、いんぎんに目礼したものだ。

溜り場の方へ向いていた首をなおしながら、なにか、彼の頭にひらめくものがあった。「そうですか。思いこむと矢も楯もたまらな

い性分でしてネ。でも、あなたの御親切おりにしましょうよ」

軽く、くだけた物腰で、その男は笑って見返したが、ハートレイはその刹那、ハツとして胸をひいた。

また見たのだ。——その男の掌にも小さな彫りものがしてあった。

にわかにこわばった彼の表情だったが、瞬時の間に、とってつけたように満面の微笑を浮かべた。

「御親切にお報いして、今夜はおこらせて貰いますぜ」

ハートレイの胸をかき立てるように、トランベットがけたたましく鳴り響いた。

いけにえを逃すな！

その男の名はラストル・モンマルトルの山の上の、ノルヴァン街に住む弁護士だとは、その晩にわかった。ニューヨークの毛皮会社の外交員で、二、三日パリに滞在して、西ドイツにまわるのだというハートレイの話を信用してあっけなく自己紹介してくれたからだ。

別れてから一時間ほどのち。彼は自室のベッドに横になりながら、その手に電話器を持った。

「ラストル氏ですネ。マリーヌを知っていますか？」

「マリーヌ？」

「そうですよ。ひばり亭の踊り子で、片腕を取られた女……」

「……？ あいつはまだ生きているのか……」

「ええ、命だけは助かりました。しかし、あなたの口吻からお察しすると、生かして置いちゃためにならないようすネ」

「お前はだれだ……？ やはりサグ教の信者

なのか？」

「サグ教の？ ええ、そうですとも」

ハートレイの眼が、異妖に輝やきはじめる。ピンと頭にくるものがあつたからだ。思わず息をついで身を起した。

「サグ教の信者だったら、いますぐマリーヌをひばり亭へ連れて行け。あの女はいけにえなのだ。神の前に捧げなければならぬ。今度こそは逃がすな。マリーヌに神の怒りの恐ろしさをよく知らせてやるんだ」

「それじゃ、これからひばり亭へ

淫祠邪教・特集

つれて行きますよ」

「早くしろ。もう一時間もすれば、お祈りが終わってしまう。今日のいけにえは確かサティのはずだ。サティの前にマリーヌを捧げるんだ。いつものように、裏口から入れ！」

ハートレイは、眼を大きくして気持よさそうにパチパチとまばたいた。いよいよ焦点にさし迫ってきたのだ。今日はじめて見せた彼の得意の表情だった。

そうだ。その前に警視庁にこの死体を返しておこう。これ以上おいたンでは腐ってしまうからな。

ハートレイの車の音が遠くに消えて、行きちがいに、パトロールカーのサイレンが、その昂奮したうなりを、彼のアパルトマンの前で止めた。

信者は裸になれ！

午前二時半。霧にけぶっていたパリの街はいつか細かい雨に変わっていた。だがムードンの森に入ると、その雨も錦装してない道路の熱気にほだされて、一面、モヤのような霞が立ちこめている。ハートレイは濡れたフロント・グラスに額をくつつけるようにして、ハンドルを動かしながら、ほのかな笑いを、影

のようにその顔に浮かべた。

——なにかある、そして、そのなにかの正体が、いま眼の前にぶらさがったんだ——という有頂天な歓喜をかくした表情だ。

しかし、その有頂天が、彼の心にいつか隙をつくっていることに気づいていない。

これから三十分も過ぎたころ、あられもない醜態を、人前にさらす破目に落ち入ろうなど、どうしてハートレイに知るはずがあるのだ。

この時間だから、もちろん、どこの料理屋も扉を閉じていた。ひばり亭の裏口もひっそ

り閑として、薄暗い裸電球がポツンと一つ鈍い光りを落としている。

だが、ベルを鳴らすと、横の小窓が開いた。「だれだ！」

「遅くなつてすみません。お祈りはまだ終わってないでしょう？」

「フランス人じゃないな？」

「アメリカの混血ですが、ラストル氏からの紹介なんです……」

窓からのぞいていた淡色の顔は、ラストルの名を聞いて、扉を開いた。

東洋人らしい、小柄で陰気な男は、それか





らうしろの飾りつけた大きな衝立を横に寄せる。そしてポツカリとあいた地下への通路を、ハートレイを前にして、右だ左だと長い廊下を導いて、殺風景な広間へ案内すると、外側から鍵を掛けたのだ。

四方とも白一色の壁で、入口は一つしかない。椅子も机もない。ただ天井の真ん中に、空気穴らしい小さな四角い窓があるが、もちろん下からは手の届きようもない。

——畜生ッ！ はかられたか。

思わず、挑むような拳を振りあげたときだ。

「お前は入信者か？」

と、野太い声が響いたのだ。いんうつな白い眼を思わせる声だ。

「なぜ、こんなことをするんだ？」

「ラストル氏の紹介だといったな……」

「そのとおりだ。俺も信者になりたい」

「サグ教は、愛の女神カリに犠牲を捧げ、信者もまた、どんな犠牲にもたえなくてはいいない。その修行ができるか？」

「できるとも。俺は本当に信者になりたいのだ」

「よし。ではラストル氏がくるまで、お祈りしていたらよい。そこで裸になれ！」

「裸に……？」

「そうだ。サグの教は男も女もない。人の間の階級もない。みんな素裸になって同じ苦痛を味わうのだ！」

ハートレイは観念したように、うなずいた。ともかく、この部屋から出ないことには、道を開こうにも開きようがない。しかも、ラストルがくるというではないか。胸の底から得体の知れぬ不安が押しあげてくる。彼はあがきはじめた動悸を、捨鉢に静めながら、着ているものを片っ端から脱ぎ捨てた。

ふと、ルイの愛嬌たっぷりの笑くぼが、脳裡をかすった。そして、何度も掌で、冷汗を拭った。

愛神の裸女――

これはまた、なんという怪奇な殿堂なのだ。山小屋のように、裏板のない天井の下には木彫りの古風な椅子が並べてあり、その明りはすべて燈明だ。真ん中に一段と高い長方形の台があつて、また、その台の真ん中には人間よりも少し高いほどの太い円柱が、不気味に一本立っている。

いや、なによりもハートレイが眼を見張ったのは、そこにいる数十人の男女の群れだった。

なに一つ身につけてない、この信者たちはまるで犬ころの戯むれるように、体をぶつけ合い、転げまわり、髪を引っ張り合い、汗みどろになって、板敷の上に強烈な体臭をまき散らしているのだ。

とやがて、誰れからともなく、

「愛神のお出ましだ……」という囁きが殿堂にひろまった。いっせいに、片膝を立てて胸を張り、両手を頭上に合わせる信者たち――壇上の女を見て、これはヴィナスの誕生かと、ハートレイは思わず、慎しみを忘れて眼を突き出したものだ。

妖気を漲らせる豊満な柔肌は、薄明りとはいえ、きめのこまかい、しっとりとした白さを思わせる。均勢のとれた長い足、肩のなだらかな線によく調和のとれた、二つのふくらみ。

――この裸女の美しさは処女なのかな？しかし、あの眼の光りは魔魚のように動いている……。

ハートレイは、静々と壇上にあがった愛神とやらの裸体を、じっと見つめながら、それでもようやく、感情のヨリを戻してきた。

「愛神カリよ」

と、その裸女はおごそかな声を出す。

「サグの教えを慕って、また信徒が集まりました。神の恩寵を願って、入信の儀式を行います」

唱和する、呻きのような低い響きが、四方の壁にこだますると、銀色の髪が乱れて、胸の隆起へ、なまめかしくまつわりかかった、二十四、五の女が、うつろな歩みを見せて、壇の上へとあがっていくのだ。

――あつサティ……

まさしくサティなのだ。乳色に透いたドレスに、薄桃色の下着をのぞかせて、濃いアイシャドウで妖艶な匂いをただよわせていた数時間前の彼女が、いまは人が変わったように、その瞳はほんやり宙を向いて、両手はだらりと垂れたままだ。

「あなたの名は……？」

「サティ……です」

「よろこんで、愛神カリの犠牲になりますか……」

「……」

「儀式の途中で、悲鳴をあげたり、泣き声を出したりすると、その罰は恐ろしいのです」

「……」

聞いているのか、いないのか、しかし、サティは口を半ば開けたまま、放心したように

淫祠邪教・特集

じっと立っていた。胸から腹のふくらみが異常なほど、大きな線を描いて呼吸しているのが、いよいよ、この場の空気を異妖に緊迫したものに仕上げている。

ハートレイは、息を飲んだような顔色になった。

底知れぬ魔の測に立たされたような、薄気味悪さ。だが、数十人の信者たちとは云え、畏まった姿勢を崩さず、むしろ淫靡な眼とも嵐を期待する眼ともとれるたたずまいで、身ゆるぎ一つしない。

——これは、いったい、どうしたことだい。こいつらは気違いの集まりじゃねエのか。

ハートレイは、身の危険なものも忘れて、やたらに腹が立ってきたのだ。

飲みこんだ唾が、ゴクリと鳴った。

あやしい儀式

なだらかな肩の前を、ふさふさと長く流れて、サティの胸のあたりで小さく揺れていた銀色の髪が愛神の裸女の手でうしろに束ねら

れると、それが儀式のはじまりらしい。

いっせいに、信者が立ち上って、口々にやら呻き声を放ちながら、またも狂気の乱舞が繰り広がる。

ハートレイも仕方なしに、両手両足を好き勝手に振りまわしているが、眼だけは鋭くサティから放さない。

と、彼女は円い棒を背にすると、その銀髪を上につけて体を吊られ、爪先立ちにじっとこらえているのだ。眉も眼も口も苦痛に歪んで白い肌が桜色に染まってきているのが、薄暗がりのなかでもはっきりとわかる。

だが、それもこの儀式では序の口だった。サティの前に立って、一心に祈っていた愛神の裸女が、突然、両足をひろげて、

「女神カリの恩寵を受けよ！」

と、叫ぶと、信者たちは待ち受けていたかのように、わあっ！ と激しく奇声を発したものだ。

そして、列をつくって台上に登っていくと吊り下がった、白い肌めがけて思い思いのところを、上から下へ、下から上へとさすっては、駆り降りて行くのだった。

サティは、みじめなくらいじっとしていた。死んでいるのか、生きているのか、恥じらい

もせず、身もだえもしなかった。

いや、むしろ、あのうつろだった瞳が、不思議に生き生きとして、恍惚の光りをただよわしているようにさえ映って見える。

だが、そう思ったのも束の間——、突然、サティが激しく、身を波打たせると、垂れていた両手で胸のふくらみを抱えたのだ。

「あれっ！」

と、前にきた信者の手を、せい一杯、体を曲げて避けながら、

「嫌です……！ こんなこと、いやッ……！」

「ホホホホ」

と、愛神の裸女の眼が、魔獣のようにピカリと光った。

「あなたも、マリーヌのような目に会わなければなりません。愛神カリの罰を受けるのです」

「ああ。助けて！ お許し……！」

しかし、もがけばもがくほど、棒の上に結わえた長い髪がからんでひき吊り、彼女のからは、ねっとりした油汗で、神秘めいた、絵のように輝やいてくるのだった。

愛神の裸女は、小気味よさそうに、それを眺めて、滑稽なほど腰を振りながら、力まかせにサティの下腹を蹴った。

「下手をすれば、この女も殺されるぞ。血の氣を失った、彼のこめかみのあたりがピクピクとひきつって身の危険もなにもなくとっさに勢いこんで壇上に駆けのぼった。」

「やめろ。女の髪をほどくんだ……！」

数分ののち――

「ラストル氏、また会いましたネ」

「いい度胸だな。殺すのはもったいないほどだ」

「あんたは弁護士だ。殺人の恐ろしさを知っているのだろう」

「わしが殺すんじゃない。サグ教の神のいけにえにするんだ。女神カリは、いつでも犠牲を求めている」

信者の乱舞に囲まれながら、ハートレイは円い棒を背中にはさんで、サティの手と足にそれぞれ合わせて大の字に縛られると、ラストルの掌でぐつと鼻先を押さえられた。

ハートレイの顔色が、だんだんと艶を失って、氣力のない、どんよりした眼つきになっていく。

視力も、聴力も、判断力も失ったとはいいいながら、ラストルの声がまだおぼろに聞こえていた。

「みなさん、いまからサグ教の神聖な儀式を

行います。サグ教は二十五年ほど前、不幸にして弾圧されましたが、いままた、こうして盛んになりつつあります。なんの階級も、男女の別もなく、ただ、愛の女神の前に犠牲を捧げて、われわれはしあわせになれるのです。今日はその昔、信者たちが神の前にどんな方法で犠牲を捧げたか、そのとおりの方法でやってみます」

くるくると手に振りまわされたのは、その先に分銅を結んでつけた、太い布紐なのだ。「やっ……！」と、いうみごとな手さばき――、布紐は生きものののように、縛られた二人の首めがけてぐるぐると巻きついた。

苦しきのあまり、一方がもたえて首を動かすと、片方の首にはますます深く紐が食いこんで、ついに呼吸がとまり、そこでがっくりと首を前へ倒したら最後、その重みで、幾分も待たずに、残りの一人もおのずと咽喉を締めつけられて息が絶えるのだ。

「ああ。うーん」

と、サティが全身でもがくたびに、ハートレイはだんだん氣が遠くなっていっていった。

「わあっ！」

と、叫ぶ信者のどよめきといっしょに、突然、眼の前にすさまじい光りが射しこんだが

それも遠い彼方の出来事のような。そして、二時間ほどたってから――、

「ポール。わけを聞かせてくれ。おれはいまどこにいるんだ？」

ハートレイは、同僚のポールが、にこにこ顔でベッドの傍に座っているのに氣がつくと甲高い声をあげて四方を見まわした。

「理由は簡単さ。君がマリーヌの死体を警察へ渡してから、ムードンの森へ出かけたことがわかったので、警視庁の旦那方がしらみ潰しに、調べたのさ。しかし危機一発で天国行だったな。あんな格好で死んだんじゃない、伊達男のお前のことだ。浮かばれないだろうぜ」扉をノックして、いかめしい顔つきの男が入ってきた。

「ムッシュ・ハートレイ。殺人犯逮捕に協力してくださいのはうれしいが、冒険の度がちと過ぎましたな。ところで、麻薬がぎれたらサティも釈放しますが、保証人になってくれますか？」

「よろこんで」

ハートレイの胸の奥に、サティの白いなよやかなからだ、愛しいほどのなつかしきでよみがえってきた。そしてこうつぶやくのだ。チェッ！ ルイの奴なンか、くそ喰えだ！

妖美艶色秘話 ☆あまとりあ社の特撰単行本を御覧ください!!

濡れた夜曲

島本春雄 著
喜多 玲子・装幀

ふっ、と正気にかえった。
後頭部がゾキゾキしていたし胸のあたりが
いやに涼しい。それに手足も縛られている。

しかし、絵津子は、かたく眼をとじたまま
であった。
理由がある。

正気にかえると

後頭部の痛みを感じ
るより先に、男
女の話し声を聞いた
のだ。

「なるほど、言わ
れてみると、たし
かにうっすらと跡
がある」

男の声であった
「——でしょう。
あのときは、こん
なじやなくて、真
っ赤な大きな痣に

見えたのよ」

これは、マダム星絵の声であった。

「あたし、てっきりと思っちゃった。だって
さ、おっぱいの上に赤痣のある女なんて、そ
うざらにいるわけがないでしょう。それに、
時間もちょうどだったし、痣は、電話連絡で
聞いた通り、右乳の上にあったんだもの」

「うむ」

と、男はうなずいたようである。

「それが、結局はキスマークのあと……。へ
ん。この女は、どえらく情熱的な男を持って
いるんだよ」

「ふふふ……さもありなん。見ろよ、このみ
ごとな乳房……男なら、だれだって吸いつき
たくなるだろう。いや、おっぱいばかりじゃ
ない。おれは、こんなすばらしい……」

——「乳房に痣がある」より——

★探訪記者の眼がとらえた妖しき夜の女体が
★陰微に織りなす種々相は強烈な美酒の味!

発売中! 定価二〇〇 千四〇



黒髪呪縛

小園桐爽

絵・古正英也

江戸の名物男

文政から天保へかけてのころ、江戸両国に泉目吉という名物男がいた。

泉目吉は、一種の畸人であり、庶民の中の芸術家であった。渡世

は人形師だが、彼が造る人形は、ただの人形ではない。

無残人形——幽霊屋敷の見世物小屋などに使われる、あの物凄い人形を造る名手だったのである。

目吉の人形は非常な人気を博し同時に、作者の目吉自身も江戸で評判の人気者となった。当時の江戸で彼の名を知らない者が、もしあったとするならばそれはよほど世情にうとい朴念仁だったに違いない。

彼がどういふ人物だったかその一端を、「わすれのこり」と題する当時の書物から書き写してみよう——。

泉目吉、本所回向院前に住居して人形師なり。此の者

幽霊、生首等をつくるに妙を得たり。天保の初め、造るところの物を両国にて見せたり。其の

品には、土左衛門、首縊り、獄門女の首を、其の髪にて木の枝に結び付け、血のしたたりしさま、又、亡者を桶に収めたるに

蓋の破れて半ばあらはれたる、又、人を裸にし、木に結びつけ数ヶ所に疵を付け、咽喉のあたりに刀を突立てるまま、惣身血に染みて眼を閉ちず、齒を切り

たる形は、見る者をして、夏日も寒からしむ。婦人子供は半ば見ずして逃出るもの多し。されどもこはいもの見たがる人情にて、却って大あたりせし。此の類ひの見せもの外にも多く出来

たり。云々。
とある。——

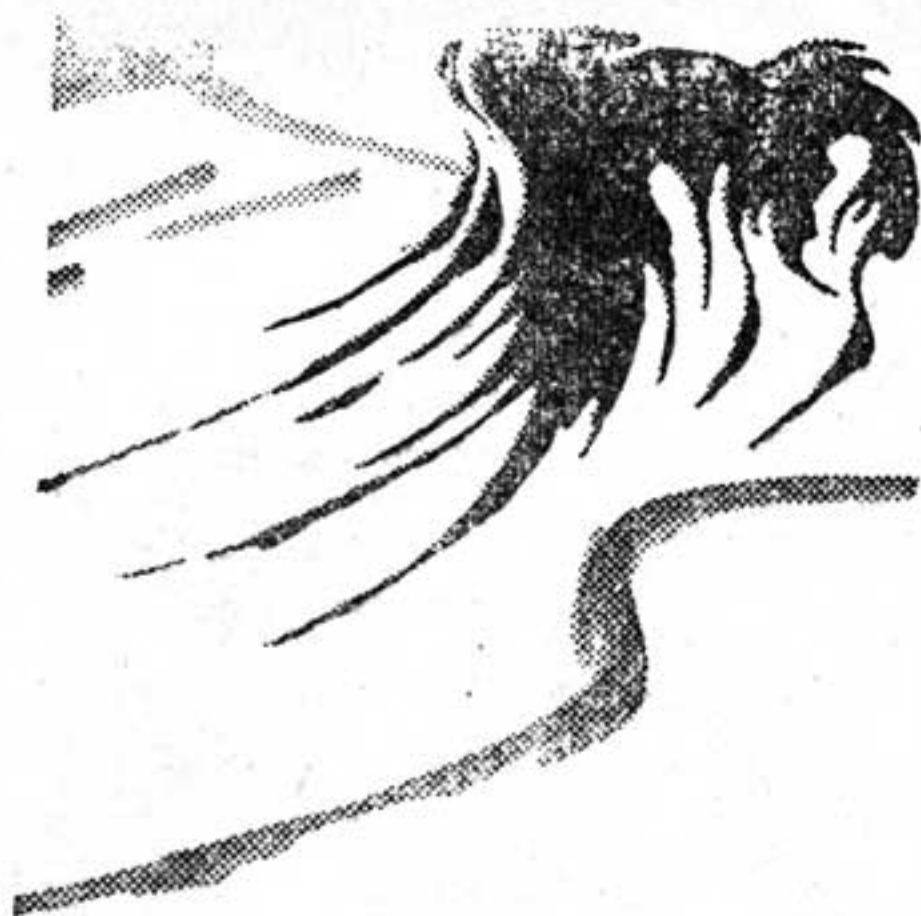
目吉は両国に住んでいた。

江戸時代の両国橋は、現在の位置よりやや下流に架けられ、橋身の延長線が、ちょうど回向院の正門に突き当たるようになっていた。

橋を渡って右側の、大川沿いの河岸地を尾上河岸と称し、この辺りを東両国という。

目吉の住居は、その東両国の尾上町にある。

色浅黒く男らしい引き締った顔立ちは、役者のだれかれに似ているのいないのと、両国一帯の娘達や女房連の噂に、いつものほった。もうそろそろ、三十に近いというのに、一体、いつになったら嫁





を迎えるのだらう、と女達をやキモキさせる。

怪奇な人形を造る男に女達の人気が集まるといのは一見、不思議なこと

ようだが、目吉の人柄は名人気質の、まずは代表的な江戸っ子だったし、男前も気っ風も無類、というので、これは、騒がれるのも無理はなかった。だが、当の目吉は世間の評判などいっこうに知らぬ顔だ。

「どうも、生きている女にやあ、あまりおもしろえのはいねえものだ……」

などと放言してはばからないの

黒髪乱し長襦袢一つで縛られた女に、音もなく近寄る人影！

だから、まことに風変わりではあった。

美しい闖入者

向島の桜は今が見ごろで、老いも若きも花に浮かれたくなる今日このごろだが、泉目吉に世間の暦はあまり通用しない。仕事に興が乗ってくると、花も月も、夜も昼もなく熱中するのが、この男の身の上だった。



今日も、目吉は暁のころから仕事場にこもって、仕上げもほど近い一体の人形を相手に、全知全能を傾けていた。

囚衣の身を、火刑の仕置柱を背負う形で嚴重に縛りつけられている哀れな娘の人形は、鈴ヶ森の八百屋お七であろう。

凄艶な美貌が黒髪をふり乱して激しく苦悶し、縄目を引きちぎらんばかりに身悶えて、今にも娘盛りの豊かな乳房があらわとなりそうなるその人形は、まさに名人芸。迫真の無残美を描き出して、妖麗そのものだった。

だが、目吉の表情には、まだ満足の色が表われていない。彼はしばし手を休め、一間ほど退って坐り込み、喰い入るように自分の作を凝視する。

どこを修正すれば思い通りの効果を上げ得るのか、探し出さずにはおかぬ、という、鋭い視線であった。

「目吉さん。……師匠。ねえ……」

師匠「たら！」

背後で艶っぽい声が起り、目吉は我に帰った。目吉にとっては不意の呼びかけだったが、声の主は焦れきって、駄々っ児のように身を揉んでいた。

「……何だ。小鈴姐さんかい」

「まあ！ 御挨拶なこと。何だはないでしょう。さっきから呼んでいるのに、返事もしてくれない。不用心だと思って上ってみれば、チャンというんじゃないやありませんか！」

「不用心だと思って、他人の家へ踏み込む、というのは妙だな」

「すぐそんなことをいうから憎らしい！」

地団駄をも踏みかねない様子で嬌声をはり上げる女は、柳橋で左袂をとっている小鈴という芸者で公称十九才。鉄火が看板のはやりっ妓だ。目下のところは別に特殊な間柄というわけでもない。いわば熱烈なファンともいうべき存在で、時折つむじ風のように目吉の

仕事場を奇襲するのである。

「朝っぱらから、どうしなすった何か用かい？」

「用がもしなかったら、来ちゃいけないんですか？」

「そう願いてえところだが、来るなどいっても無断で押し込んで来る姐さんだから始末が悪いやな」

「よしってくださいよ！ 人間きの悪い。ゆうべからロクでもない噂ばかり聞いて、気がクサクサするから、縁起直しにお化け人形を拝みに来ましたのさ……」

いうことがすこぶる変っているが、目吉もまたこれに劣らない。

今までうるさそうなそぶりですべて対していたのが、急に顔つきを柔げて坐り直し、はじめて正面きつて小鈴と向い合う姿勢となった。

「おいらの人形が、縁起直しになるのかい？」

手前の人形をよくいわれると、他愛もなく嬉しがる。まるで無邪気にも近い反応といってよかったが、実は小鈴、この辺の呼吸はチ

ヤンと計算に入れて喋っているのだ。

「ええ、そりゃあもう、あらたかで、もったいなくて……」

小鈴、花のような顔の前で白い手を可愛らしく合掌させ、艶然とほほえんだ。

憤ったり、すねたり、おだてたり、甘えたり、目まぐるしいことおびただしいのだが、動作の一つ一つに天性の愛嬌があふれるばかりで、少しも厭味にならないところが、徳な性分の娘芸者だった。たいがいの男なら、ついフラフラとなるのだが――

「おっと、俺を拝んじゃあお門違いにならあな。御本尊はこっちだぜ」

目吉は、処刑台のお七を指さした。

わたしを手本に

「まあ、こわい！ お仕置になる娘ですか？」
「うむ……」

淫祠邪教・特集

「わかった！ 八百屋お七ですね
凄いい出来栄え……まるで本当に生
きてるみたい」

「ところがなあ、いま一つ、どう
も何か足りねえ感じなのだ。断末
魔の喘ぎ、つてもものを出してえと
思うのだが、このままじゃあ夏場
の見物衆の汗を引っ込めさせるま
ではいくめえよ」

人形を見る彼の表情が再び厳し
くなりそうになった。

「目吉さんは、手本が
ないから、その辺の工
夫が苦勞でしようねえ
……」

「……む？ いま、何
といいなすった？」

「まあ！ 時々耳が遠
くなるのかしら？」

「……もう一ぺん、そ
の、手本がどうかっ
てのをいってみてくん
ねえ」

「……女の火あぶりな
んて、近ごろお江戸に

はないから……」

「それで？」

「自分一人で考えて造るよりも……」

「手本がいる、というのか？」

「……」

「はつきりしねえ！」

「……あの、わたしを手本にして
ください、といったんです」

思いきってキツパリといったつ
もりだったが、いい終ったとたん

に、耳のつけ根までが朱に染まっ
て、モジモジと、眼のやり場がな

い小鈴であった。

「なるほど。一理あるな。……俺

あ今まで、いろいろな人形を自分
一人の工夫で造って来たと思ひ、

うぬぼれてもいたんだが、考えて
みりゃあ、磔の女も、獄門の男も

土左衛門も首っ吊りも、晒し者も
子供の時分から、この眼で見えてき

ただなあ。だが、火あぶりの娘
だけは、まだ見たことがねえ……」

「だから……早くお内儀さんを貰
って、稽古台にでも使ったらいい

んですよ。じれったいあったらあり
やあしない！」

「……」

「何も、本当に火あぶりにしなく
たっていいんでしょ？ ほかのや

り方でも女が本気で苦しんだら、
目吉さんほどの名人だもの、工夫

の緒口はわけなくつかめると思っ
けどなあ……」

「うむ。なるほど。それで、つま

りはどうするんだ？」

「わたしを裸にして、柱へでも縛
りつけて、膝へでも抱かせると

か……」

「まさか、そんな目にあわせるわ
けにもいくめえが、そうだ、まね

ごとをちよつとやってみてくれる
かい？」

「ええ。じゃ……」

小鈴はたち上って、甲斐々々し
く、というのも妙だが、それに近

い動作で縋子の帯を解き始めた。
「おっと、何をする気だ。八百屋

お七だぜ、裸になるには及ばねえ
よ」

「それなら、わたしの着物が白く
なるまで脱ぎますよ。牢屋の着物
に色や模様があっちゃあおかしい
でしょ？」

いいながらテキパキと脱いでし
まって、清潔な純白の薄物一枚の
姿になった小鈴、さすがに羞恥で
四肢を包まれたような思いに襲わ
れ、胸乳の辺りを手でおおって、
その場にかがみ込んだ――。

（……あら、石仏みたいに突っ立
ってる。まあ口惜しい！ 何とも
思わないのかしら？）

「ちよいと、何をしているんです
よ！ 八百屋お七、観念して神妙
に控えましたぞえ。早くお縄を打
ってくださいました。座が白けた
ら困るから……」

「よし来た。かんべんしなよ」

目吉は細引を手にして小鈴の背
後に廻り、ほっそりと形のいい女
の白い両腕を、背へねじ上げた。
細引の一端を口にくわえて手首を

縛る。

「痛ッ！」

「いてえかい？」

「だいじょうぶ。存分にくくって
くださいまし。もう弱音は吐きま
せんから。仕事のお役に立てるん
だもの、うれしい……」

千三つの万八

「師匠、こりゃいってえ、どうし
たことで？」

「何だ、万八か、つまらねえ時に
出て来やがったもんだな……」

万八と呼ばれた男、巾着切りの
足を洗って、目吉の押しかけ弟子
となったのが去年のことだった。

前歴相応に指先が器用だし、根
は善良なので、目吉も近ごろは弟
子入りを認め、仕事を手伝わせて
いる。通り名を「千三つの万八」
という。千三つも万八も、ともに
嘘つきの代名詞だが、万八のは、
巾着切り時代の腕の確かさを誇称
したニックネームで「俺が狙った
からにやあ、千に三つもはずれは

ねえ」といつていたところからき
ている。

目吉の家からは目と鼻の先、松
坂町二丁目の「上野長屋」から通
ってくる。その万八が、仕事場の
入口で思わず立ちすくんだのだ。

何しろ、花もあざむく美女が肌
もあらわに剝がれて、柱に縛りつ
けられており、どう責められたも
のか、息も絶えだえとなつてせつ
なげに喘いでいたのだから、これ
は驚くという方が無理だった。

「その阿魔あいってえ、何者なん
で？」

「柳橋の八百屋お七だよ」

「へえ？ 柳橋の八百屋……」

ぐったりと首を垂れていた小鈴
が、ようやく顔を上げ、何とも微
妙な笑顔をつくった。

「おや？ 小鈴姐さん……でござ
んすね」

「仕事の手伝いをして貰ったの
だ」

「万八さん……猿若町あたりじゃ
見られない本当の責め場でしたよ

……」

万八、目をパチクリさせて首を
かしげるばかりだ。

「おかげでどうやら工夫はついた
気の毒だったね。万八、姐さんの
縄を解いてさし上げな」

「おっと合点！ 何だか知らねえ
が、もうちょっと早く来るんだっ
たねえ。千三つの万八一世一代の
不覚で……」

無駄口を叩きながら柱へ近寄る
のを、

「せっかくだけど万八さん。あた
しゃ目吉さんに解いて貰うんだか
ら、よけいなことはしないでくだ
さいよ」

と眼でさえぎる小鈴だ。

「何をいうんだ。誰が解こうと

変りはあるめえ。俺あ手が離せね
えよ……」

目吉は、まだ墨も乾いていない
画帳へ、しきりと補筆をしながら
きわめて無愛想な言辞を吐いた。

「まあ、口惜しい！ なんて無慈
悲なお人だろう、にくらしい！」

「まあまあ、そういわずに、おい
らに解かしておくんねえ。師匠は
仕事のこととなると急に人柄が別
になっちまうタチなんでねえ」

「ええ、ようござんす！ 仕事が
済むまでわたしはこのまま待ちま
すから」

「そんなことをいつてすぐに仕事
が終らねえ時はどうなさるね？」

「待ちますとも！ 目吉さんが解
いてくれるまでは、十日でも二十



日でも、たとえ一年だってこのまま縛られてます」

「おやおや！ 妙なことをいいなさるねえ。どうも近ごろは世の中全体が妙チキリンになって来やしたぜ……」

目吉はカラリと筆を投げ捨てて小鈴に近寄った。

土左衛門娘

目吉が縄を解き始めると、小鈴はとたんに満足そうな表情となったが、体では精一杯にすねた動作をみせるのだった。

「どんな具合に……妙チキリンなんだ？」

目吉は縄を解きながら、万八の話に好奇心を示した。

「へい、橋の方で人だかりがしたもんで、この前を素通りにしてのぞきに行ったんですがね、女の土左衛門が橋下に引っかかったってえ騒ぎで……」

「その女あいい土左衛門だったか？」

「いい土左衛門……ってのも妙だが、きれいな女でしたよ。かわいそうに、まだ若え娘で、さしずめお土左小町とでもいいいてえような別嬪なんだが……」

「何か、まだ但し書がつくのかい？」

やっと自由の身になった小鈴、

怨めしそうに目吉を眺めたが、目吉は土左衛門と聞くとそばにいる生きた美女よりも気がかりとみえて、小鈴にいたわりの言葉をかけるどころではなかった。

「それがね、黒髪がバツサリと切られて、どうも女っぷりが割引きされてるありさまなんで」

「ほう。するてえと、髪切りの仕業かな？」

「お役人衆も同じことをいってやりやしたが、妙ないたずらがはやり始めたもんでござんすね。全くどんな罰当り野郎のすることか……」

江戸で「髪切り」がはやったのは、その年の正月からだった。被



髪切り通り魔

害者は若い女に限られ、多い日は一晩に二、三人もの女が黒髪を元結から切られた。いきなり抜き討ちに切り落される女もあり、当て身を喰らって失神してから切られる女もあったが、犯人の正体はつかめない。奉行所も探索に乗り出してはいたが、いまだに、その動機さえも不明であった。――

「その娘は、祝言が真近かに迫っていたのかも知れねえな……」

目吉に続いて小鈴もこんなことをいった。

「あたしもそんな見当と思いますよ。女の命の黒髪を失くして、悲しんで身投げをした。というところかしらね？」

「ちょっと待った！ 髪の毛は伸びるもんですぜ。元通りに生えるまで婚礼をのぼすって、手もありまさあ」

「それができねえ事情だったかも知れねえよ」

「そう、きつとそうですよ。第一万八さんには女の気持なんてわか

るもんですか。わたしが今朝こへ来たのも、髪切りのいやな噂を聞いたからなんですからね」

「へへえ、髪切りとうちの師匠とは、どうつながるんで？」

「わたしを、おかみさんにしてくれないのなら、いっそ面倒だから目吉さんに髪を切って貰って、人形に使ってくださいって頼みに来ましたのさ」

「わからねえな……」

「髪切りなんかにはやられないうちに、自分から坊主になって尼寺へでも入りたくなっちゃったんですよ……」

小鈴が冗談とも本気ともつかない言葉を口に始めると、目吉は全然反応のない顔つきで立ち上り仕事場から出て行こうとした。

「師匠どこへ行きなさるんで？」

「土左衛門を見に行ってくる」

「あ、待ってくださいよ！ わたしも一緒に行きますから」

小鈴はあわてて、帯を細い胴へ巻きつけるのだった。

両国橋の下で発見された娘の身元は、その日のうちにわかった。

橋詰の番所へ駆けつけた娘の両親の話の総合すると、やはり婚礼の日が迫っており、髪切りの被害者という点も、目吉や小鈴の推察通りであることがわかった。

娘は、髪を切られてから三日三晩も泣き明かしていたというが、やがて、突然家から姿が消えた。

書置きも残さなかったもので、それから先のことは死人に口なしだが袂に小石が入っており、膝を合わせて固く縛ってあることから、覚悟の上の身投げ、という推定は、まず動かないものとなった。

動機もほかには思い当らず、悲嘆のあまり世をはかなんでの入水だろうとされて――この一件は片がついたが、奉行所の「髪切り探索」は、このできごと以来、一そう強化されるに至った。

今までは、ともかく人命とは無

関係の事件だったが、嫁ぐ日を前にした娘を死に追いやった、とあっては奉行所としても軽視はできなくなったのである。府内に厳重な警戒がしかれた。

だが――犯行は、その後も続いて起った。

役人達をあざ笑うように、警戒手薄の場所を熟知しているかのようには依然として通り魔的犯行は絶えないのだ。

奉行所の記録をたどると、こういうことの起るのは、これが初めてではない。

また、民間の文人が書き伝えた記録を拾ってみても、同種の事件が二、三にとどまらないことがわかる。たとえば「諸国里人談」という古書によれば遠く元禄年間にも起っていて「元禄の初、夜中に往来の人の髪を切ることもあり、男女共に結びたるままにて元結際より切り、結びたる形にて土に落ちてありける、云々」と書かれてい

太田蜀山人の「半日閑話」朝川善庵の「善庵隨筆」杉田玄白の「後見草」等々という書物にも同様のことが書かれていたのである。

しかし、今度のように長期にわたって執念深く続くのは例のないことだった。過去の髪切り事件は短い例で一、二カ月、長くても半年とは続いていない。一時の奇態な流行、として世間が騒ぎはじめるころには終りをつげるのが常だったのだ。

だが、今度ばかりは、単に、悪質ないたずらや奇怪な流行、といつては済まされない、何か底の深さが感じられるようだった。

江戸の女達は戦々競々として、夜中の出歩きを差し控えるようになったが、どういう事柄にも例外はあるものだ。

鉄火が売り物の町娘が強がりの一人歩きをしてアツサリとやられ下男の護衛つきで出掛けた武家娘が、下男が峯打ちで倒れた後にバツサリと切られ、亭主の急病で医

者をよびに走った新造が暗がりでききなり浴びせられ、夜鷹辻君の類いの若い方に属する女が切られ江戸の噂を知らぬ旅の若後家が御府内へ入ったとたんに切られ——という具合に引き続いて被害者は絶えなかったのである。

しかし、一方奉行所の方でも、決して手をこまねいていたわけではない。動顛したり失神したり被害者だから、満足な聞き取りもできかねる始末だったが、その断片をつなぎ合わせ、ようやく曲者の輪廓がおぼろげながらつかめてきたのである。

曲者の顔を見た女が何人かいた「あれは人間じゃありません。化け物なんです……」

とおそろしように語る女の言葉によれば、その顔は、卵のようにまっ白なのっぺらぼうだった、というのだ。同じことをいう女が続いて出たので信じないわけにはいかなかった。

世間一般がきわめて迷信深かつ

た時代の司直である。与力同心の中にも「怪物説」をとる者が少くなかった。

反面、頭の開けた役人達は、これを一笑に附した。人間の変装にきまっている、というのである。その根拠は、曲者が立ち去る際に呪文のような言葉を呟く、という点にあった。

その呪文とは「きわめて汚なし……きたなき……内外の……清く……きよしと……」というような意味の言葉が入る文句なのである「のっぺらぼうの化け物が、そんな文句を唱えるものか！ こいつあ、何か神がかりな野郎の仕業に違えねえ」と彼等は主張する。

その先鋒は、榊原半次郎という同心だった。八丁堀二百五十余人の同心の中でも知能的な捕物名人として知られる腕利きだった。

神がかりの曲者

今までにも遊び人、やくざ者、無宿者、浪人者等と数多くの容疑

者が召捕られて峻烈な取調べを受けてはいたものの、いずれも決め手がなく、ほとんどが放免となっていたが、榊原半次郎の主張によって新しい線が出た。

寺社奉行の協力により山伏、行者、祈禱師、破戒僧等が次々と召捕られて、捜査は表面、活気を呈して来た感があった——。

「師匠。今日は牛込の辺から比丘

淫祠邪教・特集

尼が二人縛られて来たそうですぜ。二人とも若くて色っぽい尼さんだが、身持ちがよくなかったそうで、近所の評判はあまりかんばしくねえとかです」

万八は世間の噂を仕入れて来るのが巧い。「そうかい。榊原の旦那もなかなかいいところを衝いていなさるんだが……」

と目吉は何やら思案に耽る。目吉と榊原半

次郎とは面識があった。陰ながら首尾よい結果が得られるようにと目吉も願っているのだが、彼には彼の考え方があるらしく、何やらもどかしそうであった。

そんなある日、突然、目吉が番所へ呼ばれたのである。

家主同道でみずから出頭する形ではあったが、役人の口ぶりが、どうやら容疑者扱いにしそうな様子だったので、これが目吉の癪に障った。

「……するてえと何ですかい？」

今度はあつしら人形師に嫌疑がかかっている、とてもおいしいなさるんで？」

「と、まあ、ハッキリいいきれるわけでもないのだが、どうだな目吉。同業の者の中で怪しいような職人の心当りなどはないか？」

中年のその同心は手柄をあせっているらしい。

目吉に鋭く反問されて、シドロモドロ、そんな頼りない言葉を吐くのだった。

「まず、あつしが何でよび出されたのか、そいつをハッキリしていただきてえものです」

目吉はいささかのおそれもなく役人を問い詰めてようやく「参考人として来て貰ったのだ」という意味の言葉を相手にいわせた。

「わかりました。ようござんす。

はばかりながらあつしにもガンをつけていることがありますんで、お役に立てるものなら立てやしょう。ただし、ほかのお役人じゃあ話がしにくい。できることなら榊原の旦那をお呼び願えてえもんで……」

役人は、ちよつといやな顔をみ

せたが、

「承知した」

とうなずいて、下っ引を一人、八丁堀へ走らせた。折よく非番で御長屋に在宅していた半次郎がただちに来てくれた。

「どうしたというのだ？」

「どうもこうもありやあしませんいきなりしよつぴかれたみてえな

もので、ふん縛られないのがせめてものめつけもの、というところできあ」

「そいつは気の毒だったな。何かの手違いだろう、かんべんしてやってくれ。ところで、俺に何か話したいことがあるそうだが……」

「へい……」

「まあ、ここへ坐ってくれ」

榊原半次郎、涼やかな微笑で目吉を自分の脇に誘うのだった。

目吉乗り出す

「旦那、髪切りの正体は目星がつきましたか？」

「まだだ」

「あつしはね、大体が髪切りって名前えに目隠しをされていなさるんじゃねえか、とそう思うんでござんすが……」

「うむ、それはどういう意味だ」

「こりゃあ、切るのが狙いじゃねえ。切って集めるのが本当の狙いだ。だから、髪取りってなことになるんじゃねえかと……」

「うむ。えらい！その通りだよ」半次郎、ボンと膝を叩いて、我が意を得たり、という顔つきをした。

目吉は柄にもなくいささか照れて、頭を掻きながら、なおも続ける。

「旦那、切られた髪は、いつてえどうなっておりますんで？ 現場に切り捨ててあるものでしょうか？」

「それがな、落ちている時もあり持ち去られていることもある……；ただしだ、落ちている時は切られた女が醜女の場合に限られているようだな」

「へえ、それじゃあ、いい女が切られた時だけ髪が失くなりやすんで？」

「その通りだよ」

「暗がりでは後ろから切りやがるもんで、前もって御面相の品定めができねえ、って寸法でしょうかね？」

「そういうことになるだろうな」

目吉は腕組みをして思索にふけた。かりにも人形師仲間が疑われた以上、半次郎の手助けをして意地にも犯人を見つけ出さずには

おくものか——という決意が眉の辺りにうかがわれる表情であった「旦那、呪文とかいうのは、どんな文句です？」

「これだ」

半次郎は、一枚の紙片を取り出した。意味の通らない言葉の断片が書きつけてあった。

「なるほどねえ。……旦那、こいつアお祓いの文句ですぜ」

「何だと?! 師匠はそんなことを知って

いるのか?」

「へい、

あつしのような妙な稼業をしておりやすと、つまらねえことまで聞きかじるものなんで。済まねえが何か書くものを貸してもらいてえ」

目吉は居合せた下っ引に頼んで筆と紙を借りた。しばし記憶をたどるようだったが、やがて、サラサラと達筆に書きつけたのである——極わめて汚なきも、滞り無ければ穢なきとはあらじ。内外の玉垣、清く淨しと申す。

「……とね、こういうチンプンカンプな文句でさあ」

「ほほう。で、これは何のことだ?」

「神道の方の、一切成就の祓い、とかいうんですがね」

「そうか。してみれば、何事か心願の筋あって黒髪を集める奴……という見当は、まんざらあてずっぽうでもなかったわけだな」

「左様で……」

半次郎は目吉に圧倒される思いであった。



紙片を一目見てただちに正確な文句を思い出す目吉の、見聞の広さと記憶力の強さ、また直感の鋭さというものは、ただの人形師には惜しい、とすら思えるのだ。も

っとも、寺社奉行の手の者にはすでにわかつている事柄かも知れないが、町方同心の彼には、これは初めて知る事実で、有力な手掛りの一つになりそうだった。豁達な人柄を持つ半次郎は、無用な虚勢を張るようなことはしない。彼は卒直に目吉の意見を聞いてみようとする。

「飯綱の修法を志す修験者の仕業……という見当はどうか？ 師匠はどう思う？」

「そいつは不自然でござんすね。お祓いというものは神前でするものでござんしょう？」

「それはそうだ。なるほど、髪を切り取る時となえるというのは妙だな」

「旦那の前ですが、あっしは稼業柄で自然ということに大そう気を

使います。捕物の方でもそれが大事かと思うんでござんすが……」

目吉は長広舌に近い言辞を口にしながら、チラリと八百屋お七の手本になった際の、小鈴の艶姿を思い浮かべていた。

「師匠のいう通りだよ。だが、この場合、自然というと、どういうことになるかな？」

「神や仏の道に励む者の仕業としたり、どうにも辻つまが合わねえ。こりやあ旦那、理屈通りには行かねえ相手じゃあねえでしようかね？」

「理屈を踏みはずした奴か。それには違いなからうな……」

「邪神に惑わされた気違い野郎のしわざと見たらどんなもので？」

「そして、ヤットウの方は相当に腕の立つ奴だ……」

「もう一つ。逃げる時に何か巧え隠れみのを持っている奴……」

えがござんす。旦那、耳をお貸しなすって……」

晒された女

日本橋——といっても、繁華な街並みばかりが続いているわけでもない。

ここ、馬喰町三丁目、関東郡代屋敷横の、初音の馬場の辺りは、夜ともなれば人通りはまれである。

四つ時、亥の刻を廻ったところ、浅草橋の方角から、珍らしく提燈の灯りが近づいて来た。

馬場を抜けて橋元町の方へ行くものとみえた。近づいたのを見ると、何の変哲もない六十あまりの老爺である。

それが、馬場の中ほどでにわか

に足を停めた。

この馬場は「楠の馬場」という別名もあるほどで、辺りには楠が多い。

中でも大きな一本の楠の根方を老爺はいぶかしそうに灯りで照らす様子だ——

提燈をかざしてみても、ギクリと

なった。

何と、そこには一人の若い女が無残にも厳しく後ろ手に縛られた姿で繋がれていたのである。

帯も着物も剥ぎ取られたものか長襦袢だけを残され、口には猿轡まで嵌められた、あさましい姿だったので。縛しめの苦痛に身悶えしたのだろう、見事な黒髪が解けて衿首から胸へ流れ、夜風に翻られてかすかに動いていた。

女は疲れきっているのか、グツグツとうなだれて、身動きもできないようだった。

顔はよくわからぬが、瞼を閉じた眼の睫毛の長さや、情容赦もなく噛まれた厳しい猿轡にさいなまれる頬の白さは、非常な美貌を思わせるに充分だった。剃り立ての眉の青さは人妻であることを物語っていた。

「こ、こりやあいつてえ、どうしたことだ！」

老爺はオロオロとそんなことを

眩きながら、なお一そう提燈を近づけた。

女の頭のすぐ上に、木の幹へ何やらしたためた紙が貼ってあることがわかった。

——この者、婦道を穢せし姦婦なり。一刀両断に成敗致すべき奴なれど、斬るは刃の汚れなれば、此の処に晒し、制裁を加うるもの也。望む者あらば、いかような仕打ちたりとも勝手たるべし。

芸州浪人、榊泉三郎。

そんな文字が達筆に書かれていたのである。

密通をして良人から仕置をされた浪人者の妻女——というところ、姦夫姦婦の私刑が公けに許されていたこの時代では、そうまれでもない事柄なのであった。

「どんな罪があったにしても、生き恥をさらされるたあ、気の毒にむごい目にあいなすったなあ。俺が縄を解いてやるで、ちよっくらお待ちなせえよ。なあに、許してやるのも勝手だろうさ……」

老爺は近寄って縄を解こうとしたが、女の体に触れて、おどろいた。

「お、こりゃあすっかり冷えちまいなすったねえ。かわいそうに、まるで死人みてえだ……」

固い縄目を解きかかって、老爺は何気なく女の顔を見た。

猿轡の下、口の辺りが赤く染まって、血の滴たりが、今しも女の頬から咽喉へ、細い糸をひいたように流れ出したのを、見たのであった。

「ウワァー！ こ、こりゃいけねえ！ し、死んでるんだ、舌を、噛んだ！ だ、誰か！」

途方もない叫び声を上げて、老爺は提燈をほうり出し、もと来た道を、ころがるように走って行った——。

そのあと、郡代屋敷の塀の陰の暗がり、こんな会話が交わされたのである。

「師匠、どうやら今夜も、だめらしいわねえ」

「うむ。だがそう巧くやすやすと魚が網にかかるはずもなからう」

「そうだとも。河岸を変えて根気よくやることだ。それにしても、縄を引くと血が流れるというのは巧い細工だったな」

「なあに。師匠はね、こんな細工は朝飯前でさあ。もっとおもしろい仕掛けもござんすよ」

「まあ！ 仕掛けの話ばかりして！ 晒し者のお手本になってさし上げたのは誰だと思ってるっしやるんです？」

「いや、もとより全体のでき栄えもみごとなものだ。やはり手本がものをいうとみえる」

「あら、旦那、それじゃあまるでわたしが本当のいたずら女みたいに聞こえるじゃありませんか！」

「つまらねえことをいってねえで姐さんはもうお座敷へ帰りねえ。お前えはあれを片づけな」

「おっと、合点。承知の助だ」

ガラガラと、大八車を引き出す音が聞えた。

お高祖頭巾

晒し者の女は、毎晩、場所を変えて繋がれた。もとより、それが目吉の作になる人形であることはいうまでもなからう。

目吉は半次郎に「囃り捜査」を提案したのであった。囃りを使う策は奉行所でも考えぬではなかったが、何分にも白刃の下に身をさらす役目なので、実行には移したい点があった。女を使わなくても、男の変装でかつらを利用すればよいという意見もあった。だが女に化ける以上は武器を持つことができないし、伏勢を置くにしても犯人は凄腕なので囃りの役をする者には多大の危険がともなう。やはり無理な着想だ、とされた。しかし、人形ならばその心配はない。

「髪切り」以外の者が手を出す場合、赤い滴が口から出るようにしたのは、恐怖を与えて追い払おうとする目吉の工夫だった。

警戒嚴重な近ごろだから、縛られた女なら斬りやすいし、夜鷹を切った前例があるのだから、晒し者でも切るはずだ、と目吉は考えた。

もとより半次郎に異存のあるはずはない。

こうして彼らは、江戸中で網を張ろうとする。神田、湯島、本郷下谷、芝——と根気よくそれは続けられた。

ある夜——神田柳原の辺りを狙ってみよう、という目吉の意見で彼らは柳原堤へ赴いた。月夜であった。堤には柳森稻荷という古い社がある。

江戸の名物は、伊勢屋、稻荷に犬の糞と俗にいうくらいで、稻荷はどの町にもあるほど多いが、この柳森稻荷は由緒正しい有名な社であった。

目吉はその稻荷の赤い鳥居へ、人形をくくりつけた。

「もし、お稻荷さん。あっしはあまり信心深くねえ方だが、ちよっ

とこの鳥居をお借りしますぜ。おかしなまねをしているようだが、これも人助けのためだ。せいぜい早えとこ髪切りの野郎と出つくわすことのできるよう、お導きくだせえましよ……」

わりあいと真剣な顔でいったものだが、小鈴がその夜もいたならば、さぞ笑いを押えるのに苦労したことだろう。

まず、引っ掛ったのはしたたか酒の入った遊び人風の男だった。

「おやあ？ 何でえ、いい女じゃねえか。もってえねえまねをしやがって……ようし、俺がありがたく頂戴しちまおう……南無稻荷大明神、とくらあ」

などと誕をたらしそうにして近づくのを、半次郎が押し問答の末に追い払った。

その次に立ち寄ったのは、願をかけにでも来たのか、お高祖頭巾の女であった。

「頭も年もよくはわからぬが、どうやらまだ若いらしい。片足が不

自由と見えて、軽いびっこを引き杖をついている。

それが、問題の鳥居の前でピタリと止った。

「ま、どうなされました？ なぜこんな目に……もし……」

声をかけてから辺りを見廻した目吉、半次郎、万八の三人は、物陰に隠れて息を殺し、見守っていた。

しばし——女はその場に佇んだが、やがて、

「……いたずら女か。フフ……ホホホ、ダキニ如来様には恰好の貢ぎ物となろう。そなたの黒髪、貰い受けますぞ！」

と、奇怪な言葉を吐いたのである。それは待ちに待った言葉でもあった。

半次郎は、すぐさま飛び出そうとしたが、目吉が袖を押えて制止した。

お高祖頭巾は、杖を持ち直した。キラリ——白く光ったものは、まぎれもなく細身の刀だ。仕込杖

だったのだ。

「えいっ！」

鋭い気合と共に白刃が一閃して黒髪が鮮かに切り落された。

そのとたん、曲者の体は何かの衝撃を受けてにわかに動揺した。

「あ！」

毘だ！ と気づいた時、すでにその体には数条の縄がからみついていたのである。

縄の先端には分銅がついている髪を切った瞬間、人形の胸の部分が割れて、中から激しく飛び出したもので、これこそ、泉目吉が苦心の末に考案したバネ仕掛けの細工にはかならないのだ。

「旦那、今だ！」

いうにや及ぶ、と半次郎、飛鳥の如くとび出した。

「髪切り！ 御用だ！」

「計ったな！」

気合もない一撃だが、あなどりがたい鋭い剣が半次郎を襲った。

「お！」

十手で喰め止めて、火花が散っ

た。

「氣違いめ、神妙にしろい！」

と、これは目吉だ。

「小癪な！」

お高祖頭巾は身をひねるような

動作をみせ、素早く刀を縄に当て

た。縄は、もとより本格な捕縛の

形になってはいないのだが、一瞬

にして数条を断ち切ったのは、や

はり手練の業、といってよかった。

「おのれ！ 痴れ者、尋常に縛に

つけい！」

半次郎はとっさに抜刀し、油断

なく詰め寄った。

「やあ！」

一なぎ、牽制の剣を半次郎に見

舞って、曲者は脱兎のように身を

ひるがえした。

「待て！」

すかさず三人は跡を追ったのだ

が――。

清水山の娘

不思議であった。

堤の上にも土手下の河原にも人

影はなく、お高祖頭巾は、忽然、

かき消すように姿が失せたのだ。

月光に浮き上って見えるものは、

風にそよぐ柳ばかり――。

「面妖な……」

「しまった、旦那、足の早え奴だ、

こっちへ逃げたに違えねえ」

目吉は筋違御門の方へ走る。半

次郎と万八も後に続いた。

「畜生め、どこへ失せやがった……」

……

三人は清水山の辺りで立ち止り

周囲を見廻した。清水山というの

は、柳森稲荷と筋違御門の中間に

ある小さな丘で、この丘の下から

清水が湧き出て神田川へそそいで

いるところからこの名がある。

清水山はまた、古来、怪異の起

ることが多い場所と伝えられ、近

寄る者には危難がふりかかるとい

うので、ここだけは人跡を絶って

雑草が生い繁っていた。

筋違御門から和泉橋までの雑草

は、飼馬の料として市橋壱岐守と

富田帯刀の両家で刈取っていたの

だが、この清水山ばかりは、妖怪

の祟りを恐れて刈り残すしきたり

となっていたため、人の背よりも

深い草でおおわれていたものであ

る。

「師匠、も、もつとほかを探しや

しょうぜ。こんな薄っ気味の悪い

処は、長居は無用で」

「そういうな万八。化け物はえて

してこんな処に隠れたがるもんだ

……」

半次郎は、何を思ったか、雑草

を踏み分けて丘へ進んで行った。

「……お、何者だ！」

鋭く誰何する声に、目吉が駆け

寄ってみると――草の中に倒れて

いる者があった。

若い娘であった。失神をしてい

るのか、身動きもしない。

「怪しい奴、起きろ！」

十手の先で背を小突くと、娘は

夢から醒めた者のように顔を上げ

た。

「町方の者だ。改めねばならぬ。

立て！」

油断なく身構えて、半次郎は促

した。

ヨロヨロと立ち上った娘は、ま

れにみる美貌だが、何と髪を切ら

れてザンバラのあさましい頭。

「何とした?！」

「……あ、お役人様！ 助けて！」

始めて気がついたように、娘は

半次郎にすがり、ワナワナと身震

いをするのだった。

「娘さん、どうしなす

った?！」

「ノッペラボウの化物

に会いました……ここ

へ引きずり込まれて、

髪を……ああ！」

娘は自分の頭へ手を

やって、悲痛な悲鳴を

上げた。

「畜生め！ 髪切りの

奴、逃げる途中でやる

たあ太え野郎だ！」

娘が妖怪でないこと

がわかると万八もその

場へ上って来て、しき

淫祠邪教・特集

りと無念がる。

「ともかく、番所まで来て貰おう……」

邪神ダキニ

昌平橋の角の自身番で娘が語ったことは、今までの被害者のものと大差はない申し立てであるに過ぎなかった。

その身元は、神田仲町の甚兵衛店に住む大工久助の娘で、お照という。年は二十一だ。

万八はここを先渡と慰めるのだが、娘はザンバラ髪をふり乱して泣き崩れるばかりであった。

「師匠……曲者は稲荷で妙なことをいったなあ」

「へい。ダキニ如来様、とかいったように」

「あまり聞かぬ名だな……」

「あつしも聞きませんが……ダキニという神様のことなら……」

「知っているのか？」

「へい、どうやら……」

「そいつは豪気だ。話してみてく

れ」

目吉が語ったのは、次のような話だった。

——ダキニは印度の暴虐の女神カアリーの侍女で、常に人肉を食い、別名を吸血鬼という。ダキニはまた、人の心を取って食う。そして心を取って食う時は法術が成就して、よく一昼夜の間に世界中を駆け廻ることができるといふ。

意の欲するところ、必ず叶って、自分の好まぬ者を病ましめ、死に至らせることもできる。ある時、ひるしやな如来という神が、ダキニを戒しめ、烈しく呵責した。ダキニは仏の威光におそれ、ついに仏に帰依した。もとより人肉を食うことは禁止されたが……

「何と食い意地の張った阿魔もあつたもんで、ダキニってのは仏の道に入ってから、まだ人肉が喰いてえとぬかしやがったのだそうで。」

ところが天竺の神様なんてえものは、時々妙なことをいうもんで

ござんしてね、しからば人の死ぬ六カ月前に人の心を食べ、と、ひるしやな如来の野郎が中途半端な許しを与えたもんです。以来、ダキニの法を修める者は、ダキニに等しい通力を得る……といわれ、これが日本にも伝わり、古くは源平時代の平清盛なんかも、ダキニの法術を修めて一世の栄華をきわめた、こうなんでござんす。まあ一口にいえば邪神の女神で、決してマトモな神じゃあござんせん」

「なるほど。外道の修法というわけだな」

「左様で……」

「ダキニとは、どう書く？」

「へい、お待ちになすって……」

目吉は筆を用意して、サラサラと走り書きをした。

——茶枳尼、又は、吐枳尼。

そして、さらに続けて別なことを書いて示した。

——この娘は怪しい。逃がさず縛ることです。仔細は、その後で。と読めたのである。

「なるほどな。こう書いてダキニか……」

さりげなく呟いた半次郎の眼がキラリと行動を起す前の光りを放った。

「……娘御、手間をとらせたな。送って進ぜよう」

静かに立ち上る。

「ありがとうございます」

一礼した娘が、悄然と歩き始めた瞬間、背後から半次郎が飛びかかった。

「神妙にせい！」

「あ！何をなさいます」

娘は弱い抵抗をみせたが、たちまち半次郎の早縄にからめられ、高手小手にキリキリと縛り上げられてしまった。

「理不尽な！何でわたしを縛るのです！」

その間に、目吉は手桶に水を汲んで運んで来たかと思うと、いきなり、ザブリ！と娘の頭から浴びせたものだ。

「ヒューッ！」



お上の
目をこまか
せると思っ
ていやがっ
たのか！」
「ひどいこ
とを！」
「とほける
のもいい加
減にしろい
！ 手前の
頭の本当の
色を見てえ
のだ」

目吉、驚づかみに娘の短い髪
の毛を握って振り返った。

「旦那、ごらんなせえ。この女の
髪あ白髪頭ですぜ」

身を揉んだ娘、意外な力で目吉
をふりほどき、外へ逃がれようと

したが戸口には千三つの万八、大
手を拡げて立ちふさがっていた。

「さあ、来てみやがれってんだ」
すこぶるいい気持の見得を切っ
たものである。

迷いのない女

「さあ、大変だ、大変だあ！ こ

れを見逃がしたら江戸っ子の名折
れだよ！ 長い間御府内を騒がし
た髪切りが捕まった！ 捕まえた
のは余人にあらず、両国尾上河岸
の人形師で化けもの人形を造らせ
たら江戸一番の名人としてその名
も高い、泉目吉師匠と、八丁堀の
腕っこき、榊原半次郎の旦那だ。
何とお立ち会い、捕まったのは花
恥かしい若い娘でこれがすこぶる
つきの美女だというから驚いちゃ
いけないよ。神田美土代町に示現
流の道場を持つ剣術の先生で大河
原一学という武芸者の一人娘だ。
名をお加代といい、明日の命も知
れない熱病にかかったのが去年の
こと。病氣は直るには直ったが、
何とお立ち合い、女の命の黒髪が
アレヨアレヨという間に白髪とな
ったという因果な身の上だ。これ
じゃあ龍宮から帰った浦島太郎の
嫁さんにもなれたものじゃない、
と思ひ詰めたのも無理はない。さ
あて、お立ち合い……」

瓦版売りの呼び声が街に流れる

ころ——。

目吉の仕事場には、半次郎と小鈴が訪れていた。

牛込築土八幡の近くに邪神ダキニを祀る怪しげな修験者、大日坊玄龍を捕えて面目をほどこした半次郎、慰労の意味で小鈴を同道し目吉を誘い出しにやって来たのである。

「何しろ、今度の捕物は全く師匠の手柄なのだからな。俺などは瓦版に刷られるも恥かしいようなものだあな」

と、半次郎はいうのだが、目吉は、

「とんでもねえ。手柄などといわねえでおくんなさい。あつしはただ、手前えの仕事をお役に立ててえと思っただけなんで……」

と、微笑するのだった。

「ねえ師匠、師匠はあの時、どうして娘の白髪を見破ったんでござんすか？」

万八は不思議そうに尋ねる。
「なあに、らちもねえことよ。灯

の下で眺めると、髪の毛の根元がチョッピリ白かったのに気がついたまでのことだ」

「眼力、というものだろうな。俺には気がつかなかったよ」

「師匠は、そんなに女の髪の毛に詳しいんですか？」

もっと何やらいいたそうな小鈴——。

「なあに、人形を造る稼業だもの当りめえのことだよ。こいつはくせえ、と、俺にはピンと来たんだ。そこでダキニの話を始めてみると……」

「聞いている娘の顔色が尋常ではなかったな」

「そうなんぞ。こいつはテッキリお高祖頭巾と仕込杖を神田川に投げ込んで、とっさに一芝居打ちやがったに相違ねえ、と思つてね」

「ははあ、するてえと、髪の毛もあの時、自分でバツサリ……」

「なあに、万八、ありゃあ前々から切っておいたものだろうよ。いざ、という時に芝居を打つための

用心さね」

「ノッペラボウの化物も、あの娘だったんでしょかねえ？」

「そうともよ。薄い白布で顔を包めば、髪がねえのだから卵のような丸坊主になれるってわけだ」

「それにしても、憎い奴は玄龍だな。迷い乱れた娘心の弱みにつけ

込み、元通りの黒髪にしてやるととんだ人騒がせなインチキ修法を吹き込んだものだ。もっとも、玄龍もまさか通行人の髪を切るとま

では思わなかったらしい……」

「なまじ、町道場の剣術使いの娘に生れて、女としては腕の立つ方だったのが間違えのもとだが……旦那、あの娘、黒髪を持つ女が憎くて切った、という気持もあったこととでござんしょうね？」

「うむ。女の愚かしさ、浅はかさは、何とも哀しいものだ……」

半次郎がシンミリとそう呟いた時、たちまちキリキリと眉を吊り上げたのは小鈴だ。

「ちよいと、旦那、わたしもはば

かりながら女の数の中でござんすよ。あんまり女の悪口を師匠に吹き込まないでくださいましな。わたしはどうせ愚かしい女ですけれどもね、いくら目吉さんが恋しくたって、ダキニなんてものにはこりんざい、頼りやあしませんよ！」

辰巳上りに甲高くなる口調で、抗議とも口説ともつかないことをいうのだった。

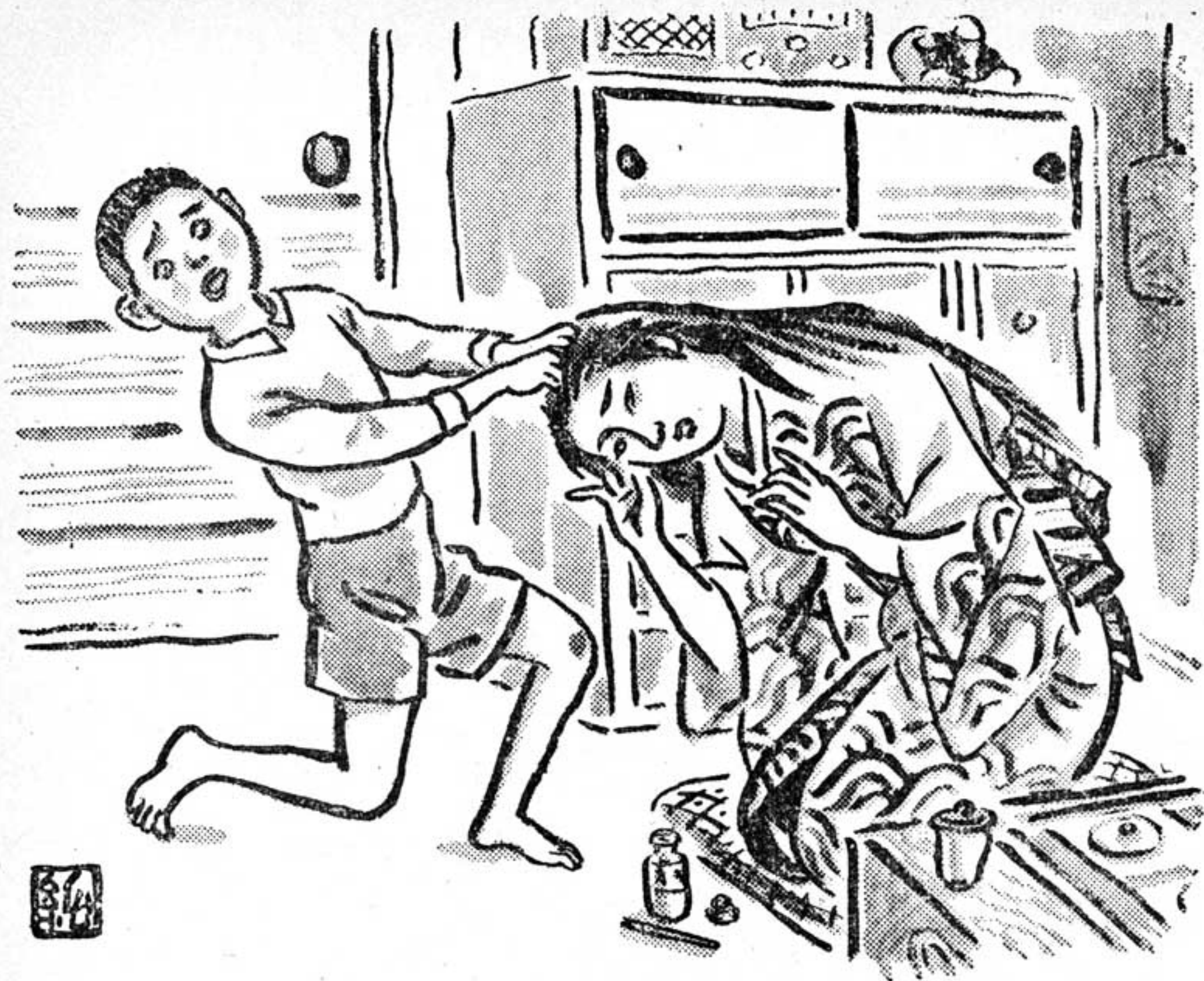
「まあまあ姐さん、そうムキになりなさんな。お前さんはダキニなんかにすぎるお人じゃねえ」

「そうだと、万八さん」

「小鈴姐さんは、ダキニよりも抱き寝にモノをいわせたがる、迷いのねえお人でござんすよ」

万八の、この駄洒落には半次郎も目吉も腹をかかえて笑ったが、小鈴はズバリといい当てられてかみるみるうちに頬を染めたのである——。

終



髪行燈

長い美しいお志津さんの黒髪が少年の眼の前に揺がって、甘い香りを放っていた……

志摩 不二

芦屋 純・画

一筋の髪

めずらしくひとりで銭湯にいった新一は、今日は父親のごつごつした掌で体をこすられる苦しみがないので、洗いもせずのびのびと湯水に戯れて遊んでいた。まだ夕暮れ頃のせいか浴場の中には、四五人の男しかいない。その中のひとりには鳶久という仕事師で、新一の顔見知りの小父さんだった。

「ほう！ 坊や、今日はひとりか？」

彼は顔をムツとふくらませて云った。

「小父さん！ もう僕、五年生だよ」

「ははははは、そうかそうか、それじゃア、坊やと云っちゃア悪い

か」

薦久は笑いながら彼の体を軽く抱き上げると音を立てて湯舟に飛び込んだ。二人はしばらくキャッキヤツと叫びながら騒いでいた。

と、ふと薦久は湯の中で、手を奇妙に動かしていたが（はてな？）と云うように、何かをつまみ上げて眼のそばに近寄せていった。

「小父さん、どうしたの？」

「う、うん！ こりやア、女の毛だな」

それは五十センチ以上もある長い髪の毛だった。男湯の中に浮いてはいても、たしかにそれほど長ければ女の髪には違いなかった。

「ふうん、たしかに女の毛ですな」

そう云ったのは、いつも店の酒を呑んでいるように顔の赤い遠州屋酒店の小父さんだった。薦久はまじめくさった顔で首をかしげ、

「はて、女の髪の毛でも、これほど長くしている女は、この町内では……」

「ふん、たんとはいない、と云っても、たったひとりですな」

「はい、そうだ。あの清元の師匠——」

「うん！ お志津さん」

「こりやア、こたえられねえ——。あのお志津さんの髪の毛となりやア、大切にしなきゃならねえな」

「へへ……、親方、よかったねえ」

薦久と遠州屋は顔を見合せて笑い合った。

「ところで遠州屋さん、するとだね」

薦久は声をひそめて云った。

「師匠は今、となりへ入っているンだろうか？」

「そうさねえ？ 入っているのかな」

「と、すると、師匠は今……」

「うん！」

また顔を見合せて、ゴクリと生唾を飲み、

「洗い髪で……」

「玉の肌を——」

「うーん！ 仇な姿——」

「どころじやアねえ——。目をまわす——」

「ハハ……」

「へへ……」

そして二人とも、ザブリと顔を湯の中に突っ込んだ。

新一は湯舟の隅で息を飲んで二人の話を聞いていた。胸はドキドキとなり、体は湯当りしたように真赤になって、ぶるぶる震えていた。彼の目は薦久の指先きにつままれた長い髪の毛を、見つめていて動かなかった。

（あの人の、あの美しい人の、髪の毛なんだ——）

欲しいと思った。こんな小父さんにさわられたくなかった。

さぶりと、しぶきを上げて薦久が湯から上った。新一もあわててあとにつづいた。

（あの人の髪の毛を小父さんは、どうするつもりだろう？）

すると薦久は体を洗うために、カランの前にしゃがんだが、

「へへ……、お美しい師匠の髪の毛大明神、粗末にやできねえ——」

と云いながら、前の鏡に髪の毛をベタリと張りつけた。そして体を洗い始めたが、そのうち頭を洗いだし、桶から湯をかぶりだした。

小父さんは目を開けていない。

（今だ！）隙をねらっていた新一は、さっと横から手を伸ばすと、髪の毛を鏡からはがし手拭いにくるんだ。そのまま、上り湯も浴びず、脱衣場に飛び出していった。

霜降りの上衣も、半ズボンも、どう身につけたかわからなかった。一筋の髪の毛を包んだ手拭だけをしっかりと握って松の湯から外に出た。と、入口の一段低くなる石段を踏みはずし、あっと云うまに彼はのめって地面へ叩きつけられた。

「痛ッ！」痛かった。膝頭をすり剥いたらし

い。血がにじんでいる。手も真黒になった。このまま戻れば、父に叱られる——。と思うと、起き上がりながら、飛んだ石鹸箱も拾わずにシクシク泣き出した。

その彼の鼻に近々と、甘く温かい強烈な髪の毛の匂いが襲って来た。はっと眼を開けると、黒々と艶やかな髪の毛の山が一杯に拡がり、そして徐々に後に廻ると、ほんのりと紅を浮べた美しい女の顔が笑っていた。

白い掌に石鹸箱を差し出した清元の師匠は「坊っちゃん、泣いちゃアだめよ」

ほんぽんと上衣とズボンの土を叩いてくれた手が、はたと止って、

「あら？ 血が……」

美しい眉が大きく寄せられ、

「いらっしやい、あたしの家へ。このままお家へ帰れば、お父さんお母さんに叱られるでしょ。汚れも拭いてあげましょう——」

肩に手を廻されると、息が止りそうだったむっとするような女の匂い。鳶久の小父さんの言葉ではないが目が廻っていた。そのまま彼は、粹な格子の家の中に連れ込まれたのだ。

髪におう

片足立てた膝小僧にオキシフルをつけられると新一は、思わず目の前のお志津さんの洗髪に爪を立て、うしろにのけぞり、

「痛ァいッ！」

と泣き声を挙げた。髪を引っ張られ、立膝

のお志津さんの体の中心が狂い、二人は畳の上に音をたてて倒れた。

「ああ……」

新一は呻いた。長い長いお志津さんの洗髪がバサリと彼の顔一ぱいに覆いかぶさり、



甘い狂おしい匂いと味が、彼の全身に流れ込んだ。

たちまちそれは彼の小さな体に充満して、気が遠くなるようだった。

「痛い！ 痛い！ 痛い！」

彼はお志津さんが身を起したあとも、その時の自分の気持を知られるのを恐れ、膝小僧を抱いて泣きつづけた。

「もういいの。いいのよ。手当は終わったのよ」

お志津さんは軽く笑いつづけて、薬箱をしまいに立った。彼はシクシクやりながら、

（このお礼はどうしたらいいのかな？）と考えていた。まだ彼の鼻口や肌に、全身にお志津さんの黒髪の甘い香り、ひんやりと冷めたいくせにはの温かい感触が残っていた。

（髪々。髪の毛……。美しい女の人の髪の毛――）

気の遠くなるようなその甘美なもの。ほんやりと思いつづけていると、

「あら？ もう泣き止んだ？ よかった……」

戻って来たお志津さんに、新一は立上ると今手にした手拭をいそいで開き、松の湯から持ってきた、あの髪の毛を差し出すと、

「こ、これ、あんたの毛、あ、あげるよ！」

と叫ぶと、あっけにとられている彼女の横

を走り抜け、下駄をはくのも夢中で、その家から外に飛び出していった。

ところが新一は家に帰ってから（ああ。しまった。僕はどうしてあの髪の毛を返してしまったのだろうか――）と急にあの一筋の髪の毛が惜しくなり、はげしく悔んだのだった。

美しいお志津さんの顔、白い肌の香り、艶艶とした長い黒髪のやるせない甘さ――、それを新一の心につなぎ残すものは、今何一つないのだ。

あれ一本あれば、あれ一筋があれば、彼とお志津さんをつないでくれるのに――、とひたむきに思われるのだった。

彼には五十を越す父と母があった。永年区役所の吏員を勤め、恩給と退職金で老後を楽に過している両親であり、一人息子の彼をおそくつくつたので甘やかしていた。彼新一も何一つ不自由はなかったが、兄弟姉妹のない寂しさ、あまりにも年代の離れた両親に心の寄りどころがなく、彼の心は孤独だった。それが母にない異性の美しさ甘さを求めさせ、ひたぶるに十年ほど違うお志津さんに心を体を向わせたのであろう。

彼とお志津さんをつなぐもの――。それは

どんなものでもよかったのだろうが、彼は銭湯での出来事によって、その対象が黒髪になった。

それ以来、彼はお志津さんの黒髪がどうしても欲しくなった。一筋でも二筋でも手に入れたかった。そうすればお志津さんの甘い感触を再びわが身に感じ、味わうことができるのだ、と思えるのだった。

そう思うようになってから町を歩いていても、長い髪の女を見ると、なぜか胸が高鳴った。色の白い美しい黒髪をしていると、それが七八歳の少女でも、その髪に触れ、手に握り顔に押しつけて、感触を楽しみ、甘い匂いを嗅ぎ、口に含んで味わいたい衝動に馳されるのだった。

新一の家はしもたやで町並みの角にあったので、中通りに面した方は奥行きが四間半が塀になっていた。その塀にはいろいろのピラが貼ってある。なかでも多いのは、やはり映画の広告だった。少なくとも三館ぐらいはあり、俗に云うピラ下を毎週一館で二枚ずつ置いていくので、新一はいつも只で映画を見ていた。

老いた両親は、毎週行くのをおっくうがるので新一はひとりで観に行くことが多かった

ある日高砂座と云う寄席から映画になった小屋に彼は土曜日の午後、ひとりで出掛けていった。「少女地蔵」という少女を主題にした悲劇と「猿飛佐助」なので館内は子供たち

で一ぱいだった。新一は左脇の椅子に掛けることができた。

その右隣りに五六年生の見知らぬ髪の長く美しい少女が居るのに気づき胸がときめいた

なんとか話しかけて親しくなりたいと思ったやがて彼は、彼が映画に行くと言うと母がきまって、キャラメル、チョコレート、煎餅などをポケットに入れてくれるので、その菓子を利用することにした。

少女が連れている五ツ六ツの男の子は、彼が菓子をムシクシややりだすと案の定映画より菓子の気をとられだした。

彼は思いきりよく、

「坊や、はい！」

とキャラメルを箱ごと男の子に渡した。

「まあ、ありがとう——」少女が姉らしく礼を云った。

「じゃ、君にも——」

子供らしく姉にはチョコレート一枚やると、

「いいのよいいのよ」

と少女は遠慮した。彼はまだポケットにある菓子を取り出してみせ、「まだこんなにあるんだ。いいんだよ」と云った。

「すみません」少女は素直に受けた。

幕間に中売りがくると彼はラムネを二本買い、その男の子に一本やった。

少女は彼を金持ちの家の子らしいと思ったようだ。



映写が始まって暗くなると彼は少女の髪に顔を寄せた。

「え？」話しかけられたのかと思って少女は顔をふりむけ彼に聞いた。

彼は無邪気に云った。

「君の髪の毛、とてもいい匂いだね。嗅がせてね」

少女は一瞬戸惑ったようだったが、コクンとうなずくとそのまま正面を向いた。承知してくれたので彼はあたりの者たちへの気がねはあったが、思いきり少女の髪の甘さと芳香を味わうことができた。

練羊羹のように濃い甘さでありながら、高い山の上で嗅ぐ空気のように清潔な香りだった。

「痛ッ！」頭がチクンとして少女は小さく叫びながら彼を見返った。彼が髪の一筋を抜こうと引っ張ったからである。

「ごめんよ。僕少し欲しかったんだ……」

叱られた小犬のように首をすくめた新一に少女は「そう——」と答えて何か考える風だったが、「ちょっと坊や、待っていてね。おねえちゃん御不浄へ行ってくるから——」とその場に男の子を置いて、ひとりで便所に立っていった。

新一はその間、いろいろ思いまどいながら落着きなく待っていたが、しばらくして戻って来た少女は席に掛けると、そっと、新一の手に百本以上もあると思うられる髪の毛の束を握らせ、

「あちらで斬ってきたのよ。あげるわ。ちょうどあたし缺をもっていたから……」

と囁くのがだった。彼はズシリと重たいようなその黒髪を手握ると、えたいの知れぬ衝動が体の中を駆けめぐり、夢中で立上ると、

「僕も便所いってくる！」

と少女に云い置いたまま、半分も見えていない映画のことも忘れ、映画館からわが家に飛んで帰った。

動悸のするまま彼は自分の勉強部屋に帰ると、その少女の髪に頼ずりした。

生れて初めて手にした異性の体の一部分だった。名も知らぬあの美しい素直で優しい心の少女がそのまま、彼の物になったと同じ気がするのだった。

香りを嗅ぎ、口に含んで甘さを知り、肌にこすりつけると美しい少女が彼の体も心もしっかりと抱きしめてくれるように思えるのである。その黒髪の一束が彼のどこかに触れている時、彼は一人っ子の孤独から完全に解放

されているのだった。

道 草

秋になって小学校の二学期が始まった。新一は級長に選ばれ、服の胸ポケットに赤い絹紐で編んだ花模様の印をつけた。副級長は二人で草色の印しをつける。

彼は一年ぶりでその印しをつけた照れくささに、黒いランドセルを背負い嬉しさ隠したうつむき顔で家に向った。

今夜母は赤飯を祝ってくれるだろうし、父は彼の欲しい物をなんでも買ってくれるだろう。自然に彼の顔に微笑が浮ぶ。

「何を笑いながら歩いているの？」

はっと顔を上げると、お志津さんの笑顔が目の前にあった。突然のことなので、ドギマギ動悸をたかぶらせて立っていると、目ざとく胸の印しに気づいたお志津さんは、

「まア、偉いのね、級長になったの？」

「うん！」

「おねえさんも何かお祝いをしてあげなくちゃアね。新一さん何がいい？」

けがの手当てをしてもらってから、四五回道で逢ったことがある。そんな時新一は恥かしくて口もきけず、「こんちは！」と云うく

らいで、駆け去っていったものだった。一方のお志津さんは「新一さん、どこへいくの?」とか「おねえさんのうちへ、またあそびにいらっしゃいよ」とか、愛想よく云ってくれた。

顔を赤らめて、何も云わずに立っている新一に、何か紙に包んだ物を胸に抱いたお志津さんは、

「そうそう、今ちようどいい物を買って来たところ。ひとまずこれを御馳走するわ。さアいらっしゃい」

否も諾もなかった。彼の肩を抱くようにすると、右への露路を曲った。真っ直ぐ行けば隅田川へ出る道で、新一の家に行くのだが、右へ行けば遠廻りになる。それも学校からの帰り道。道草を食うことになる。クラスの級長がすることではない。だが新一にはお志津さんの誘いを拒むことができなかった。

(あの家に行けば、あの時の甘い香りと快感がある——。あの嬉しさをもう一度——)

新一はすでにはの甘いお志津さんの体臭に酔い痴れ、踏む足も宙に浮いてお志津さんの家に連れられていった。

古風な新一の両親はいつもお茶ぐらいしか飲まなかったが、お志津さんの家には、紅茶

もコーヒーもあった。お志津さんが買って来たいいものとは、チョコレート菓子と、虎屋の羊羹だった。それに紅茶もコーヒーも注いでくれた。新一は幸福だった。旨い飲物も美味な菓子もいらない。美しい黒髪をしたこのお志津さんのそばにただで彼は天国にでも居るような気がするのだった。

そこへ表の格子が開いて、

「お志津!」と、渋い老人の声がして入って来た男があった。焦茶の木場外套を思わせる地味な薄手のシャツに、暑苦しく縞のネクタイを締め、カーキ色の半ズボンを吊った、やせた六十がらみ、品のよい半白髪の男だった。

「あら! あなたいらっしゃい」

立上って、いそいそと出迎えるお志津さんに老人は新一を見て笑いながら、

「おや、珍らしくお客さんかい?」

「ええ、あたしの恋人です。八名川小学校の秀才で紙谷新一さんと云うの——」

お志津さんはいたずらっぽく、わざわざ新一の肩を抱いて頬ずりした。

老人は今までお志津さんがいた座布団に坐ると、並んでいる二人をニコニコした人の好い顔で見つめた。

「そうかいそうかい、これははじめまして:

。僕は日本橋薬研堀で七色唐幸子の店をやっている大沼栄蔵という者です。縁あってこのお志津を世話している者じゃが、これから仲よくしてやってくださいよ」

そう云って、新一に気がねをしないようにうちとけた言葉を次々とかけてくるのだった。新一はお志津さんが「妾」であることを前から知っていた。だから老人の云った(世話している者)と云う言葉で、すぐこの人がお志津さんの「お婿さん」のような人なのだと理解することができたのだった。

だが不思議に新一は大好きなお志津さんを自由にしているのであろうこの大沼と云う老人を少しも憎く思わなかった。お志津さんの相手の男がこのような人であってくれたことに、なぜかホッとしたのである。

「僕帰る!」と立上ると、老人は、

「まア、いいじゃないですか……」

と引き止める。

「でもまだ学校からの帰り道なんです!」

「そうだったわね。級長になったこと、お父さんやお母さんに云ってなかったのね」

お志津さんは新一を門口まで送ってくれた「じゃまた遊びに来てね、ほんとに!」

(未完)

川すべてのかげに女がいる川

妖

婦

と

毒

婦

お色気たっぷり的美女にいじめられるのは悪くないが、鼻の下を長くすると危い女もいる！

橘 新太郎



美人の条件

悪い女というものは、世の中にはさらに転がっているのだろし、世の中にさらに転がっているくらいだから、小説の世界にも幾らでもありそうだと。ところが、いざ妖婦毒婦となると、浅学この上なしの筆者などには、とてもおいそれとはみつからない。

妖婦というからには、まず悪女である以上に、美人であり、お色気があることが絶対条件となってくるし、そん

じよそこらの男の子では、てんで齒が立たないという代物でないと資格がない。ちよいときれいで、男が好きで、金をまきあげるのがお上手なんて程度では、たかだか悪女の称号くらいしかたてまつれないからだ。

そこで思いつくのが、お馴染のルパンものに登場するカリオストロ伯夫人である。

とにかく、ものすごい美貌の持主だし、頭がよくって残忍でと、妖婦毒婦の条件は十二分にそろっている。しか

も、怪盗ナンバー・ワンのルパンと、がっちり四つに組み組んで、最後まで苦しめ抜くのだから、指折りの妖婦といってもさしつかえはないだろう。

このカリオストロ伯夫人が登場する作品は二つある。両方とも長篇で、邦題が『妖魔の呪』と『カリオストロの復讐』ルパンものの代表作である『八一三』や『奇巖城』なんかほどポピュラーではないが、ルパンの経歴やなんかが出てくる点で面白い。

『妖魔の呪』の方には、青年時代のル



パンが登場し、後者は二十年ばかり後の物語ということになっている。ルパンが争い、競争した相手は、シャーロック・ホームズをはじめ、ずいぶんたくさんいるが、ルパン自身がもつとも恐れた相手は、このカリオストロ伯夫人だろうと思う。

探偵ものから離れて、アベ・プレヴーの代表作であるマノン・レスコーなんか、妖婦と呼んで呼べないことはないだろう。少なくとも、ゾラのナナなどよりは、妖婦と呼ぶにふさわしいと思うのだが――。

歴史の方でお馴染みの、ルイ十四世



の愛妾マダム・ボンパドゥール、これは実在の人物だから、ここで取りあげるのはちょっとまずいのだが、毛色の変った妖婦ということで、名前だけ出しておこう。

二年ばかり前だと思うが、フランスのストリップ映画で『裸の女神』というのがきたことがある。いかにもフランスらしい洒落っ気たっぷりの愉快な映画だったが、その中で六、七人の男たちが、女の部屋の鍵穴をのぞきながら、コーラスをやるシーンがあった。歌詞はとくに忘れてしまったけれども、なんでもレオポルダを歌ったものであったことだけは憶えている。

レオポルダというのは、ご存じの方も多いだろうが、確か十九世紀に大活躍をしたパリの娼婦の名前だ。今だに名が残っているくらいだから、その道にかけてはものすごい腕利きだったのだろう。たらしこまれた男の数も、さぞや大変なものに違いない。この偉大な娼婦にも、ついでに妖婦の称号を捧げておく。

この映画、今でも場末の映画館なら



お目にかかれるかもしれない。まだごらんになっていない方があって、偶然これを上映しているところに行き合せられたなら、ぜひお入りナサイ。

★人妻毒婦

うろ覚えで書いているのだからまことに申し訳のない限りだが、アメリカの探偵作家でマイケル・シェインものの製造元であるブレット・ハリデイが主人公のシェインの名で編集した短篇集に、『恐るべき女たち』というのがある。

一ダースばかりの探偵作家の作品の中から、恐るべき女たちの出てくる短篇を一つずつ選んだもので、アンソニー・パウチャーや、ブルーノ・フィッシャー、フランク・グルーバー、クエンティン・パトリック、ハロルド・Q・マースールなど、現在最も人気のある作家連が並んでいた。勿論、ハリデイの作品も入っている。

なかなか粒のそろった作品を集めてあって、この種のアンソロジーではよくできたものだから、一つ二つ御紹介

してみよう。

近所の家から銃声と悲鳴が聞えたという電話が警察へかかって、警部が行ってみると、案のじょう男の死体が転がっている。死体のそばには、その家の主人と、妻。妻の方が簡単に自白するのだが、つまり、主人の留守中にやってきた友人に暴行されそうになり、思わずつかんだ拳銃で射殺してしまったというわけだ。

妻の自白通りなら、これは無論正当防衛だから問題はない。ところが、警部が調べていくうちに、いろいろと筋の通らないことが現れてくる。まず、凶行直後に外出から戻ってきたことになっている主人の立場がくずれ出し、被害者の傷の具合や何かが妻の申し立てに全く合わなくなってくる。

どう考えても、妻が偽りの自白をして夫をかばっているとしかたれないのだが、何と問いつめても夫の方は口を割らない。妻は妻で、確かに私が殺しましたの一点張りだ。

妻がけんめいにかばってくれているのに、夫の方は黙りこくっているのだ

から、警部や地方検事は夫に対する疑いをますます深めていく。だが、確証をつかまなければ、どちらが犯人とも言い切れない。

そのうちに、被害者が実は妻と友人以上の関係だったことがわかる。こうなると、夫が嫉妬に狂っての犯行という線まで浮んで、奴さんいよいよ抜きさしならないところまで追いつめられてしまうのだが、これだけではお話にならない。

と書けば、もうご想像がつくだろうと思う。偽りの自白を続ける間に夫への疑いがだんだん深くなっていく——これがすべて妻の計算だったのだ。

自分の肉体だけが目的で、その肉体の方にもぼつぼつ飽き始めたらしい恋人への憎悪が、彼女を殺人に駆りたてるのだが、罪を逃れるために夫の愛情を利用するところなど、ただの悪女ではない。しかも、金を目当てに結婚した亭主に、思ったほどの金がなかったんだから、ついでに電気椅子へ送っちゃえとは、ひどい考えだ。

妻の自白さえ通れば、正当防衛でお



画はおじやんになってしまふのだが、事件を調べる警部が、以前にこの人妻を愛していたなどのエピソードもからんで、巧みにストーリーを盛りあげている。タネの割れるいきさつまでバラ

人妻の名はグローリア。作者は、異常な味を持つ探偵作家として定評のあるブルーノ・フィッシャーで、この作家のものは長篇『血まみれの鉄』と、短篇が一つ二つ翻訳されているきりだ

同じアンソロジーからもう一つ。西部ものの作家としても有名で、映画になった『六番目の男』などの原作者であるフランク・グルーバーの古い作品が一つ入っている。



そらく放免になるだろうし、妻を愛する夫にしてみれば、黙っているよりしかたない。やがて疑いが自分にかかって、どうにもしようがなくなつてから本当のことをぶちまけてみても、もう誰も信用してくれるものはない。ふとしたことでタネが割れ、妻の計

してしまふのは、エチケットに反しそうだから、この辺で止めておくが、顔がきれいで体がよくつて、その腰から足への線なんか、どんな男でもつい眼を奪われるといった人妻が、これだけのことを冷静に企らむとすると、まず毒婦の資格はあるだろう。

★女は魔物

が、お色気とグロテスク趣味をうまく噛み合せた作品がたくさんある。なおここでご紹介した作品には、『亭主の首を絞めあげろ』といった調子の題がついていた。



新婚旅行に出ようとしている男のところへ、聞いたこともない名の女から何とも奇妙な電報がくる。理由の如何にかかわらず結婚を取り止めろというのだ。結婚の相手は、かつては親友の妻だったのだが、その親友が急に死んでしまった後、友情が愛情に姿を変えたというわけ。

愛情に燃えあがっている男は、奇妙な電報など無論無視して、ナイアガラ瀑布への新婚旅行にいそいそと出発する。ところが、新婚第一夜が明けるとすぐに、男へ電話がかかってきて、出てみると、なんと怪電報の主なのだ。

不承不承、彼がその女に会うと、思ったより若い女性で、彼の新妻が死んだ親友と結婚する以前に、彼女の亭主であった男の妹だという。彼女と結婚した男たちは、みんなが不思議な心臓障害で死んでしまっているから、すぐに別れなければいけないと、まあこういった話なんだが、彼にはどうしても信用できない。

すると今度は、その奇妙な若い女性のために働いている私立探偵がやって

きて、彼の新妻の前歴をいろいろと並べてたてるのだ。なんでも十年も前に二十四歳というふれこみで結婚し、間もなく主人が急死した後、次々と結婚を繰り返しては、その度に亭主が死んでしまうという話。現在二十四歳であるはずの美しい新妻が、私立探偵の話だと三十四歳の恐るべき毒婦ということになる。

こうなってくると、いくら愛情に燃えあがっている男でも、不審を抱かずにはいられない。が、妻の方から、実は先夫と結ばれる前にも結婚の経験があったのだと、先に打ち明けられてしまふ。一応の疑念は晴れるが、それにして、十年も前に結婚しているというのがひっかかる。それとなく問いただしてみると、彼女憤然として自分の出生を証明する書類をとり出してみせた挙句、他人を信用して自分を信じてくれないのかと、怒り出す始末。彼もやっと納得して、今度は先に受け取った電報をみせ、信じたからこそこんな電報も無視して結婚したんだと、めでたく仲なおり。

さてその夜だ。ふと眼覚めると、妻が起き出して何かやっている。おかしいなとは思いつつも、うつらうつらしているうちに、近づいてきた妻の腕が、彼の口許にのびてくる。その手にスプーンがきらっと光って、思わず払いのけると溶けた鉛が飛び散った。

こういう殺人方法が可能なのかどうか、一度お医者さんにきいてみようとか、大分前から思っているのだが、要するに彼女は、人並すぐれた美貌を資本にして、次々と結婚しては夫を殺し、保険金を稼いでいたのだ。大金持と結婚して巨額の遺産を一度に狙うのでは、何かと人の眼にもつくし、尻尾をつかまれる危険も多い。当り前の男を選んで保険金を狙うところがミソだ。

結婚の相手には、体は丈夫だけれども、必ずいびきをかく男を選ぶ。いびきをかく男は、当然口を開いて眠ることが多いから、溶かした鉛をスプーンに一杯、ポトリと落せばノックアウトとなるのだそう。

美しい未亡人が泣いて悲しむさまを見れば、医者だって別に不審を抱かず



に、心臓マヒか何かだろうってことになる——というわけ。

偽りの出生証明まで用意して、万が一に備えるあたり、この恐しい美人にも妖婦毒婦に列する資格はありそうなおまけに、十も年齢をごまかして、それが亭主にさえわからないというのだから、女は魔物、なんとも恐ろしいことではある。『忘れ去ることさえできれば』という題がついていたが、心からの愛情を捧げていた彼氏にしてみれば、いつまでも苦しい思い出として残ることだろう。このアンソロジーは、探偵ものをたくさん入れているデルブツクの中の、ファースト・エディションのいうのに入っている。

(近くは、本誌増刊『耽奇小説』第二集『グラマ・サスペンス』『密月の魔女』に収録)

やはりこの本の作品のうち、ハロルド・Q・マースールの作品は、探偵雑誌マンハントに最初載ったもので、裏窓の兄弟誌であるマンハント日本語版に近く紹介されるらしい。

題は『血のラブソディー』ガーシュ

インの名曲『ラブソディー・イン・ブルー』をもじったのだろう。

★罪を亭主に

マンハントがでてきたから、この方からも一人。

エヴァン・ハンターといえば、例のブラックボード・ジャングル、つまり『暴力教室』で一躍トップ・クラスの作家にのしあがり、主婦連あたりからだいぶ睨まれた男だが、マンハントに彼が書いたシリーズものに、カート・キャノンという探偵が出てくる。

このキャノン、以前は大きな事務所をかまえ、盛大にやっていた腕利きの私立探偵だが、ある夜、愛妻のトニが人もあろうに親友でもあり一番の部下でもある男と乳くり合っている現場をみつけて、拳銃でひっぱたいたため、探偵のライセンスを取りあげられてしまふ。妻と仕事を同時に失い、浮浪者の群に混って酒浸りになりながら、それでも、貧しいものが事件にまきこまれて困っていると、かつての腕ふるって助けてやるといった男だ。

ここまでなら、トニも単なる悪女だし、世間に幾らも例があるだろうけれど、第七話だか八話だかで、大変なことをやらかしてくる。

キャノンから去って、愛人と二人南米で暮っていたトニが、ひょっこりニューヨークへ舞い戻ってきて、ルンペン街にキャノンを訪ね、ヨリを戻して欲しいと頼みこむ。裏切られようとどうされようと、キャノンの方はとことんトニに首ったけだから、最初のうちこそ尻ごみするが、結局は仲なおりに同意する。

苦悩も苦労も打ち忘れ、新しい未来を夢みて、キャノンは晴ればれした気持でトニの宿舎を訪問すると、そこにかつて自分を裏切った親友、トニの愛人が拳銃弾にぶち抜かれて転がっているという寸法。キャノン再起の前途を祝して、トニが贈ってくれた拳銃が実は凶器だったのだ。

うまくいかなかった愛人を殺し、罪を亭主に押しつけるという手口は、先に紹介したフィッシャーの作品と同じだし、亭主の愛情を利用するやり方



も、フィッシャーのに出てくるグローリアの方が一段とうまいが、こちらはシリーズもので、一作一作、自分を手ひどく裏切ったトニに寄せる。キャノンのめんめんとした愛情を繰り返し見せつけられているだけに、トニがいつそうあくどく見える。



あまり後味のよくない作品で、キャノン・シリーズの中では駄作に属するものだろうが、トニという悪女もここまできれば毒婦に昇格できる。
探偵小説の場合、原則として人が殺されるわけだし、犯人が女性であることもずいぶんあるが、大てい悪女ど

まりで、カリオストロ伯夫人クラスの大物はなかなかみつからない。一見したところ、いかにも妖婦めいた奴が出てくることはよくあるのだが、そいつが誰かに殺されちまうことが案外多くって、最後までヒロインとして活躍するのは、わりに少いのではないかと思う。

ひところ、アメリカ本国はもとよりのこと、日本にまで大旋風をまき起こしたスピレーンの長篇には、よくこわい女性が登場するようだ。気味の悪いほどきれいな精神科の女医だとか、いきなり裸になって主人公のマイク・ハマーをびっくりさせる美人が出ていらつしやる。

今度またM書房から選集が出始めているが、妖婦毒婦とまではいかずとも悪女としては相当な女性たちが、一作に一人は現れるから、そんな連中に興味をお持ちの方に、ちょっとお知らせしておきます。

アメリカで、探偵小説や科学小説と平行して、実話雑誌がたくさんでている。こんなのを開いていると、よく少



女ギャングや、売春グループのことが出ているが、残念ながら妖婦毒婦と呼ばれそうなのには、めったにお目にかかれない。せいぜい、ギャングの情婦だった女の子が、亭主が豚箱にほうりこまれた後、留守をしつかり守っていたとか、麻薬の密売に女の子が一役買っていたという程度にすぎない。

★妖術呪術

このあいだ、S社から『悪魔への祈り』とかいう題の本が出て、それによるとフランスあたりでは、今日でも妖術とか呪術とかいったものが、かなりはびこっているらしい。いささか以上に驚いたが、書いたのが名のあるジャーナリストで、まさかヨタ話でもなさそうだし、考えてみれば日本だって、けっこういかがわしい新興宗教が流行っているのだから、驚く方がおかしいのかもしれない。

昔のままの、ありのままを書けばたちまち発禁をくらいそうな黒ミサなんかも、実際に行われているようだ。一つの村なら村で、何人もの女性が次々

と悪魔につかれたり、修道院の尼さん連がいかれてしまうのは、一応集団ヒステリーということになっているようだが、この本で見るとそう簡単にも言い切れないらしい。

いずれにせよ、妖術呪術なんてものは、きわめてグロテスクな味があるからそれだけでも面白いし、自分の亭主や何かを呪い殺そうとした女性もずいぶんあって、この方面からたどっても妖婦毒婦が何人か拾い出せそうだ。

先日、アメリカの兵隊をバーでつかまえて、アメリカには高橋お伝みたいな有名な毒婦はいないのかと、冗談半分にきいてみた。無論、相手は高橋女史なんて知らないから、こちらの知ってることを一生けんめい説明してみた。カラミティー・ジェーンはどうだときた。

カラミティー・ジェーンは、ごそんじの通り西部の女傑で、真偽のほどはともかく、お話では有名なワイルド・ビル・ヒコックと親交があったことになっている。クーパーがヒコック役で大当りを取った。『平原児』ではジ

ン・アーサーが演っていたし、新しいところではドリス・デイ主演の映画もあった。

確かにこわい女性には違いなかったろうけれど、妖婦毒婦と呼ぶには少し純情すぎるし、なんといってもお色気がない。

カラミティー・ジェーンじゃダメ、もっとものすごく、色っぽいのはないかと、なおも追求したのだが、心当りはございませんと逃げられてしまった。恐らくこちらのきき方がまずくて、意味がよくわからなかったのだろう。

これからもチャンスがあれば調べてみたいと思っている。

愛読者向き限定版

「裏窓叢書」

鋭意進行中!

詳細は追ってお知らせします。
御期待ください!



読者短評



◎創刊号以来、貴誌の愛読者です。さて、グラビアについて一言、三月号の「牛の骨と女」は写真としては申分ないのですがこの種類(二月特大号、それに十二月号もそうだったのですが)のものより、最近の傾向としては、うすい下着(ブラジャー・パンティ・コルセット等)を身につけたポーズのものとか、グラマー、ピンアップガールの的なもの、もしくは、外人ストリッパ写真といった具合のものの方が、より好まれ、また期待されつつあるのではないのでしょうか？

それが、内容については、号を追って充実して来ていることが喜ばしく、この充実感は、一面その編集方法の良さからとも思えます。

文としては、三月号では「怪異愛霊教」の描写とか、円城寺先生の「抱き寝如来」の筆運び等が、私の好みです。

ただ「女間諜散華」のように折角の力作でも、挿絵が一枚もなく、面白さを半減させられた感じがします。今後この程度の長さのものには、一枚でも挿絵を挿入するように願いたいものです。

私は、貴誌の発行以前、他の雑誌に絵や文章を発表したことあるのですが、貴誌を読み出してからは、内容が充実しているもので「われわれの拙い筆ではとても……」と半ばあきらめて専ら愛読者の立場で楽しんでいきます。

とに角、業務のかたわら裏窓で憩いの気分を味わわしていただいております、貴誌の発展を心から希いつづけながら……。

趣味として描き続けている画の、ケツサクでも出来ましたら是非見ていただくつもりです。

(東京・板橋・依田精二)

◎貴社の発刊されている「裏窓」

(二月号)を始めて購入して読了しましたところ、他誌に見られぬスリルとサスペンスに魅了されて、時間の経つのも忘れてしまいました。特に、黒木忍先生の「生首往生」は戦慄と興奮のうちに、二度もくり返して読んではしまいました。それに、ホンキイ・トンク作、黒羽新先生訳の「山荘のヘリオトロップ」の探偵小説は、一段と裏窓の新鮮味を感じさせてくれたようです。どの読物も、読後感に何ともいえない味があります。日曜日なども、外出せずに部屋にいて、貴誌を見ることが楽しみで、文学書や研究書を読むことも必要でしょうが、働き疲れたときの気分を休めるには、もつてこいの雑誌だと思えます。欲をいえば、今までにないような凄惨推理小説を載せていただければ、幸いと思うのですが、如何でしょうか？ (広島・西中)

◎三月号拝見しました。私は昨年三月号からの読者ですが、どちらかというと現代物よりも時代物の方が好きです。しかし今月号の口絵「剝製幻想曲」は特異な題材を扱い、全く素晴らし

いものでした。その上、画は、絵物語のせいもあってか見て楽しいし、また古正氏の画も文以上の良さがありません。同じ号の色頁の絵物語「妖艶娘縛絵」は、文面とも流石に中島先生だと感じました。同氏が挿絵を描いていられる「人肌将棋」もまた特別に面白いと思いましたが裏窓特有というか、そのような場面が足りなくて、いつも残念に思っています。又、同氏の開化女囚吟味は絵がいただけなかった。もう少し前にのべた二つの絵に近くした方が読者にも親しみやすかつたろう。

「抱き寝如来」と「閻魔のお秀」は文章は大変面白かったがこれも挿絵が足りない。特に後者などは、絵物語りのように挿絵を多く入れたらなおよかったであろう。「獄門首のお銀」は軽い文章であるが、また面白い。これには、今まであまりないようなタッチで絵が入れてあったが、全体を通してみて、本誌の中以前においてはなかなかよく粒のそろった作品があったが、後の方にくると、手を抜いたような感じが起らないでもない。

読者短評

その中で、最後の「人肌将棋」がしめくりをよくしているの
で、いくらか救われている。

昨年まで、内外映画名場面集やある美容体操など、特異性をもったものがあつたが、今年もそのような特異性をもったものを絵にして中島先生にでも描いていただいたら如何。それも、現代的なものでなく、時代ものの感覚でしたら、さらに良いと思います。また、グラビア等にも、前にいった「ある美容体操」のような写真を一頁分くらいにの大きさに拡大して、何枚も掲載したら本当にいいと思う。

(北海道・H)

◎三月号はスリルと迫力に富み相変らず興味深く読むことが出来ました。中でも絵物語りは特に趣があつたと思います。しかし「剣製幻想曲」の結び方は最近の貴誌の既刊号で同じ方法があつたのを記憶しているためか何か物足りなさがありました。もう少し考えていただく余地があつたのではないのでしょうか。それから、前号のこの欄で、ある美容体操の復活を希望される方がおられたようですが、私

も大賛成です。しかし、あの形式では面白くないと思います。もっと大きく拡大していただければ良いと思います。出来れば一頁大の大きさにしてみたいくらいかがでしょう。又、これの単行本も考えられないことはないと思います。今までは種々特異な本を發表して読者を驚かせた貴社で、新しく試みてはいかがでしょう、今までのものにはない面白さが出ると思います。

最後に読者の皆さんに一言。

というのは、この欄で気のついた事ですが、私達は、この欄をもっと真剣に考え、有効に使うべきではないでしょうか？ 読者が誠実でもって望まない限り編集部や各作者の誠実性というものには自然に遠のいて行くのではないのでしょうか。編集部や作家の皆様、相変らずの御健闘を全国読者の皆様と共に祈り致します。(武蔵野・垣間見蔵)

◎小生は二年程前より御誌を愛読しておりますが、多くある雑誌の中で断然光っていると思ひます。殊に執筆しておられる先生方の、それぞれのうまさには感服させられます。(中略)御誌

の何と素晴らしいこと。大多数の読者諸兄の絶賛しているように「怪異愛霊教」などはまさに圧巻です。小生は三鷹市に在住しておりますので、愛霊教本部の所在地をいろいろ想像してみます。作者の飯田豊吉氏は三鷹市の事に詳しいかどうか知りませんが、確かに文中に出て来るような場所があります。東京天文台の付近、あの辺は実に閑静で森あり雑木林あり、丘あり崖あり、小川あり。といった具合で一人で歩くのが恐いようなことがあります。

また「泣き方を教えて」は非常によかつたと思います。久しぶりに面白い作品に接することが出来ました。「抱き寝如来」は最後に来て見事にひっくり返されました。でもその方が後味の良い感じでした。申し上げたいこと書きたいことは山のようにありますが、このような投書は生れて始めてですので、サッパリ要領が分りませんからこれをやめます。御健闘を祈ります。

(三鷹市・関口龍三郎)

◎裏窓毎号拝見しています。私たち地方の者には、都会に住ん

でいる人達のように娯楽がありませんので、毎月こうして送っていただいて御誌を読むのが楽しみです。月の半ばを過ぎるとそろそろ発行日が待遠しくて郵便の来るのがたのしみになります。他にも二誌ばかり直接購読を申し込んであつて毎号とつていたのですが、どうも詰らなくて今月からは申し込まなくなりました。その原因は、近くの町まで行くと二、三カ月の月おくれで四、五十円で売っているからです。そんな雑誌は内容もありきたりで余り面白くないのです。ところで、他の雑誌を申し込まないかわりに、貴社の単行本をほしいのですが、裏窓に發表されないで、私たちのような読者向きのものをほとんど出してほしいと思います。が如何でしょうか？(京都府・周山勇)

◎最近同じようなお手紙が多くありますので、愛読者向き限定版の裏窓叢書といったものを出すことになっております。御期待下さい。この欄に掲載しました方には本誌の五月号をお送り致します。投稿には住所御芳名明記のこと、誌上匿名自由(係)



月曜日の罨

彼女のミサ

ホンキイ・トシク

黒羽 訳新

江淵 晃夫・画

わがいとしのメリイ

そいつが、シュワルツだということを探ぐりだすまでに、ずいぶんオレは足を棒にしたし、よけいな出銭を使った。もぐりの堕胎医め！

しつこいの剥げた階段の壁。階段そのものも一段おきくらいに腐っている。階段をあがりかけたたん、オレは吐気を催した。何ともいいようなない悪臭が、階段の壁のトンネルの中にもついていたからだ。何か鳥の羽根が化学的な変化で、すえてしまい、それに、フォルマリンをぶっかけたような匂いが、オレの鼻腔へおしよせてきた。

シュワルツの部屋は三階だということはわか

淫祠邪教・特集



っていた。

オレは階段を上りながら、かわいそうなメリイのことを、もう一度胸にうかべた。

彼女はオレのことを「口髭のおじさん」とよんでいた。オレにしてみれば、おじさん呼ばわりはくすぐったい。

しかしメリイは十八だし、オレはちょうどメリイの年の倍だからおじさんとよばれたってしかたがない。

「どうせ飲むなら、もう少し好いお酒をのんだ方が身のためよ」何をこの小娘めがと、オレはい



つも酒をうけとりながら、腹の中で罵った。が、メリイはオレをからかっていたんじゃないかった。

「アタシのおじさんによく似てるんだもの、ちよつと向うをみてごらん。ほら、その頬骨の出っぱつてるところと、ちよいと唇をひんまげるところが、死んだおじさんそっくりだもん……」

いつも清潔で、いつも青空みたいに明るかったメリイ。

オレは酒を買ってかえると、ベッドへひっくり返って、口からのむ。そして、目をつむると、きまってオレの瞼の裏に、メリイの姿がうかんだ。

ひよつとすると、年甲斐もなく、オレはメ

リイに惚れていたのかもしれない。「映画につれてってよ、おじさん。今週スカートを新調しちゃったんで、お小遣いが足りないんだから」

ホット・ドッグをかじりかじり、よく並んでメリイと映画館の暗闇で、銀色にひかるスクリーンを何時間もみつめていたことがあった。

しかし、オレは、キス一つしなかった。

「遠慮しなくたっていいわ、ホンク」ホンクと呼びやがった。おじさんと呼ばなかったわけだ。おじさんと呼んだんじゃア、こつちが尻こんでしまうことを、ちゃんとしてメリイは知っていたんだ。

「遠慮？」

「そうじゃないの。反対給付がなくっちゃア悪いもの。キスくらいなら遠慮は御無用よ」人通りはなかった。よっぽどオレは、メリイの腰を抱いて、キスしてやりたかった。

しかし、オレは黙って「さよなら」だけいうと、踵を返した。今になって考えてみれば、ちよつとおしかったような気がする。

垢無の十八娘があゝの世へ行ってしまった！

相手の男は誰なんだ！

月曜のミサを探れ！

やっぱりオレは、メリイが可愛かったんだ。だけど、あんな小娘を恋人にするほどオレは年よりじゃないんだと、オレは自分にいつてきかせていた。つまり、何のことはない、一種の自己弁解だ。

ひよっとするとメリイは——いや、いや、そんなことはあるまい。メリイは、安心できるおじさんと信じて、オレとつきあってくれていたのさ。そして、オレを、自分と同じように、身よりのない「寂しい人間」だと思つて同情していたのかもしれない。

そのメリイを——シュワルツの奴め！

メリイは死ぬまで、シュワルツの名を唇にのほせなかった。

オレに相談してくれたら、オレが何とかしてやれたのかもしれないのに。

胎児は五か月で、引き出されたとき死んでいた。消毒が不完全だったのが原因で、メリイは熱にうかされ、心臓が参つて、死んだ。

店の親爺は外聞をおそれ、方々へ手をまわして「病死」にしてしまった。メリイ自身の名誉から考えれば、たしかにありがたいややかただったと思うが、メリイの「おじさん」だったオレにしてみれば気に食わない。

いったい、メリイの子の父親は誰だったん

だ？

義眼の墮胎医

どうせ一筋縄で行く相手じゃないと、オレははじめから覚悟していた。何しろ、名前からしてドイツ系のシュワルツだ。

オレの顔を一目みた瞬間、奴は警察の刑事とカンちがいしたらしい。ドアをしめようとしたが、それより先、オレの靴がドアにくさびを打ちこんだ。

五尺そこそこで禿頭。胃でもわるいのか、口のまわりをただらしていた。おまけに左の眼が義眼だった。もっともはじめっからオレは、その義眼に気づいたわけじゃない。義眼に気づいたのは、それよりかなりあとのことだった。

オレがドアを押しあけると、シュワルツはじりじりうしろへ退って行った。オレは奴を威嚇するように睨めつけ、わざと石のポケットへ掌をつっこんでいた。パチンコがあるぞ、と思わせるはったりだったのだ。

シュワルツは後退りに退って行ったが、とうとう向うの壁に体をおしつけてしまった。これよりも退れないと気づくと、指先をカラーの中へつつこみ、それで空気の流通をよ

くしてから、ふいごから洩れる風のような声を出した。

「な、なんだ、何しに来た？」

「先生に、ちいっとばかり、うかがいたいことがあつて来たのさ。こっちの質問に、ただ答えてくれりゃいいんだ」

「警察か、それともお前は——」

オレは警察じゃねえと、はっきりいつてやった。しかし、オレもその時、ちいっとばかりうかつだった。シュワルツのいった「警察か、それとも——」という、（それとも）が何を意味するのか、もっとその場で突っ込んだ聞き方をしておけばよかったのだが——。

「メリイ・ヒギンスの一件で来たんだ」

「メリイ？」

「とほけちゃいけねえぜ、先生」オレはそういつてから考え直した。というのは、こいつに手術してもらうとき、メリイはおそらく本名を名乗らなかったにちがいないと思つたためだった。だから、やんわり、大体何月の何日ごろ、年は十八で、これこれの様子をした娘がおろしてもらいにきたらうと尋ねた。

シュワルツは、ようやく落着きをとり戻したらしく、今度は少し反抗的な面で、オレの顔をみつめていたが、なかなか口をわろうと

はしなかった。

「いいかい、先生。何もオレは、先生のためにならねえことを聞く気できたんじゃねえ。ひょっとしたら、メリイが、お手当てをうけると、多分、麻酔の途中か何かで、相手の男の名前をいわなかったんじゃねえかと、それを聞きにきただけさ」

シュワルツは、ちよつとしてから、また空気のもれたような音を出しやがった。

「あんたと、その娘の関係は？」

「まア、伯父と姪って間柄さ」

「わかった。わしがこんなことをいうと、あんたは鼻で笑うだろうが、御承知のように、医師の秘密という不文律がある——」

こういつてからシュワルツはオレに、水を一杯のんでいいかと聞いた。

オレがうなずくと、白いカーテンが垂れてある手術台の向うに姿を消した。何か、ガラスがふれあうような音が聞こえた。

出てきたシュワルツは、服の袖で、口のはたをぬぐった。オレにはこれですぐわかった。水じゃない。元気をつけようと、一杯ひっかけてにちがいない。その証拠に、シュワルツの顔から、卑屈の色が次第に薄らぎ始めた。「わしは若そうにみえるが、もうじき七十だ。

老先きは短い。二十年ほど前、ある手術に失敗して、医師会から追放された。だといって他に生きて行く方法はとも考えられなかった。わしは、腕に自信があった。今までに、もうそれ以来、何百人もの女を助けてやってきた。失敗したことは一度もなかったのだが——」

オレは、ちりちりしてきた。だから、つい言葉が荒くなった。

「いいわけはよせよ、先生。オレの聞きたいことだけに返事してくれりゃアいいんだ。娘は、何か男の名前をいったのか？」

相手は、もぐりの墮胎医だ。ずるい点ではひけをとらぬ男だけに、こつちがあせつてくると、足元をみやがった。

「あの娘は、病死になったはずだろう。変にむしかえしたりしたら、わしだけの迷惑じゃあるまい。とぼちちりをうけて困る人間が何人も出ると思うがどうだ？」

オレは、とうとう疳癪玉を破裂させた。

「な、なにをする？」

シュワルツののどつ首をオレは締めあげたしめあげたというより、チビの先生を宙につるしあげた形だった。そのときに、右の眼は白黒しやがったが、左の眼の玉だけが奇妙に

オレの顔を正視していたんで、オレは左の眼が義眼だつてことに気がついた。

「さアいえ、金がほしけりゃアくれてやる。

メリイは、何かいったんだろう？」

「助けてくれ、乱暴するな。金をくれるのならくれると、はなからそういつてくれりゃアいいのに」

蛆虫め！　とうとう口をわりかけた。だがこのとき、とんでもない邪魔者に入られた。

謎の置き言葉

オレが驚づかみに札束をとり出そうとした瞬間、ドアにノックの音がした。シュワルツは黙っているとオレに合図すると、白いカーテンを指さした。かくれているというのだと察したオレは、もう半分安心していたから、足音を忍ばせて、白いカーテンの奥へかくれ、耳をすまして待っていた。

ドアが開く音がした。しかし、客は中へ入ってこなかった。シュワルツが戸の外へ出て行ったらしい。一瞬、逃げる気かと、オレは気負い立ったが、すぐシュワルツ

淫祠邪教・特集

の声が戸の外でしたので、出て行くのをやめた。

客は男のようだった。シュワルツとひくい声で話をしてた。しかし、話の内容はカーテンとドアに妨げられて、オレの耳へははっきり聞こえてこなかった。

いきなり、ウーンといううめき声。

反射的に、オレは飛び出して行った。ドアが半ば開いていて、そのドアのすぐ下に、身体を海老のように折りまげたシュワルツが倒れていた。

オレは階段をかけおりて行く、黒マントの男を追おうと思ったが、すぐ気をかえた。

抱きおこすと、シュワルツは胸を短刀でえぐられ、もう虫の息だった。

「おい、しっかりしろ、約束のはなしが残っているぞ、シュワルツ。あの娘は、何ていったんだ？」

義眼の方はうつろにあいていたが、生きてゐる方の眼の瞼は、もう八分どおりふさがりかけていた。

唇が、二度三度、痙攣した。

「エ、エ、エガーパイ」

それだけというのが、せいぜいだった。

何だ、エガーパイというのは？

聖餐！

冗談じゃない。メリイとキリストとどういう関係があるというのだ。

だが、それ以上聞き出すことは、もう一みて不可能だった。

おそまきとは思ったが、オレはシュワルツの死体をおきつ放しにして、階段をかけおりて外へ出た。

やはり無駄だった。黒いマントに、おまけに黒いフードで頭をつつんだ男の姿は、どこにも見当らなかった。

オレは考えてみた。なぜシュワルツは刺されたんだろう？ 犯人は、そして、なぜシュワルツを刺したのか？

手際はあざやかだ。心臓を狙って一つき。ついた短刀をもって逃げた。考えようによっては、あの黒マントを着てやってきたのも、返り血を浴びても目立たないという計算だったのかもしれない。黒地の布に赤い血は、すぐ吸いこまれて、黒と赤の判別はつかない。だが妙だ。考えれば考えるほど妙だった。

もうマントに身をつつむ季節ではない。ポトマックでは、日本の桜が咲き出す春だ。わざわざ返り血をあびても目立たないように、黒マントでやってきたのは妙だ。それに、フー

ドだった。

いや、フードは別だ。逃げて行くとき、うしろから見られることを考えて、冠ってきたのかもしれない。

シュワルツなら、おそらく殺されてもいい原因を、いくつももっているに相違ない。

これは偶然なのだろうか？

オレが、ここへやってきたのは、オレしか知らないはずだ。とすると、オレがいたときシュワルツが殺されたのは、やはり偶然のようだ。

オレは引っ返えすのをやめて、オレの巢へ戻った。何のことはない。骨折り損。もうちよつとのところまで追いつめた獲物を、横どりされた形になって、オレはむしゃくしゃした。

ウイスキーをひっかけて、ベッドへ横になつて、もう一度考えてみた。

シュワルツがいった「聖餐」と、メリイの死に、果して何か関係があったのだろうか？ それとも、もう半分死んでいたシュワルツが、キリストの最後の晩餐を頭にうかべて、あんなうわごとをいいやがったのだろうか？ それとも？

オレは、ここで、はっとした。そうだ。そ

れとも——シュワルツはいいやがった。お前は、警察か、それとも——とオレに聞いた。それともという、その意味は何だったんだろう？ 警察でないそれともは——ひょっとすると、たかり屋を意味していたんじゃないか？

いや、そうじゃない。あんな男が、たかり屋をおそれるわけはない。あいつこそ、ちょっと曲がれば、あいつ自身がたかり屋にたかるんだから、たかり屋を恐がるはずはない。とすると、それともとは、いったい何を指したんだろう……。

結局その日のオレは、メリイのおもかげをウイスキー瓶に抱きしめて眠ってしまった。

これは手がかりだ

オレは振り出しに戻った。シュワルツの死は、小さな囲み記事で報道された。そして三日もたつと、元医師だったシュワルツのことをみんなは忘れてしまったようだ。

だがオレだけは、シュワルツのことを忘れなかった。いや、シュワルツがいまわに残した一語を忘れなかったといった方が正しいだろう。

オレはメリイの店の親爺さんにたのんで、

メリイの荷物をしらべさせてもらった。身よりのないメリイだったので、彼女の荷物は、屋根部屋へ放りこんであつた。

小型なトランクで二杯。これがメリイの全財産だったらしい。

一つのトランク

クは、服や下着が、

くしゃくしゃになっておしこまれていた。きつと、一とまとめにして、ごみ屑籠へでもすてるみたいに誰かがトランクに押しこんでしまったようにみえた。

オレはまずそのトランクをあけてしらべて



みた。結局そのトランクから何一つ手がかりは発見できなかったが、オレはトランクの蓋をといたとき、ひどくセンチメンタルな気分におちこんでいた。十八娘の下着に、直接手をふれたのはその時がはじめてだった。娘たちが、下着に贅をつくす気持が、オレにも少なかった。というのは、名状しがたい手ざわりだった。ひろげたそれは、ゆうに身体の三分の二を蔽いかくすだけのものだったが、丸めてしまうと、本当に野球のボールみたいに小さく丸まった。

人がみていなかったのを幸い、オレはその丸めた下着を頬におしつけ、それからおいをかいた。たしかにメリイの残んの香がたちこめているような気がした。メリイは、そうひどくはなかったが、わきがだった。

もう一杯のトランクにも、ジャケットや何か身につけるものも入っていたが、メリイの日記と手紙が入っていた。手紙は、むろんしりあいとか、ボーイ・フレンドからのもので全部目を通したが、ほとんど役に立たなかった。

だが、日記には、大発見があった。それとこれと思いあわせてみると、シュワルツが言い残した言葉も、まんざらうわごとではなかつたわけだ。

メリイは一年ほど前から日記をつけはじめ

ていたようだ。オレと映画を見に行ったことを、とても楽しそうに書いていたので、オレは少し嬉しくもなった。

そして、オレの眼は、ある個所に吸いつけられてとまった。

九月十五日、マッジにさそわれて、弥撒へ行く。

九月二十二日 マッジから、また弥撒へ行くかと誘いがあった。どうしようか？

九月二十九日 もう行くまいと決心したのに、マッジから誘われると、アタシの心は動いてしまう……。

おかしい！ たしかにおかしい。弥撒に行くのなら、なぜ（もう行くまい）と思うのだろう？ そして、誘われると、なぜ（心が動いてしまう）のだろうか？

オレはカレンダーをしらべてみた。そして驚いた。九月十五日も、九月二十二日も、九月二十九日も、月曜日だったからだ。

弥撒と書いてあるが、これはひよっとすると、暗号かもしれない。月曜日に弥撒へ出か

けるなどという話を聞くのは始めてだ。

オレは荷物を片づけてから店へ行くと、親爺さんに礼をいい、それとなく、マッジという女を知っているかと尋ねてみた。

「マッジ？ ああ、きつとマッジ・ウィリアムスのことだろうぜ。マッジなら、ハーロー雑貨店の売り子ですぜ。ああ、メリイとは仲がよかったよ」

よし。これで糸がたぐれそうだ。オレは文字通り勇み立った。

しかし、よく考えてみると、まともにマッジに当ることは危険らしい。彼女たちはいうまでもなく、オレにはわからないが、何か共通の（秘密）をもっている。女は、たとえば、でも、男とちがって、いうまいと思ったら、それこそ牡蠣のように口をつぐんでしまう。

聞き出すより、嗅ぎ出すべしだ。すぐさまオレは活動を開始した。

マッジ・ウィリアムスは、ひどく大柄な娘で、それだけヴォリュームがあり、男好きのする娘だった。しらべてみると、年は十九つとめている店から三丁ばかりはなれたアパートに、母親と二人ぐらしでいることもわかった。

こっちの正体をカンづかれないよう、それ

淫祠邪教・特集

から毎日毎日オレはマッジをはった。もし、メリイが、日記に書いていたようなことが、今でも行われているとすれば、マッジの行動を見のがしていけないのは月曜日だと考えたが、とにかく次の月曜日まで、オレはマッジが店をおえ、家へ帰り、時には映画をみに出かける後までついて廻った。

虎穴の支那街

ところで、問題の月曜日の晩。

マッジがつとめから家へ戻ってきたのが、午後六時フラット。オレはマッジのアパートから二百米ほどのところへ車をとめて、張っていた。

待つことおよそ一時間。

案にたがわずマッジは表へ姿をあらわした。一人だ。連れがない。車をすてて、オレは足でマッジをつけることにした。見失う心配は全然ない。まるでわざと持ち上げているみたいな、マッジの尻から目をはなさなければよかったからだ。

一丁場行ってマッジは道を東へ

とった。

まっすぐ行けば支那街に入る。まさか支那街へ行くまいと思ったが、そいつはオレの思いちがひ。

つけているのに夢中だったんで、葦とんにくの匂いでオレは支那街に足をふみ入れたことにやつと気づいた。

マッジは、まるで買物でもするような足取りで、「福来洋行」という雑貨屋へ姿を消した。

オレは横目でその店をチラとみて、店の前を通りすぎると、十米ほど先の「飯店」のところで一服吸いつけた。

マッジの姿は、もう「福来洋行」の店の中にはなかった。おそらく店の奥へ行ったにちがいない。

この街は作りが特別で、いわば二つの通りをはさんで、二軒の店が背中あわせになっている。だから、もしマッジに気づかれていたら、マッジは「福来洋行」の入口から入って奥をぬけ、この店の背中あわせの店から素通りして、オレの立っている通りとちがう通りに抜けてしまう危険性も考えられた。

だが、マッジはオレを知っていないし、一度だってここへくるまで、うしろをふりむい

たりしなかった。だから、「籠ぬけ」される懸念はなかった。

とにかく「福来洋行」が何かの（巢）にちがいない。オレはそこで、もう二十分近く立って張っていた。

きたきた、白人の娘が、その二十分の間に三人。一緒にきたんじゃない。別々に「福来洋行」へ吸いこまれて、マッジと同じように出てこなかった。

オレは腹をきめた。

しかし、万が一の場合にそなえ、電話でオコーネル警部に連絡しておいた。

何気なく、オレが「福来洋行」の入口の玉すだれを鳴らして中へ入ったのが、七時三十分。

帳場のところに、やせて狐のような顔ををしたシナ人が一人、ソバをすすっていた。オレの顔をみると、あわててソバをすする音をたててかつこんだ。

「花瓶を一つみせてほしいんだが？」

オレは客のふりをして、店の中をみまわした。入って左の奥にドアが一つある。オレの見当だと、このドアの向うは、地下室へつづく階段と睨んだ。

都合のいいことに、店には他の人間がいな

い。きつとこいつが店番兼見張りだと思ったので、オレは財布から十ドル札を四五枚ひっぱりだした。

これでちょっと警戒していたらしいシナ人も、オレを本当の客だと思い込んだとみえる。

「花瓶いいの、沢山々々ある」

そういいながらも、残ったソバの汁を全部平げると、おみこしをあげた。

「四五十ドルで手頃なのはないかね？」

右の目でシナ人を、左の目でオレは通りの様子をうかがった。

今だと思った瞬間、オレは拳固をかためていきなりシナ人の鳩尾を突いた。奴さん、まともにオレの腕の中へ倒れてきたから、オレはその身体を引きずって帳場のかげに運び念のため猿ぐつわをかませ、うしろ手にしぼりあげて、そこにあった絨氈を上にかぶせておいた。

これで第一の関門はパス。だが、あとに関門がいくらかあるか見当はつかない。当って碎けるだ！

オレは目をつけておいたドアをそっと開いた。うまい。

やっぱり地下室へおりの階段が薄灯りにてらされて下へ続いていた。

狂宴……そして……

階段の教は十三。ちょっぴりいやな気がした。暗い廊下がまっすぐ十米近くのびている。どうやらこの地下室は、この店と背中あわせの店との共通の地下室らしかった。

足音を殺し、オレは一步一步進んだ。

通路にそって、右左にいくつかのドアがある。オレは一々鍵穴をのぞいて中をうかがった。右の三つ目のドアの鍵穴をのぞいて、さすがのオレもどきりとした。

というのは、まず第一に目に入ったのが、黒いフードを冠った黒マント姿だったからだ。しかし、よくよくみると黒マントは一人ではない。みえる範囲に、少くとも黒マント姿が三つ。そして、それと対照的に白いフードで白マントの姿もあった。

オレはそこまでたしかめると、後退りに退って、その室のもう一つ手前のドアの鍵穴をのぞいてみた。そこには人影がなく、何かの物置らしかったので、オレはドアの把手をそっと廻わしてみた。開いた。

しめた。

入ってからライターに火をつけてみると、樽がいくつも立ててある。オレは火を消して

壁ぎわへ手さぐりで行き、樽にのってみた。壁は板ばりなので、耳をすますと、となりの部屋のざわめきが聞こえてくる。

闇に目がなれてくると、オレはオレが立っているところから二十センチほど右に、小さな穴があるのに気づいた。その穴から、となりの灯がもれてきていたので、穴のあるのに気づいたのだ。

オレはただちに横に移動すると、穴に目をあててのぞいた。

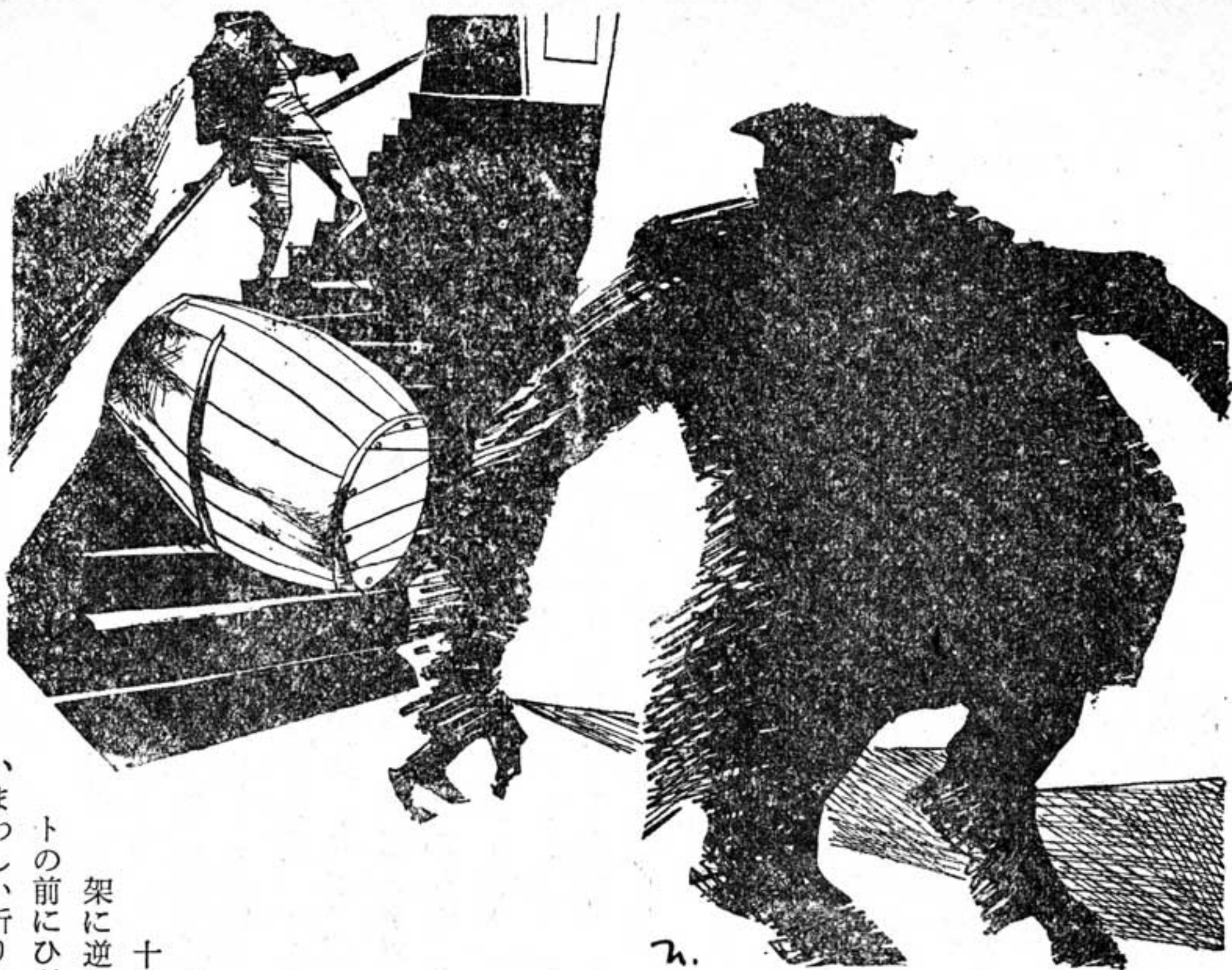
よくみえた。ほとんど隣りの部屋の全景をオレは右の眼でみてとった。

中央に祭壇がしつらえてある。そしてその近くに、一、二、三——黒いフードの黒マントが七人。白いフードの白マントが六人。黒マントは黒い仮面を、白マントは白い仮面で顔をおおっている。どれがマジカかわからなかったが、ちょっとしてオレは、すぐマジは白マントの中にきつというにちがいないと確信した。

というのは、こういうわけだ。

黒マントも、白マントも、マントの丈は大体同じように膝すれすれだった。

十三人はマントの前を何かで止めていた。しかし、膝から下の足を観察してみても、オレ



は白マントが「女」で、黒マントが「男」であることをすぐに察した男も女も、靴下はむろんのこと、靴もはいていない素足だ。だからひよっとすると膝から上だって、いや、オレの想像通りだったことはそれから十分以内にわかったのだが――。

「主の名によりて来れるものは、祝せられ給え」

祝詞だけ聞けば、本当の弥撒と人は思うにちがいない。

だが、そこにくりひろげられたのは、いわば悪魔どもの弥撒だった。

十三人の悪魔たちは、十字架に逆さに磔刑になったキリストの前にひざまづき、神をも恐れぬいまわしい祈りをささげた。

何か葡萄酒の入ってでもいるような大盃が順ぐりにまわる。

それから黒マントと白マントの踊り。

黒マントが、マントの前をさっとはねのけ裾を肩にかいぐる。オレの思った通り、マントの下は生れたままの姿だった。白マントも同じように前をはねのける。

伴奏は携帯ラジオのロカンボ。

白と黒のマントがもつれ、ゆれる。

一おどりすむと、また、大盃がまわった。

今度は白と黒が、それぞれ別の白と黒とに相手をかえた。

ところで、黒が七人で、白が六人だから、どうしても黒が一人あまってしまう。

しかし、彼らは何かのきめでもあるように争うことはなかった。はみ出した黒マントは他の六組がおどっているうち、のんだり食ったりして、おとなしく番を待っている。

これでオレはわかった。どうして白マントが六人しかいないかの意味をのみこんだ。七番目の白マントがメリイだったんだ。あの、オレがいたいと思っていたメリイが、七番目の白マントだったんだ！

三十分もおどってから、おどりは一段落ついた。

そして、なぜこの連中が、裸にマントを蔽っていたかがオレにやっとわかった。マントは羞恥を蔽う布ではなく、コンクリートの床へ薬布団の代りに二枚重ねて敷くシートだったのだ。

そこにも、ここにも。そして、一人あまつてしまった。

メリイの父親は、だから多教でなく、複教だったし、メリイにしてみれば、誰が父親かわからなかったのが当然だったのだ。

樽は転がって行く

様子はもうわかったのだから、オレは早々に引きあげるべきだった。汐どきということはいつでも肝心だということをオレだって承知していたのに――。

いきなり駈ける足音がしたと思うと、狂宴の場のドアがあいた。

縛り上げて眠らせておいたシナ人だった。

オレはとまどった。もう逃げるすきはないとすれば、どこにかくれるか？

時計をみた。九時に、まだ十五分ある。九時まで時を稼げればオレの勝ちだ。

樽の上からとびおりた拍子に、オレはうまいことを思いついた。

樽だ！ この中にならなくれる。

オレは樽をさがした。空樽が二つあったから、その一つへもぐりこむと、中から蓋をうまくして、息をひそめた。

となりの部屋では大分大さわぎが始まったらしい。

どこだ、とか、誰だとか大声でいう男たちの声がする。

しかし、その声も、しばらくすると汐のようにならなくなった。

足音が次々に通路をぬけて上へ遠去かかって行った。

オレをさがすより、奴等はまず身の安全を慮んばかりで退散して行った様子だ。

そのうちに、コトリと音もしなくなってしまった。針一本おとしても、きつと雪でもおちたように聞こえるほどの静寂が生れた。

不気味だった。

オレは出ようか出まいかと迷った。

油断はできない。

さわいでさがしまわるより、ひよっとすると何人かの男たちが通路のどこかで息をひそめ、安心して逃げだそうとするオレを待ちかまえているのかもしれない。

いや、たしかにそうだとオレは思いはじめ

た。シュワルツを殺した黒マントの手際。

あの手でオレを倒そうと、罌をかけて待っているに相違ない。

といって、出るも引くもならない。いつまでも樽の中へかくれているわけにもいかない。十分くらいたった頃。

オレのかくれているドアが、微かに軋って開いたようだった。

いよいよ来たな！

オレは身を固くして待ちかまえた。入ってきたのは二人らしい。足音でわかった。

蓋のすきから、そいつらがふりまわす懐中電気の灯が天井に反射するのがみえた。

だが、二人とも一言も口をきかない。

やがて足音が、オレのかくれている樽の方へ近づいてきた。もうどうにもしようがない。

オレはできることなら息さえとめたいくらいだった。

と、いきなり声がした。

「どうやら、ここじゃないらしい」

思わずオレは安堵の胸をなで下した。

だが、この言葉は裏はらだったことが、すぐわかった。

いきなりオレのかくれている樽の蓋を、上

からボタンと叩かれた。蓋がきっちりハマったので、しまったと思うその間に、まず釘が一本、そして二本、三本。立てつづけに蓋の口のまわりに釘がうちこまれた。オレは、とうとう樽詰めにされてしまったのだ。

「これでいい。さア運び出すんだ」

声とともに、樽が右左にゆれ、次にゴロンと樽ごとオレは横に転がされた。

「どっちから運び出すね」

「張の店からがよからう」

しまった。これでは逃れようがない。オレは「福来洋行」だとオコーネル警部に連絡をつけておいた。だから、せめて「福来洋行」の入口から運び出されれば、助かる可能性はあるかもしれない。だが、こいつらは「張の店」といった。これはきつと、「福来洋行」と背中あわせの裏の店のことだ。こうなれば十中の八九は絶望だ。

オレがそう思っているとき、もう樽はオレの目でもまわすように、ゴロゴロゴロゴ横転しはじめていた。

鎮魂歌

運てのは紙一重だ。

あるとき、シナ人が樽に入っているオレを

放りっぱなしに転がしておいたら、オレは樽詰めにされたまま、その地下室で餓死してミイラに化けていたんだろう。

「お前のミイラなら、きつと博物館で大歓迎してくれような」

オコーネル警部は、こういってオレをからかいやがった。全くだ。大したみせものになっただろう。

オコーネル警部は、九時きっかりに手を入れた。

地上室へなだれこむと、ちょうどシナ人ともう一人の黒マントが、オレの樽を転がして張の店の階段に押し上げようとしているところだった。

まず射ったのが、黒マント。

オコーネルの銃も応じた。

シナ人は、おそらく樽の中のオレを眠らせるつもりだったらしい。

いきなり樽の土手つばらめがけて射った。

ここが紙一重のさかい目だった。

樽も古かったし、シナ人の狙いもちょっとまずかった。もっとも、まずかったおかげでオレはこうしておてんとさまをあおげる身でいるのだが。

射った一弾は、たしかに真中へ当りはした。

だが、弾丸の当たったのは、樽の胴をまんなかで締めている鉄のたがだった。たがははじけてとんだ。

そして、その反動で、樽が転げて階段にぶつかったんで、樽はこわれた。

これで勝負はついた。

樽からはいだそうとしているオレの姿をみて、オコーネルはシナ人の右手を狙った。

「お前、よっぱらってるみたいだぞ」

当り前だ。ローラー・コースターにのって、こんなに横転することはまずあるまい。シナ人は口汚く罵りながら、しょっぱかれて行った。

「もういい加減に、危い橋をわたるのは、よせ、ホンク」

オレはいいい返した。

「しようがねえ、これがオレの道楽さ」

「ふん、道楽か、大した道楽者だな、お前は——」

だからオレは、オコーネルって野郎が好きなのさ。

地下室から阿片やモルヒネや、その他いろいろの禁制品である麻薬が発見されて、オコーネルは、ほくほくしていた。これというの

も、オレの道楽のおかげなのに。

「福来洋行」の主人がこの一件の主犯だったシュワルツを殺ったのは、黒マントで主人と抵抗したジョセフという若僧だった。

シュワルツがオレに「警察か、それとも？」といった、そのそれともはこの「福来洋行」をさしていたのだった。

シュワルツは、やはりいわばこいつらの一味で、妊娠した白マントは、みんなシュワルツのお世話をうけておろしめていたのだ。

ある日、シュワルツはメリイのことでオレにしめられ、もう少して泥を吐きかけたときジョセフがやってきた。シュワルツを殺ったのはジョセフだった。

シュワルツが小声で、オレがメリイのことできたというと、ジョセフは「弥撒」に手がのびるのを恐れ、とっさにシュワルツを刺して逃げた。

「福来洋行」の主人の劉は、麻薬の密輸をかげでやっていた一方、若いものを麻薬で釣りあんな「弥撒」の場を提供していたのだ。

男女がまわしのみしていた大盃の酒には、催淫薬が大量にまぜてあった。

可哀そうなメリイは、はじめそうとはしらず、マッジにさそわれてここへ来て、否応な

いきものをいちめるな



左次朗・画

しに仲間にされたにちがいない。

禁断の木の実の味を知ってしまったえば女は弱いものだ。それに組織はうまく出来ていて、絶対に秘密が保たれていた。マッジは、やはり女友達のジョイスにさそわれて仲間に入りそして、マッジはメリイを仲間に入れたのだが、マッジが知っているのは、ジョイスとメリイだけだったのだ。つまり、一人は、紹介者と被紹介者しかわからないことになっていた。なので、メリイの場合は、マッジだけしか知らなかったわけになる。男も女も、絶対に仮面をとることを許されなかったのだから——

組織はそうになっていたが、ジョセフが捕らえられ、マッジという女の名がわかっていたので、この連中は一網打尽にあげられた。

オレは事件がおわったあと、やりきれない思いに沈潜した。

よせばよかったという気がしてならなかった。せつかく抱いていた、清浄なメリイの思い出に、ぬぐい去ることのできない汚点をつけてしまったからだ。黙って眠らせておけばよかったんだ。

死者の墓をあばく勿れ！

いや、考えてみると、メリイばかりではない気もしてきた。女って動物は、うわべはとりすまして虫も殺さないようなツラをしてやがるが、蔭にまわると何をしていることか！

そう思うより仕方がない。だから、オレはそう思い思い酒を買いに、表へ出た……

御待望の江戸暗黒秘録新装の単行本が出ました！

江戸暗黒秘録

鈴木和夫著
東 桂 史・装幀

女囚の中には比丘尼などもいたが
仏に仕える義、などという肩書きは
もはや通用しない。浅ましくも縛ら
れたまま剃髪されたのである。用心
のため縛るのであるから、当然後ろ

手に、それもきびしく縛り上げたものと思え
る。大だらいの水で月代を濡らし、囚人の後
ろから髪結いが仕事をした。

いかに純情であつた女囚でも、生地獄の牢
屋暮らしをしていては性格が荒むであらうが



女の命とい
われる髪を
整えるのに
縛り上げら
れたままで
するという
ことは、や
はり哀しい
に違いない
鏡もなく、
娼婆から来
た同性や異
性の髪結い
達の好奇心

視線を受け、髪を弄られる時、女心に血の
涙を流す女囚も多かったであらう。

囚人の世話はずべて非人がするのだが、
髪結ばかりはそうも行かない。髪結達は汚
ながり、嫌々ながら仕事をしたであらう、
と考える事もできる。邪慳な仕事ぶりであ
ったかも知れない。女囚達は昔を思い出し
身の運命を呪ったことであらう。

なお、髪結い一人に家主が一人ずつそば
につきそっていた、と記録されている。脂
ぎった精力的な感じの狸おやじが、好色な
視線をうら若く美貌な女囚に向け、その虐
げられて無抵抗な姿を愉しんでいる光景な
ども容易に想像できるのである。

女囚といっても、荒くれ女や淫蕩な女ば
かりがいた訳ではない。例えばほんの些細
な失火を放火と見做されて牢へ送られ、火
刑の日を待つ娘もいれば、雇い主からいい
寄られ、ついに身を許し、懐妊した事を
封建の闇にひしがれた人間性の暗黒面を貴
重な資料によりまさまさと描出した好著！

定価二二〇円・千四〇円

東京都中野区江古田一 あまとりあ社

まほろ侍 破魔曆 壁虎鳴文

恋 文

黒木 忍

中嶋 長美・絵

「ちょっと、からだを貸して」

小えんは、並んで歩いているお妙にいきなりいうと、お妙の帯のところに両手をかけて、はいていた駒下駄を左右はきかえた。

「右と左を逆に揃えておくんだもの……」

「ほんとう、履物を右左違えてはくと心が落ちつかないわね」

「それだけじゃあない、さんざ、お妙さんのろけるんだもの」

まだ、あたりが艶めいてくるのには時間がある七ツ下りの柳橋であった。

お妙は、日本橋の瀬戸物問屋の娘だ。親の備州屋仙左衛門が、芸事が好きなので、お妙は、

稽古事に柳橋へ通っていて、小えんとは仲の好い友達であった。

清元の師匠の家を出て来ての帰り道である。

その師匠の家の玄関をはなれると同時に、小えんは、お妙にのろけられたのだ。

「男に文をつけられて困ったわ」

「それはそれは」

小えんは、目で笑ってそういった。困ったといいながら、お妙はすこしも困った顔をしてないばかりか、ちよっと体のどこかを押すと笑いが噴きこぼれそ



うだった。

「同情がないのね」

「だって、あんた、うれしそうよ」

「ふふふ」

「文をつけられて困ったら、はっきり断ればいい」

小えんは、そういつてしまってから、言葉が意

地悪く取られないかと心配した。

「それがそうはいかないの。店の惣助

が受け取ってくるんですもの」

お妙は、秘密をしゃべるように、小えんの耳もとに口を近づけていった。

「なんだ、あいだに人がいたのかと小えんは思った。」

「それで相手は？」

「お武家さまだっていうけど」

「あら、顔を見たことないの？」

小えんは、驚いたようにお妙の顔を見た。

お妙は、くすぐったそうにうなずいた。

小えんは、このひとはたのしんでると思った。恋を、恋というものを……

小えんは、大道破魔之介の顔を思い出した。

顔を見もしない男の文をもらってうれしそうにしている友達と肩を並べて歩きながら、小えんは、何となく落ちつかない気になった。

大道破魔之介は、このところちよつとも顔を見せないのだ。

——お千加さんと逢っているのかもしれない……

小えんは、女巾着切りの千加を思い出すと、きつとそれは着物を着ていない、裸にされて後手に桂にくくられた千加の、女の小えんにも眩しいほどの女盛りの裸体だった。

——女のあたしでさえ、ほうつとため息が出るくらいのお千加さんだもの、大道さんはきつと……

小えんは、そんな心細い気持になると、隣りを歩いているお妙が、ふっと、うらやましくなった。そして、お妙の横顔から、胸へ見て来て、小えんの目に、ふと、お妙の帯の間からのぞいている白い紙の端を見つけたのだった。

小えんは、お妙の帯のところにつかまって、左右逆にはいていた駒

下駄をはきかえると、ついと指をのばして、お妙の帯の間から、その白い紙を抜き取っていた。

「これね？」

「あら、駄目よ！」

お妙は、あわてて、小えんが手にしたものを取り上げて、帯の間の奥深くしまい込みながら、みるみる顔を真っ赤に染めた。

恋文だった。

「赤くなった！」

小えんは、大きくお妙の背中を、こぶしで叩いた。

「痛いッ！」

お妙は、大げさに背中をそらした。

「たくさん痛がりなさいよ」

小えんは、なおもお妙の背を打った。

お妙は、その小えんからはなれて逃げた。

「そこ叩かれると本当に痛いよ」

真顔だった。

「恋の病気？」

「違うの」

小えんは、ずっと笑い顔をひっこめた。

「あたしね、今の部屋に寝るようになってから、時々夜中に背中が痛くなるのよ。すごい、まるで背中へ五寸釘を打ちこまれるよう」

「じょうだん」

「いいえ」

「病気よ。みてもらいなさい。黒門町の井上先生がよくってよ」

「井上先生って、お上手なの？」

「ええ、そうらしいわ。大道さんにきいて来まして迎えに行けば来てくれます」

「それじゃ、そうしようかしら」

二人は、別れる所へ来ていた。

「今度移った部屋はね」

お妙は、いいだしかけたが、急に顔を赤らめると、

「そのうち遊びにいらっしやいな」

それで左右に別れていた。

極彩色

お妙は、惣助が取りもってくれた恋文のことを、小えんに話したことで、まだ見ぬ文の相手に一層恋いこがれた。

小えんに話したように、お妙の寝る部屋は、前に壁だったのを板張りにして、それに極彩色で裸の男女の秘戯が、かなり立つ筆で、描かれていた。襖にも、狂った痴戯の姿態がからみ合っていた。

父の仙左衛門の風流趣味だった。それがわざわざいしたのか、お妙の母は病没していた。

お妙は、番頭の惣助から、はじめて文を廊下から手渡された時から父にねだって空部屋だったその部屋を自分の部屋にした。今までは妹のお菊と合部屋だったから、秘密のたのしみを味わうわけにはいかなかったのだ。仙左衛門は、お妙の、世の男に対して心をひらきはじめ

たらしいのに満足して、お妙にその部屋を与えたのだった。

夜であった。

お妙は、ばかに寝ぐるしかった。寝間着がわりの緋の長襦袢を、腰の上あたりまでたくりこんで、全身に妖しい汗をかいていた。小えんに見られた恋文を、胸に当てて、お妙は、頭の中だけ妙に冴えかえらせ、体はぐたりとしていた。

胸に抱いた恋文から、お妙は、文の主の男をあれこれ想像していたお妙の目は、枕行灯の明りにうつしだされる、男女のむきだしの秘図を追った。

ズキンとした痛みが、背中に起った。

お妙は、蒲団を押し上げて、背をまるめ、長襦袢の端を両手とひざで抱きしめた。

——痛い……

お妙は、たえられぬ背中の痛み、しばらく蒲団の中で体をうごかしていたが、やがて蒲団から抜け出した。

背中に、えぐるようにはげしい疼痛が走った。

——まるで、五寸釘を打ちこまれるようだ……

お妙は、板壁に全身を吸いつかせるようにして、手の平で、男女の痴戯の絵をなせた。

——痛い、痛いッ！

お妙は、夢中で胸を掻きひろげた。みごとに成熟した乳房が、秘図に押しつけられた。

★板張りの極彩絵に熟れた乳房を押しつけてやもりのように刺殺された美女！

奇妙に、痛みを訴える悲鳴が出ない。

それに、お妙の体は、板壁からはなれられない。無意識に左右の手で板壁をなせていた。

部屋には、ぜいたくな色彩の夜のものがみだれ、極彩色の板絵壁に吸いつくお妙は、身につけている長襦袢を乱している。お妙は腰のものもまともになかった。

まるで、女の磔であった。

お妙は、あまりの痛さに、ひくく呻いていた。背中的一点が、文字通り五寸釘を打ちこまれるようにはげしく痛むのだ。

それに全身に気持の悪い脂汗をふかせながら、その鋭い痛みに呻きながら、お妙が、恋文のことも、男と女のこと、すべて痛み、五体から抜け切ったとき、まるで磔から解放されたように、お妙の体はどさりと畳に崩れていた。

翌日、黒門町のお医師、井上玄丹が、備州屋に迎えられた。

玄丹は、その部屋に入ったとき、まわりの極彩色に目を見張ったがすぐお妙の診察にかかった。

「なるほど、なるほど」

玄丹は、お妙の話すのをきき終ると、

「肌をぬいでもらおうかな」

お妙は、玄丹に背中を向けると、緋の長襦袢を肩からすべらしてもろ肌ぬぎになった。

一点のしみもない、羽二重のような肌である。

玄丹は、娘のお薦の肌もこのようであろうかと思いながら、仔細にあちこち指で押して見た。

「痛みはせぬかな」

「はい、どこも痛みません」

「どの辺が昨夜は痛んだのか、このあたりかな」

「まるで五寸釘を打ちこまれるように痛んだんです」

もちろん、玉をのべたようなお妙の背中に、それらしい跡があるはずはない。

「どこもお見受けしたところ、悪いところはございませんな」

と、玄丹は、腰に落ちた長襦袢の襟でお妙の背中をかくすようにしていった。

「ありがとうございます」

お妙は、長襦袢の上から着物を着て帯をしめた。

そのあいだ、玄丹は、まわりの板絵の極彩色を眺めていた。

こんな部屋で若い娘がひとり寝るからいかなのだ。女の妄想が生む神経病だ……

玄丹は、お妙が自分に対してすわるときいた。

「大道さんをお知りのようだが」

玄丹は、自分の娘のお薦が、ひそかに大道破魔之介を慕っているのに気づいていたから、そのことがちょっと気になったのだ。お妙は、大道破魔之介からと玄丹を呼んだのだ。

「大道さんは知りませんが」

お妙は、にこりとしていった。

「ほう？　で、どなたから大道さんの名を」

「小えんさんからです」

「小えん？」

「ええ、小えんさんとは友達ですから」

「小えんというのは、大道さんと懇意なのかな」

「そうらしいですわ。小えんさんのいいひとらしいです」

「小えんというのはどういう女です」

「柳橋の芸者さんです」

玄丹は、ほうっと、ため息を吐いた。お薦に強敵がいると思ったのだ。

玄丹が帰ると、お妙は惣助を呼んだ。

惣助は、ぐると男女の秘戯図を見てニヤリとしてからいった。

「医者と呼ぶほどのことはなかったんですね」

「惣助、後生だからあの、文をお前にことづけてくださったお方に会わしておくれ」

お妙は、惣助に、手を合せて見せた。
「よろしゅうございます。でも奉公人の身ではなかなか店を留守にすることは」

ずるい笑いが惣助の顔にうかんだ。
「店なんか構やあ

しないよ」

「へえ」

惣助はニヤリした。

「ほら、これをやる」

お妙はその惣助に、小判をひねった紙づつみを投げた。

「お嬢さん、いつもいつもこんな心配していただいて」

「何をいつてるんだい。もらわないうちはうごかないくせに。いいか



い、今日中に先方のお方のお顔なりとも見られるようにはからつてくれるんだよ」

「へえ」

と、惣助は紙ひねりをふところへしまいこみながらニヤリした。

悪だくみ

その日の夕方――

お妙は、水天宮の近くの茶屋「水春亭」の座敷に、ひとりすわって窓を五寸ばかりあけて、そこから見える水天宮の鳥居のあたりをいっしょうけんめいに見つめていた。

その鳥居を、惣助が、恋文の相手といっしょにくぐって出てくるはずであった。

お妙は、待つうちに、迫りくる期待に、乳房のあたりを両手をぎゅっとつかんでいた。惣助の話によると、侍にして置くにはもったいない男前の侍だという。お侍ではと心配したお妙に、いえ、旗本の三男坊だから大小を捨ててもということもできるし、本当にそれほどお妙に熱心だというのである。

お妙ははッと、思わず胸に両手を当てたまま窓のほうに乗り出した。

――違うわ……

その侍には、供の惣助がついていない。そうだ、鳥居を出てくると惣助はいったのだ。それに、今見たのは浪人者じゃあないかとお妙は思った。

その浪人者は、大道破魔之介だった。

鳥居をくぐるなり、お店者らしい男といっしょに歩いてくる侍姿の男に破魔之介は目をとめた。

――仮装かな……

桜の花は満開であったし、その男は、いかにも大小が板についてない。ふだん腰にしつけないから重そうなのだ。大小というやつは、差しつけていると、左足が右足より発達するほど差し重みするものなのである。

その男と、お店者は、破魔之介の目を逃げるように鳥居をくぐって行った。

それから、ほんのちょっとあとのことだ。

破魔之介は、水天宮をお詣りして歩きだすと、前から来た侍に、ぶつかりそうになって体をひらいた。

これは本当の武士であった。

破魔之介が、ふり返ったのは、その武士が、うすい布で顔を覆っていたからであった。

破魔之介は、その武士を見送り、目がその先を、いかにも腰に差した大小を重たげにこちらに背中を向けているさっきの男にいくと、その目が、駆け出している布で顔を覆った侍の後姿に自然に移った。

駆けて行く武士は、すぐ、侍姿の男に近づいた。

男が、ふり返る。

その瞬間であった。

パツと、血しぶきが噴き上った。あざやかな駆けながらの抜き打ちであった。

侍姿の男は、道にのけぞって倒れた。その上を駆け抜けるように、その男を斬り捨てた武士はつむじ風の如く見る見る町角を曲って見え

なくなつた。

そのころ「水春亭」の座敷では、お妙が、すっかり、かい間見た男に、氣持をうばわれていた。

「どうでした、お嬢さん」

何度目かの同じ問いが、惣助からお妙に発しられていた。

惣助は、ニヤニヤしていた。すっかりこの娘は地廻りの源七に惚れこんじまった……

「惣助、今度はお話できるようにして」

お妙は、指先で襟元をいじくり廻しながら、上ずった声を出していた。

「左様でございますね」

お妙の体を、じろじろ見つめ廻しながら、惣助は、意地悪く冷たい調子で答えた。

——替玉とはしらねえで……

「ねえ、後生だよ」

お妙は、手を合せた。

よく手を合せて拝む女だと惣助は思った。

そのきれいな、喰いつきたい手首をくくって、着物を脱がせたらどうだろうと惣助は不らちな想像をしていた。

——はじめは何だかんださからうだろうが、何、この娘は相手が男ならいいんだ。いやいけねえ、俺はこの女から金を引き出すんだ……
そいつを忘れちゃあいけねえ、危ねえ危ねえと、惣助は、用意して置いた短刀を出した。

「お嬢さん、先方の方も一目お嬢さんを見て、すっかり気に入ったようでございます。というのはこの短刀、生涯お嬢さん以外の女は妻に

は持たないと、何だかお家重代の短刀だそうですが、晴れて婚礼できるまで預けると、こうおっしゃってこの短刀を手前にお嬢さんに渡すようにしてお預りいたして置きましたが」

「まあ、あの方がお家重代の短刀を……」

お妙は、押しいただくように、惣助から短刀を受け取った。

「それで惣助、もうあたしをそこまでお考えくださっているんなら、先方の方のお名前だけでも伺わせてもらっていいと思うけど、どうなんだい」

「へえ、それが先方の方も、お固いお方でしてね。お妙どのの心底も返し文でよくわかった。それにこうしてお互顔を合せてわしはいっその思いを深くしたが、いずれは武士を捨てる上はその前に名前を名乗ってご家名にかかわってはと申しますので」

「お前はそ先の先方のお名前を知ってるのだろうか」

「へ、へえ」

惣助は、ニタリとして返事した。

「あたしはお嬢さんに、実はこういうお名前だと申しあげたいのは山なんです、何せ固い男の約束、それにうっかりそれを反古にしてこのご縁談にひびがはいってば」

「惣助、もういい、まさかこのままあの方にお会いできなくなるんじゃないだろうね」

「へっへ、そいつはこの惣助にまかせて大舟に乗った気でいてもらいたいと思いますよ」

「じゃあ仕方がない。お名前は伺わないがお顔は拝見したんだから……で、いつあの方とまた会ってお話ができるようにしてくれるのだい」
「へえ、それについてちと云い憎い相談がございますので」

惣助は、ずるそうにニヤリとした。

「いやなひとだよ、ちゃんといって見なよ惣助」

「へい、では申しあげますが、先方のあのお侍さまがおっしゃるには当方は家重代の短刀を手渡したのだ、お互いに夫婦の盃を交わすまでは大事に持っていてもらいたい、それで当方もお嬢さんの大事なものを持っていたい、とこう申しますので」

「何だろう、あたしにとって大事なものって」

「へえ、あたしも考えました。鏡かなとも思いました。鏡なら女の生命だと思ひまして、鏡ですかときいたら、違ふといひますので」

「じゃあ何だとおっしゃったのだい」

「へえ、百両あずかりたいと申します」

惣助は、さあ出方はどうだとお妙の顔を見た。

「お金だって？」

お妙は不審な顔をする。

「へえ、商家にとっては何より金子が重要なものであらうと」

「わかったよ。家へ帰ったら何とかするから。それからこれはお前の骨折り賃だよ」

お妙は、用意しておいた紙ひねりを惣助のひざにほうった。

兇 刃

その夜――

お妙は、自分の部屋で一人になると、今までにもらった恋文をひろげて全部読み直した。今までは、文面で男を想像するだけだったが、今度は、顔を見たのだ。文を全部読み終ると、ほうーっと深いため息

を吐いた。目はしらずに板壁の極彩色の裸の男女の痴戯図に走る。

その絵の、男の顔が、昼間見た侍の顔になり、女の顔が自分の顔になる。

お妙は、自分の右手をふところにいれて、じっとり汗ばんだ乳房を押した。

ズキリ――

お妙は、背中に、キリを差し込まれるようにはげしい痛みを覚えた。
(井上先生は何でもないといったけど……)

ズキン

と、また痛んだ。

お妙は、男のことを考えようとした。

(神経だと先生はいったんだ)

それからしばらく、お妙は急いで敷いた蒲団の中で、昼間会った男のことをあれこれ想像した。

そのうち、お妙の全身は汗をかく。

緋の長襦袢の胸もとを大きく掻きひろげて、両手で、二つのよく盛り上った乳房をおさえこんでいる。

ズキン

妖しいたのしみに落ちこもうとしたお妙は、うっと悲鳴を洩らした
しつかりつぶった瞼の裏の、昼間見た男と自分とのあられもない恰好
にからみあった裸の足がずっと遠のいた。

痛ッ！

お妙は、蒲団をかきのけた。

その時、ふわっと、その部屋に姿を現わした男があった。

薄い布で顔を覆っている。だから、薄灯りの枕行灯の明りでは、顔

は黒い布で目鼻は全然見えない。水天宮近くで、侍姿の男を抜き打ちに斬り捨てた侍だ。

その侍は、じっとお妙の顔を睨んだ。

「女！ 俺には色よい返事を文やるたびに返しながら、よくも他の男とひそかに逢曳きをしておったな！」

「あっ、あなたは！」

お妙は、黒い布の男の顔を恐怖して見る。

「俺は、それ、そこにお前が読み捨ててある文の主だ」

「えっ！」

「昼間の男と、俺のことを笑い話にのせていたのであろう。それに、文だけでは俺の気持が信じられぬと二百両を取ったのもあの色男に渡したのだな。やはり顔なぞはどうでも真実己れを愛してくれればというのも嘘だったのだな。フン、女はいかに口ではうまくいっても、どういつもこいつも男の値打ちまで顔の美醜で決める」

「待ってください。そのお顔の布を取って見せてください。惣助は、文の主だとあたしに昼間水天宮で会わせたお方は」

「役者のような色男であつたろう。だが文の主は俺だ。そして俺の面はこうだ」

男は、顔の布を手でむしるように取りのけた。

「あっ」

お妙は、男の顔を見て、声を上げた。男の顔は一面に灸をすえたあとのようにひどいあばた面であつた。それに色はまるで血の気がない青味走った顔だ。

「我が家に入入りしているうちに惣助は、お前の美しい顔に思いをよせていた俺を一杯はめたのだ。それに色よい返事をよこし男の心をも

てあそんだお前を俺は許さぬ」

「いえ、何もあたしはあなたさまをこまかそうなぞとは」

「何もきかぬ」

スラリと、脇差を抜くと、お妙の長襦袢をおさえた紐を切っていた。はらりと左右にはだけて、むっちりしたはだか身が現われる。

はっと、俯つ伏せになろうとするのを、男の足が仰向けに蹴倒していた。

キラリと、光った白刃が、素早くお妙のひざの間に、刃を上差しこまれていた。

お妙は、声も出ない。

白刃が、押し上げられるままに、お妙は悲痛な呻きをあげた。

男は、白刃をどけると、お妙の体に近寄った。

お妙は、ざらざらした感触に肌を鳥毛だたせた。

「——痛いッ！」

ズキリと、お妙は、背中にはげしい疼痛を感じたのだ。

ギョッとしたように、男は体を退ける。

お妙はうつ伏した。

ズキリ！

背中に、五寸釘を打ちこまれるようにすさまじい痛みがまた走った。うっと、お妙は中腰になる。背をそらしながら、ふらふらと、壁に

近づいた。

男は、そのお妙の、気違いじみた様子に、目をうばわれたようにただ見ている。

お妙は、左右にひろがった長襦袢に、あらわになった両の乳房を板壁にくいぐい押しつけ、両手が、極彩色の秘戯画をなせた。

うわっ！

お妙は声をあげる。

男は、しばらくそのお妙を見ていたが、やがて、お妙に近づいた。

「壁からはなれろ！ 女！」

長襦袢の襟に手をかけて、ぐいと引っばった。

お妙の背中が裸になる。

それでも、お妙は板壁からはなれなかった。

男は、チッと舌打ちした。

板壁や襖に、一面に極彩色で描かれている露骨な図柄が、はじめて

男の目にそれとしてうつった。

男は落ちてゐる刀を拾った。

「売女！」

裸の、お妙の背に、男は脇差をぶつりと突っこんだ。

勢い余って、板壁に突っこんだ刃が、手許に引っばったが脱けない。

「うわっ！」

お妙は、壁に縫われたように身もがいたが、そのまま息絶えた。

「うぬ！」

男は、また脇差を引いたが、あっと柄から手をはなした。



ひやりとした感触が、男の手の甲に吸いついたのだ。壁虎だ。

舌を出して、男の顔を見た。

男は、やもりがわらったように見えた。

チッと、手を振る。

振り捨てられたやもりは、するすると極彩色の板壁を這い上った。

そこから、ひよいとお妙の裸の背にとまった。

男は、落ちてゐる黒布を拾うと、顔をかくして、音もなくその部屋から消えた。

雌やもり

「気の毒にお妙さんは死んだが、背中を刺しぬかれたのは、何か因縁かもしれませんね」

玄丹である。

話の相手は大道破魔之介だ。

「ほう、因縁ですか」

「因縁って、何です？」

お薦が口をはさむ。

「うむ、あたしはお妙さんが殺された日の昼間に診察に行つたのだが」

玄丹は、備州屋から、大道さんの口添えがあつたといつたのは黙っている。破魔之介が若い女と親しいのをお薦にきかせたくないからである。

「背中がまるで五寸釘で打ちこまれるように痛むと





「ほう」

「ほう」

「それがね、自分ではどういわけかしらないが、ふらふらと立って板壁に体を押しつけるらしいんです。夢中なんだそうですね、自分では」

「板壁ですか」

「なるほど、備州屋ほどの瀬戸物問屋の娘が板壁の部屋に住んでるといとおかしいが、その板壁はただの板壁ではないんですな」

「何の板壁です？」

「極彩色の、若い者には目の毒な絵が四方に描いてあるんです。裸の男女がたわむれている図ですよ」

お蔭は、ぼっと顔を染めて、目のやり場に困ったようである。

「その板壁に夢中で体を押しつけている。両手はその極彩色の絵をなせてるって寸法です。だが本人は夢中だというんです。何しろ背中に五寸釘を当てられてその所に打ちつけられたように板壁からはなれ

られないというんです」

「いつも体を押しつける所は同じ場所ですか？」

「そうらしいですな」

「その同じ場所に背中から脇差が刺し貫かれて縫われたように死んでいたとするとこれは因縁です」

破魔之介は、恐ろしそうに眉を寄せているお薦の顔を見て微笑した。

「それで、どんな時に背中が痛むんです？」

「ふだんは何ともないそうです。夜蒲団の中にはいつて一刻ばかりたつときと痛くなるってました」

破魔之介は、ニヤリとした。

「そうか。」

とするとお妙はその妙な壁絵を見て妄想すると背中が五寸釘を打ちこまれるように痛むんだ……

「行ってみましょうか？」

と、破魔之介は玄丹の顔を見た。

「その絵を見に。なんだったらお薦さんもいっしょにどうです？」

「あたしはいや」

お薦は、顔を赤らめて、そうきいた破魔之介の顔をにらんだ。

それから半刻後である。

破魔之介と玄丹は、備州屋仙左衛門の案内で、お妙が板壁に縫われたように殺されていた部屋に立っていた。

なるほど、若い独り身の男女が見たらいっぺんに頭に血が上りそうな絵が極彩色で描いてある。

「ここですね」

破魔之介は、拭き清めたが、また血の跡がうすくしめったようにつ

いている所に近づいた。

極彩色の絵は、それで、裸の男女のからみ合った体が汗で濡れたようだ。

そう思って、じっとそこを見つめていた破魔之介は、かすかな、それこそ、気のせいで聞えたような音を耳にした。何かが、板に触れた音である。

「ご主人、この絵板はこのままにしておくのですか？」

破魔之介は、振り返って、仙左衛門にいった。

「こわすのは惜しいのですが、まさかこのままにもしとけません。せめてその血の跡のついた所だけでも取りはずそうかと思ってます」

「いま破ってもよろしいか？」

「ええ、まあ、あなたがそうしたいなら」

「釘抜きを持って来させてください」

破魔之介は、店の者が釘抜きを持ってくると、板を割らないように注意深くその釘をはずそうとした。だが釘の頭はつぶしてかくし釘に板を打ちつけてあるのでうまくいかなかった。

破魔之介は、一番上だけを何とかはずした。そこに指をかけて、板にひびがはいらないようにしずかに剝ぎにかかった。

板一枚を、注意深くはずした破魔之介は、

「これをご覧なさい」

と、仙左衛門と玄丹にいった。

「あっ」

「やもりだ」

「まだ生きてる……」

仙左衛門は、驚きの声を上げた。

「この板を取りつけて幾年になります?」

「もう四五年はたちますよ」

仙左衛門は、そういつて、恐ろしそうに板をはずした荒壁を見る。

そこに、一匹のやもりが、背中を五寸釘で刺し貫かれていた。板を張る時、大工が釘で板ごとやもりの背を縫いつけたらしい。

壁色のやもりは、尾をうごかし、腹で呼吸していた。

「雌です」

ほうと、やもりの雌雄を見分ける破魔之介に、感心したように玄丹がため息を吐いた。

「どうして四五年もたったのが生きてるんです?」

「雄が餌を運んだのでしよう。それよりよく見てください。背中から貫いた釘の位置が、ちょうどこのやもりに交尾を許さない位置です。栄養は雄が運ぶので満点だが、それだけこいつは交尾できないいらだたしさを覚えたわけです。そいつが執念となり、呪いとなったのでしような」

「備州屋さん、亡くなったお内儀はやはりこの部屋に寝たと思いますか、背中を病むとかいうことはなかったんですかな」

「なかったようですよ」

「こいつはまだ交尾を知らないやもりなのでしよう。だから夫婦のそれには妬かない。未通女が男のことで妄想をたくましくするのを呪ったんでしよう。生娘が汗を肌にかくと、忍冬のような匂いがするそうですからね。そいつをこのやもりは嗅ぎ分けたんです」

「とにかく、やもりの磔は気持が悪い」

「放してやりましょう」

破魔之介は、釘を壁から抜いた。すると、何年ぶりかで自由に

なったやもりは、すぐ三人の目からその無気味な姿を消した。

「これで呪いは消えたでしょう」

ほーっと、ため息をついている仙左衛門と、玄丹に、破魔之介はぼつんといった。

その日の夕方、お妙の葬式は盛大に行われ、やもりの呪いの話は、葬式の盛大と共に噂になってパツとひろがった。

花嫁磔

「薄っ気味悪い話だ」

女巾着切りの千加は、破魔之介の話をきくと、眉を寄せた。

「ほう、千加もやもりはやっぱり嫌いか」

「好きなやつはいないでしょうよ」

「千加なら大丈夫だ。あのやもりが呪うのは男知らずの生娘が寝床の中であられもないことを想像して汗をかくからだよ」

「どうせ巾着切りをしてる女だ、男をしらないといったって信用してくれないでしょうよ」

千加は、そういうと、チラと流し目で、そばに敷いてある派手な蒲団を見た。

「寝ていつてくれるんでしよう?」

「変なことはお互いにしないことだぜ。お妙さんのように磔になって背中を白刃で縫いつけられるのはご免だ」

「何も改まることはないさ。やもりのやつが呪おうが好きな男と寝るんならちっともこわくはない」

「おいおい、変なことはしないって約束だぜ」

破魔之介は、着たりて先に千加の蒲団にはいった。
千加の体の匂いが、破魔之介の鼻孔をくすぐる。

この匂いかもしれない、やもりが妬いて呪う匂いは、と、破魔之介は思った。

「ご免なさいよ」

千加がそつと破魔之介のわきへはいってくる。
一つ蒲団しかないのである。

破魔之介の手が千加の体を抱く。

千加はキュッと体を固くして、その破魔之介に背を向けた。

「抱いてくれないんでしょう？」

「俺は当分女房はもらわぬつもりだ」

くるりと、千加は、その破魔之介のほうへ向き直った。

「夫婦にならなくっちゃいやとはいやあしない」

「そんならいつかは抱く時が来るかもしれない。この指がもっとずっと不器用になった時だ」

千加は、破魔之介につかまれた指を、いきなり口へ持っていて、ギリッと、歯で噛んだ。

「馬鹿！ 何をするんだ！」

破魔之介は、その指を、千加の鼻をつまんで歯からはなすと、ビリッと、千加の長襦袢の袖を引きちぎった。

「あっ！」

千加は、袖が取れてあいたわき口から、盛り上った裸の乳房がのぞいたのを、あわててかくした。右手は破魔之介につかまれているから千加はうつ伏せに体を廻したのだ。

破魔之介は、長襦袢の袖に、歯を当てて細く裂くと、

「もっと伸ばせ」

「いや！」

破魔之介に引かれた右腕を、千加はあわてて体を押しつける。そうしないと肩から腕、わき腹と、白くてむっちりしたのがのぞくのだ。

破魔之介は、おや？ と思った。

こんなにもこの女が恥かしさを感じる女とは思っていなかったことだ。

破魔之介は、流れている血を拭いてやってから、すぐまだ白いところへついた歯型から噴き出る真っ赤な血を、美しいと感じながらキリキリと捲いた。

「さあ、おとなしく寝るのだ。やもりが妬かれないように適当に仲悪くな」

そういうと、ごろりと仰向いた破魔之介は、すぐと軽いいびきをかきだした。

千加は、それからしばらく、遠慮しいしい体をうごかしていた。先に男にいびきをかかれて寝つけならしい。

翌朝、破魔之介が目覚めたのは、日が大分頭の上に昇った頃であつた。

千加の体は、寢床の中にない。

大分寝返りを打っていたようだがと、破魔之介は、手を伸して蓐盆を引き寄せると、千加の煙管に蓐をつめて、煙りを吐いた。

せいたくな蓐を吸っている……

そこへ、ガラリと千加が戻って来た。

「大変、昨夜やもりに呪われて花嫁が背中をぐさりと刺されて……」
「一晩寝なかったからって、馬鹿なことをいっちゃいけない」

原稿募集

- 本誌にピッタリする特異性ある原稿をお待ちします。
- 枚数は20枚～30枚前後。
- 採用原稿には掲載誌と薄謝を呈します。



原稿送り先

東京都中野区江古田一 久保書店内

裏窓編集部

「だって、本当なんだ。花嫁は新床からぬけだして白無垢の寝間着を腰まで脱がされて柱に背中から脇差でブツリと縫いつけられたように死んでいたっていうんだ。そのそばの鴨居には、やもりが畳針でやっぱり磔のように背中からブツリと止められて、まだヒクヒク生きてるっていうんですよ。あたしたちもうっかりすると磔になるところだった……」

「冗談ではないぞ。やもりの呪いはもう解けてるんだ」

「だってみんなそういつてるんだよ」

「人間の仕業だよ」

破魔之介は、寢床に起き直った。

「人の話だと、何だかその花嫁の背中がやもりの背中のように土色のあとが浮き出ているというんだもの、やっぱりやもりが婚礼を妬いて呪ったんじゃないかしら……」

破魔之介は、どうしてこの女が、そんなことを信じている顔をしているのかわからない。

「行っって見ようじゃあないか。うまくいけば花嫁の死体も拝めるかもしれない」

破魔之介は、きちんと帯をしめ直すと、大小を腰に落した。

「どこだ、花嫁の磔があったのは」

「横山町の山城屋ですよ」

破魔之介が山城屋につくと、店の前は野次馬が群がっていた。

やもりと、花嫁の磔は、好個の話の材料になる。

破魔之介は、店の中に、備州屋仙左衛門の顔を見つけると、ずかずか人を押し分けて店へ入っていった。

そのあとを干加も、

「ご免なさいよ、ご免なさいよ」

と、いいながらついて来た。

「おう、これは大道さん」

備州屋は、破魔之介を見とめると近づいて来た。

「やもりに呪われたそうですね」

「まさか、やもりが脇差を持ち歩きはしないでしょう」

「殺された花嫁さんの死体を見せていたきたいのだが」

「どうぞ、やもりの呪いを見破った大道さんだ。花嫁を呪ったやつはどんな男なのか見当をつけてください」

破魔之介は、仙左衛門に導かれて奥の部屋に通った。

「ここです」

無言で、破魔之介と千加は中へはいる。

寝かされている高島田の崩れた下は花嫁の死体である。

それに取りすがるように、泣き口説いているのが、この花嫁を迎えたこの店の跡取り米次郎であった。

破魔之介は、花嫁の死体に掛けた蒲団をまくると、一瞬、そのあまりにも清らかな白無垢の死装束に目を見張る。

次に、破魔之介の手がその死体を俯つ伏せにした。死装束の襟に手をかけて、ぐいと腰のあたりまで下に押しさげる。

蠟のような背肌に、幾筋もの、やもりの背中のような色の縞があった。その真ん中に脇差で柱に縫いつけられた刺し傷が無気味に口をあけていた。





「お前は一体誰だ！」

米次郎が、破魔之介のやることに気を吞まれていたが、そう叫び声をあげた。

破魔之介は、はだけたものを元のようにすると、すっと立った。

「かわいそうに……。やもりに呪われたんだ……」

米次郎が、死体を仰向けに寝かせてきちんと襟や乱れた裾を直しはじめた。

破魔之介は、それを見てその部屋を出た。

「やっぱりやもりの呪いなのかしらん？」

歩きながら、千加は破魔之介に寄り添ってそうきく。

「冗談じゃあない。やもりの呪いなら江戸だけでも

一晩で何百という花嫁

が磔になって新床から死柱を抱く」

「やっぱり誰かが

花嫁が山城屋に嫁ぐのをねたんで殺したんだね」

「花嫁の背中

の傷痕な。あれは節のつまった細竹で殴られた跡だ」

寄り添う千加をふり向きもせず、破魔之介は歩き続ける。

「えっ？」

千加は息を吞んだ。

「やもりのたたりでああなったんじゃあない。花嫁を殺したのは女に深い恨みを抱いている男の仕業だ」

「男の？」

まさかにやもりの呪いとも信じられない千加だが、あまりにむごい人間の所業と思えぬ花嫁の死にさまである。

（ひどい、あんな殺し方を……）

破魔之介は淡々たる口調で、

「おそらく、男の目の前で新床の花嫁を裸にして竹鞭で打ったのだろう。花嫁を磔にして殺す前に、男の前でなぶりものにしなくちゃあいられないほどの恨みを持った奴のやったことだ」

「……………」

それにしても……と千加は思う。

花婿が指をくわえて見ている法はない。

「山城屋の息子はすっかり気も転倒して、女が目の前で鞭で打たれたのを忘れてるんだ。それでやもりの磔を見て、すっかりやもりの呪いだと思ひこんだのだろう」

「……………」

千加はもう黙って衿をかき合わせる。

「山城屋はあれだけの大店だ。昨夜婚礼があるのは世間に知れていたんだ。それで年頃の女に恨みを抱く男がしのび込んだのだ。若い女に恨みをはらすのに、婚礼の夜ほど恰好の日はない。それも花婿の目の

前でだ。俺も惚れた女に裏切られたら江戸中の娘を婚礼の夜に襲う気になるかもしれん」

破魔之介は、はたと歩く足を停めた。

「千加、山城屋や備州屋ぐらいの本店で婚礼のある店をさがしてくれ。それも噂に立ってるほうがいい」

「どうするのさ」

「そこへ俺とお前が乗り込むんだ。本物の花嫁花婿は別の部屋で寝かせて、お前が花嫁になって寝るんだ」

「花婿はお前さんなんだね。嘘の新床でもいい、お前さんが花婿になつてくれるんなら……」

「なる」

破魔之介は、歩きだしながらそう答えた。

やもり呪法

備州屋のお妙が、やもりに呪われて死んだと噂がたった日の朝から行方不明だった番頭の惣助が、死体となって発見された。神田川に浮かんだのだ。

惣助の背中にも、刀で刺し貫いた傷が腹の方まで突き出ていた。

破魔之介は、その話を千加から聞いた。

「まだ婚礼のある店は見つからぬか」

「今夜が婚礼だけど、やもりの呪いがおそろしいから日延べしたという家ならあるんだけど」

「どこだ」

「神田の蓬萊屋さ、小問物問屋」

「そこにしよう」

「えっ？ だって日延べをしたんだよ」

千加は、破魔之介を見ていう。

「その店は日延べしたさ。だがほかの全部、江戸中のめでたい婚礼が日延べされたんではあるまい。こっちが日延べしてるまにやもりと花嫁が仲好く一對、飛んでもない男に磔にされるんだ。蓬萊屋には、やもりの呪いがこわかったから一旦は日延べしたが、やもりの呪いなぞは噂っぱちとわかったから予定通り今夜婚礼すると云い触らしてもらうんだ。もちろん本物の婚礼は日延べしていいんだぜ」

「だけど、一度取り止めてまた今夜に婚礼をあげるといったら、何かあるかもしれないと警戒されてしまうんじゃないかしら」

「かえって、おもしろいとくるはずだよ」

破魔之介は、その男は侍だと思っている。

それに、一人の女に裏切られたといつて、次々と、しかも婚礼の夜の花嫁を地獄に追いつくような真似をするのだから、相当の変屈男だと想像した。そういう男は、意地になってというより、執念の鬼のようになつて、やもり呪法なぞは嘘っぱちと一度延期した婚礼を今夜予定通り行くと耳にしたら必ず出てくると思われた。

破魔之介は千加と、「蓬萊屋」へ出かけた。

思ったより立派な本店だ。

主人が、備州屋仙左衛門を知っていたのは好都合だった。

「実は備州屋さんに止められたんですが、そういうことなら派手にやってもらいましょう」

主人は、承知した。

破魔之介は、今夜嫁を取るという件に会ったが、この男がまたばか

にしゃっきりした男だった。

「家の商売が小間物屋です。若い娘さんがお得意ですから、女の敵をつかまえるためなら願ってもやってもらいたいところです。私の婚礼は今夜ちゃんとあげます」

その夜――

蓬萊屋では盛大に婚礼の宴が張られた。

江戸の当夜行われるはずの大部分の婚礼が日延べされるというのにこの騒ぎに物好きの野次馬が蓬萊屋の表をいっぱいぞきに來た。

蓬萊屋では、やもりの呪法払いですと、その野次馬の誰彼となく冷酒を振舞った。それでいやが上にも蓬萊屋の婚礼は噂に立った。

めでたく晴れやかな宴が終り、新婿新妻が、一室に引きあげると、破魔之介と千加も一番の上座敷に床を延べてもらって落ちついた。

「いい花嫁ぶりだぜ」

千加は、白無垢の長襦袢である。艶やかに髪は文金の高島田である。

もちろん、破魔之介も、花婿姿であった。

「本当にあんたの花嫁になっちまおうかしら……」

流し目に見る千加の姿は、破魔之介には自信が持てないほど色っぽい。

「さあ、とにかく寝て待とう」

新床だから、一組の夜具である。

先に破魔之介がはいる。手が、あとからすべりこむ千加の腰を抱いた。

夢魘の時間がたつ。

破魔之介は、あっと思った。

巾着切りの千加が、今夜まで男を知らない生娘だったことに愕然とした。

「うれしい、いつでも捨てていいんだよ……」

千加は、普通の女の逆なことをいった。

破魔之介は、それに答えず、千加を抱く腕に力を入れた。

やがて、千加はかいいびきをかきはじめた。満足して、今夜のやもりの呪いを全然忘れ去ってしまったようだ。

と、……

破魔之介は、床からすべり出た。

衣桁のかけにしのぶ。

薄明りの枕行灯の明りに、音もなくふわっと浮き上った黒い影が、じつと寝床をのぞきこむ。侍である。

黒衣で顔をつつんでいる。

首をかしげたのは、床に女一人だけだからだろう。

「起きろ」

「うう……」

曲者の手が、目覚めきれぬ千加の蒲団をめぐった。

「寒い――」

かき上げようとした手をむずとつかんだ。千加の手がその手をおさえる。千加の両手に細紐が巻かれた。

ハッと、千加は異変に気づいた。

その千加の体を、曲者の手が蒲団の上から畳にほうり出した。

「あつ、何をするんだい！」

白無垢の長襦袢が、すべって、両手を前しぼりの千加が素っ裸の体を曲げて曲者をにらんだ。

「やもりの呪いだ」

ふところにいれた手が、出ると、ヒュッと何かが飛んだ。べたり！

と、そいつは千加のわき腹に吸いついた。

「うっ」

それがやもりと知って、千加は体を振って振り落そうとしたが、やもりはじっと一つ所に吸いついたままだ。

「男はいないようだな」

曲者は、男が女といったほうが仕事やりやすいらしい。

刀で脅せばいいし、男の前で新妻を嬲り殺しにするほうが快味を誘うのだ。

曲者はふところから、また一匹のやもりを取り出した。

それを鴨居に畳針でブツリと打ちつけた。

キ、キ……

奇妙な、やもりの泣き声だ。

「畜生！ どうしよってんだい！」

「フッフ、金と面に惚れた女は地獄へ落すのだ」

ヒュッと、鞭を振った。あおりで、顔の黒布がはずれた。現れたのは醜怪なあばた面である。

「畜生！」

千加は、破魔之介がいないのにうろたえていた。

破魔之介のために初めて女になった日に気違い侍に殺されるのがたまらない。

ピシリッ——

「うっ、ち、畜生……」

千加の、脂の乗った裸体が畳をころげ廻る。

その背に、竹鞭がピシリッ、ピシリッと打ちおろされる。

「う、うっ」

と、呻き声をあげて、さすがに前で両手をしばられた千加には抵抗もできないままに、呻き声も出なくなった。

「もうよかろう、あとはやもりと並んで磔になるだけだ。立て！」

「だ、だれが……」

「立たぬか！」

脇差をひっこ抜いた。

その冷たい白刃を見て、キッと千加は怒りの眦りを上げた。

「はは、立つようにしてやるぞ」

刃を上、曲者は前に折っている千加の膝の間に白刃を差し入れた。

千加はすこし体をあげる。

「もっと上げるのだ」

白刃が上へぐいとうごく。そのとき、

「馬鹿！」

破魔之介は、怒声と共に、小柄をピシッと白刃を持つ曲者の手首に打ち込んだ。

あっとひるむ曲者の前に立って、破魔之介は、千加を守っていた。

「き、貴様、武士だな……」

「張った網にかかったらじたばたしないことだ」

「うっ」

と、曲者は呻く。

破魔之介の言葉に、ある意味を悟ったのである。

告予男次



冷徹の眼よく邪を破り、漂然と去来する破魔介行状記……

まぼろし侍
破魔ごよみ
柔肌
燈籠

黒木 忍 中島喜美画

翌日、どうして曲者を捕えず逃がしたんだと怒っていた千加が、貧乏旗本の二男坊が切腹したという話を持って来た。

「そいつはねえ、顔一面あばたで、ガマ蛙のような男だってさ」

「女に持てないのもあの男のせいではないな」
破魔之介は、ニヤリ、と笑った。

好んで危地に忍び破魔介の耳目となって千加が探る大店の奥の悲嶋。柔肌に燈籠の石は荒く、降る雪は霏々と白く、あわや息の根も絶えんばかり。黒髪は千々に乱れて……

集 募 稿 原

◇他誌に見られぬ特異な題材で頁を飾る本誌は、毎号異常な反響を呼び、店頭で売切れの盛況を示して居りますが、来月号もお買い洩れのないように必ず本号お買い上げ書店に御予約下さい。

◇バックナンバーは新規の愛読者の為に小部数取り揃えてあります。(一四四頁―一四九頁を御覧下さい) 既刊号三冊以上お申込みの読者には送料は当社で負担致します。

◇御送金は、現金書留、小為替、振替等が最も安全で確実です。

◇小社は本誌の他にも単行本・新書判等の

書籍を多数出版しております。出版目録を

おのぞみの方はハガキにハッキリと御住所御芳名をお書きになって「裏窓で見た、目録送れ」とだけ書いて、東京都中野区江古田一の二三〇二久保書店営業部宛御申込になれば無料ですぐ送ります。

◇直接購読を御希望の方は、三ヶ月分・三百六十円、又は六ヶ月分・七百二十円を本社営業部宛にお払込み下さいますと店頭発売前に直接お送りします。(送料小社負担)
◇その場合は、御送金と同時に何月号より何月号までとハッキリ御指定下さい。

◎小説・読物 三十枚～四十枚程度

他誌に見られないような特異性のあるもので、本誌ならピッタリすると思われる作品をお待ちします。

(小説は現代・時代、どちらでも結構です)

◎アブチック・スリラア 三十枚～四十枚程度

◎あぶちっく・みすてりい 三十枚～四十枚程度

他に本誌に適すると思われるものならば何でも結構です。原則として、原稿は返却しないことになって居りますが、特別の場合にはお返し致しますから、もし不採用原稿返送御希望の向きは、送料を同封されますようお願い致します。
掲載の分には相応の原稿料と、掲載誌一部をお送りします。

— 原 稿 送 り 先 —

東京都中野区江古田1の2302

久保書店内 裏窓編集部

裏 窓

第四巻・第四号
四月 号

(毎月一回一日発行)

定価 百二十円・送料十二円

(地方売価百二十三円)

印刷 昭和三四年三月二五日
発行 昭和三四年四月一日

編集人 須 磨 利 之

発行人 山 田 忠 雄

印刷所 向上印刷株式会社

発行所 株式会社 久保書店

東京都中野区江古田一ノ二三〇二
電話中野・(38)六九八〇・一三八八
振替口座・東京 一〇七五六番

★お買い上げの本誌に落丁乱丁等がありました節は、書店にておとり替え下さるか、または本社宛にお送り下されば、スグおとり替えます。
★本誌の記事を無断で転載、上演、上映、放送することはお断りします。